

北越北線関係発掘調査報告書

水 久 保 遺 跡
宮 平 遺 跡 II

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北越北線関係発掘調査報告書

水 久 保 遺 跡
宮 平 遺 跡 II

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北越北線は、JR上越線六日町駅から十日町市、松之山町などを経てJR信越本線犀潟駅（大潟町）にいたる地方鉄道新線です。開通すると新潟県内でも有数の豪雪地帯である中魚沼郡と東頸城郡を結ぶ交通手段として、沿線地域の発展に多大な役割を果たすものと期待されています。

本書は、この北越北線建設に先立って発掘調査をした頬城村の水久保遺跡、浦川原村の宮平遺跡の調査報告書です。この2遺跡の発掘調査報告書の刊行で、北越北線関係の工事に伴う発掘調査事業はすべて終了しました。

水久保遺跡では、溝で区画された中世の屋敷跡が発見され、中国からの舶載磁器や国産の陶磁器が出土しています。国産の陶磁器は、今の石川県・福井県・愛知県・岐阜県で焼かれたもので、当時も広範な地域で物資の流通があったことがうかがわれます。また、出土した漆器の分析によれば、上質品も出土していることが注目されます。宮平遺跡でも中世の区画溝が発見されたほか、平安時代の食膳具や貯蔵具が出土しています。

各遺跡とも遺構・遺物は相対的にわずかしか発見されませんでしたが、古代・中世の人々の暮らしの一端が明らかになりました。特に、中世の区画された溝の検出は、高田平野周辺の発掘調査でも類似例が徐々に増加し、今後の中世遺跡のあり方を考える上で一つのポイントとなるものと思われます。

今回の調査結果が、今後の本県における考古学研究に資するとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機になれば幸いです。

最後に、本調査に対して多大なご協力とご援助を賜った頬城村・浦川原村教育委員会ならびに本調査に参加された地元の方々に対して厚く御礼申し上げます。また、日本鉄道建設公団には格別の御配慮を賜り、ここに深甚なる謝意を表します。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

みづ く ぼ 遺 跡

例　　言

1. 本報告書は新潟県中頸城郡頬城村大字手島字水久保1081番地ほかに所在する水久保遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は地方鉄道新線北越北線の建設に伴い、新潟県が日本鉄道建設公団から受託し、昭和63年度に実施した。調査主体は新潟県教育委員会（以下、県教育委員会と略す）であり、調査面積は2,694m²である。
3. 整理は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）が県教育委員会から受託し、平成4～7年度に報告書作成にかかる整理作業を行った。
4. 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教育委員会が保管している。遺物の註記は、水久保遺跡の「水」とし、出土地点または遺構名等を併記した。
5. 本書の示す方位はすべて真北であり、磁北は真北から西偏約7度である。掲載した図面のうち、既成の図面等を使用したものについては、それぞれの出典を記した。
6. 遺構・遺物の実測図、写真は原則として一括した。遺物番号は一連の通し番号を付し、写真図版もすべてこの番号を使用した。
7. 文中の註は脚註とした。引用文献は著者と発行年を〔 〕で文中に示し、卷末に一括して掲載した。
8. 漆器の科学分析は、四柳嘉章氏（漆器文化財科学研究所）に依頼した。（第V章）
9. 本書の作成は、埋文事業団調査課調査第一係が行った。本文の執筆は第V章を除いて、第I章・第II章が石山精哉（埋文事業団文化財調査員）、第IV章2.A. が田海義正（同主任調査員）、第IV章2.B. が小池義人（同主任調査員）・荒川隆史（同文化財調査員）、第IV章2.C. D. が小池義人、要約が藤巻正信、ほかは高橋保雄（同主任調査員）である。
遺構写真図版は石山精哉・佐藤恒（同嘱託員）、遺物写真図版は山田昇（同嘱託員）が作成した。
編集は高橋保雄・藤巻正信が行った。
10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示、御協力を賜った。厚く御礼を申し上げる。（敬称略）
　　家田順一郎・植木 宏・岡村功一・岡本郁栄・頭城村教育委員会・久保田好郎・小島幸雄
　　小林義広・坂井秀弥・品田高志・滝川重徳・田中 靖・田辺早苗・森 繁治・福井県立埋蔵文化財センター・望月正樹・横山勝栄・吉岡康暢・四柳嘉章

目 次

第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制と整理作業	2
A. 調査体制	2
B. 整理作業と体制	2
第 II 章 遺跡の環境	4
1. 遺跡をとりまく地理的環境	4
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	6
第 III 章 調査の概要	10
1. 遺跡の位置と立地	10
2. 調査の概要	11
A. 県営圃場整備事業区域での第一次調査	11
B. 調査方法（グリッドの設定）	13
C. 調査の経過	14
第 IV 章 遺 跡	15
1. 層 序	15
2. 遺 構	16
A. 掘立柱建物跡（S B）	16
B. 土 坑（S K）	20
C. 溝 （S D）	34
D. その他の遺構（S X）	36
3. 遺 物	37
A. 土器・陶磁器	37
1) 珠洲焼	37
2) 越前焼	41
3) 青 磁	41
4) 白 磁	42
5) 濱戸美濃焼	43

6) 中世土師器	44
7) 近世以降の陶磁器	44
8) 平安時代の土器	45
B. 石製品	45
1) 石臼	46
2) 石鉢	46
3) 五輪塔	46
4) 砥石	46
5) 石硯	47
C. 土器軸用品	47
1) 土器片研磨具・研削具	47
2) 土器片円盤	48
D. 木器・木製品	48
1) 漆器	48
2) 曲物	49
3) 折敷	49
4) 板材	49
5) 杭・柱・木片	49
E. 金属製品	49
F. 縄文時代の石器	49
第 V 章 新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析	61
1. 分析の方法	61
2. 分析結果	62
3. 小結	65
第 VI 章 まとめ	71
1. 遺物について	71
2. 遺構について	72
《引用・参考文献》	79

挿 図 目 次

第1図	北越北線路線図（中頃域郡地内）	1
第2図	水久保遺跡周辺の地形分類図	5
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第4図	水久保遺跡範囲確認調査報告書、トレンチ位置図	11
第5図	水久保遺跡調査範囲とグリッド設定図	13
第6図	小グリッド模式図	13
第7図	水久保遺跡基本層序、土層柱状図	15
第8図	漆器塗膜層断面顕微鏡写真(1)	69
第9図	漆器塗膜層断面顕微鏡写真(2)	70
第10図	遺構配置図と土地更正図	75
第11図	遺跡周辺の字界図	77

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	9
第2表	水久保遺跡範囲確認調査報告書、トレンチ別遺構・遺物出土表	12
第3表	土器・陶磁器類集計表	38
第4表	石製品・礫集計表	46
第5表	土器片研磨具・研削具集計表	47
第6表	木器・木製品集計表	47
第7表	水久保遺跡遺物観察表(1)	50
第8表	水久保遺跡遺物観察表(2)	51
第9表	水久保遺跡遺物観察表(3)	52
第10表	水久保遺跡遺物観察表(4)	53
第11表	水久保遺跡遺物観察表(5)	54
第12表	水久保遺跡遺物観察表(6)	55
第13表	水久保遺跡遺物観察表(7)	56
第14表	水久保遺跡遺物観察表(8)	57
第15表	水久保遺跡遺物観察表(9)	58
第16表	水久保遺跡遺物観察表(10)	59
第17表	水久保遺跡遺物観察表(11)	60
第18表	水久保遺跡漆器観察一覧表	68

図 版 目 次

図 面

- 図版1 水久保遺跡遺構全体図
図版2 水久保遺跡遺構配置図
図版3 遺跡の位置と周辺の地形
図版4 遺構実測図1 SK1・2・3・4・5・9 SD2
図版5 遺構個別実測図1 SK1・2・3・4・5・9 SD2
図版6 遺構実測図2 SK6・7・8・10・11・12・13・14
図版7 遺構個別実測図2 SK6・7・8・10・11・12・13・14
図版8 遺構実測図3 SB1 SK15・16・17・18・19・20・22・29・34
SD1・10・11
図版9 遺構個別実測図3 SB1 SK15・16・17・18・19・20・22・29
SD1・10・11
図版10 遺構実測図4 SB2・12 SK21・23・24・25・26・27・28・30・31
SK33・38・39・42・44・45・50・56・57・61
SB3柱穴7・SB5柱穴10
図版11 遺構個別実測図4 SB2・12 SK21・23・24・25・27・28・33・38・39
SK42・44・45・50・56・57・61
SB3柱穴7・SB5柱穴10
図版12 遺構実測図5 SB3・4・5・11 SK32・35・41・43・46・47・48
SK49・51・52・53・54・55・58・59・60・62・63
SD9 SX1
図版13 遺構個別実測図5 SB3・4・5・11
SK32・35・48・51・52・53・59・63
図版14 遺構実測図6 SK36・37・40・64・65・66・67・68・69・70・71・72
SK73・74 SD3・4・5
図版15 遺構個別実測図6 SK36・37・40・64・65・66・67・68・69・70・71・72
SK73・74 SD3・4・5

- 図版16 造構実測図7 S B 6・7 S K75・76・77・78・79・80・81・82・83
S K84・85・86・87 S D 6・7
- 図版17 造構個別実測図7 S B 6・7 S K75・76・77・78・79・80・81・82・83
S K84・85・86・87 S D 6・7
- 図版18 造構実測図8 S B 8・9 S K89・90・91・92・93・94・96・97・100
- 図版19 造構個別実測図8 S B 8・9 S K89・90・91・92・93・94・96・97・100
- 図版20 造構実測図9 S B10 S K98・99・101・102・104・107・109・110
S K111
- 図版21 造構個別実測図9 S B10 S K98・99・101・102・104・107・109・110
S K111
- 図版22 造構実測図10 S K103・105・106・108・112 S D 8 S X 2
- 図版23 造構個別実測図10 S K103・105・106・108・112 S D 8 S X 2
- 図版24 出土遺物実測図1 珠洲焼
- 図版25 出土遺物実測図2 珠洲焼
- 図版26 出土遺物実測図3 珠洲焼 越前焼
- 図版27 出土遺物実測図4 青磁 白磁 濑戸美濃焼
- 図版28 出土遺物実測図5 濑戸美濃焼 中世土師器 近世以降の陶磁器 平安時代
の土器
- 図版29 出土遺物実測図6 石製品
- 図版30 出土遺物実測図7 石製品 土器軸用品
- 図版31 出土遺物実測図8 木器・木製品
- 図版32 出土遺物実測図9 木器・木製品 石製品 金属製品 桐文時代の石器

写 真

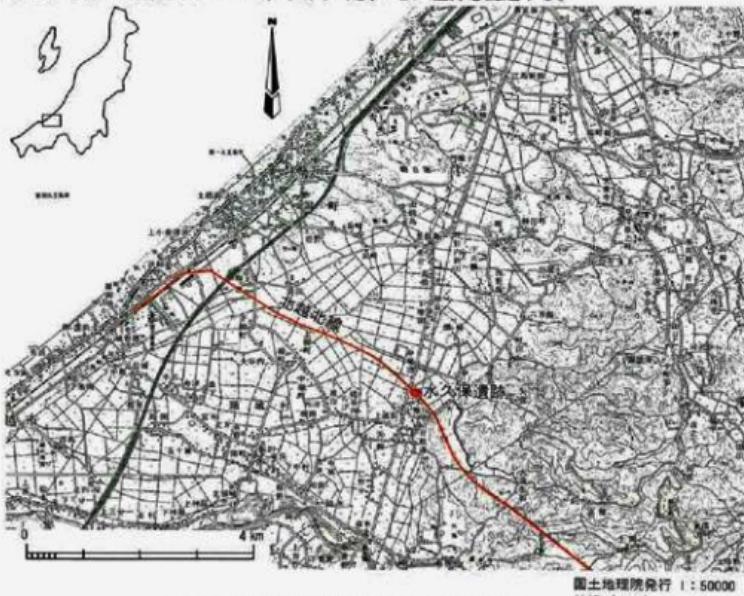
- 図版33 永久保遺跡周辺の景観
- 図版34 10~17区完掘状況 20~23区完掘状況 20区付近完掘状況
- 図版35 S B 1完掘 S B 2・12完掘 S B 3・4完掘
- 図版36 S B 5・11完掘 S B 6完掘 S B 7完掘
- 図版37 S B 8・9完掘 S B 10完掘 S B 5柱穴10遺物出土状況 S B 11柱穴4柱
根検出状況

- 図版38 S K 3・4 土層断面 S K 5 土層断面 S K 5 完掘 S K 7 遺物出土状況
S K11遺物出土状況 S K19土層断面 S K19遺物出土状況 S K19完掘
- 図版39 S K32土層断面 S K21土層断面 S K23土層断面 S K24・25土層断面
S K16土層断面 S K33遺物出土状況 S K36・37土層断面 S K42土層断面
- 図版40 S K71・73土層断面 S K71・73完掘 S K56・57土層断面 S K61土層断面
S K72土層断面 14B・P 2柱痕検出状況 S X 1 完掘
- 図版41 S D 1・3・4 完掘 S D 1 完掘 S D 1 完掘
- 図版42 S D 1 土層断面 S D 2 完掘 S D 2 土層断面
- 図版43 S D 3・4・5 完掘 S D 5 遺物出土状況 S D 4・5・6・7 完掘
- 図版44 S D 6・7 完掘 S D 9 完掘 調査風景
- 図版45 水久保遺跡全景
- 図版46 珠洲焼
- 図版47 珠洲焼 越前焼 青磁
- 図版48 青磁 白磁 濱戸美濃焼
- 図版49 唐津焼 鞍部焼 越中瀬戸焼 中世土師器 土師器
- 図版50 須恵器 石臼 石鉢 五輪塔
- 図版51 五輪塔 砥石 土器片研磨具・研削具
- 図版52 土器片研磨具・研削具 漆器 曲物
- 図版53 曲物 折敷 板材 杭 石硯 簪 土器片円盤 錢貨 繩文時代石器
柱根 鉄滓

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

北越北線は、JR上越線六日町駅（六日町）から分岐して十日町市、松代町などを経てJR信越本線犀潟駅（大潟町）に至る総延長約60kmの地方鉄道新線である。北越北線は、昭和39年に工事線に指定され、昭和43年に六日町から十日町までが日本鉄道建設公團（以下、鉄建公團と略す）により工事が着工された。次いで昭和47年には十日町から犀潟までの認可がおり、法線が発表になった。しかし、路線が魚沼丘陵と東頸城丘陵を東西に横断するため、全区間の64%がトンネルとなり工事は難航した。また、国家予算との関連から工事が中断する時期もあった。昭和60年に北越北線は、国鉄新線から地方鉄道新線として認められ、第三セクター方式の運営による北越急行株式会社となった。北越北線は、新潟県内でも有数の豪雪地帯である中魚沼地方と東頸城地方を結ぶ交通手段としてとともに、沿線地域の経済的・社会的発展に大きな役割を果すものと期待されている。以下、年度ごとに経緯を記述する。



第1図 北越北線路線図（中頸城郡地内）

昭和48年、県教育委員会は十日町駅から信濃川右岸までの分布調査を実施し、2遺跡について発掘調査を実施した。

昭和50年、県教育委員会は鉄建公団の依頼を受け、浦川原村から頭城村までの分布調査を実施し、浦川原村地内で宮平遺跡と虫川城跡の2遺跡が法線にかかることが確認された。

昭和54年、虫川城跡の南側でトンネル工事に伴い、城跡の遺構の一部が崩落する危険性が生じたため、県教育委員会は急速4月24日から4月28日まで面積162m²を対象に発掘調査を実施した。

昭和60年、県教育委員会は鉄建公団の依頼を受け浦川原村から大潟町犀潟駅までの分布調査を実施し、既に報告されている宮平遺跡と頭城村地内で新たに水久保遺跡が確認された。

昭和61年、鉄建公団の要望に基づき、虫川城跡の法線にかかる部分を5月19日から6月6日まで面積585m²を対象に発掘調査を実施した。

昭和63年、遅れていた用地買収が完了したため、水久保遺跡は5月10日から6月24日まで面積2,694m²を対象に、宮平遺跡は7月18日から9月27日まで面積2,628m²を対象に発掘調査を実施した。なお、水久保遺跡については法線外の部分が県営圃場整備事業にかかるため、同時期に頭城村教育委員会が発掘調査を実施した。

2. 調査体制と整理作業

A. 調査体制

調査は県教育委員会が主体となり、以下の体制で実施した。

調査期間 昭和63年5月10日～6月24日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 田中邦正）

管 理 総 括 大嶋 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）

管 理 矢部 亮（ 同 課長補佐）

庶 務 境原 信夫（ 同 主事）

調 査 調査指導 中島 栄一（ 同 埋蔵文化財係長）

調査担当 戸根与八郎（ 同 主任）

職 員 茂田井信彦（ 同 文化財主事）

国島 聰（ 同 文化財専門員）

B. 整理作業と体制

整理作業にかかる遺物の基礎整理のうち、洗浄は発掘調査時に行い、調査終了後註記、大まかな分類、一部実測の作業まで行った。遺構の基礎整理は同じく曾和分室に於て、図面整理、一部遺構の確定と遺構カードを作成した。

その後、本格的な整理作業は、平成4年4月から埋文事業団曾和分室で行ったが、継続的な作業ができず、しばしば中断した。特に平成6年度は同じく北越北線関係の『宮平遺跡』[高橋ほか1995]等の整理作業と重複したために作業は大幅に遅れ、原稿執筆等は平成7年度にずれ込んだ。

整理期間 平成4年4月～平成8年3月

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎、平成4・5・6年度）

（教育長 平野清明、平成7年度）

整理・報告 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎、平成4・5・6年度）

（理事長 平野清明、平成7年度）

管理 藍原直木（事務局長）

渡辺耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長、整理担当兼務、平成4・5・6年度）

庶務 藤田守彦（総務課主事、平成4年度）

泉田誠（総務課主事、平成5・6・7年度）

指導 戸根与八郎（調査課調査第一係長、平成4年度）

藤巻正信（調査課調査第一係長、平成5・6・7年度）

職員 高橋保雄（調査課主任調査員、平成7年度）

なお、平成7年度は原稿執筆、報告書刊行に係わる編集、校正を行った。

第II章 遺跡の環境

1. 遺跡をとりまく地理的環境

水久保遺跡が所在する中頭城郡頭城村は、高田平野の北東部に位置し、東頭城丘陵の西端部にあたる。頭城村は、南縁部を東西に流れる保倉川の流域に広がる沖積地が村域の大半を占め、東部には東頭城丘陵、北西部には潟町砂丘がかかっている。

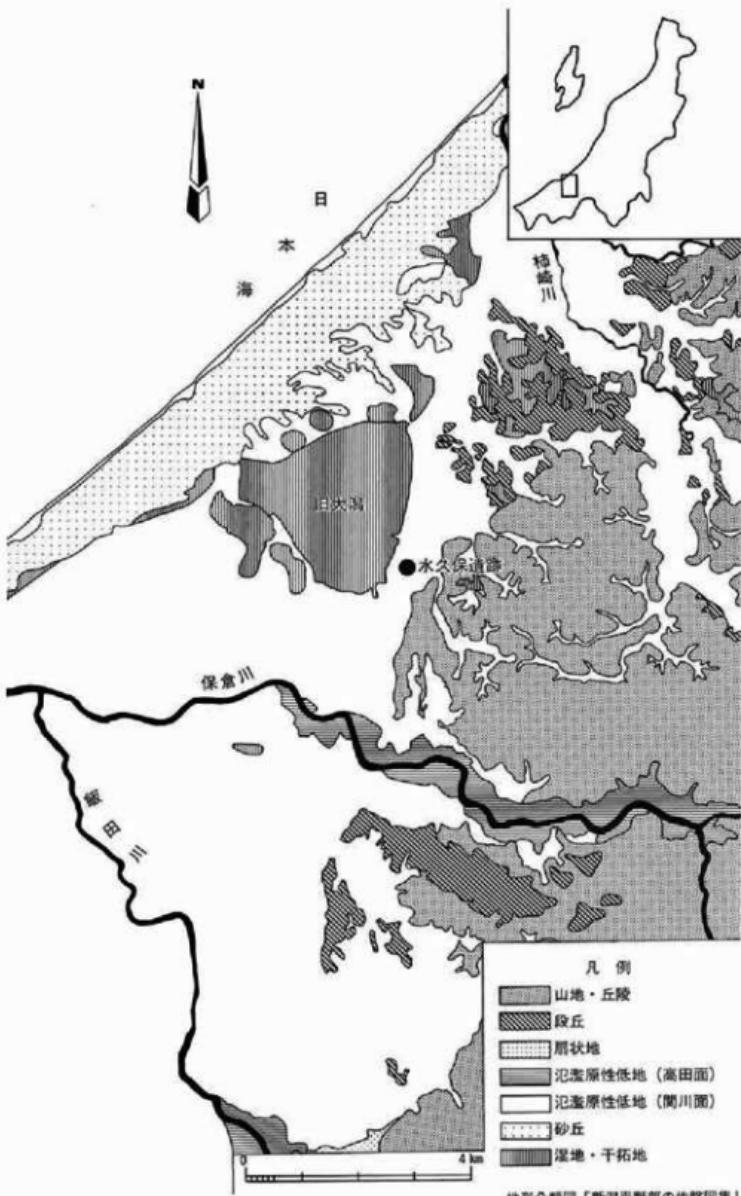
高田平野は、新潟県の南西部に位置する不等辺三角形をした平野で、北側で日本海に接し、西側を西頭城山地、東側を東頭城丘陵、南端を妙高火山群にそれぞれ囲まれている。高田平野は、それらの山地や丘陵から流れ出す関川・矢代川・飯田川・保倉川などの河川が運び込んだ土砂や砂礫が堆積して形成された沖積平野である。また、平野を流れるこれらの河川は、激しく蛇行と氾濫を繰り返してきたが、現在では改修工事により平野に残る自然堤防と旧河道からの蛇行の跡が窺われる。平野の地形は、南部から海岸に向かって扇状地、氾濫原性低地、海岸砂丘に大別される。扇状地は、南西部から南東部にかけて所在する矢代川・関川・飯田川などの谷口ではよく発達しているが、北東部の保倉川・柿崎川流域では形成されていない。

氾濫原性低地は、高田平野の大部分を占め、上位より高田面と関川面に区別される。高田面は氾濫原性低地の大部分を占め、疊層と砂層・シルト層の互層より形成されている。関川面は関川・保倉川流域に分布し、これらの河川が高田面を侵食して形成されたもので、高田面との比高は平均で1~2mである。

高田平野の北部には、潟町砂丘と呼ばれる海岸砂丘が直江津から柿崎にかけて約20kmにわたり延びている。砂丘は起伏に富み、その規模は幅0.5~2.5km、高さ10~30mである。潟町砂丘は、固結度の高い更新世末に形成された古い砂丘の上に、沖積世に形成された新しい砂丘が重なるという二重構造をしており、「古砂丘型砂丘」[新潟古砂丘グループ1967]といわれている。また、砂丘の内側にはかつて大潟と呼ばれた潟湖（ラグーン）が存在したが、江戸時代の干拓により消滅している。周辺には現在でも朝日池・鶴ノ池・天ヶ池などの湖沼群が残っており、潟湖の名残をみることができる。

東頭城丘陵は、高田平野の東部、関田山脈から米山山地にかけて北東方向に広がり、さらに北方に伸び刈羽郡まで続いている。丘陵の大半が新第3紀の軟らかい堆積石で形成されており、この地域は日本でも有数の地滑り地帯となっている。

水久保遺跡は、旧大潟と東頭城丘陵に挟まれた沖積地内の微高地に位置しており、標高は約9mを測る。



地形分類図「新潟平野部の池盤図集」
(北陸建設弘満会 1981) から作成

第2図 遺跡周辺の地形分類図

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

頭城村の遺跡の分布は、東部の丘陵地については古くから知られていたが、西部の沖積地については、昭和56年に県教育委員会が実施した中頭城都遺跡詳細分布調査によりその詳細が明らかになった。頭城村域では、縄文時代以前の遺跡は現在まで確認されていない。縄文時代の遺跡は、村の東部の丘陵地に分布し、特に大池・小池の周辺に集中している。遺跡は縄文時代中期のものが主体をなしており、中でも塔ヶ崎遺跡（頭城村大字塔ヶ崎）は中期後葉の代表的な遺跡として古くから知られており、出土した土器は塔ヶ崎式土器と呼ばれている。また、上越地方では出土例が少ない火焔型土器の出土が注目される。

古代・中世の遺跡は、丘陵地から沖積地にかけて広く分布している。中でも旧保倉村の自然堤防上と旧大潟の湖岸付近に集中している。この地域の遺跡から採集された遺物は、古代では須恵器・土師器、中世では珠洲焼が主体をなすが、片津中之島A遺跡（頸城村大字片津）・榎井B遺跡（頸城村大字榎井）からは灰釉陶器が採集されている。採集された遺物から、古代の遺跡はその大半が平安時代の9世紀後半から10世紀のもので、中世の遺跡は14世紀から15世紀のものと推定されている〔坂井1985〕。また、旧大潟の湖岸から丘陵地にかけては、中世の城館跡・塚・寺院跡などが分布している。丘陵の最西端には雁金城跡（頸城村大字花ヶ崎）があり、天正6年（1578）の御館の乱の際にその名がみえる。この地域の山城は高田平野から外へ通じる街道の要衝に築かれている。

現在の頸城村域は、古代においては頸城郡に属していた。『続日本紀』の大宝2年（702）3月17日の条に、「分_二越中国四郡—属_一越後国—」との記述がある。文中の四郡とは頸城・古志・魚沼・蒲原郡を指しており、頸城郡はこの時期に越後国に編入されることになる〔米沢1980〕。また、『倭名類聚抄』の「越後国 国在頸城郡行程上 二十四日下十七日」との記述から、頸城郡には越後国の国府が存在していたことが窺える。国府の所在地については諸説があり現在まで明らかになってはいないが、頸城地方が越後国の中で先進的地域として古くから開けていたことが窺える。さらに、同書には郡内に存在した「沼川・都宇・栗原・原本・板倉・高津・物部・五公・夷守・佐味」の10郷が記されており、頸城村はこのうち夷守郷に属していたと考えられている。夷守郷に関して、正倉院の宝物の中に「越後國久疋都夷守郷戸主肥人皆麻呂庸布毛段、□ 」と記された庸布が残っている。

奈良時代の8世紀半ばから初期莊園が各地に成立してくる。頸城郡においても、東大寺領の石井・吉田・真沼莊、西大寺領の桜井・津村莊の5莊が存在していた。これらの莊園はいずれも8世紀末までには成立していたと思われる〔荻野1986〕が、所在地については明確な定説がない。9世紀になるとこれらの莊園の開発と經營は早くも破綻をきたし、12世紀に

はその実態を失い、代わって保や郷と呼ばれる国衙領が成立していく。頸城郡における初期莊園から国衙領への改編は、「倭名類聚抄」にみえる郷を所領の基本単位として行われた〔田村1987〕。初期莊園の衰退後、頸城郡に確実に存在した莊園は佐味莊（柿崎町、吉川町）のみで、あとは国衙領であった。頸城郡には中河・荒井保（新井市）、真砂・横曾根・富川保（上越市）、保倉保（浦川原村）など19の保が存在し、その数は越後国全体の約半数を占めていた。頸城村域には榎井保が存在しており、「康泰寺文書」の弘治3年（1577）10月18日の条の「頸城郡内夷守郷榎井之保内」という記述からそれが窺える。

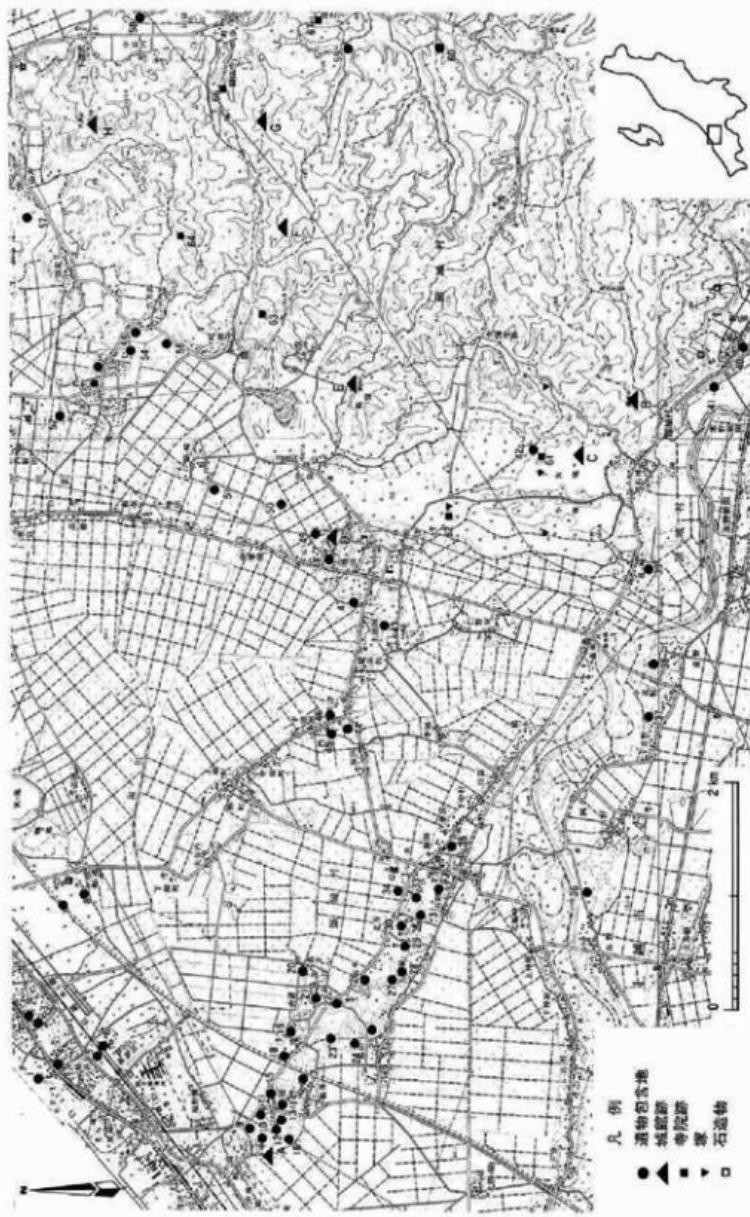
文治元年（1185）、越後国は源頼朝の知行国となるが、承久3年（1221）の承久の乱後は北条氏の手にその支配権が移り、以後北条氏一族により独占されることになる。鎌倉幕府が滅び、建武の新政がスタートすると越後国は新田義貞の支配下に置かれるが、続く南北朝の動乱期にその支配権は上杉憲顕の手に移る。憲顕の孫の房方の時に、房方と彼を補佐し実質的国務を主導した守護代長尾高景の2人により、上杉・長尾両氏の越後支配の基礎が形づくられる。16世紀、長尾為景は守護上杉房能を滅ぼし越後国の実質的支配権を獲得し、為景の子の景虎（謙信）は上杉家の名跡を譲り受け、名実共に越後の支配者となる。上杉・長尾両氏の支配は16世紀末上杉景勝の会津移封により終わりを告げる。

上杉氏支配の最終末の文禄4年（1595）に行われた検地をもとに慶長2年（1597）に作成された「越後国郡絵図」〔東京大学史料編纂所1983〕は、この時期の事情を知る貴重な史料である。絵図は越後国7郡全てにわたり作成されたと思われるが、現存するのは頸城・瀬波の2郡のみである。頸城郡についても、現在の中頸城郡の関川以東と東頸城郡の一部にあたる「高津・津有・五十公・美守」の4郷のみが描かれている。美守郷は『倭名類聚抄』にみえる夷守郷のことであり、字句を嫌い美守に改めた〔平野1988〕といわれている。絵図には、町村毎に御料所（上杉氏の直轄地）と知行主の別、町村名、田の等級、本納高、罫ノ高、家数、人数などが記載されている〔東京大学史料編纂所1987〕。頸城村は美守郷に属し、

松橋村・三分一村（上三分一、下三分一）・江縫村（榎井）・船津村・片津村・ひ根津村（日根津）・領家村（手島地内兩毛）・手嶋村（手島）・高崎村（手島地内細ヶ崎）・やすミ村（矢住）・二の分村（仁野分）・森本村・花か崎町（花ヶ崎）・石かミ村（石神）・たうか崎村（塔ヶ崎）・かもう田村（大蒲生田）・げんぞう村（玄僧）（カッコ内は現行の大字名）
の17町村で、このうち9町村が御料所であり、この地域が上杉氏の越後国支配の基盤となっていたことが窺える。また、絵図から頸城村城には花ヶ崎街道という脇街道が通っていたことが窺える。花ヶ崎街道は、府中（上越市）を発し、行ノ沢村（大潟町）付近から松橋村・船津村・森本村・花か崎町・石かミ村（頸城村）を抜けて直峰之城（安塚町）に至る道である。道中、花ヶ崎のみ町になっており、この地が街道の要衝として早くから発展していたことが窺える。

第3図 遺跡の位置と周辺の道路

国土地理院発行 1:25000
湯河原町・高田東部・安曇 (1962)



第1表 周辺の遺跡一覧

1. 上小舟津浜海岸遺跡	中世	31. 諏訪北畠B遺跡	中世	61. 須日寺跡
2. 上小舟津浜遺跡	中世	32. 諏訪北畠A遺跡	平安	62. 頤尊寺跡
3. 道ノ間遺跡	奈良・平安	33. 青野東畠遺跡	平安・中世	63. 伝淨福寺跡
4. 津波浜遺跡	平安	34. 青野東畠遺跡	中世	64. 伝みとふかへり寺院跡
5. 中ノ山遺跡	中世	35. 百間町中畠遺跡	中世	65. 性明寺跡
6. 狐山遺跡	平安・中世	36. 池島遺跡	平安	66. 諏法寺跡
7. 柳ヶ瀬遺跡	平安・中世	37. 下青野遺跡	平安	67. 菩門寺跡
8. 星登財遺跡	平安	38. 中青野遺跡	平安	
9. 松橋A遺跡	平安	39. 古屋敷遺跡	中世	A. 古宮館跡
10. 松橋B遺跡	中世	40. 大明神遺跡	平安	B. 離金城跡
11. 松橋C遺跡	中世	41. 塙原遺跡	平安・中世	C. ふるかんどう館跡
12. 松橋D遺跡	平安・中世	42. 西谷遺跡	中世	D. 両毛館跡
13. 松橋E遺跡	平安	43. 天ヶ崎遺跡	中世	E. 茶臼山城跡
14. 松橋F遺跡	平安	44. 片津中之島C遺跡	平安	F. 町田城跡
15. 松橋G遺跡	平安・中世	45. 片津中之島A遺跡	平安	G. 諏法寺城跡
16. 横井A遺跡	平安	46. 片津中之島B遺跡	平安	H. 六角城跡
17. 横井B遺跡	平安	47. 上増田遺跡	中世	
18. 下米岡遺跡	平安・中世	48. 生仏遺跡	中世	
19. 手官家堀遺跡	平安	49. 永久保遺跡	中世	
20. 舟津駆音屋敷遺跡	平安	50. 中島古屋敷遺跡	平安	
21. 舟津A遺跡	中世	51. 五反田遺跡	平安	
22. 舟津B遺跡	中世	52. 楊田遺跡	中世	
23. 島田四間割B遺跡	平安・中世	53. 堂ノ前遺跡	平安・中世	
24. 島田四間割A遺跡	中世	54. 古町B遺跡	奈良・平安・中世	
25. 島田四間割C遺跡	中世	55. 古町A遺跡	平安	
26. 宮本岡塚遺跡	中世	56. 寺町遺跡	平安・中世	
27. 宮本南塚遺跡	平安	57. 林割遺跡	平安	
28. 五十嵐宮ノ島遺跡	平安	58. 渡無し遺跡	平安	
29. 北方屋敷添遺跡	平安	59. 梅町遺跡	平安	
30. 下千原下塚遺跡	中世	60. 大坪遺跡	奈良・平安	

上杉景勝の会津移封後、頸城地方は短期間に領主が交代するが、寛永元年（1624）に入封した松平光長の治世下でその全盛期を迎える。光長の時代、藩は殖産興業や支配制度の確立のための施策を積極的に行なった。特に大溝郷における新田開発は注目すべき事業であり、この開発により現在の頸城村の村域が確立されたといえる。現行の77の大字名のうち、新田名がつくものが58と約7割を占めている。^{参考文献22)} 大溝郷の開発は寛永15年（1638）から延宝6年（1678）まで約40年にわたって行われ、約90の新田村と16,000石余りの新田が開発された。大溝郷の開発が終わった直後の天和元年（1681）に光長は越後駿助の責を問われて改易とされ、以後、光長の遺領は幕府領と小藩の支配領とに分かれ幕末に至る。

第III章 調査の概要

1. 遺跡の位置と立地

水久保遺跡は新潟県中頸城郡頸城村大字手島字水久保1081番地ほかに所在する。頸城村は高田平野の北東部に位置し、面積38.7km²・人口約8500人の農村地帯である〔頸城村史編さん委員会1988〕。村は東西に長く北から西にかけては潟町砂丘の内側になり、南側は保倉川が流れ、東側は東頸城丘陵の西縁にかかる。したがって、村の約2/3は平野、残り1/3は低丘陵で占められている。かつては平野の多くが排水の悪い低湿地であり、旧大潟をはじめとする潟湖が存在していた。古代・中世の遺跡は旧保倉川自然堤防上、旧大潟湖岸付近、旧大潟から丘陵までの沖積微高地に多い(第3図)。

水久保遺跡は村内のやや東側寄り、旧大潟から丘陵までのほぼ中間に位置し、標高約9mを測る。遺跡から西側に存在した旧大潟の湖岸まで、東側に存在する東頸城丘陵の西縁まで、それぞれ約300~400mの距離である。したがって、遺跡周辺の地形は東から西に向かって極めて緩やかに傾斜する。また、明治27年明治村土地更正図に機織れば、遺跡のあった地点は畠が多く存在し、周辺より高かったことが推測される(第10・11図・図版3)。

頸城村の古代・中世の開発史については既に詳しく述べられ〔坂井1985〕、多くの指摘がなされている。遺跡周辺に限れば、条里型の地割の存在、溜池灌漑施設から古代あるいは中世の開発を考察している。

ところで、文禄四年(1595)から慶長二年(1597)の間に作成されたという「越後国郡絵図」には遺跡の所在する手島村および周辺村落が描かれている〔東京大学史料編纂所前掲〕。それによれば、「手島村 上 御料所 紫崎分 宮崎与八部分 本納 三百四拾七石毫斗八升 繩ノ高 三百三拾四石七斗 家廿五間 六拾五人」とあり、生産高、家数、人数共に多く、大きな村落が営まれていたことが知られる。

周辺の遺跡として遺跡の北東約400mに中島古屋敷遺跡があり、発掘調査の結果、平安時代(9世紀後半~10世紀)、中世(13~14世紀・16世紀)、近世(17世紀前半)の遺物が出土し、同時代の集落跡と推定されている〔秦1988〕。旧河道路を隔てた南隣には両毛館跡がある。しかし、「越後国郡絵図」には描かれておらず、絵図が描かれた頃は既に機能していなかったものと推定される。このほか遺跡の南西旧大潟湖岸近くには塙仏遺跡、上増田遺跡、天ヶ崎遺跡があり、中世の珠洲焼が採集されている。

2. 調査の概要

A. 県営圃場整備事業での第一次調査

水久保遺跡が所在する周辺では、昭和63年に頸城村明治地区県営圃場整備事業が実施されることになった。この県営圃場整備事業区域内にも水久保遺跡がかかるため、昭和62年に遺跡範囲確認調査を行った。この遺跡範囲確認調査結果を参考にし、北越北線関係分の水久保遺跡の第二次調査範囲を決めた。ここでは、県営圃場整備事業区域内の遺跡範囲確認調査結果〔池田ほか1987〕を記載する。

県営圃場整備事業区域内の遺跡範囲確認調査は、県教育委員会により水久保遺跡ほか2遺跡を対象に昭和62年9月25日～昭和63年3月25日の期間、数回にわたって実施した。



第4図 水久保遺跡範囲確認調査報告書、トレンチ位置図

水久保遺跡では、北越北線の法線に沿って16か所、その周辺に10か所の計26か所のトレンチを設定した。トレンチの大きさはおおむね2×6mである。調査対象地は昭和30年の耕地整理の際、深さ90cm位まで掘り下げたといわれ、遺物包含層は存在しなかった。しかし、表面採集の遺物のほか7トレンチで遺物が出土し、9トレンチで遺構が確認された。調査の結果、平安時代～中世の遺構・遺物が存在する集落跡と推定された。なお、昭和30年の耕地整理の際、中世陶器、五輪塔（室町時代後期）、人骨が多量に出土したということである。

この結果を基に遺跡の範囲が確定され、県営圃場整備事業区域、北越北線関係分の第二次調査範囲が決定された（第4図・第2表）。

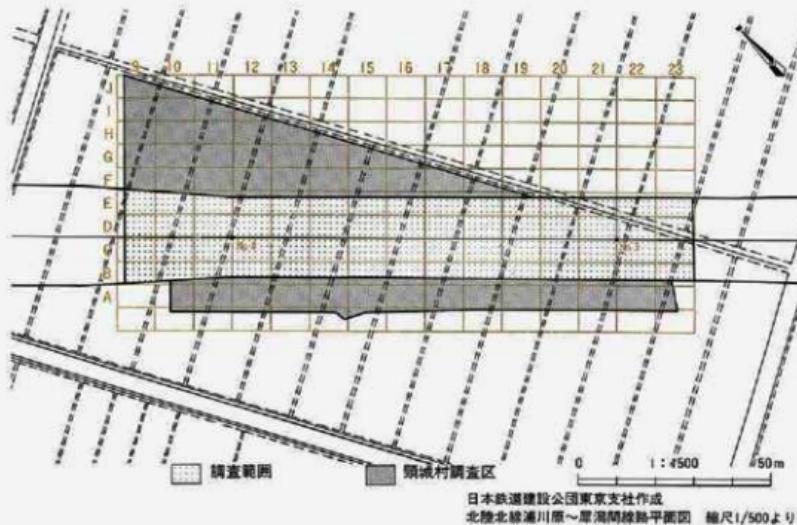
第2表 水久保遺跡範囲確認調査、トレンチ別遺構・遺物出土表

トレンチNo	遺 物						遺 構				
	須恵器	土師器	珠洲焼	土師質土器	中世陶質土器	石器	木製品 木片・ 竹片・ 木の実	ピット	井戸	土坑	溝
1				1				1			
2											
3									1		
4											
5							2				
6											
7											
8											
9											
10											
11											
12											
13											
14											
15											
16		2		4							
17				1							
18											
19											
20											
21											
22											
23					3	1					
24						2					
25											
表面採集	2		4		2						

B. 調査方法（グリッドの設定）

県営圃場整備事業区域内の遺跡範囲確認調査の結果、包含層は残存していないことが予想された。このため調査は原則的には表土除去、遺構確認、遺構半截、遺構完掘の順序で行い、それぞれの過程で必要に応じ写真、図面等の記録をとった。

調査は頸城村調査区の調査と同時であったため、村当局と相談し同じグリッドを使用した。グリッドはセンター杭Na3 ($Y = -11K8115$ ・ $X = +132K4315$) とNa4 ($Y = -11K8140$ ・ $X = +132K5005$) を結んだ線を横軸の基準とし、この横軸に対しセンター杭No.3から垂直に延びる線を縦軸の基準とした。この基準線を基に横軸は6 m間隔で、縦軸は10 m間隔で大グリッドを設定した。このためグリッドの横軸は真北から46度西偏している。大グリッドの縦軸はアルファベット、横軸は算用数字を付け、この組み合わせにより表示した。発掘調査ではこの大グリッドだけであったが、整理作業では大グリッドをさらに2 m四方に分割して1~15の小グリッドとし、例えば「17C7」というように表記した。



第5図 水久保遺跡調査範囲とグリッド設定図



第6図 小グリッド模式図

C. 調査の経過

調査は昭和63年5月10日～6月24日の間に実施した。調査方法については前項で簡単に触れた。以下、調査日誌から抄述する。

5月10日 発掘調査器材を現地に搬入する。頸城村調査区もこの日から調査が開始されたため、関係者とグリッド、調査方法等を協議する。

5月11日 県営圃場整備事業区域内の遺跡範囲確認調査の結果を参考にし、東側約半分の表土を除去する。表土は場所により厚薄あるが、おおむね約20cm弱である。表土除去にはバックホーを用い、排土はブルドーザーで調査区外へ押し出した。

5月12日 調査区は沖積地であるうえ、周囲には水田や農業用水路がある。このため湧水があるうえ排水が悪い。頸城村調査区の関係者と協議し、それぞれの調査区境（法線際）に排水溝を掘削した。排水溝は幅約1m・深さ約1mで、バックホーで掘削した。

5月13日 東側の表土除去はほぼ終了し、15・16列グリッド境に土層観察用のベルトを設定し、これより西側の表土を除去する。5月17日に完了する。大基準杭を打設する。

5月16日 作業員を入れ、ベルトコンベアを設置し、西側から精査を行い遺構確認をする。遺構確認後は調査方法で述べたように遺構半截、完掘、必要に応じ写真・図面の記録を行った。図面は平面図縮尺1/40で簡易遺形を用い、断面図縮尺1/20である。写真はカラー・白黒2種類を用いた。

5月17日 小基準杭を打設する。

5月25日 この日までに9～14列グリッドの遺構はほぼ完掘。

5月26日 ベルトコンベアを移動し15・16列グリッドの遺構確認、遺構掘りに入る。

5月30日 17～21列グリッドの遺構確認、遺構掘りに入る。

6月10日 22・23列グリッドの遺構確認、遺構掘りに入る。この日までに19～21列グリッドの遺構はほぼ完掘。

6月14日 この日までに15～18・22・23列グリッドの遺構はほぼ完掘。しかし、14～16・B～Dグリッドでは掘り残しの遺構が多く、さらに精査、遺構掘りを行う。

6月19日 頸城村教育委員会と共に現地説明会を開く。

6月21日 遺構掘りが終了する。航空写真・全景写真のための清掃に入る。

6月22日 航空写真・全景写真撮影。

6月23日 遺構平面図作成が終了し、現地調査はほぼ終了する。

6月24日 現地から器材および遺物等を搬出し、現地作業はすべて完了する。

第IV章 遺跡

1. 層序

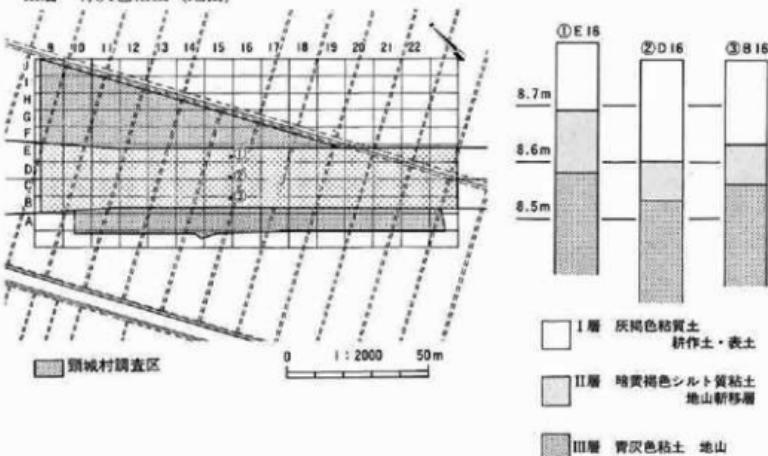
調査区は北西から南東に長さ148m・幅21mで、細長く延びる。標高は北西端で8.4m、南東端で8.9mを測る。遺跡周辺の標高は西方の旧大潟湖岸付近で6.0m、東方の丘陵境で10mを測り、1/130の勾配である。したがって、遺跡周辺では東から西に極めて緩やかに傾斜する地形である。しかし、明治27年の土地更正図を見ると遺跡と推定される範囲は、多くが畑に利用され周囲より高かったことが知られる。このような島状に高い所は周囲にいくつかあり、また、手島川の旧河道跡と推定される所もあり、現在より複雑な地形を呈していたことが窺われる。

水久保遺跡およびその周辺は昭和30年の耕地整理により一面水田化された。したがって、調査区には遺物包含層が残存せず、基本層序も以下のように単純であった。

I層 灰褐色粘質土（耕作土・表土） 昭和30年の耕地整理以降の堆積土である。遺物はわずかに出土するが、いずれも細片で、まとまった個体になるものはない。下層は水田床土である。15~20cm。

II層 暗黄褐色シルト質粘土（地山漸移層）5~10cm。

III層 青灰色粘土（地山）



第7図 水久保遺跡基本層序、土層柱状図

2. 遺構

遺構は頸城村調査区を含め、西から東へ斜めに横断するかのように集中分布し、北西寄り、南東寄りは希薄である。明治27年の土地更正図に換れば遺構が集中分布する部分は多くが畑に利用され、遺構の希薄な部分は水田、道、水路であることが分かる。

昭和30年の耕地整理では約90cm程（遺物包含層は全て）削られたといわれているが、遺構の分布状況、遺構の遺存状況を見る限り、遺構もある程度削平されたものの、それほど大きくは削平されなかったものと推測される。

遺構の所属する時期は、包含層が残っていなかったために同一面で遺構を検出したこと、遺構の上面が残存していないため遺構同士が重複していても新旧関係が不明なものが多かったことから不詳とせざるを得ないものが多い。遺構の時期をある程度推定できる遺物は、縄文時代、平安時代、中世、近世以降と多時代にわたる。ここでは遺物の主体を占めた中世の土器・陶磁器から遺構の所属時期も中世と推定し、詳細は後述する。

遺構の種別は掘立柱建物跡（S B）、土坑（S K）、溝（S D）、その他の遺構である。遺構番号は種別毎に付けた。頸城村調査区の発掘調査報告書がはやく刊行されたが、遺構番号は別個に付けた。本文で頸城村調査区の遺構を使う場合、図版等には遺構種別の前に「村」を冠し、例えば「村S B 2」というようにした。

以下、遺構種別毎に説明する。

A. 掘立柱建物跡（S B）

本調査区で12棟、頸城村調査区で3棟検出されている。本調査区で検出された建物跡の内2棟は頸城村調査区に延びる。調査ではピットが多数検出され、ピットの中には柱根が残存しているものもあった。しかし、遺構が極めて多かったことや調査期間の関係から現地で建物跡として識別された柱穴は少なく、多くの建物跡は調査終了後、机上で確定された。したがって、確定された建物については、なお検討を要するものもあり、検出されたピットの数からさらに多くの建物跡があったものと推測される。

掘立柱建物跡を長軸方向で大まかに分類すると南北棟が6基、東西棟が6基となる。建物跡の分布は14~16区と18~20区に多く見られる。特に16C・D・E区には4棟の掘立柱建物が集中し重複している。

今回の報告では、掘立柱建物跡の規模を中心に記述する¹⁾。

1) 柱穴間距離の記載は、柱穴が直線上に位置しないため全体の長さと各柱穴間の距離は整合しない。柱穴間寸法は柱穴下端の中心の距離を柱の中心として計測した。

S B 1 (図版8・9・35)

13D・14D・14Eにある東西1間×南北2間の掘立柱建物跡(N-9°-E)である。柱間寸法は不揃いで東側柱筋(桁行)が4.15m(北から2.25・1.9m)、西側柱筋が4.35m(北から2.4・1.95m)を測る。梁間は北側が2.45m、南側は2.25mである。柱内側面積は約10.5m²である。柱穴掘形は径19~28cmの円形で、深さ17~37cmであるがP 6は4cmと浅い。SD 1、SK 19と重複するが新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S B 2 (図版10・11・35)

15B・Cにある掘立柱建物跡(N-9°-E)である。柱筋は通らず、柱間寸法も不揃いである。柱間寸法は東側柱筋が6.5m(北から1.5・1.6・1.05・2.4m)の4間、西側柱筋が6.9m(北から1.8・3.4・1.7m)の3間、梁間は北側が3.2mの2間(2.06・1.15m)、南側は1間で3.3mを測る。柱内側面積は約21.4m²である。柱穴掘形は円形から楕円形で、径も30~90cm以上と差がある。柱穴の深さは75~8cmとやはり差がある。P 9の柱穴覆土は灰黒色で埋土は暗褐色土である。主軸方向はSD 1に一致する。SB 12〔村SB 2〕と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。SB 2は柱の並びや柱穴規模の差が大きく、掘立柱建物跡としては若干の疑問がある。

S B 3 (図版11・12・13・35)

16C・Dにある掘立柱建物跡(N-13°-E)である。柱間寸法は東側柱筋が6.75m(北から2.9・3.9m)の2間、西側柱筋は6.6m(北から1.76・2.5・2.3m)の3間である。梁間は北側が4.2m(東から1.1・1.1m)の2間、南側が4.3mの1間である。柱内側面積は約28.1m²である。柱穴掘形は径40~60cmの円形で、深さは22~55cmを測る。SB 3は東西棟建物であるSB 4・SB 5に直交するように重複し、SK 44・45・51とも重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S B 4 (図版12・13・35)

16D・Eにある掘立柱建物跡(N-68°-W)である。柱間寸法は北側柱筋(桁行)が8m(東から2.0・2.7・3.4m)の3間、南側柱筋は8.04m(東から2.4・2.2・3.4m)を測る。梁間は東側で4.3m(北から1.7・2.6m)の2間、西側は3.6mを測るが間柱は確認されていない。柱内側面積は約31.3m²である。柱穴掘形は径24~50cmの円形から不整円形で、深さは25~54cmである。東西棟建物のSB 5、南北棟建物のSB 3、SK 49・52・63と重複するが新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S B 5 (図版11・12・13・36・37)

16C・Dにある掘立柱建物跡(N-82°-W)である。柱間寸法は北側柱筋(桁行)が6.6m(東から1.7・2.0・2.9m)の3間、南側柱筋は6.4m(東から2.9・1.2・2.3m)を測る。梁間は東側で3.9m(北から1.4・1.0・1.5m)、西側で3.7m(北から1.7・1.7m)の2間である。柱内

側面積は約24.1m²である。柱穴掘形は径約20~45cmの円形から梢円形で、深さは34~66cmである。柱穴5には柱根が残存していた。東西棟建物のS B 4、南北棟建物のS B 3、S K51と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は柱穴10から青磁稜花皿(47)、珠洲焼壺(K種)胸下部破片1点、粉挽き臼下臼破片1点が出土している。

S B 6 (図版16・17・36)

18D・E、19Eにある掘立柱建物跡(N-87°-W)である。柱間寸法は北側柱筋(桁行)が6.45m(東から1.4・1.1・1.7・2.3m)の4間、南側柱筋は6.32m(東から1.2・1.3・1.8・2.0m)を測る。梁間は東側で1.65m、西側は1.84mの1間である。柱内側面積は約11.1m²である。柱穴掘形は径20~50cmの円形から梢円形で、深さは11~48cmである。S D 7の北に隣接し、主軸方向も溝にはば一致する。遺物は出土していない。

S B 7 (図版16・17・36)

18C、19B・Cにある掘立柱建物跡(N-87°-W)である。柱間寸法は北側柱筋(桁行)が5.3m(東から2.2・1.4・1.7m)の3間、南側柱筋が5.48m(東から2.1・1.8・1.6m)を測る。梁間は東側で2.06m、西側は1.95mの1間である。柱内側面積は約10.8m²である。柱穴掘形は径20~30cmの円形で、深さは13~47cmである。S B 7は東西溝S D 6と南北溝S D 5が直交する部分より南東約3mに位置し、S D 6と長軸方向はほぼ同じである。また、S B 6・8とも長軸方向が一致し、S B 6の南約7.5m、S B 8の北西約3.5mの距離にある。遺物は出土していない。

S B 8 (図版18・19・37)

19・20Cにある1間×2間の掘立柱建物(N-86°-W)である。柱間寸法は北側柱筋(桁行)が3.78m(東から2.1・1.7m)、南側柱筋は3.5m(東から1.8・1.7m)を測る。梁間は東側で1.9m、西側で1.5mである。柱内側面積は約6.2m²である。柱穴掘形は約30~50cmの円形から不整形で、深さは20~62cmで著しい差がある。柱穴1の覆土は比較的均質な灰黒色である。柱穴4は暗灰褐色で地山粒子を混入する。遺物は出土していない。

S B 9 (村S B 3) (図版18・19・37)

19B、20A・Bにある掘立柱建物跡で、本調査区と頸城村調査区の境界に位置する。頸城村教育委員会の報告書では南北3間、東西2間の建物跡とされているが、北に柱穴の連続性が認められるため、南北5間の掘立柱建物跡と改めた。建物は(N-5°-E)南北棟建物である。柱間寸法は東側柱筋(桁行)が8.3m(北から2.2・1.2・1.45・1.5・2.1m)、西側柱筋は8.4m(北から2.1・1.2・1.4・1.5・2.1m)である。梁間は北側で3m(東から1.2・1.8m)、南で3.36m(東から1.6・1.7m)である。柱内側面積は約10.6m²である。柱穴掘形は円形から不整円形で径30~60cm、深さ13~58cmと平面形・規模ともに著しい差がある。覆土は柱穴2が灰黒色を呈し、地山土が不均等に多く混入する。S K90、村S B 4と重複するが、新旧関係は不明であ

る。遺物は出土していない。

S B10 (図版20・21・37)

21C・Dにある1間×3間の掘立柱建物跡 (N-20'-E) である。建物跡では最も東寄りで検出された。柱間寸法は東側柱筋 (桁行) が7.4m (北から2.5・2.2・2.6m)、西側柱筋は7.2m (北から1.6・3.5・2.2m) である。梁間は北側が2.46m、南側が2.76mである。柱内側面積は約19.1m²である。柱穴掘形は円形で径20~30cmと比較的小さい。深さは8~34cmで著しい差がある。S K98と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S B11 (図版12・13・36・37)

16D・Eにある1間×3間の掘立柱建物跡 (N-79'-W) である。柱間寸法は北側柱筋 (桁行) が6.15m (東から2.3・—・—m)、南側柱筋は6.2m (東から2.2・2.5・1.4m) である。梁間は東側で1.9m、西側で2.5mである。柱内側面積は約13.5m²である。柱穴掘形は不整円形から梢円形で径25~67cm、深さは33~63cmである。柱穴4には柱根が残存していた。S B11は南北方向に走るSD1、SD3の間の遺構集中区に位置する。南西隅付近で接するS B5とは主軸の方向が一致する。S B3・5、SK58・61、SD3、SX1と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S B12 (村S B2) (図版10・11・35)

15A・B・Cにある2間×3間の掘立柱建物跡 (N-23'-E) で、本調査区と頬城村調査区の境界に位置する。頬城村教育委員会の報告書では、西側に1間延び3間×3間の建物跡を想定している。しかし、遺構平面図に南東隅の柱穴がないこと、北西隅のピットが11cmと著しく浅いこと、平面形が方形に近い建物跡は本遺跡では見られないことから今回2間×3間に改めた。柱間寸法は東側柱筋 (桁行) が7.0m (北から2.9・2.7・1.4m)、西側柱筋は7.1m (北から1間目の柱穴は排水溝で切られているため、—・2.0m) である。梁間は北側が4.4m (東から2.4・1.9m)、南側が4.2m (東から2.1・2.0m) である。柱内側面積は30.3m²である。S B2、SK26村SE8と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

B. 土坑（SK）

本調査区では112基の土坑が検出されている。現地調査では、ピットより平面形が大きい遺構のうち、相対的に深いものは井戸、浅いものは土坑と判断し、それぞれ別々に遺構番号をついた。しかし、整理作業の段階で全て土坑とした。ここではまず土坑とした理由について簡単に触れ、個々の遺構の説明をする。

- ①井戸または土坑とした遺構はどちらかの施設（例えば井戸枠など）が伴わず、全て素掘りの穴であるため、施設の有無で両者を区別できない。
- ②遺構の形態については沖積平野のため壁面等が崩落しやすく、遺構使用時（廃棄時）の形状かどうか、判断が難しい遺構があると推定される。
- ③覆土、深さについては、昭和30年の耕地整理により遺構の上部は削平され、特に浅い掘り込みの遺構、標高の高い位置に存在した遺構は、遺存状態が悪いことが予想される。
- ④井戸は湧水施設のため、井戸、土坑と判断した遺構について底面の標高を検討した。どのレベルが水脈か判断できる資料はないが、井戸と判断したものが土坑より標高が高かったり、あるいはその逆のものもかなり認められた。以上のことから、積極的に井戸と土坑を区別する判断材料に乏しいため、すべて土坑とした。

なお、土坑と柱穴に確定されなかったピットとの区別もそのまま前述の理由が当てはまるが、ここでは一応、便宜的に径70cm未満・以上で判断した。

SK 1 (図版4・5)

11C 6・11に位置する。SK 2と重複しているため平面形は不明であるが、遺存部では長径83cm、深さは最大9cm（底面レベル8.23m）を測る。SK 2との新旧関係は不明である。遺物は中世土器皿（70）が出土している。

SK 2 (図版4・5)

11C 6・11に位置する。平面形は円形で、長径85cm、短径78cmを測る。深さは最大14cm（底面レベル8.21m）を測る。SK 1と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は覆土から漆器碗（119）、珠洲焼甕または壺（11）・片口鉢（27・28）、瀬戸美濃焼おろし皿（64）、珠洲焼きを転用した土器片研磨具・研削具（115）等が出土している。

SK 3 (図版4・5・38)

11E 3・8に位置する。SK 4に掘り込まれているため平面形は不明であるが、楕円形を呈していたものと推定される。遺存部の短径は67cm、深さは最大34cm（底面レベル7.92m）を測る。覆土は2層に分かれ、遺構下部に黒色土、上部に青灰褐色土である。遺物は出土していない。

SK 4 (図版 4・5・38)

11E 3・8に位置する。平面形は橢円形を呈し、長径108cm、短径78cmを測る。深さは最大43cm（底面レベル7.87m）を測る。覆土は下部に木片を含む黒褐色土、上部に灰褐色土である。

SK 3を掘り込んでいる。遺物は出土していない。

SK 5 (図版 4・5・38)

11E・12Eにかけて位置する大型土坑である。平面形は東西方向に長軸をもつ長方形を呈し、長軸6.7m、短軸1.4～2.2mを測る。底面はほぼ平坦で、深さは最大約30cm（底面レベル7.96m）を測る。覆土は3層に識別されるものの、黒色土が中心で青灰色土がブロック状に混入する。遺物は出土していない。

SK 6 (図版 6・7)

12B 9に位置する。南から西側にかけてのほぼ半分を排水溝によって失っている。長径64cm、深さは最大66cmを測る（底面レベル7.87m）。遺物は出土していない。

SK 7 (図版 6・7・38)

12B 4・9に位置する。平面形は小判状で、長径71cm、短径50cmを測る。深さは最大約80cm（底面レベル7.53m）であり、底面付近で円形曲物底板の一部（123）が出土している。SD 1と重複するが、新旧関係は不明である。

SK 8 (図版 6・7)

12B 10・15に位置する。平面形は不整円形で長径82cm、短径84cmを測る。深さは最大84cm（底面レベル7.65m）を測る。遺物は出土していない。

SK 9 (図版 4・5)

12C 1に位置する。平面形は橢円形で長径83cm、短径71cmを測る。深さは最大71cm（底面レベル7.66m）を測る。遺物は覆土から細片のため須恵器または株洲焼か分別不明の小壺と推定される破片1点が出土している。

SK 10 (図版 6・7)

12D 4・12E 14に位置する。平面形はほぼ円形で、長径72cm、短径59cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは最大45cm（底面レベル7.98m）を測る。覆土は灰黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK 11 (図版 6・7・38)

13B 5・10に位置する。平面形は円形で、長径61cm、深さは最大58cm（底面レベル7.92m）を測る。遺物は覆土上層より扁平罐2点出土している。

SK 12 (図版 6・7)

13D 7・8・12・13に位置する。SK 13、ピットと重複しているため平面形は不明である。約30×60cmの範囲で遺存し、深さは最大9cm（底面レベル8.40m）を測る。SK 9、ピットと

の新旧関係は不明である。覆土から越前焼壺胴部破片（36）が出土している。

S K13 (図版 6・7)

13D 7・8・12・13に位置する。S K12、ピットと重複しているため平面形は不明である。遺存部では短径55cm、深さは最大約14cm（底面レベル8.38m）を測る。S K12・ピット2基との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K14 (図版 6・7)

13E 9・10に位置する。平面形はほぼ円形で長径55cm、短径50cmを測る。深さは最大81cm（底面レベル7.56m）を測る。遺物は覆土から珠洲焼壺口縁部破片（6）、中世土師器（77）が出土している。

S K15 (図版 8・9)

14B 7・8に位置する。南西側を排水溝によって失っているが、平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。最大径は119cmを測る。覆土は5層に識別されるが、全体に黒みの強いシルトである。深さは最大92cm（底面レベル7.55m）を測る。覆土2層から青磁碗体部破片1点が出土している。

S K16 (図版 8・9・39)

14B 3・4・8・9に位置する。平面径は不整円形で、長径84cm、短径81cmを測る。断面形は台形で、深さは最大99cm（底面レベル7.52m）を測る。覆土は炭化粒を含む黒色シルトであり、上層から細片たまに不明確であるが、土師器の壺片1点、椀片6点が出土している。

S K17 (図版 8・9)

14C 4・5に位置する。平面形は円形を呈し、長径54cm、深さは最大35cm（底面レベル8.16m）を測る。遺物は出土していない。

S K18 (図版 8・9)

14C 5・10、15C 1に位置する。平面形は東西方向に長い不整長方形を呈し、長軸2.4m、短軸0.6～0.8mを測る。深さは約10cm（底面レベル8.44m）を測りほぼ一定している。遺物は出土していない。

S K19 (図版 8・9・38)

14D 1・2に位置し、平面形は隅円方形である。長径55cm、短径48cm、深さは最大62cm（底面レベル7.59m）を測る。覆土は4層に識別され、下部に被熱礫が7点あった。遺構上部はSD 1の掘り込みを受けている。

S K20 (図版 8・9)

14D 3に位置する。平面形は円形を呈し、長径54cm、深さは最大45cm（底面レベル8.00m）を測る。覆土は黒褐色土單層である。遺物は覆土から珠洲焼片口鉢口縁部破片（23）が出土している。

S K21 (図版10・11・39)

15B 5・16B 1に位置する。平面形は不整方形を呈するが、もともとは方形だったものと推定される。長径203cm、短径164cm、深さは最大148cm(底面レベル7.23m)を測る。覆土は3層に識別され、中部以下は黒褐色を呈し、下部には炭化粒が含まれる。遺物は越前焼片口鉢(34)・甕胴部破片、珠洲焼壺または甕胴部破片、砥石(107)、粉挽き臼破片、越前焼甕体部破片を転用した土器片研磨具・研削具等が出土している。

S K22 (図版8・9)

15B 2・7に位置し、平面形は不整形を呈する。長径160cm、短径140cm、深さは最大142cm(底面レベル7.21m)を測る。西壁上部は柱根を伴うピットに掘り込まれている。覆土は2層に識別されるが、主体は地山ブロックと炭化粒を含む灰褐色シルトである。遺物は粉挽き臼上臼(92)、砥石(103)、加工の有無不明の木片等が出土している。

S K23 (図版10・11・39)

15B 2・3・7・8に位置する。15B-P 6・7・8と重複しているため、平面形は不明である。深さは最大19cm(底面レベル8.42m)を測り、覆土は灰黒色シルトの単層である。ピット7に掘り込まれているが、そのほかの重複関係は不明である。遺物は出土していない。

S K24 (図版10・11・39)

15B 3に位置する。平面形は不整形を呈し、長径103cm、短径84cm、深さは最大46cm(底面レベル8.10m)を測る。覆土は灰黒色シルトの単層である。S K25と重複し、これより古い。遺物は珠洲焼片口鉢の破片を転用した土器片研磨具1点が出土し、口縁部の形態から吉岡編年V～VI期に相当する。

S K25 (図版10・11・39)

15B 3・4に位置する。平面形は円形で、長径64cm、短径62cm、深さは最大54cm(底面レベル8.03m)を測る。覆土は地山ブロックや炭化粒を含む灰褐色土で、単層である。S K24と重複するが、これより新しい。遺物は出土していない。

S K26 (図版10)

15B 9・10・14・15に位置する。北東部を排水溝により失っているため、平面形は不明である。遺存部での深さは最大77cmを測る。遺物は出土していない。

S K27 (図版10・11)

15C 9・14に位置し、平面形は不整橢円形である。長径145cm、短径104cm、深さは最大187cm(底面レベル6.74m)の規模を測る。覆土は粘土質シルトで、暗茶褐色と灰黒色の2層に識別される。遺物は木片が数点出土しているが、加工の有無は不明である。

S K28 (図版10・11)

15B 4・5、15C 14・15に位置する。平面形は不整形で、最大径108cm、深さは最大80cm(底

面レベル7.77m)を測る。覆土はシルトで、2層に識別される。遺物は本片1点が出土している。

S K28 (図版8・9)

14C10・15C6に位置する。平面形は円形を呈し、長径75cm、短径70cmを測る、深さは最大32cm(底面レベル8.23m)を測る。覆土は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、珠洲焼壺口縁部(7)、土師器か中世土師器か分別不明の土器細片が出土している。

S K29 (図版10)

15C13・14に位置する。S B12柱穴3と重複するがこれを振り込んでおり、平面形は梢円形である。長径63cm、短径50cm、深さは最大23cm(底面レベル8.39m)を測る。覆土は暗灰黑色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K31 (図版10)

15D3・15E13に位置する。平面形はほぼ円形で、長径91cm、短径83cm、深さは最大97cm(底面レベル7.66m)を測る。西端はSD1と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は下部から礫が1点出土している。

S K32 (図版12・13・39)

15E5・10、16E1に位置し、平面形は隅内長方形である。長径98cm、短径60cm、深さは最大64cm(底面レベル7.99m)を測る。覆土はシルトで2層に識別される。遺物は珠洲焼甕または壺(12)・片口鉢3点・白磁碗(49)・瀬戸美濃焼皿(58)・中世土師器皿(76)・石硯(134)等が出土している。

S K33 (図版10・11・39)

15E8・9・13に位置する。平面形は円形を呈し、長径66cm、短径57cm、深さは最大22cm(底面レベル8.40m)を測る。遺物は覆土中から中世土師器壺(82)が出土している。

S K34 (図版8)

15E2に位置する。頬城村調査区にあるがここで取り上げた。北東部は排水溝により失われているため規模等の詳細は不明である。遺存部から平面形は円形または梢円形であった可能性が高い。遺物は出土していない。

S K35 (図版12・13)

15E10に位置する。ピットと重複するため、平面形は不明確ながら不整形を呈すると推定される。長径61cm、短径32cm、深さは最大40cm(底面レベル8.24m)を測る。ピットとの新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K36・S K37 (図版14・15・39)

16B・17Bの境界付近に位置する連鎖状の遺構であるが、西方の土坑をSK36、東方の土坑をSK37とする。両者の中央に浅いテラス部分が挟まれる。テラス部分では、SK37の覆土上

層がSK36の覆土より後に堆積しているが、両者が存在した時間の前後関係は不詳である。

SK36は東西方向の軸で径95cm、深さは最大75cm（底面レベル7.83m）を測る。遺物は覆土1・2層より越前焼壺同一個体（36）が12片、瀬戸美濃焼綠釉皿1点、五輪塔水輪（101）、石臼片1点、搬入碟1点など比較的多く出土している。

SK37は東西方向の軸で径100cm、深さは最大91cm（底面レベル7.44m）である。遺物は出土していない。

SK38（図版10・11）

16B2に位置する。平面形は不整楕円形で、長径83cm、短径65cm、深さは最大77cm（底面レベル7.86m）を測る。東部はSD1と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK39（図版10・11）

16B1・2・7に位置する。平面形は不整形で、長径104cm、短径61cm、深さは最大32cm（底面レベル8.26m）を測る。覆土は炭化物を含む黒褐色土が中心で、覆土中から越前焼壺胴部片（36）、被熱した自然礫1点が出土している。底面でピット2基と重複するが、これより新しい。

SK40（図版14・15）

16C10・15に位置する。平面形はほぼ楕円形を呈し、長径106cm、短径85cm、深さは最大88cm（底面レベル7.73m）を測る。遺物は出土していない。

SK41（図版12）

16C5・10、17C6に位置する。平面形はほぼ楕円形を呈し、長径127cm、短径99cm、深さは最大180cm（底面レベル6.76m）を測る。周辺のピット4基と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK42（図版10・11・39）

16C1・16D11に位置し、南から延びる連鎖状遺構の北端部にある。SK60と重複するがこれを掘り込んでおり、平面形は楕円形と推定される。短径60cm、深さは最大80cm（底面レベル7.82m）を測る。覆土はシルトで3層に識別される。遺物は出土していない。

SK43（図版12）

16C7・12に位置する。平面形は不整方形を呈し、長径80cm、短径78cmを測る。SD1の底面からの深さは最大87cm（底面レベル7.31m）を測る。なお、SD1との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK44（図版10・11）

16C2に位置し、北から延びる連鎖状遺構の南端部にある。SK45・SB3柱穴7・16C1-P57と重複するため平面形は不明であるが、遺存部の形状より不整長方形と推定される。深さは最大56cm（底面レベル8.06m）を測る。覆土はシルトで2層に識別される。重複する他の遺

構との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K45 (図版10・11)

16C 2に位置する。SB 5柱穴5、16C-P57、SK45と重複するため、平面形は不明である。深さは最大17cm(底面レベル8.45m)を測る。覆土は灰黒色シルトの単層である。重複する他の遺構との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K46 (図版12)

16C 13・14に位置する。平面形は不整長方形で、長軸85cm、短軸58cm、深さは最大32cm(底面レベル8.28m)を測る。南隅、北隅でピットと重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K47 (図版12)

16D 1に位置し、平面形はほぼ円形を呈する。長径103cm、短径90cm、深さは最大138cm(底面レベル7.22m)を測る。16D-P 6と重複するが新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K48 (図版12・13)

16D 4・5・9・10に位置する。平面形は東西方向に長い不整形である。長径181cm、短径100cm、深さは最大147cm(底面レベル7.12m)を測る。覆土はシルトで4層に識別され、下層には炭化粒が含まれる。南東隅でピットと重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K49 (図版12)

16D 2・3・7・8に位置する。2つの落ち込みとSB 4柱穴2と重複しているが、新旧関係は不明である。一応、中心部の最も深い落ち込みと南側のテラス部分をSE 24とした。しかし、SE 24がどの部分に限定されるかは不明である。深さは最大100cm(底面レベル7.60m)を測る。遺物は出土していない。

S K50 (図版10・11)

16D 8・13に位置し、平面形はおおよそ隅円方形である。長径65cm、短径59cm、深さは最大87cm(底面レベル7.72m)を測る。遺物は出土していない。

S K51 (図版12・13)

16D 8・9・13・14に位置する。SB 3柱穴4、16D-P21と重複するため、平面形は不明確だが、不整橢円形を呈する。長径95cm、短径72cm、深さは最大70cm(底面レベル7.90m)を測る。底面には標高差15cm程度の段差が見られる。重複遺構との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K52 (図版12・13)

16D 9・14に位置する。平面形は橢円形を呈し、長径97cm、短径83cm、深さは最大82cm(底

面レベル7.77m)を測る。SB4柱穴7、16D-P44と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K53 (図版12・13)

16D10に位置する。平面形はおおよそ隅円方形である。長径90cm、短径88cm、深さは最大146cm(底面レベル7.05m)を測る。SK59と重複し、これを掘り込んでいる。覆土は4層に識別され、下層には炭化粒が含まれている。遺物は出土していない。

S K54 (図版12)

16D11に位置する。平面形はほぼ楕円形を呈し、長径66cm、短径50cm、深さは最大64cm(底面レベル7.98m)を測る。覆土は2層に識別され、1層灰黒色シルト、2層暗黄褐色シルトである。覆土1層からは土師質土器皿1点、越前焼片口鉢底部を転用した土器片研磨具・研削具1点が出土している。

S K55 (図版12)

16D6に位置する。平面形は不整形を呈し、長径62cm、短径49cm、深さは最大41cm(底面レベル8.26m)を測る。南西部でピットと重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K56 (図版10・11・40)

16D7・8・12・13に位置する。SK57、3基のピットと重複するが、SK57を掘り込んでおり、平面形は楕円形と推定される。長径91cm、短径58cm、深さは最大35cm(底面レベル8.23m)を測る。覆土は暗灰黒色シルトの単層である。なお、3基のピットとの新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K57 (図版10・11・40)

16D13に位置する。SK56、3基のピットと重複するが、SK56を掘り込まれているため、平面形は不明である。深さは最大33cm(遺存部の底面レベル8.24m)を測る。覆土はシルトで2層に識別される。遺物は瀬戸美濃焼天目茶碗(54)、珠洲焼甌または壺片1点が出土している。なお、3基のピットとの新旧関係は不明である。

S K58 (図版12)

16D2に位置する。SB11柱穴7と重複するため、東西方向に長いが平面形は不明である。短径44cm、深さは最大17cm(底面レベル8.43m)を測る。遺物は青磁碗(38)が出土している。SB11柱穴7との新旧関係は不明である。

S K59 (図版12・13)

16D10に位置する。SK53と重複しこれに掘り込まれているが、平面形は楕円形と推定される。短径51cm、深さは最大32cm(底面レベル8.27m)を測る。覆土はシルトで2層に識別される。遺物は出土していない。

S K 60 (図版12)

16C 1・2、16D11・12に位置する。S K 42、S B 4 柱穴 9、ほかにピット 3 基と重複するため平面形は不明である。約70×40cmの範囲で遺存し、深さは41cm（底面レベル8.18m）を測る。覆土は灰黒色シルトを基本とし、2層に識別される。重複する他の遺構との新旧関係は、S K 42に掘り込まれている以外不明である。遺物は瀬戸美濃焼碗（55）が出土している。

S K 61 (図版10・11・40)

16E 12・13に位置する。平面形は北西から南東方向に長い不整形を呈し、南東部にわずかなテラスを有する。長径167cm、短径115cm、深さは最大89cm（底面レベル7.70m）を測る。覆土は灰黒色シルトを基本とし4層に識別され、2層には地山ブロックが、4層には炭化粒が含まれる。西部でピットと重複するが、ピットに掘り込まれている。遺物は珠洲焼片口鉢（24）が出土している。

S K 62 (図版12)

16E 6・11に位置する。ピット 2 基と重複するが、平面形は楕円形と推定される。長径74cm、短径42cm、深さは最大42cm（底面レベル8.20m）を測る。重複するピットとの新旧関係は不明である。遺物は土師器壺（83）が出土している。

S K 63 (図版12・13)

16E 15に位置する。S B 4 柱穴 4 と重複するが、平面形はほぼ楕円形と推定される。長径75cm、短径50cm、深さは最大32cm（底面レベル8.28m）を測る。S B 4 柱穴 4 との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K 64 (図版14・15)

17B 1・2に位置し、平面形は隅円方形を呈する。長径71cm、短径66cm、深さは最大71cm（底面レベル7.87m）を測る。遺物は出土していない。

S K 65 (図版14・15)

17C 11に位置し、平面形は不整隅円方形を呈する。長径86cm、短径69cm、深さは最大128cm（底面レベル7.29m）を測る。遺物は覆土 1 層より珠洲焼甕または壺胴部破片 1 点、片口鉢胴部破片 1 点、覆土 3 層より越前焼壺（36）、粉挽き白上白（89）・下白（93）、曲物柄杓側板等が出土している

S K 66 (図版14・15)

16C 5・17C 1に位置する。南側を17C-P24に切り込まれるが、おおよそ隅の円い方形を呈する。長径80cm、短径78cm、深さは最大113cm（底面レベル7.44m）を測る。覆土はシルトで3層に識別され、下層には炭化粒が含まれる。遺物は下層から白磁皿、瀬戸美濃焼端反皿口縁部破片、用途不明の板材（130）が各1点出土している。白磁皿は口縁から底部にかけての小破片で、器壁は薄く、高台には抉り込みがある。内外面に施釉され、見込みと高台にはトチ目が

認められる。焼成良好で灰白色を呈する。森田分類D群に相当する。

S K67 (図版14・15)

17C11・12に位置する。平面形は不整円形を呈し、径56cm、深さは最大23cm(底面レベル8.35m)を測る。遺物は出土していない。

S K68 (図版14・15)

16D15・17D11に位置する。17D-P1に切り込まれるが、ほぼ橢円形を呈する。長径122cm、短径111cm、深さは最大146cm(底面レベル7.11m)を測る。遺物は出土していない。

S K69 (図版14・15)

17C5・17D15に位置する。南東部は崩落したものと推定される。上端の平面形は隅の凹い方形、底面はほぼ円形を呈する。長径128cm、短径80cm、深さは最大91cm(底面レベル7.65m)を測る。遺物は出土していない。

S K70 (図版14・15)

17D1・17E11に位置する。ほぼ隅円方形を呈する。長径98cm、短径84cm、深さは最大84cm(底面レベル7.76m)を測る。遺物は出土していない。

S K71 (図版14・15・40)

17D12・13に位置する、断面形がロート状を呈するものである。南部はS K73と、ほかに17D-P4・5・21と重複するため、平面形は不明である。テラス部分のレベルがS K73の底面とほぼ一致しているため、皿状の浅い蘊みがS K71の中心部を取りまっているように見える。覆土は2層に識別されるが、上層の一部を除き灰褐色シルトで占められる。深さは最大134cm(底面レベル7.26m)を測る。重複する遺構との新旧関係は、S K73を掘り込んでいる以外不明である。曲物柄杓(126)が出土している。

S K72 (図版14・15・40)

17D3・4・8に位置する。平面形は橢円形を呈し、長径218cm、短径146cm、深さ23cm(底面レベル8.34m)を測る。覆土は暗灰色シルト、暗灰褐色シルトの2層に識別される。重複するピットとの新旧関係は、北部のピットを掘り込んでおり、南東部のピットは不明である。遺物は出土していない。

S K73 (図版14・15・40)

17C2・3、17D12・13に位置する。S K71に掘り込まれているため、平面形は不明である。遺存部の深さは最大25cm(底面レベル8.34m)を測る。覆土はシルトで、5層に細分される。17D-P5・21とも重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K74 (図版14・15)

17E12に位置する。平面形は隅円長方形を呈し、長径89cm、短径37cm、深さは最大24cm(底面レベル8.35m)を測る。底面は緩い凸をなす。遺物は出土していない。

S K75 (図版16・17)

18B 5・10、19B 1・6に位置する。南西側に突出が見られるが、平面形はほぼ円形を呈する。長径97cm、短径81cm、深さは最大78cm(底面レベル7.82m)を測る。遺物は出土していない。

S K76 (図版16・17)

18E 8・9に位置する。平面形はほぼ橢円形を呈し、長径108cm、短径85cm、深さは最大91cm(底面レベル7.71m)を測る。柱根、杭が各1点出土している。

S K77 (図版16・17)

19B 2に位置する。東部をS K81と重複するが、ほぼ円形と推定される。径77cm、深さは最大89cm(底面レベル7.73m)を測る。S K81との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K78・S K79・S K80 (図版16・17)

19B 4・8・9に並んで位置するが、重複関係はない。S K78は排水溝によって南西部を失っており、全体の形状は不明である。遺存部では径93cm、深さは最大99cm(底面レベル7.66m)を測る。砾石(106)、約6×8×1.5cmの扁平礫が出土している。

S K79はS K78の東隣に位置する。排水溝により南隅部を失っているが、不整圓方形と推定される。長径85cm、短径63cm、深さは最大82cm(底面レベル8.02m)を測る。遺物は出土していない。

S K80はS K79の東隣に位置する。ほぼ円形を呈し、長径96cm、短径82cm、深さは最大166cm(底面レベル6.97m)を測る。遺物は出土していない。

S K81 (図版16・17)

19B 2・3に位置する。S E77と重複するため、平面形は不明である。遺存部では径85cm、深さは最大50cm(底面レベル8.12m)を測る。S E77との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K82 (図版16・17)

19C 8・9・13・14に位置し、ほぼ円形を呈する。長径95cm、短径85cm、深さは最大130cm(底面レベル7.29m)を測る。茶臼下臼(96)、石鉢(97)、五輪塔地輪(99)が出土している。

S K83・S K84 (図版16・17)

19C 4に位置する。西側にあるS K83がS K84を切り込んでいる。S K83は隅圓方形と推定され、径97cm、深さは最大153cm(底面レベル7.02m)を測る。覆土は地山ブロックが斑状に混じる黒褐色シルトの単層である。遺物は曲物柄杓(127)が出土している。

S K84は平面形は不明で、遺存部では径80cm、深さは最大162cm(底面レベル6.94m)である。覆土は黒褐色シルトの単層で、覆土から越前焼壺(37)、粉挽き臼上臼(87・88)が出土している。

る。

S K 85 (図版16・17)

19C 8・13に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径95cm、短径75cm、深さ50cm（底面レベル8.12m）を測る。覆土は地山ブロックが縞状に混じる黒色シルトの単層である。北西部で19C-P 7と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K 86 (図版16・17)

19C 3・4に位置する。平面形は隅円長方形を呈し、長軸87cm、短軸65cm、深さは最大55cm（底面レベル8.09m）を測る。覆土は暗灰黒色シルトの単層で、下部に炭化粒が含まれる。遺物は出土していない。

S K 87 (図版16・17)

19E 14・15に位置する。北部上面をSD 6に切り込まれるが、ほぼ円形を呈する。長径75cm、短径73cm、深さは最大72cm（底面レベル7.93m）を測る。覆土は黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K 88 (図版16)

19E 12・13に位置する。平面形はほぼ隅円方形を呈し、長軸70cm、短軸62cm、深さは最大42cm（底面レベル8.19m）を測る。北部をSD 7と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K 89 (図版18・19)

20B 1・6に位置し、平面形はほぼ楕円形を呈する。長径105cm、短径90cm、深さは最大80cm（底面レベル7.89m）を測る。北西部でピットと重複するが新旧関係は不明である。遺物は被熱融1点、底面より加工の有無不明の焼けている木材数点が出土している。

S K 90 (図版18・19)

20B 1に位置し、平面形は不整形を呈する。長径70cm、短径70cm、深さは最大70cm（底面レベル7.96m）を測る。北部はSB 9柱穴3と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K 91 (図版18・19)

20B 3に位置し、平面形は不整方形を呈する。長径70cm、短径57cm、深さは最大73cm（底面レベル7.88m）を測る。覆土は炭化粒を含む暗褐色シルトの単層である。遺物は珠洲焼片口鉢(22)が出土している。

S K 92 (図版18・19)

20C 11・20B 1に位置し、ほぼ楕円形を呈する。長径103cm、短径80cm、深さは最大151cm（底面レベル7.20m）を測る。西縁で20C-P 1と接するが、新旧関係は不明である。遺物は中世土師器皿(81)、漆器碗(118)、折敷(128・129)、杭(133)等が出土している。

S K93 (図版18・19)

20C12に位置し、楕円形を呈する。長径98cm、短径85cm、深さは最大143cm(底面レベル7.18m)を測る。遺物は出土していない。

S K94・S K95 (図版18・19)

20C13・14に位置する。S K94は平面形がほぼ円形で、長径100cm、短径90cm、深さは最大88cm(底面レベル7.77m)を測る。遺物は出土していない。S K95はS K94の東隣に位置する。平面形は隅円方形で、長径65cm、短径63cm、深さは最大70cm(底面レベル7.91m)を測る。遺物は出土していない。

S K96 (図版18・19)

20E14に位置し、不整円形を呈する。長径75cm、短径74cm、深さは最大86cm(底面レベル7.78m)を測る。覆土は黒色シルトを基本とし、2層に識別される。遺物は出土していない。

S K97 (図版18・19)

20E11に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径67cm、深さ64cm(底面レベル8.02m)を測る。覆土は黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K98 (図版20・21)

21C2、21D12・13に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径145cm、短径115cm、深さ最大173cm(底面レベル6.85m)を測る。覆土は2層に識別され、遺物は2層から珠洲焼甕(20)・片口鉢(29)、漆器皿(121)、杭(131・132)等が出土している。

S K99 (図版20・21)

21D4、21E14に位置する。北西部にテラス状の落ち込みと重複するが、平面形はほぼ楕円形を呈する。長径100cm、短径84cm、深さは最大132cm(底面レベル7.32m)を測る。覆土はシルトで3層に識別される。テラス状の落ち込みとの新旧関係は不明である。遺物は珠洲焼片口鉢(31)、瀬戸美濃燒天目茶碗(52)、白磁皿(50)、円形曲物底板(124)、用途不明の焼けている板1点等が出土している。

S K100 (図版18・19)

21E11に位置する。平面形は円形を呈し、長径85cm、短径75cm、深さは最大28cm(底面レベル8.34m)を測る。南部でピットと重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

S K101 (図版20・21)

22C1・22D11に位置し、ほぼ円形を呈する。長径84cm、短径77cm、深さは最大77cm(底面レベル7.88m)を測る。覆土は3層に識別される。遺物は出土していない。

S K102 (図版20・21)

22D12・13に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。径94cm、深さは最大171cm(底面レベル

6.98m)を測る。覆土は2層に識別され、上層には炭化粒が含まれる。遺物は出土していない。

S K103 (図版22・23)

22D 8・9・13・14に位置し、不整橢円形を呈する。長径103cm、短径84cm、深さは最大146cm(底面レベル7.22m)を測る。覆土は灰黒色シルトを基本とし、3層に識別される。遺物は焼けている板材破片が1点出土している。

S K104 (図版20・21)

22D 2・3・7・8に位置し、不整円形を呈する。長径100cm、短径88cm、深さ最大162cm(底面レベル7.04m)を測る。覆土は2層に識別され、上層には炭化粒が含まれる。遺物は出土していない。

S K105 (図版22・23)

22D 13に位置する。平面形はほぼ隅円方形を呈し、長軸72cm、短軸65cm、深さは58cm(底面レベル8.07m)を測る。覆土は2層に識別され、上層には炭化粒が含まれる。遺物は出土していない。

S K106 (図版22・23)

22D 14に位置する。平面形はほぼ隅円長方形を呈し、長軸94cm、短軸77cm、深さは最大50cm(底面レベル8.10m)を測る。覆土は2層に識別され、上層には炭化粒が含まれる。遺物は砾石(105)、木炭が出土している。

S K107 (図版20・21)

22E 1・6に位置する。平面形は円形を呈し、長径95cm、短径90cm、深さは最大114cm(底面レベル7.53m)を測る。覆土は地山ブロックが含まれる灰黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K108 (図版22・23)

22E 14・15に位置する。平面形は橢円形を呈し、長径85cm、短径70cm、深さは最大119cm(底面レベル7.48m)を測る。遺物は出土していない。

S K109 (図版20・21)

22E 7に位置する。平面形は不整形を呈し、長径67cm、短径37cm、深さ19cm(底面レベル8.49m)を測る。遺物は出土していない。

S K110 (図版20・21)

22E 7・8に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長径109cm、短径96cm、深さは最大21cm(底面レベル8.48m)を測る。覆土は黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K111 (図版20・21)

22E 1・2に位置する。北東部が調査区外になるため、平面形等の詳細は不明である。調査部分では径155cm、深さは最大59cm(底面レベル8.10m)を測る。遺物は出土していない。

S K112 (図版22・23)。

S X 2 の南西隅 (23E 6) に位置するが、S X 2 との新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈し、長径100cm、短径92cm、深さは最大163cm (底面レベル7.06m) を測る。遺物は出土していない。

C. 溝 (S D)

S D 1 [村 S D 3・4] (図版8・9・41・42)

頬城村調査区も含め調査区西半部寄りに存在する延長79mの矩形の溝である。S D 5と共に遺跡内の区画を大きく規定するものである。11Aから14Eにかけての左半部はN-92°-Eの方向で、15Eから17Aにかけての右半部はN-5°-Eの方向で掘削されており、ほぼ直角に折れ曲がる。上端幅は1.4~2.3mを測り、左半部に比較して右半部が広い。検出面からの深さは24~69cmであり、左端部から右端部にむけて数値を増して、底面のレベルは左半が8.2m前後、右半が8.0前後である。覆土は3層に区分され、遺物は1層からが大半を占め、次いで3層からは少量、2層からは全く出土していない。出土分布傾向として、右半部に対し左半部が少なく、その中でも13C・D、14Dは少なく、周辺遺構の密度とはほぼ一致する。遺物の内訳は珠洲焼(5・8・9・10・13・17・18・26・32・33)、越前焼(36)、青磁(39・41・45)、瀬戸美濃焼(59・60)、中世土師器(72~75・80)、須恵器(86)、石臼(94)、五輪塔(98・100)、土器片研磨具・研削具(110)等、図示しないものも含め多数出土している。

S D 2 (図版4・5・42)

頬城村調査区も含めた調査区西端の9Dから13Iにのびる溝である。10D・10Eの境界付近、本調査区・村調査区の境界付近で途切れているが、長さは延長52mを測る。深さは2~12cmで底面のレベルは8.2m前後であるが、凹凸が著しく一定していない。村調査区には村 S D 9・10・11があり、方向、掘形等が近似していることから、S D 2 と関連する遺構と推定される。覆土は暗褐色シルトの単層である。遺物は珠洲焼壺または壺4点(14)、中世土師器皿3点(71・78)が出土している。

S D 3 [村 S D 2・8] (図版14・15・41・43)

16G~18Aに位置する。S D 1 の右半部とS D 5 の間際に存在する溝であるが、両溝より東に傾いており、やや蛇行している。軸方向はおむねN-18°-Wである。北端は土坑化して幅を広げているが、その他の部分は幅0.5~1.1mを測る。深さは3~10cmと浅く、底面のレベルは8.5m前後である。覆土は地山の黄褐色土をブロック状に含む灰褐色シルトである。遺物は中世土師器皿片1点、珠洲焼片口鉢(25)が出土している。豊穴状遺構S X 1 の覆土を切り込んで掘削されている。

SD 4 (図版14・15・41・43)

17・18Cに位置する。SD 3とSD 5を結ぶ、やや曲流する溝である。深さは3~7cmで、底面のレベルは8.5m前後である。延長7.6m、上端幅0.4~0.8mを測る。珠洲焼甕または壺胴部破片1点の出土がある。

SD 5 (図版14・15・43)

16G~19Aに位置する。SD 1右半部とほぼ平行する溝である。上端幅が一定せず、やや蛇行しているが、軸方向はほぼN-10°-Wである。上端幅は0.5~2.5mを測る。深さは8~13cmで、底面のレベルは8.45m前後である。覆土は暗灰褐色シルトで、連結するSD 6・SD 7の覆土とは明瞭に分離できない。珠洲焼(2・4・15)、青磁碗(44)、白磁皿(48)、瀬戸美濃焼碗(62)、唐津焼皿(65・67)、茶臼上白(95)、土器片研磨具・研削具(114)、磨製石斧(138)等、図示しないものも含め多数出土している。

SD 6・SD 7 (図版16・17・43・44)

18C・D、19D・E、20Eに位置する。SD 5とほぼ直角に連結する平行した溝である。軸方向はほぼN-92°-Wである。上端幅はSD 6が0.8~1.0m、SD 7が0.3~1.0mである。深さはともに6~12cmであり、底面のレベルは8.55m前後である。遺物はSD 6で珠洲焼小壺(3)・片口鉢片1点・甕または壺片5点、瀬戸美濃焼皿片1点、瓦質土器片1点、SD 7で珠洲焼壺片1点、越前焼壺(36)が出土しており、越前焼片はSD 1覆土のそれと同一個体である。

SD 8 (図版22・23)

22D・23D・Eに位置する、上端幅0.4~0.8mの溝である。深さは7~9cmで底面のレベルは8.6m前後である。遺物は珠洲焼甕または壺片、越中瀬戸焼壺底部片、京焼風碗片、分別不明の焼き物が各1点出土している。

SD 9 (図版12)

15Eに位置する上端幅0.2~0.5m、深さ6cm程度の溝である。16Dの溝と同一の可能性があるが、深さは26cm程度で大きく異なる。検出した部分は延長約6.5mである。遺物は出土していない。

SD 10・SD 11 (8・9・44)

14Eに位置する2条の「畠状小溝」である。ほぼ平行しており、幅は0.3m、深さは最大3cmである。遺物は出土していない。

D. その他の遺構 (S X)

S X 1 (図版12・40)

16E・Fに位置する竪穴状遺構である。平面形は隅の深い不整方形であり、長軸4.2m、短軸3.0mを測る。図示した6基のピットがこの遺構に伴う柱穴と考えられるが、西側の3基は東側のそれと比較しての規模が小さく、前者3基は縁辺上に配置されている。東縁部はSDに切り込まれ、北半部は方形の搅乱を受けている。この他、数基のピットがSX1に重複しているが、SX1に伴うものがどれであるのか不明である。覆土は黄褐色ブロックが斑状に混じる灰黒色シルトである。覆土より中世土師器皿片が1点出土している。

S X 2 (図版22・23)

23Eに位置する竪穴状遺構である。北半部は調査区域外であるが、不整の円形または梢円形を呈すると思われる。調査区域壁際で4.6mの径を測る。遺構確認面での掘り込みは浅く5cm前後である。SK112と重複するが、掘削の前後関係は不明である。遺物は出土していない。

3. 遺 物

出土した遺物は、土器・陶磁器類のほか、木製品、石製品、土器軸用品、金属製品などである。出土量は平箱（箱サイズ54×34×10）で土器・陶磁器類13箱、木製品10箱、石製品10箱程度で、これ以外の遺物は少ない。遺物の多くは、遺構内出土で、溝、土坑に伴うものがほとんどである。耕作土（1層）からのものは少ない。遺物の所属する時期は、多くが中世で、次いで近世、古代の遺物は少ない。頸城村調査区の遺物は、出土量が本調査区より少いものの、出土状況・時期は同じ傾向 [秦1988] といえる。

以下、遺物の説明を記述するが、番号は遺物の種別にかかわらず、すべて通し番号をつけた。なお、節のおわりには遺物観察表を掲げた。

A. 土器・陶磁器類

土器・陶磁器類の内訳は第3表のように中国製磁器（青磁・白磁）、国産陶器（珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼）、中世土師器、瓦質土器、平安時代の土器（土師器・須恵器）、江戸時代以降の陶磁器（唐津焼・伊万里焼・越中瀬戸焼など）に分別される。それぞれの個体数については、不確定要素¹⁾も多くあり、必ずしも実数を反映していないかもしれないが、大まかな傾向を知れる。

中世に限定すれば、珠洲焼がもっとも多く、次いで中世土師器、瀬戸・美濃焼、青磁、越前焼、白磁であり、瓦質土器は1点のみである。一定量が灯明皿に使われたと思われる中世土師器を除外し、用途の近似したと思われる碗・皿類に限れば、中国製磁器（青磁・白磁）より、瀬戸美濃焼が多く1.5倍である。以下、種別ごとに述べる。

1) 珠洲焼（図版24・25・26・46・47）

石川県の能登半島先端の珠洲市周辺で生産された中世陶器であり、頸城地方は中世前半より珠洲焼の流通圏と予想されている [坂井1986]。中世陶磁器類284点の内、178点（研磨具等に転用された21点を含む）を数え62.7%を占める。内訳は片口鉢46点、壺または甕132点である。なお、珠洲焼の分類、部位名称等については、『中世須恵器の研究』 [吉岡1994] に従った。

1) 小片で分別不可は不明とした。複合されたもの、明らかに同一個体と思われるものは1個として数えた。珠洲焼のように大型品で出土数が多い種別は、実数より多くなっているものと思われる。中世土師器と平安時代の土師器で分別のつかないもの多くは、中世に所属すると推定されるため中世土師器に含めた。

第3表 土器・陶磁器類集計表 () 内は土器軸用品の数

種 別	器 種	遺構内出土		遺構外出土		合計 (%)
		出土数	図示数	出土数	図示数	
珠洲焼	片口鉢	28(7)	13(5)	18(2)	3(2)	46(9) (13.3)
	壺・甕	75(5)	19(3)	57(6)	6(3)	132(11) (38.3)
越前焼	片口鉢	3(1)	1	1		4(1) (1.2)
	壺・甕	6(2)	2	3(1)	1	9(3) (2.6)
青磁	碗・皿	9	7	4	3	13 (3.8)
白磁	碗・皿	4	3	1	1	5 (1.4)
瀬戸美濃焼	天目茶碗	4	2	1	1	5 (1.4)
	碗・皿	17	6	5	4	22 (6.4)
中世土師器	皿・壺	37	12	10	1	47 (13.6)
瓦質土器		1				1 (0.3)
土師器・須恵器		6	2	5	2	11 (3.2)
唐津焼		2	2	7	1	9 (2.6)
伊万里焼		1	7			8 (2.3)
織部焼				1	1	1 (0.3)
越中瀬戸焼		1		6	1	7 (2.0)
分類不明		8		17		25 (7.2)
合 計		202	69	143	25	345 (99.9)

小壺 (1 ~ 5)

5点を図示した。いずれもロクロ成形の壺R種である。

1は口頭部破片で、頭部は直立気味に、口縁部は外傾気味になり、口縁端部は円く（円頭）おさまる。頭部から上胴部にかけての様子から撫で肩になるものと思われる。吉岡編年【吉岡前掲、以下同じ】V期に属する。

2は肩部から上胴部の破片で、比較的撫で肩になるものと思われる。外面に条の細かい櫛目波状文が施文される。

3・4は底部破片で、4は静止糸切り後、底側部にヘラ削りが行われている。底部からの立ち上がりの様子から長胴型と推定される。

5は短頭小壺の口頭部から上胴部の破片で、口頭部は「く」の字状に鋭く外傾し口縁端部は

上方につまれ、外面は面を成す。口縁部内面は受口状になる。胴上部には条の細かい小波状の櫛目文が施文されている。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期またはⅣ期¹⁾に属する。

壺（6～8）

6は口頸部の破片で、頸部は直立ぎみに、口縁部は外傾気味になり、口縁端部は嘴状に外側や下方に挽き出している。吉岡編年Ⅳ期に属する。

7は短頸の口頸部破片で、頸部は強く屈折し、口縁部は水平口縁になる。口縁端部は円く（円頭）おさまる。吉岡編年V期に属する。

8は叩き目を削磨技法によって調整した壺K種の口頸部から上胴部の破片である。口頸部は若干外傾気味に屈曲し、口縁部は頸部に比べやや厚みを増し、口縁端部は円く（円頭）おさめる。吉岡編年IV～V期に属する。

甕（9～21）

12点図示したがいずれも破片である。11～17は甕との分別が明らかでない。

9は中甕の口頸部から上胴部破片で、口頸部は「く」の字口縁である。内面には弱い稜が2段生じ、外面は直線状に開く。口縁部は頸部に比べやや厚みを増し、端部はやや円みを持たせておさめる。上胴部は口頸部内面下端の稜以下から器壁を少しづつ薄作りにする。頸部から上胴部への様子から胴径は口頸をやや上回るものと思われる。吉岡編年IV期と推定される。

10は口頸部から上胴部破片で口頸部は「く」の字口縁で、内面には弱い稜が2段生じ、外面は直線状に開く。口縁部は頸部に比べやや厚みを増し、端部はやや円味を持たせておさめる。上胴部は口頸部内面下端の稜以下から器壁を少しづつ薄作りにする。頸部から上胴部への様子から胴径は口頸をやや上回るものと思われる。上胴部外面には「六」の刻文がある。吉岡編年IV期と推定される。

9・10は約10m程離れて出土したものの共にSD1からの出土であり、調整・器形は極めて近似している。同一個体の可能性もある。

11～14は叩打成形（T種）の甕または壺の胴部破片である。外面には11が綾杉状、ほかは横位あるいは右下りの打圧痕、内面は円形押圧痕が認められる。

15・16は叩打成形（T種）の甕または壺の下胴部と底部鉢形の境目の破片である。外面鉢形には横位の、下胴部には右下りの打圧痕が認められる。内面は円形押圧痕であり、鉢形にはかすかにロクロナデの痕跡と接合痕が見られる。

17・18は叩打成形（T種）の甕または壺の底部鉢形から底側部にかけての破片である。17の外面鉢形には右下りの、底側部には横位の打圧痕が、18にはすべて横位の打圧痕が認められる。内面はロクロナデであるが、17は粗雑な作りで粘土紐の繋ぎ目がよく残っている。また、底側

1) 勝土から観察すると法住寺三号窯の可能性があるという。（西柳嘉章氏御教示）

部から鉢形への立ち上がりはやや急であり、寸胴気味の長胴型になるものと思われる。

19~21は叩打成形（T種）の底部から底側部の破片である。外面底側部には19・21はやや右下りの、20は横位と右下りの打圧痕が、内面にはロクロナデが認められる。底部外面には敷き砂の痕跡があり、上げ底風になっている。

片口鉢（22~33）

12点図示したが、いずれも破片で、全体の器形が分かることは2点しかない。ここでは口径28cm以上を大型品、20cm以下を小型品とし、両者の間を中型品とした。すべてロクロ成形（R種）である。

22は中型品の口縁部破片で、胴部は直線状に開き、口縁部は肥厚気味になる。口縁端部は方頭で、外傾する面を持つが、内端・外端は若干の円みを持つ。吉岡編年IV期に属する。

23は大型品の口縁部破片で、胴部は直線状に開き、口縁部はやや肥厚し、端部は三角頭で幅広（18mm）の端面が内傾する。端面には波長約30~35mmの櫛目波状文が施文され、内面には稍密な卸し目がつけられている。吉岡編年V期に属する。

24~25は胴下半部の破片である。内面卸し目は24は比較的稠密に、25は粗につけられている。

26は中型品の口縁部から胴部の破片で、胴部は直線状に開き、口縁部は肥厚気味になる。口縁端部は方頭で、外傾する面を持つが、外端の拡張が著しく、外端と内端の間に緩い凹部が見られる。卸し目は幅狭で細く、胴部下半に比較的稠密につけられるものと思われる。吉岡編年IV期に属する。

27は中型品の口縁部から胴部の破片で、胴部は直線状に開き、口縁部は肥厚気味になる。口縁端部は三角頭で、外端を水平に著しく突出させた水平口縁で、外端と内端の間に緩い凹部が見られる。卸し目は幅広で太い。吉岡編年IV期に属する。

28は中型品と推定される胴部から底部の破片で、胴部はわずかに膨らみを有する。幅広で太い卸し目が粗に認められる。

29は大型品の口縁部から胴部の破片で、胴部はほぼ直線的に開き、口縁部は肥厚気味になる。口縁端部は三角頭の内傾口縁で、口縁基部を強く撫で内端を突出させ、幅広（18mm）の端面を作る。端面には櫛目波状文が施文され、内面には中太の卸し目が稠密につけられている。注口は幅狭く、突出が浅い三日月形になる。吉岡編年V期に属する。

30は大型品の口縁部から胴部の破片で、胴部はほぼ直線的に開き、口縁部は肥厚する。口縁端部は三角頭の内傾口縁で、口縁基部を強く撫で内端を突出させ、幅広（20mm）の端面を作る。内端・外端は観る長三角形状になる。端面には波長30mmの櫛目波状文が施文され、内面には中太の卸し目が稠密につけられている。吉岡編年V期に属する。

31は大型品の口縁部から底部の破片で、底部からほぼ直線的に開き、口縁部はあまり肥厚しない。口縁端部は三角頭の内傾口縁で、内端はそれほど突出していないが、幅広（20mm）の端

面を作る。端面には波長30~38mmの櫛目波状文が施文され、内面には中太の卸し目が稠密につけられている。高口指数（器高÷口径×100）は37、底高指数（底径÷口径×100）は35で吉岡分類II、類（腰が低い底平型で大型品）に属する。吉岡編年V期に属する。

32は大型品の口縁部から底部の破片で、底部からは直線的に開き、口縁部は肥厚しない。口縁端部は三角頭の内傾口縁で、内端は突出していないが、幅広（15mm）の端面を作る。外端はやや円味を帯びる。端面には櫛目波状文が施文され、内面には中太の卸し目が稠密に付けられている。高口指数は37、底高指数は36でII₁類に属する。吉岡編年V期に属する。

33は大型品と推定される胴部から底部の破片で、胴部は直線状に開く。底部内面は使用により摩滅しているものの、太い卸し目が付けられていたことが推測できる。

2) 越前焼（図版26・47）

越後において珠洲焼に代わるのは15世紀末葉から16世紀代〔坂井1987・遠藤1989〕とされている。中世陶磁器類284点の内、13点（研磨具等に転用された4点を含む）で少なく、3.8%を占めるに過ぎない。内訳は片口鉢4点、壺または甕9点である。

片口鉢（34）

大型品と推定される底部から胴部にかけての破片で、胴部は直線状に開く。破片の様子から内面には1単位幅27mm9目の卸し目が10単位付けられていたものと推定される。

壺（35・36）

36は頸部破片で、頸基部は直立気味に、口縁部にかけては外傾気味になる。口縁端部は外方に挽き出されたと思われ、口縁部内面は緩く屈曲する。

37は器高40cm近くになると推定される大型品である。しかし、被熱し多くの破片になっており、底部から口縁部まで接合せず、推定復元実測図である。頸部から口縁部は外傾気味に開き、口縁端部は折返し、円く仕上げて玉縁状口縁としている。胴部は緩やかに張り最大径はほぼ胴部中央部にもつと思われるが、実測図より若干上位になる可能性もある。

福井県一乗谷朝倉氏遺跡のIII期〔岩田1988〕に類似資料があり、越前焼編年〔植崎・田中1986〕のV期後半に属する。

甕（37）

頸基部から肩部の破片である。内面には帶粘土の接合による指痕、頸基部付近にはロクロナデ、外面にはロクロナデが認められる。肩部寄りにはヘラ記号「フリ」が付けられている。

3) 青磁（図版27・47・48）

13点出土している。内訳は碗11点、皿2点である。可能な限り図化した。なお、青磁の分類・呼称等については「14~16世紀の青磁碗の分類」〔上田1982〕に従った。

碗 (38~45)

38・39はいわゆる鍋蓮弁文碗と推定される口縁部あるいは体部の破片である、小片のため詳細は不明であるが、比較的幅の広い蓮弁文で、39は弁先が尖るものと思われる。上田分類【上田前掲、以下略】B II類またはB III類に含まれる。

40~42は無文碗の口縁部から体部の破片である。内湾気味の体部からそのまま口縁端部になる40・41、外反する42がある。41は口縁部外面に釉垂れが見える。なお、40は外面に2条の、42は内面に1条の細くて浅い横線が見えるものの、調整痕と思われるため無文碗とした。40・41は上田分類E類、42は上田分類D II類に含まれる。

43は線描蓮弁文碗の体部下半から底部の破片であり、釉は疊付を越えて高台内面途中までかかり外底面は無釉になる。見込に花文のスタンプがある。また、外面体部下半に細くて浅い横沈線が見られるが、調整痕と推定される。上田分類B IV a類に含まれる。

44は無文碗の体部下半から底部の破片であり、釉は疊付を越えて高台内にまわり、一部外底面までかかる。見込は無釉である。上田分類B IV a類に含まれるものと思われる。

45は体部下半から底部の小破片であり、釉は高台疊付までかかる。高台内面、外底面はもともと施釉されなかったか、施釉後削り取ったかは不明である。

穂花皿 (46~47)

46は体部下半から口縁部の破片である。体部下半で腰を折り、緩く外反し口縁部にいたる。外面は無文、内面口縁下には唐草文と思われる文様が見られる。

47は遺存率がよく、全体の5/6が残っている。体部下半で腰を折り、緩く外反し口縁部にいたる。外面は無文、内面には弧線状の文様が見られる。全面施釉後、外底面の釉を削り取っている。

4) 白磁 (図版27・48)

5点出土している。青磁に比べ極めて少ない。内訳は皿4点、碗1点で、4点図示した。なお、白磁の分類・呼称等については「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」【森田1982】に従った。

皿 (48~50)

いずれも小型の皿で、48は口縁部から体部の、49・50は体部から底部の破片である。いずれも緩く内湾しながら48は体部から口縁部に、49・50は底部から体部にいたる。施釉は49は一部高台外面までかかるが、基本的にすべて体部下半で止められてる。釉には細かい貫入が多く伴う。森田分類【森田前掲、以下略】のD群に含まれる。

碗 (51)

体部下半から底部の破片で、緩く内湾しながら立ち上がる。器壁は比較的薄いが、高台はそれほど細くなっていない。釉は体部までで、高台及び外底面は施釉されていない。器壁・高台

等の様子から森田分類のC群とE群の中間の特徴を示す。

5) 潤戸・美濃焼 (図版27・28・48)

現在の愛知県から岐阜県にかけて生産された中世陶器を瀬戸美濃焼として一括した。27点出土している。内訳は天目茶碗5点、碗・皿類が22点であり、碗と皿では皿が多い。なお、卸し皿が1点出土している。この内13点を図示した。

天目茶碗 (52~54)

52・53は口縁部から体部の破片で、内湾気味に開いた体部は口縁部で52は小さく、53はやや大きく外反する。52は外面口縁下約1.6cmのところに弱い稜を持ち、53は口縁下約2.1cmで肥厚する。52は古瀬戸編年〔藤沢1984、以下略〕後期後半、53は瀬戸大窯編年〔藤沢1986、以下略〕5段階に属する。

54は体部の破片で、内湾気味に開いた体部は口縁部近くで更に内湾する。体部下半は無釉であるが、それ以前に化粧かけとして露胎部に光沢のない鉄釉をかけている。53・54に比べると器壁が薄く、釉に光沢がある。化粧かけから瀬戸大窯編年3段階以前と推定される。

碗 (55~57・62)

55~57は平碗の口縁部から体部の破片である。やや内湾気味に「ハ」の字状に開いた体部は口縁部で外反しややくびれた器形になり、端部は尖る。56は小片で明らかでないが、55・57は外面体部下半以下は無釉となる。なお、56・57は10m程離れて出土したが、器形、焼成、釉の剥落状態、胎土から非常に近似し、同一個体の可能性がある。いずれも古瀬戸編年後期後半に属する。

62は白瓷系の碗と推定されるもので、底部の破片である。擂り鉢状の底部から緩やかに立ち上がる。底部は回転糸切りで、見込中央部には成形時の突起を磨り消した痕が残る。内面の一部にかすかに釉が認められるが、自然釉かどうか不明である。外面は無釉である。山茶碗の編年〔田口1983〕のIV期後半に属するものと思われる。

皿 (58~60・61・63)

58~60は端反皿の口縁部から底部の破片である。見込から体部にかけては内湾気味に立ち上がり、口縁部は59は緩く、58・60はやや大きく外反する。端部は58がやや尖り、器壁もやや薄い。いずれも外面体部下半はヘラ削り、高台は削り出し高台である。釉は外面体部下半、底部以外は施釉される。内面見込にトチ目が認められる。いずれも古瀬戸編年後期後半に属する。

61は底部から体部下半の破片である。全面に施釉され、見込に菊花のスタンプがある。瀬戸大窯編年1段階に属する。

63は白瓷系の皿と推定されるもので、底部の破片である。内外面無釉で、底部は回転糸切り底である。

おろし皿 (64)

完形品である。ロクロ引きの体部はやや内湾ぎみに「ハ」の字に広がり、口縁端部は偏平でやや外傾した面を持つ。内面見込にヘラによる格子状の卸し目が施され、口縁には半円筒状の粘土を押し付けた片口が付く。底部は回転糸切り底である。外面底部、体部下半の一部、見込以外は施釉される。見込にトチ目痕が4か所認められる。古瀬戸編年〔藤沢1984〕の中期前半に属する。

6) 中世土器器 (図版28・49)

土器質土器とも呼ばれている。小破片が多く個体数の出し方に不確定の要素もあるが、47点出土した。大半が皿と推定される。13点図示した。皿については成形技法による分類〔坂井1986〕を行った。

皿 (70~81)

製作技法により2種類に分けた。A類は手捏ねで、口縁部内外面をヨコナデするタイプ、B類はロクロ成形で、底部を回転糸切り底にするタイプ〔坂井前掲〕である。

A類 (70~78)

口径が11cm未満の小型品 (70~73・78) と11cm以上の中型品 (74~77) がある。

70・71は器壁が厚く、器高が低くやや急角度に立ち上がり、口縁部は上方にのびるものである。

72・73・78は器壁がやや薄く底部は丸底風または小さく、体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はやや外反するものである。79は特に薄く作りがよい。

74~77は中型品で底部は平底風または上げ底風、体部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は若干上方に上げられるが、端部の内面がわずかに凹むもの (74・75・77) と凹まないもの (76) がある。77は砂粒の多い胎土で端部は円められている。

B類 (79~81)

79・80は小型品である。

81は口径14.3cmの大型品で、体部は直線状に立ち上がり、体部上半から口縁部にかけては緩く外反し、端部は尖る。胎土は精良で作りもよい。

壺 (82)

口縁部と底部をわずかに欠くもので、器高が皿に比べやや高いため壺とした。手捏ねで成形した後、口縁部内外面をヨコナデしている。

7) 近世以降の陶磁器 (図版28・49)

多くは近世の所産と思われるが、第3表のように唐津焼・伊万里焼・織部焼・越中瀬戸焼が

出土している。大半は遺構に伴うものでなく、耕作土（I層）からの出土である。

縁部焼 (63)

1点のみの出土である。いわゆる「青織部」と呼ばれている皿の破片である。体部下半は内湾気味に、体部中央で屈曲し外反する。端部は円められ、外面に弱い凹みを持つ。体部下半はヘラ削り、高台は削り出し高台である。文様は見込に鉄絵の菊花文、口縁端部を除いた口縁部内面に銅線釉、口縁端部外面から内面全体に長石釉（白釉）の配色で、外面は無釉である。17世紀前半【土岐市美濃陶磁歴史館1994】と思われる。

唐津焼 (65~67)

9点出土している。碗・皿類5点、壺または甕2点、擂り鉢2点この内近世初期と推定される皿3点を図示した。

65は底部から体部下半の破片である。ロクロ成形で、削り出し高台を持つ。外底面を除き全面に施釉され、内面見込、高台疊付に3か所砂目痕が残る。

66・67はいわゆる折縁皿の口縁部から体部の破片である。緩やかに直線状に開いた体部は口縁部でわずかに外反し、端部は上方に折られる。端部の内面は緩く凹む。内面見込と体部の間に段を持つが、65は弱い。釉は外面体部下半以下が無釉と推定される。

すべて大橋編年【大橋1984・1989】のII期に属する。

越中瀬戸焼 (69)

7点出土している。内訳は碗2点、壺または甕4点、片口鉢1点である。69は底部から体部の破片で、ロクロ成形で、底部は回転糸切り底である。内面に卸し目が認められ、稠密に施されたものと思われる。

8) 平安時代の土器 (図版28・49・50)

土師器5点、須恵器7点が出土している。いずれも小破片である。

土師器 (83)

底部の破片で、ロクロ成形、回転糸切り底である。

須恵器 (84~86)

いずれも甕の体部破片である。84・85は外面平行、内面同心円叩き、86は外面格子目、内面平行叩きである。

B. 石 製 品

石製品の内訳は第4表のように石臼、砥石が多く、次いで五輪塔である。石鉢、硯が各1点出土している。また、被熱礫も多く出土している。出土傾向として多くは遺構に伴う¹¹⁾。

以下、種別毎に述べる。

1) 石臼 (図版29・50)

16点出土している。遺存の良否はあるもののすべて破片で、ほとんどが被熱している。内訳は粉挽き臼13点（上臼10点・下臼2点・上下不明1点）、茶臼3点（上臼2点・下臼1点）である。なお、臼の分類と名称は『臼』[三輪1978]に従った。

粉挽き臼 (87~93)

87~92は上臼で、直径25~33cmの大きさ、臼の目からすべて反時計回り、安山岩製である。

93は下臼で直径30.4cmを測り、上臼に対応する大きさである。

茶臼 (94~96)

94・95は上臼で、それぞれ直径17.2・18.7cmを測る。臼の目から反時計回りになる。安山岩製であるが、粉挽き臼に比べきめ細かい石質である。

96は下臼で直径16.6cm（受皿径29.7cm）を測る。臼の目から上臼は反時計回り、砂岩製である。

2) 石鉢 (図版29・50)

97は口縁部の破片であり端部はやや尖る。安山岩製。小片のため詳細不明である。

3) 五輪塔 (図版30・50・51)

98~100は基礎（地輪）で、98・99は完形、100は1/2を欠く。上面を平坦に仕上げるが、下面にはやや凹凸が残る。安山岩製。

101は塔身（水輪）で1/2を欠く。上下面に凹みを持つが、上面の凹みは大きく深い。安山岩製。

4) 砥石 (図版30・51)

102・103・105~108は横断面形方形または長方形の砥石である。108は風化が激しく、正面は一応自然面と判断したが、ほかは正面面、両側面に砥面を持つ。102は両端、103・105は上端も使用されている。104は横断面形三角形状を呈する砥石である。109は砥石に含めたが破片であり不明確な部分が多い。正面

第4表 石製品・礫集計表

種 別	遺構内出土	遺構外出土	合 計
石臼・粉挽き臼・上臼 下臼 上下不明 茶臼・上臼 下臼	7 1 1 2 1	3 1 16	
石 鉢	1		1
五 輪 塔	4		4
砥 石	8	2	10
石 瓦	1		1
成 熟 磨	11	7	18
礫	1	2	3

1) 被熱礫、礫は遺構外からも多く出土しているが、半数以上は出土地点不明のものである。

面に砥面（磨面）が認められる。形状、石材がほかの砥石と異なることから、绳文時代の石皿の可能性もある。なお、109以外は使用の頻度により砥面が凹面になる。

5) 石硯（図版32・53）

134は方形硯と推定されるが、側面は面取りされず凹凸が著しい。縁沿いに深く彫り込み海部をつくる。したがって、陸部は島状になる。裏面は平坦面をなす。粘板岩製。

C. 土器転用品

不要になった土器片をほかの目的に使用あるいは加工しているものである。22点出土している。従来、使用により研磨具または研削具と思われていたもの21点、加工によりいわゆる「円盤状土製品」「メンコ」と呼称されていたもの1点である。ここではそれぞれ「土器片研磨具・研削具」「土器片円盤」と呼称する。

1) 土器片研磨具・研削具（図版30・51・52）

土器片の一部に使用の結果と思われる摩滅痕が認められるものである。23点出土している。内訳は第5表のとおりで、転用前の種別は珠洲焼19点、越前焼4点である。内7点を図示したが、A. 1)珠洲焼の項で5点図示（14・21・24・26・29）してある。

110～113は珠洲焼片口体の口縁部から体部上半の破片である。いずれも口縁部内面に摩滅痕が認められる。110・111に比べ、112・113のはうが摩滅が進行している。口縁部の形状により吉岡編年V期に属する。

114～116は珠洲焼壺または壺の胴部破片である。いずれも外面のほか、114は1側面に、115は2側面に摩滅痕が認められる。

すべてを観察した限りでは砥石のように砥面が凹面することではなく、砥石のように金属器を

第5表 土器片研磨具・研削具集計表

種 別	器 种	部位(破片)	使 用 面	出 土 数
珠洲焼	片口体	口縁部	口縁部内面	6
		口縁部～胴部	外面	2
		胴部	外面 + 3 腹面	1
	壺または甌	胴部	外面	5
			外面 + 1 腹面	1
			外面 + 2 腹面	1
			内外面 1 腹面	1
	底部	外面 + 2 腹面	1	
越前焼	片口体	底部	内外面 + 2 腹面	1
	壺または甌	胴部	1 腹面 内面 + 2 腹面	2 1

第6表 木器・木製品集計表

種別・器種	遺構内出土	遺構外出土
漆器・椀	4	
漆器・皿	1	1
曲物・円形曲物	2	
曲物・曲物柄杓	3	
折敷	2	
板材	2	
梳	8	2
柱材	11	5
木片(加工の有無不明)	8	6

研ぐようなものではないと考えられる。

2) 土器片円盤（図版30・53）

1点のみの出土で、136は珠洲焼の壺または壺の体部破片の周縁を打ち欠き、円形状に仕上げたものである。

D. 木器・木製品

木器・木製品の種別・器種別の出土数は第6表のようになる。柱、木片、杭の出土が多い。また、低湿地遺跡の調査でもあまり出土例の少ない漆器、曲物、折敷がまとまって出土している。なお、遺構外出土になっている木製品は、調査時は遺構に伴っていたが、その後の管理不備によって地点不明になったものと思われる。

以下、種別毎に説明する。

1) 漆器（図版31・52）

6点出土し、すべて図示した。前述のように遺構外出土が1点あるが、もとはすべて遺構に伴っていたものである。内訳は椀4点、皿2点で、すべて横木取りである。なお、漆器の分類、名称等は「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」[四柳1991]に従った。

椀（117～120）

117は総赤色漆の椀で、口唇部と高台が黒色漆である。内面見込から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に続く。内面体部下半に稜があり、高台裏に赤色漆による「吉」銘がある。

118は総黒色漆の椀である。内面見込は中央部が緩やかに凹み、体部にかけて内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に続く。

119は総黒色漆の椀である。見込から体部下半にかけては緩く立ち上がり、体部下半は膨らみ、内湾し、口縁部では垂直気味になる。器壁は薄い作りである。

120は総赤色漆の椀の口縁部から体部の破片で、口唇部が黒色漆である。内湾気味の体部は口縁部で外反する端反椀である。器壁は薄い作りである。

121・122は総赤色漆の皿で、口唇部と高台は黒色漆である。体部は内湾気味に緩く立ち上がり口縁部にいたる。121は内面体部下半に稜があり、高台はやや外向きにつくられる。122は残りが悪く不明確であるが、121と同じ作りだったものと思われる。共に高台裏に赤色漆で「一」銘がある。

2) 曲物 (図版31・32・52・53)

5点出土し、すべて図示した。内訳は円形曲物2点、曲物柄約3点である。なお、曲物の分類・名称については、『木器集成図録 近畿古代篇』[奈良国立文化財研究所1985]に従った。

円形曲物 (123・124)

共に底板の一部である。123は径33.4cm、124は径19.0cmを測る。いずれも側板と結合する結合孔が認められ、123は1か所2孔で5か所に均等配置されたものと思われる。また、結合孔に木釘が2本が残存していた。

曲物柄杓 (125~127)

いずれも底板と側板が出土していたが、側板は断片であったり(125)、ばらけていたり(126・127)していた。126A・C、127B・Cはばらけていた側板をもとに復元実測したものである。底板の径8.4~8.7cm、2孔1対の結合孔3か所(124は遺存の様子から3か所と推定される)。檜皮縫のみの結合など大きさ、製作方法に共通点が多く見られる。なお、126の側板には方形の柄孔が認められた。

3) 折敷 (図版32・53)

S Kから2点(128・129)のみ出土している。いずれも四隅の角を切らない「平折敷」である。

4) 板材 (図版32・53)

2点出土している。図示した130は板の隅部の断片で、用途は不明である。

5) 杖・柱・木片 (図版32・53)

調査では杖10点、柱16点、加工の有無不明の木片14点が出土した。しかし、その後の管理不備からすべて乾燥し変形してしまった。比較的変形の少ない3点を図示した。太さは131が5.7cm、132が7.5cm、133が2.0cmで先端部は加工され尖る。

E. 金属製品 (図版32・53)

135は銅製の簪、137は唐銭(開元通宝)である。このほか製品ではないが、鉄滓4点出土している。

F. 繩文時代の石器 (図版32・53)

138は蛇紋岩製の定角式磨製石斧、139は頁岩製の打製石斧である。共に繩文時代中期以降の所産と思われる。

第7表 水久保遺跡遺物観察表(1)

珠洲焼 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
1	22D・I層	小壺	口頭部破片	8.6	(5.1)	灰・灰	内外面ロクロナデ。	
2	18C・SD5・1層	小壺	肩部・腹部 破片		灰・灰		内外面ロクロナデ。外面櫛目波状文。 肩径21.8cm。	
3	19D・SD6・1層	小壺	底部鉢形破 片	8.2	(4.4)	灰・灰	内外面ロクロナデ。底部静止糸切り。	
4	18C・SD5・1層	小壺	底部鉢形破 片	9.6	(5.4)	灰・灰白	内外面ロクロナデ。底部静止糸切り。 底部部箇削り。長胴型?。面凸有 し。	
5	15D・SD1・1層	小壺	口頭部～上 肩部破片	4.9	(2.2)	灰白・灰白	内外面ロクロナデ。上肩部外面櫛目 波状文。外面自然釉かかる。	
6	13E・SK14	壺	口頭部破片			灰・灰	内外面ロクロナデ。	
7	15C・SK29	壺	口頭部破片			灰・灰	内外面ロクロナデ。口端面に微頭压 痕あり。	
8	16BC・SD1・1層	壺	口頭部～上 肩部破片	16.8	(9.8)	灰・灰	口頭部内外面ロクロナデ。上肩部外 面叩打痕、箇状器具にて削り。内面 押圧痕後、ヨコナデ。頭基部外面に 凹状器具の接合痕あり。	
9	16BC・SD1・3層	壺	口頭部～上 肩部破片	41.2	(8.6)	灰・灰	口頭部内外面ヨコナデ。上肩部外 面平行叩打痕、内面押圧痕。頭基部内 面に薄く焼付痕。	
10	16A・SD1	壺	口頭部～上 肩部破片			灰・灰	口頭部内外面ヨコナデ。上肩部外 面平行叩打痕。内面押圧痕。上肩部外 面に「」の割れあり。被然。	
11	11C・SK2	壺また は壺	肩部破片			灰・灰	外面矢羽叩打痕。内面円形押圧痕。	
12	15E・SK32	壺また は壺	肩部破片			灰・灰	外面平行叩打痕。内面円形押圧痕。	
13	12B・SD1・1層	壺また は壺	肩部破片			暗灰・灰	外面平行叩打痕。内面円形押圧痕。	
14	11E・SD2	壺また は壺	肩部破片			暗灰・暗灰	外面平行叩打痕。内面円形押圧痕。 土器片研磨具、研削具に転用。	
15	18D・SD5・1層	壺また は壺	下肩部～底 部鉢形破片			灰・灰	外面平行叩打痕。内面押圧痕後、ヨ コナデ。	
16	18B・I層	壺また は壺	下肩部～底 部鉢形破片			灰白・灰白	外面平行叩打痕。内面円形押圧痕。	
17	13D・SD1・1層	壺また は壺	底部鉢形破片			褐灰・灰黄 褐色	外面平行叩打痕。内面円形押圧痕、 接合部ヨコナデ。燒成やや不良。	
18	16BC・SD1・3層	壺また は壺	底部鉢形破片			灰白・灰	外面平行叩打痕。内面円形押圧痕後、 ナデ。内面に津付着。	
19	16B・SD1・1層	壺	底部鉢形破片				砂底。外面平行叩打痕。内面押圧痕 後、ナデ。	
20	18B・I層	壺	底部破片	15.2	(4.4)	灰・灰	砂底。外面平行叩打痕。内面押圧痕 後、ナデ。	
21	21D・SK98・2層	壺	底部破片	16.6	(4.7)	灰・オリー ブ灰	砂底。外面平行叩打痕。内面押圧痕 後、ナデ。	
22	17D・I層	壺	底部破片	22.6	(4.8)	灰・灰白	砂底。外面平行叩打痕。内面押圧痕 後、ナデ。土器片研磨具、研削具に転用。	

第8表 水久保遺跡遺物観察表(2)

珠洲焼 () は残存数

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
22	20B・S K91	片口鉢	口縁部破片	(23.3)			灰・灰	内外面ロクロナデ。押し目なし。
23	14D・S K20	片口鉢	口縁部破片	(33.2)			暗緑灰・オ リーブ灰	内外面ロクロナデ。口縁部内面磨目 波状文。押し目(目数不明)あり。
24	16E・S K61	片口鉢	胴下半部破 片				灰・灰	内外面ロクロナデ。押し目(目数不明) あり。土器片研磨具・研削具に 転用。
25	17C・S D3-1層	片口鉢	胴下半部破 片				灰白・灰白	内外面ロクロナデ。押し目(1単位 21mm幅6日)あり。
26	15D・S D1-1層	片口鉢	口縁部～胴 部破片	26.8	(7.7)		暗灰・灰	内外面ロクロナデ。押し目(1単位 15mm幅7日)あり。土器片研磨具・ 研削具に転用。
27	11C・S K2	片口鉢	口縁部～胴 部破片	23.0	(6.9)		灰・灰	内外面ロクロナデ。押し目(1単位 30mm幅8日)あり。
28	11C・S K2	片口鉢	胴部～底部 1/4		11.0	(7.2)	灰・灰	内外面ロクロナデ。底部静止糸切り。 押し目(1単位35mm幅8日)あり。 内面ロクロナデ凹凸。押し目凹凸著 しい。底脚部外面に指頭圧痕あり。 底部に板状の圧痕あり。
29	21D・S K98-2層	片口鉢	口縁部～胴 部破片	38.8		(11.9)	オリーブ 灰・灰	内外面ロクロナデ。口縁部内面磨目 波状文。押し目(1単位22mm幅10日) あり。土器片研磨具・研削具に転用。
30	19C・I層	片口鉢	口縁部～胴 部破片	41.1		(7.2)	灰・灰	内外面ロクロナデ。口縁部内面磨目 波状文。押し目(1単位24mm幅10日) あり。図示してないが注口部あり。
31	21E・S K99-底面	片口鉢	口縁部～底 部1/4	40.0	14.0	14.9	灰・灰	内外面ロクロナデ。口縁部内面磨目 波状文。底部静止糸切り後、ナデ。 押し目(目数不明)あり。底脚部外 面に指頭圧痕あり。
32	16BC・S D1-1層	片口鉢	口縁部～底 部1/4	37.6	13.7	13.9	灰・オリーブ 灰	内外面ロクロナデ。口縁部内面磨目 波状文。底部静止糸切り。押し目(目 数不明)あり。底脚部外面に指頭圧 痕あり。
33	15D・S D1-1層 15B・P7 15B・I層	片口鉢	胴部～底部 1/2			14.6 (9.7)	オリーブ 灰・明オリ ーブ灰	内外面ロクロナデ。底部静止糸切り。 押し目(目数不明)あり。内外面・ 割れ面に煤付着。焼成や不良。 底脚部外面に指頭圧痕あり。

越前焼 () は残存数

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
34	15B・S K21	片口鉢	胴部～底部 破片		15.8	(8.5)	橙・にじい 赤褐	内外面ロクロナデ。押し目(1単位 10日)あり。
35	18D・I層	壺	頭部破片				にじい橙・ 浅黄褐	内外面ロクロナデ。焼成や不良。 器面の荒れ著しい。

第9表 水久保遺跡遺物観察表(3)

越前焼 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
36	13D・SK12 16B・SK36・1層 16B・SK36・2層 16B・SK39 17C・SK65・3層 15C・SD1 16B C・SD1・1層 18D・SD7 13D・1層 16B・1層 17B・1層 17C・1層 17D・1層 20D・1層 19C・SK84	瓶	口縁部～底部破片	10.2	13.0	(39.2)	褐灰・褐灰	体部内外面押圧後、体部下半弱いナデ。口部内外面ヨコナデ。破損が著しく細片である。被熱によるハジケが多い。体部の輪筋痕明瞭に残る。
37		甕	上胴部破片				に浅い黄緑 に深い黄緑	上胴部内外面押圧後、外面ヨコナデ。 筆記号あり。内外面に多くの煤付着。

青磁 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
38	16D・SK58	碗	口縁部破片	12.7			明緑灰・明 緑灰・灰白	墨文あるが詳細不明。
39	16B C・SD1・1層	碗	体部破片				オリーブ・ オリーブ・ 灰白	墨文。
40	16C・1層	碗	口縁～体部 破片	12.0			緑灰・緑灰・ 灰白	体部下半に2条の横線。
41	16B C・SD1・1層	碗	口縁～体部 破片	14.1			灰白・灰白・ 灰～明緑灰	被熱により本来の色調でない。口縁 部外面難壊れあり。
42	21E・P10	碗	口縁～体部 1/8	15.0			緑灰・緑灰・ 灰白	内面下半に2条の横線あり。
43	16C・1層	碗	体部～底部 破片		5.5	(4.1)	オリーブ 灰・オリーブ 灰・灰白	碗は盤付を越えて高台内にまわる が、高台内面途中で止まり、外底は 露胎のままである。盤付の釉の削り 取りは行わない。内面見込みに花文 のスタンプあり。外面の細括墨文は、 ヘラ先等で表現か？外面体部下 半に横線あり。
44	17E・SD5・1層 15D・1層	碗	体部～底部 破片		4.8	(3.0)	オリーブ 灰・オリーブ 灰・灰白	碗は盤付を越えて高台内にまわり、 一部外底まで掛かる。外底中心部は 露胎のままである。盤付の釉の削り 取りは行わない。内面見込みは無地 である。内面見込み・外底の露胎部 は灰褐色である。

第10表 水久保遺跡遺物観察表(4)

青 磁 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
45	16B・S D1・1層	碗	体部～底部 破片		5.0	(2.5)	オリーブ 灰・オリーブ 灰・灰褐 ～褐灰 绿灰・绿灰 灰白	摩滅著しい。釉は疊付を越えて高台 内にまわらない。疊付の釉の割り取 りは行わない。高台外縁削られ尖る。
46	12C・I 層	皿	口縁部破片	15.3				模花皿である。内面口縁下に唐草文 と思われる文様あり。
47	16C・S B5・柱穴 10	皿	5/6	11.3	2.8	5.5	オリーブ 灰・オリーブ 灰・灰白	模花皿である。内面口縁下に弧線状 の文様あり。内面足込に弧線あり。 全面に施釉後、外底の釉を粗雑に削 り取る。外底露胎は純赤褐色を呈す。

白 磁 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
48	18C・S D5・1層	皿	口縁～体部 破片	10.1			灰白・灰白 灰白	体部下半は施釉されていない。内外 面には細かな買入が入る。被熱して いる。
49	15E・S K32	皿	体部～底部		4.0	(1.5)	灰白・灰白 灰白	体部下半・高台・外底は施釉されて いないが、体部下半・高台外面の一 部に釉が掛かる。内外面には細かな 買入が入る。
50	21E・S K99	皿	体部～底部 破片		3.3	(1.9)	灰白・灰白 灰白	体部下半・高台は施釉されていない。 内外面には細かな買入が入る。
51	22B・I 層	碗	体部～底部		7.3	(2.4)	灰・灰・灰	高台・外底は施釉されていない。被 熱している。トチ目2か所あり。

瀬戸美濃焼 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
52	21E・S K99	天目 茶碗	口縁～体部 破片	12.1			褐～黒褐 褐～黒褐 灰白	
53	16D・1 層	天目 茶碗	口縁～体部 破片	14.7			暗褐～黒 褐～暗褐 灰白	
54	16D・S K57	天目 茶碗	体部破片				暗褐～暗褐 灰白	比較的透明感のある釉が厚く掛か る。窓口に疊付有。
55	16D・S K60	碗	口縁～体部 破片	13.0			灰オリーブ ～ブ・灰オリ ーブ・灰白	外面体部下半無釉である。
56	16B・I 層	碗	口縁～体部 破片	14.0			淡黄～淡黄 灰白	施成不良で、釉の剥落著しい。
57	地点不明	碗	口縁～体部 破片	17.6			浅黄～浅黄 灰白	施成不良で、釉の剥落著しい。外面 体部下半無釉である。外面体部下半 はヘラ削り。

第11表 水久保遺跡遺物観察表(5)

瀬戸美濃焼 () は残存箇

番号	出土地点・造様名・層位	器種	遺存部位・遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
58	15E・SK32 17D・SD5・1層	皿	1/2	10.7	5.0	2.8	浅黄・淡黄・灰白	施成不良で、釉の剥落著しい。外面体部下半・高台・外底は無釉である。外面体部下半はヘラ削り。削り出し高台で、体部との境にヘラによる沈線が入る。内面見込に2個のトチ目が認められる。
59	12B・SD1	皿	1/6	11.3	5.2	2.1	明オリーブ灰・明オリーブ灰・灰白	外面体部下半・高台・外底は無釉である。外面体部下半はヘラ削り。削り出し高台で、体部との境にヘラによる沈線が入る。内面見込に帯状のトチ目が認められる。破損部に漆の補修痕あり。
60	15D・SD1・1層	皿	1/3	11.6	5.5	2.5	明オリーブ灰・明オリーブ灰・灰白	外面体部下半・高台・外底は無釉である。外面体部下半はヘラ削り。削り出し高台で、体部との境にヘラによる沈線が入る。内面見込に3個のトチ目が認められる。破損部に漆の補修痕あり。
61	17C・1層	皿	底部破片		6.0	(1.2)	明オリーブ灰・明オリーブ灰・灰白	全面に施釉されているが、外底は釉が剥取られている。付高台か?。内面見込に菊花文のスタンプあり。
62	17E・SD5・1層	碗	体部～底部		5.1	(2.0)	灰白・灰白・灰白	無釉である。底部は回転糸切りである。内面体部下半には付着。
63	地点不明・1層	皿	体部～底部		4.0	(1.0)	灰白・灰白・灰白	無釉である。底部は回転糸切りである。内面体部下半には付着。
64	11C・SK2	押し皿	破片 完形	15.3	8.0	3.1	灰オリーブ・灰オリーブ・灰白	内面見込・外面底部、外側体部下半の一部以外は施釉される底部は回転糸切りである。内面見込に4か所、外側底部に2か所重ね施釉あり。内面見込にヘラによる格子状の押し目あり。口縁に片口が付く。

中世土師器 () は残存箇

番号	出土地点・造様名・層位	器種	遺存部位・遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
70	11C・SK1	皿	口縁～体部 破片	9.1		2.3	浅黄緑・淡黄緑	手捏ねで口縁部内外面をヨコナデする。
71	11E・SD2	皿	2/3	10.2	5.6	1.9	灰白・灰白	手捏ねで口縁部内外面をヨコナデする。
72	15E・SD1・3層	皿	完形	10.5	4.5	2.2	淡黄緑・淡黄	手捏ねで口縁部内外面をヨコナデする。口縁部内外面に焦またはタール状の付着物あり。
73	15E・SD1・3層	皿	完形	10.2	4.3	2.3	浅黄緑・黄緑	手捏ねで口縁部内外面、内面体部下半をヨコナデする。口縁部内外面に焦またはタール状の付着物あり。

第12表 水久保遺跡遺物観察表(6)

中世土師器 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
74	16BC・SD1・I層 15C・SD1・I層	皿	1/4	11.3	6.0	2.5	黒褐・黒褐	手捏ねで口縁部外面、内面をヨコナデする。内外面に堀またはタール状の付着物あり。
75	16BC・SD1・I層	皿	口縁～底部 破片	12.2	4.7	2.5	褐灰・褐灰	手捏ねで口縁部～体部上半内外面をヨコナデする。底部外面以外に堀またはタール状の付着物あり。
76	15E・SK32	皿	口縁～底部 破片	12.8	6.0	2.4	黄橙・黄橙	手捏ねで口縁部内外面、内面体部下半をヨコナデする。
77	13E・SK14	皿	1/4	12.7	7.7	2.4	にほい・黄 橙・浅黄橙	手捏ねで口縁部内外面をヨコナデする。内面の一部に堀またはタール状の付着物あり。
78	11E・SD2	皿	1/3	10.9	4.6	2.2	にほい・橙 ・にほい・橙	手捏ねで口縁部内外面、内面体部下半をヨコナデする。内外面に堀またはタール状の付着物あり。
79	地点不明	皿	1/3	8.4	5.0	2.1	淡褐・淡黄	ロクロ成形で底部を回転糸切りとする。
80	16BC・SD1	皿	底部破片		5.1	(1.2)	褐灰・黒褐	ロクロ成形で底部を回転糸切りとする。内面の一部に堀またはタール状の付着物あり。
81	20C・SK92	皿	1/3	14.3	7.7	3.0	浅黄橙・浅 黄橙	ロクロ成形で底部を回転糸切りとする。
82	15E・SK33	環	略完形	12.3	5.8	3.3	浅黄橙・浅 黄橙	手捏ねで口縁部内外面をヨコナデする。

唐津焼 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
65	17E・SD5・I層	皿	体部～底部		4.6	(2.0)	明オリーブ 灰・明オリ ーブ灰・灰 白	外底のみ無釉である。内面見込・高台に3個のトチ目が認められ、砂礫が付着する。外面体部下半はヘラ削り。割り出し高台である。
66	15C・I層	皿	口縁～体部 破片	13.5			灰白・灰白・ 灰白	外面体部下半無釉で、これ以外は施釉されている。内面見込と体部の境にかすかに段がある。いわゆる「折 縁皿」である。
67	19A・SD5	皿	口縁～体部 破片	13.0			明オリーブ 灰・明オリ ーブ灰・灰 白	外面体部下半無釉で、これ以外は施釉されている。内面見込と体部の境に段がある。いわゆる「折縁皿」である。

第13表 水久保遺跡遺物観察表(7)

織部焼 () は現存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存部位・遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
68	地点不明・I層	瓶	1/5	13.0	8.0	2.9	灰白	いわゆる「青磁部」と呼称されるもの。外面無釉である。内面体部上半 銅錆釉、口縁・体部下半・見込は長 石釉(白釉)が施釉される。見込に 廟花文の鉄捺あり。外面体部下半か らはヘラ削り。削り出し高台である。 外面体部に蝶状のもの多く付着す る。

越中瀬戸焼 () は現存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
69	17E・I層	片口鉢	底部破片		13.3	(3.6)	灰赤・淡緑	内外面クロナナテ?。底部回転条切 り?。焼成やや不良。器面の荒れ著 しい。却し目(目数不明)あり。

土師器・須恵器 () は現存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	遺存部位・ 遺存率	法量(cm)			色調 (外・内)	備考
				口径	底径	器高		
83	16E・S K62	土師・ 环	底部破片		7.4	(1.3)	浅黄緋・浅 黄緋	底部は回転系切り。
84	21E・I層	須恵・ 甕	胴部破片				暗灰・灰	外面平行叩き、内面同心円当て具底。
85	10C・I層	須恵・ 甕	肩部破片				灰・灰	外面平行叩き、内面同心円当て具底。 被熱によるハジケあり。
86	12C・SD1	須恵・ 甕	胴部破片				灰・灰	外面格子目叩き、内面平行當て具底。 被熱による爆状の付着物あり。

第14表 水久保遺跡遺物観察表(8)

石臼 () は現存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	遺存率	法量(cm)		(kg) 重き	石材	備考
				直径	高さ			
87	19C・S K84	粉挽き臼・上臼	3/4	30.2	11.4	1.8 (7.0)	安山岩	6文面×11.2cm。芯棒受けの径約3.0cm。供給口の平面形は方形か?洗き本穴2か所あり。反時計方向の回転。6?文面×5?溝。反時計方向の回転。
88	19C・S K84	粉挽き臼・上臼	1/4	26.0	8.8	1.0 (2.28)	安山岩	被熱による黒変、ハジケあり。反時計方向の回転。
89	17C・S K65・3層	粉挽き臼・上臼	1/5	25.0	12.8	(2.51)	安山岩	被熱による黒変、ハジケあり。目(主構・副構)は摩滅。
90	19C・1層	粉挽き破片	28.0	8.0	(1.1)		安山岩	被熱による黒変、ハジケあり。目(主構・副構)は摩滅。
91	18B・1層	粉挽き臼・上臼	破片	33.0	6.6	(0.85)	安山岩	反時計方向の回転。
92	15B・S K22	粉挽き臼・上臼	1/4	26.2	13.8	(2.9)	安山岩	6?文面×9?溝。被熱による黒変、ハジケあり。反時計方向の回転。供給口の径約3.0cm。
93	17C・S K65・3層	粉挽き臼・下臼	2/5	30.4	8.0	2.1 (3.1)	安山岩	目(主構・副構)は摩滅。芯棒孔の径約2.8cm。
94	16BC・SD1・1層	茶臼・上臼	1/4	18.7		(1.37)	安山岩	8文面×7.2cm。被熱による黒変、ハジケあり。反時計方向の回転。供給口の径約2.5cm。洗き本穴は1辺約1.8cmの正方形か。
95	17D・SD5・1層	茶臼・上臼	1/5	17.2		(0.5)	安山岩	6?文面×11?溝。被熱による黒変あり。反時計方向の回転。
96	19C・S K82	茶臼・下臼	2/5	29.7	10.0	(3.99)	砂岩	8文面×7・12cm。被熱による黒変、ハジケあり。上臼は反時計方向の回転。芯棒孔の径は約1.7cm。

石鉢 () は現存値

番号	出土地点・遺構名・層位	遺存率	重さ(kg)	石材	備考
97	19C・S K82	口縁部破片	(0.16)	安山岩	

五輪塔 () は現存値

番号	出土地点・遺構名	部位	遺存率	法量(cm)		(kg) 重き	石材	備考
				幅(径)	横			
98	16BC・SD1	地輪 完形	24.2	25.2	18.0	20.5	安山岩	
99	19C・S K82	地輪 完形	26.4	26.7	17.5	18.2	安山岩	被熱による黒変あり。
100	16BC・SD1	地輪 1/2 (15.4)	25.2	16.4	(9.6)		安山岩	被熱による黒変、赤変あり。
101	16B・SK36	水輪 1/2	22.6		15.1	(6.3)	安山岩	被熱による黒変、赤変あり。上下面に後りあり。

第15表 永久保遺跡遺物観察表(9)

砥石 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・層位	遺存率	使用面数	法量(cm) (g)				石材	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
102	19C・I層	完形	6	14.1	3.7	1.8	153	シルト岩	両端はわずかに使用された。
103	15B・S K22	1/2	(5)	(10.0)	2.7	3.0	(88)	シルト岩	上端はわずかに使用された。
104	16C・P32	1/2	(4)	(10.3)	3.9	3.2	(139)	シルト岩	被熱による黒変、ハジケあり。
105	22D・S K106	1/3	(5)	(5.9)	2.3	1.9	(58)	シルト岩	上端はわずかに使用された。
106	19B・S K78	破片	(4)	(5.9)	(2.9)	(1.5)	(34)	シルト岩	
107	15B・S K21-1層	1/3	(5)	(7.8)	2.7	2.6	(72)	シルト岩	
108	16C・S B5・柱穴	1/2	(2)	(9.2)	7.8	2.2	(203)	砂岩	被熱による黒変、風化激しく、両側面以外不明。
109	14E・S D1	破片	(2)	(7.8)	(6.0)	(3.2)	(223)	安山岩	被熱による黒変、赤変あり。

石硯 () は残存値

番号	出土地点・遺構名	遺存部位	法量(cm) (g)				石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ		
134	15E・S K32	底部・海部、縁の一部	(9.3)	(4.0)	1.4	(73)	粘板岩	海部・陸部・縁・上側面・裏面の一部にも墨付有。陸部は紙くずむ。

土製品 土器片研磨具・研削具

番号	出土地点・遺構名・層位	転用前器種	使用部位	法量(cm) (g)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
110	16BC・S D1-1層	珠洲焼・片口鉢	口縁部内面	8.9	9.6	1.2	80	
111	17C・S K65-1層	珠洲焼・片口鉢	口縁部内面	5.8	6.2	1.1	38	
112	表面探査	珠洲焼・片口鉢	口縁部内面	5.7	4.7	1.3	33	
113	16C・I層	珠洲焼・片口鉢	口縁部内面	6.2	4.8	1.3	30	
114	17D・S D5	珠洲焼・甕または壺	外面・上側面	4.4	3.1	1.4	28	体部破片を使用。
115	11C・S K2	珠洲焼・甕または壺	外面・両側面	6.1	5.4	1.2	39	体部破片を使用。
116	13C・I層	珠洲焼・甕または壺	外面	6.2	8.9	1.7	85	体部下半部破片を使用。

土器片円盤

番号	出土地点・遺構名・層位	転用前器種	法量(cm) (g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
136	15D・I層	珠洲焼・甕または壺	3.1	2.9	1.2	16	体部破片を使用。擦痕や磨痕等は認められない。

第16表 水久保遺跡遺物観察表(1)

木器・木製品 漆器 ()は残存値

番号	出土地点・遺構名・層位	器種	分類	遺存部位・遺存率	法量(cm)			本取り	備考
					口径	底径	器高		
117	21D・SK98	楕	純赤色漆	口縁部～底部 2/3	17.0	(7.9)	(7.2)	横	口唇部と高台は黒色漆。高台裏に赤色漆で「吉」銘あり。内面底部下半に継あり。
118	20C・SK92	楕	純黒色漆	口縁部～底部 2/3	13.0	8.0	5.5	横	保存状況悪く細片になっている。
119	11C・SK2	楕	純黒色漆	口縁部～底部 1/3	17.0	(7.4)	(6.6)	横	薄手の作り。
120	11C・SK1	楕	純赤色漆	口縁部～底部 1/3	14.2		(4.7)	横	口唇部は黒色漆。体部下半の割れ口に沿って補修の漆付着。薄手の作り。
121	21D・SK98-2層	皿	純赤色漆	口縁部のみ一部欠	15.5	10.2	3.2	横	口唇部と高台は黒色漆。高台裏に赤色漆で「一」銘あり。内面底部下半に継あり。
122	地点不明	皿	純赤色漆	体部のみ一部欠	16.4	(10.3)	(3.1)	横	口唇部と高台は黒色漆。高台裏に赤色漆で「一」銘あり。内面底部下半に継あり。

曲 物

番号	出土地点・遺構名	器種	遺存部位・遺存率	法量(cm)		備考
				径	厚さ	
123	12B・SK7	円形曲物	底板・1/3	径33.4	厚さ1.0	内面に刃状が無数につく。結合孔は1か所2個、5か所に均等配置か?。木釘2本残存。
124	21E・SK99	円形曲物	底板・1/3	径19.0	厚さ0.6	結合孔の痕跡1か所あり。
125	19B・P29	曲物柄杓	底板・略定形	底板- 径8.5	厚さ0.5	側板は図示していない。桟皮紐のみで結合している。2孔1対の結合孔3か所あり。
126	17D・SK71	曲物柄杓	側板・断片	側板- 厚さ0.1		図126A・Cは復元実測。桟皮紐のみで結合している。2孔1対の結合孔3か所か? 舞板内面には斜平行線のケビキ多数あり。側板上方より1.3cm下、1.2×1.1cmの方形の柄孔あり。
127	19C・SK83	曲物柄杓	底板・1/2	底板- 径8.4	厚さ0.4	図127B・Cは復元実測。桟皮紐のみで結合している。2孔1対の結合孔3か所あり。側板内面には斜平行線のケビキ多数あり。側板は2列継じ。前列下は内継じ。
			側板・2/3	側板- 径8.0	厚さ0.1	
			側板・2/3?	底板- 径8.7	厚さ0.45	

折 敷 ()は残存値

番号	出土地点・遺構名	遺存部位・遺存率	法量(cm)			備考
			幅	横	厚さ	
128	20C・SK92	底板・1/2?	9.5	(5.0)	0.35	左邊より0.7cm内側に0.3×0.4cmの小孔あり。四隅の角を切らない「平折敷」。
129	20C・SK92	底板・1/2?	9.3	(6.8)	0.3	左邊より0.6cm内側に0.3×0.4cmの小孔あり。四隅の角を切らない「平折敷」。

第17表 水久保遺跡遺物観察表(II)

板 材 () は残存値

番号	出土地点・遺構名	遺存部位・ 遺存率	法量 (cm)			備 考
			縦	横	厚さ	
130	17C・S K66	隅部・断片	(8.2)	(4.3)	(0.7)	板目材。

杭 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	遺存部位	法量 (cm)		備 考
			長さ	径	
131	21D・S K98・2層	杭先端部	(82.3)	5.7	
132	21D・S K98・2層	杭先端部	(37.2)	7.5	
133	20C・S K92	杭先端部付近?	(18.0)	2.0	

管

番号	出土地点	遺存率	材質	法量 (cm) (g)				備 考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
135	地点不明	完形	銅	12.4	0.6	0.1	4.0	

錢 貨

番号	出土地点・遺構名・ 層位	遺存率	種類	鉄造年代	備 考			
					銅	銀	金	其他
137	地点不明・I層	略完形	唐錢・開元通宝	780~975年				

縄文時代 石 器 () は残存値

番号	出土地点・遺構名・ 層位	器種	法量 (cm) (g)				遺存 状態	石 材	刀部平 面形	刀部断 面形	備 考
			長さ	幅	厚さ	重さ					
138	17E・S D5・1層	磨製 石斧	(9.3)	5.2	2.6	(208)	2/3	蛇紋岩	円刃	両刃	刀部の剥離、破壊あるが、後世のもの。「定角式磨製石斧」。
139	16D・I層	打製 石斧	(6.2)	5.5	1.4	(62)	1/2	頁岩	円刃	片刃	刀部に摩耗・光沢あり。

第V章 新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析

四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）

1. 分析の方法

漆器を経済的・技術的価値で評価する場合、肉眼による表面観察では使用後の塗りと加飾部分でしか判断できない。しかし、漆器本来の耐久・堅牢性による品質は塗装工程（髹漆）^{スヒラフ}にあり、この塗膜の下に隠された情報は塗膜分析によって引き出される。

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し、ポリエステル系樹脂に包埋後その断面を研磨のうえ、金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら髹漆や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察ではわからない時代的、地域的な髹漆の特色、製品の価値判断が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる。

塗装液の同定には一部赤外線（IR）吸収スペクトル法を、赤色顔料の同定には蛍光X線分析法を併用した。赤色顔料は水銀朱（HgS）とベンガラ（Fe₂O₃）であるが、両者の差異は商品価格に大きく反映する。

本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うが、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

① 赤色漆

赤色の顔料である朱やベンガラが未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「總赤色（未同定）漆」、同定済みの場合は「總赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「總（總）朱」「皆朱」「朱漆器」を用いることもある。

② 黒色漆

黒色の顔料である炭素粒子や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、まぎらわしいが黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質することと、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるからである。近年の筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、技術や材料科学の上からも両者の区別が必要となっている。未同定の場合は、はじめに、「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「總黒色漆」、同じく黒色系

は「総黒色系漆」(慣例による「総(懃)黒」は両者を含んだものである)、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤(ベンガラ)外黒色漆」などと呼称する。

③ 下地の分類

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

2. 分析結果

塗膜分析を行った漆器は6点で、その塗装工程などを観察一覧表(第18表)に掲載した。本節では表面観察(含技法)と塗装工程について、木胎(木地)から順に番号(①~)を付して説明する(木胎への木留め工程の記述は特記すべきもの以外は省略)。層厚は1資料につき内外面各3点を分析したものの平均値であり、必ずしも図版のスケールとは一致しない。

以下の報文中、最後の工程である上塗り漆の項で「表層変質」とあるのは、時に誤って「黒色着色層」と報告されるが、黒色顔料が含まれているわけではなく、空気と常に接触する上塗り漆の表層には多糖-糖タンパク-ウルシオール成分の層があり、酸化して茶褐色ないし茶黒色に変質している。すなわちこの表層が酸化劣化防止層となって強い塗膜が形成されるわけである。したがって表層変質のないもの多くは、油などの混ぜ物が多く含まれるためにこの酸化劣化防止層が十分に形成されていないと判断される。

◇遺物Na117(第8図・図版31・52) 鉢(総赤色)

器形・表面観察

あまり腰が張らずにゆったりと内湾ぎみに開く皆朱鉢(口径17cm)。内面下部にみこみを区切る界線としての有段がみられる。こうしたタイプは極めて珍しい。口唇部と高台は中塗りの黒色系のままであり、高台裏には朱漆による「吉」銘がある。高台は厚く11mmである。塗りは外面より内面において刷毛目が著しい。横木取り(柵目)。

塗膜分析

内面①口縁部に布着せが施されており、ヨコ糸の繊維束幅は長径194μm、短径155μm、タテ糸繊維束幅は155μmである。布の上に鉱物粒子に漆を混ぜた地の粉漆下地層が施されており、繊維束頂部では58μmである。鉱物粒子は石英、斜長石、有色鉱物、若干の雲母から構成。②漆層。層厚は66μm前後。表層4~5μmに変質がみられる。十分なねかし時間がおかれたことが知られる。③漆層。層厚12μm前後。④赤色(朱)漆層。層厚29μm。朱粒子径は1~2μm前後と0.5μm以下のものから構成されており、やや入念な破碎工程がとられている。

外面①地の粉漆下地層。層厚97 μm 前後。鉱物粒子の構成は内面に同じ。②漆層。層厚85 μm 前後。表層2~3 μm に変質がみられる。③漆層。層厚12 μm 前後。④赤色(朱)漆層。層厚21 μm 。朱粒子の構成は内面に同じ。

◇遺物No118 (第8図・図版31・52) 梶(総黒色系)

器形・表面観察

やや高めの高台からあまり腰が張らずに立ち上がる総黒色系梶(口径13cm、器高5.5cm)。高台外面にはカンナ目をとどめ、厚さは1cm。上塗りは高台裏まで施されているが(高台裏は下地のままで終わるものもある)、全体に塗りは薄い。漆絵はみられない。横木取り(柾目)。

塗膜分析

内外面①炭粉渋下地層。層厚は34 μm 前後と薄い。表層の渋の分離は10 μm 前後である。炭粉粒子は主に $2 \times 6 \mu\text{m}$ 前後の針状粒子、径4~5 μm の台形・椿円形・三角形粒子から構成。②漆層。層厚は40 μm 前後で、表層10 μm 前後に変質がみられる。

◇遺物No119 (第8図・図版31・52) 鉢(総黒色系)

器形・表面観察

小さい三角状の高台から腰が張りだして、ゆったりと開く総黒色系鉢(口径17cm、器高6.6cm)。非常に薄手に挽き出されたもので、口縁部での厚さは2.5mm、底部では1.5mmである。上塗り色は茶色がかかった黒色を呈するが、麗しい光沢をとどめており、表面に断紋などは認められない。横木取り(柾目)。

塗膜分析

内外面①木胎(導管)の深いところまで生漆が浸透しており、木固めが十分に行われたことが知られる。その上に地の粉漆下地層が施されており層厚は100 μm 前後である。鉱物粒子は石英、斜長石、有色鉱物、若干の雲母から構成。②漆層。層厚は20 μm 前後。部分的に2層となっている。表層4~5 μm にプロテクト層である変質がみられる。

◇遺物No120 (第9図・図版31・52) 梶(総赤色)

器形・表面観察

高台を欠くがゆったりと外反する総赤色の端反梶(口径14.2cm)。口唇部は中塗りの黒色漆を露呈したままである。体部に生漆による接着痕が認められる。上塗り色はややくすんだ柿色を呈している。横木取り(柾目)。

塗膜分析

内面①地の粉漆下地層。層厚73 μm 前後。鉱物粒子は石英、長石、有色鉱物、若干の雲母から構成。部分的に2層が確認できるが、粒度は変わらない。②黒色漆層。層厚は40 μm 前後。本層は微細な油煙による黒色顔料が含まれたもので、下地のくぼみに沈殿している。層厚は厚いところで40 μm 前後、平均すると4~10 μm である。部分的に上層に重ね塗りがみられる。

③赤色(朱)漆層。層厚34 μm 前後。朱粒子は大きいもので12×19 μm 、7×17 μm の長方形粒子が確認できる。径2 μm と4~5 μm の方形、橢円形粒子と1 μm 以下の粒子が分散している。

外面①地の粉漆下地層。層厚110 μm 前後。鉱物粒子は内面に同じ。②黒色漆層。層厚は26 μm 前後。部分的に上層に重ね塗りがみられる。③赤色(朱)漆層。層厚は17 μm で内面の半分となっている。朱粒子は内面に同じ。

◇遺物Na121 (第9図・図版31・52) 横子(総赤色)

器形・表面観察

やや高めの高台から内湾ぎみに聞く総赤色皿であるが、内面下部が有段の様子と呼称されるもの(口径15.5cm、器高3.2cm)。口唇部と高台は中塗りのまま残している。高台裏には朱漆による「一」の銘がある。木地はやや厚く高台では10mmである。上塗りは鮮やかな柿色を呈し、内外面とも刷毛目を残している(粘調な漆を使用)。横木取り(柾目)。

塗膜分析

内面①口縁部に布着せが施されており、ヨコ糸の繊維束幅は長径389 μm 、短径236 μm 、タテ糸繊維束幅は98 μm である。布の上に鉱物粒子に漆を混ぜた地の粉漆下地層が施されており、繊維束頂部では薄く15 μm 前後である。鉱物粒子は石英、斜長石、有色鉱物、若干の雲母から構成。②漆層。層厚68 μm 前後。表層4~5 μm に変質がみられる。十分なねかし時間がおかれていている。高台裏ではこの層までが施されている。③漆層。層厚15 μm 前後。口唇部ではこの層が表面となっている。④赤色(朱)漆層。層厚24 μm 前後。朱粒子は径2 μm 前後のものが粗く分散、この間を0.5 μm 以下の微粒子が埋めている。

外面①布着せ層ではヨコ糸の繊維束幅長径150 μm 、短径116 μm 、タテ糸繊維束幅は48 μm である。布上の地の粉漆下地層は繊維束頂部で97 μm 前後である。鉱物粒子の構成は内面に同じ。②漆層。層厚19 μm 前後。③漆層。層厚36 μm 前後。④赤色(朱)漆層。層厚10 μm 前後。朱粒子の構成は内面に同じ。

◇遺物Na122 (第9図・図版31・52) 横子(越赤色)

器形・表面観察

やや高めの高台から内湾ぎみに聞く総赤色の様子で(口径16.4cm、器高3.1cm)、高台裏の「一」銘や塗りなどの特徴は121と同じである。表面の劣化は121より進んでおり光沢は失われている。横木取り(柾目)。

塗膜分析

内面①地の粉漆下地層。層厚24~97 μm 。鉱物粒子は石英、斜長石、有色鉱物、若干の雲母から構成。布着せ部分は未分析。②漆層。層厚30 μm 前後。高台裏ではこの層までが施されている。③漆層。層厚12 μm 前後。口唇部ではこの層が表面となっている。④赤色(朱)漆層。層厚10 μm

前後。朱粒子は径 2 μm 前後のものが粗く分散、この間を 0.5 μm 以下の微粒子が埋めている。外面①地の粉漆下地層。層厚は 194 μm 前後でやや厚手である。鉛物粒子は内面に同じ。②漆層。層厚 24 μm 。③漆層。層厚 14~58 μm 。④赤色(朱)漆層。層厚 15 μm 前後。朱粒子は内面に同じ。

3. 小 結

新潟県中頸城郡頸城村所在の水久保遺跡は県教育委員会と村教育委員会³⁾の調査によって、周溝区画内と区画外から多数の掘立柱建物群が検出されており、15世紀を中心とした重要な遺跡として注目されている。筆者は全体の概要は周知していないので、漆器の分析を通して得られた若干の所見を報告する。

分析を行った 6 点については要点を第 18 表に掲載した。器形・法量による区分については、かって多変量解析を用いて分析を行ったことがあるが⁴⁾、中世では口径 17cm の 117・119 は器形から見ても鉢とした方が適切と思われる。時期的には調査所見から 118 を除いて 15 世紀前半に比定されている。髹漆(塗装工程)の上からこれらの特色をまとめておくことにしたい。

まず、器形や底部の銘から組物と考えられるものは、121 と 122 の様子である。塗膜分析の結果、髹漆は十分乾燥させた木胎(木地)に漆を吸わせる「木固め」が施された後、火成岩による地の粉漆下地→漆→漆→朱漆(上塗り)の工程がとられ、朱漆の顔料破碎工程も同じであることが判明した。そして 117 の皆朱鉢もまた同一の髹漆であった。これら 3 点に共通する特色は内面に段を有すること、口唇部と高台には朱漆を塗らず中塗りのまま残すこと、高台裏の塗りは地の粉漆下地の上に漆 1 層でとめていること、高台の厚さが器形を問わずほぼ同一であることである。つまり、同一木地師、同一塗師による製品と推測される貴重な事例といえよう。

次に 120 の端反皆朱椀であるが、口唇部に中塗りをそのまま残している点は上記 3 点と共通しているが漆塗りが 1 層省略されている。しかし中塗りに黒色顔料(油煙)を含んだ漆(黒色漆)が施されている点は重要である。この油煙による黒色着色法は古代以来の技法であるが、中世では化粧箱・硯箱、椀類では上質品においてのみ用いられている⁵⁾。新潟県では新発田市宝積寺館跡・土坑 26 より出土した皆朱椀(玉縁)の例がある⁶⁾。市教育委員会田中耕作・鶴巻康志氏のご厚意で塗膜分析を行ったが、髹漆は地の粉漆下地→漆→黒色漆→朱漆→朱漆という丁寧な工程によるものであることが判明した。中塗りに油煙による黒色漆が施されており、高台裏はこの塗り面である。土坑 26 は僧侶の墓跡と考えられているが、それに相応しい遺物といえよう。また上越市伝至徳寺跡⁷⁾からは多量の漆器が出土しているが、実見したかぎりでは中塗りに黒色漆が施された上質品が相当認められた。

119 の總黑色系鉢は繊細な横輪挽きによって仕上げられたもので、底部の厚さは 1.5mm しかな

い。髹漆は十分木固めがされた上に火成岩による地の粉漆下地が施され、上塗り漆1層で仕上げられているが、上塗り漆の光沢は麗しく堅牢なものとなっている。

以上は下地が木胎の瘦せを防ぎ堅牢な漆器作りに不可欠な漆下地（本堅地）技法によった上質品である。これに対して118の總黑色系椀は下地が柿渋に炭粉粒子を混ぜた普及タイプの渋下地（粉下地ともよばれる）⁹⁾で、上塗りは漆1層である。器形的には15世紀中～後半のものと共通するが¹⁰⁾、ある時期共伴した可能性もあり検討課題としておきたい。なお、木取りは6点すべて広葉樹のヨコ木取り（桟目）であった。樹種は未同定であるが、118を除いては同じ樹種（ケヤキ？）のようである。

さて、漆器は上質品の漆下地から普及品の渋下地漆器まで、階層や行事に応じて各種のものが生産されており、品質から遺跡・遺構の性格に迫ることがある程度可能である。永久保遺跡からは上質の髹漆が施された朱漆器が出土したが、器形的に注目されるのは皆朱様子である。

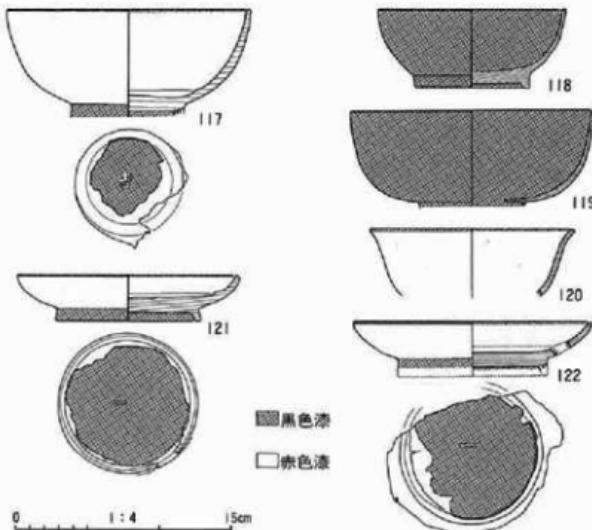
様子は『法隆寺資財報』や『下学集』にもみえるが、『和漢三才図会』卷13¹¹⁾によると、様子は僧家で多く用いられ調羹を盛るとされている。また117の内面有段の皆朱鉢や119の總黑色系鉢も通有の集落では出土しないものであり、これらは寺院か類似施設あるいは在地領主の館跡で使用されたものと考えられる。

いうまでもなく朱漆器は古代ではステータス・シンボルであり、限られた階級しか使用できなかった。内面朱塗りを含む朱漆器が公家・武家や寺院を中心として日常食器として普及しはじめるのは13世紀ごろからで、当時の様子が『遊行上人絵巻』『東征伝絵巻』などに描かれている。14世紀代に入ると地方でも一定量流通するようになるが、富山県立山町辻遺跡出土の様子（内面赤色、14世紀後半）はベンカラ塗りの渋下地漆器であった¹²⁾。15世紀では總赤色漆器の出土量が次第に増加し、武士クラスではかなりを占めるようになったことが、1463（寛正4）年の「新見地頭方政所見搜物色々在中」（東寺百合文書サ函123）からもうかがえる¹³⁾。新見莊地頭方政所で使用された漆製品は、瓶子・鏡子・提子・鏡箱・蒔絵の茶入れ・薬壺・湯盞台・茶盆・香箱・折敷・椀・皿などで、在地支配者層が使用した当時の製品全体がほぼ網羅されている。内面赤色椀も含めると大半が朱漆器である。この傾向は16世紀にはいると一層加速し、越前・常陸半島の刀彌大音氏の雄物注文（16世紀中頃）¹⁴⁾のうち、漆器は皆朱と内朱で占められていた。

こうした朱やベンカラ漆による赤色漆器流行の背景には、元や明の堆朱をはじめとする唐物漆器への強い憧れも無視できない。『君台觀左右帳記』や『室町殿行幸御筋記』によれば室礼における唐物の多さは圧倒的であり、漆器では朱を多用した堆朱、堆墨などの彫漆が主流を占めている。朱への強い憧れが禅家・公家・武家の座敷飾りや調度品のみならず、食器にも及んだことは当然であろう。今1つは町衆や農村の自立に伴って禁色であった赤色漆器を求める動きである¹⁵⁾。たとえ渋下地にベンカラ漆の椀皿であっても、その赤色の有する魅力は今日われわれが想像する以上のものがあったにちがいない。

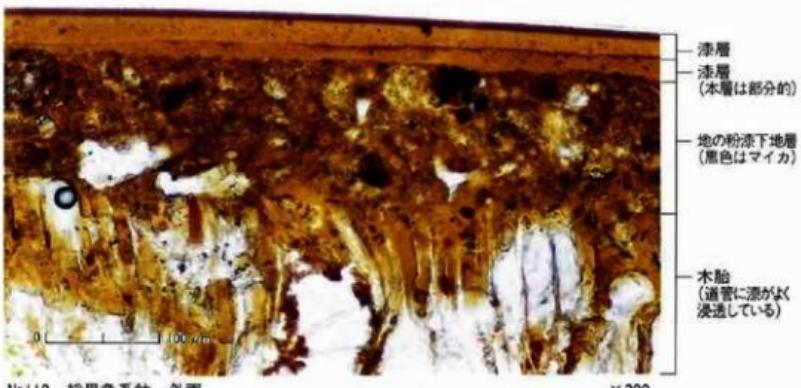
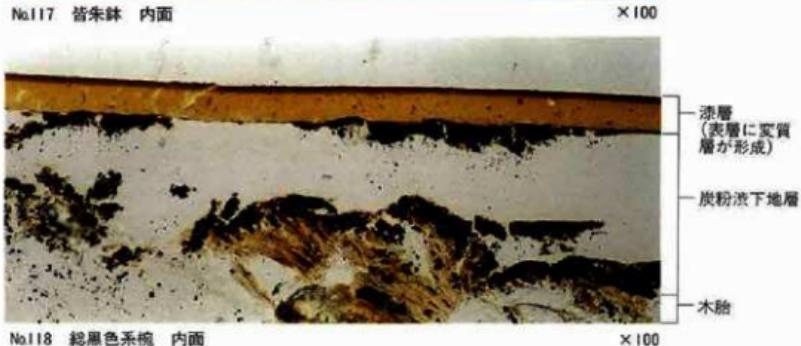
註

- 1) 四柳嘉章「漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社, 1995
- 2) 桑浦治郎「永久保・中島古窯跡遺跡」新潟県頸城村教育委員会, 1988
- 3) 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会誌』34, 石川考古学研究会 1991
- 4) 四柳嘉章「三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の塗膜分析」『御殿川流域遺跡群II』静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1994
- 5) 田中耕作・鶴巻康志ら「三光館跡・宝積寺館跡」新潟県新発田市教育委員会, 1990
- 6) 小島幸雄「伝至徳寺跡の調査」『日本歴史』556号, 1994
- 7) 四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会誌』35, 1992
- 8) 四柳嘉章「掘り出された絹文～中世の漆器」日本漆文化会議, 1995
- 9) 品田高志「越後における古代・中世の漆器—漆器食器を中心にして」『新潟県考古学談話会会報』7号, 新潟考古学談話会 1991
- 10) 島田勇雄ら「和漢三才図会」5巻 平凡社, 1986
- 11) 小泉和子「莊園政所の家財と生活」『朝日百科 日本歴史2』, 1986
- 12) 細野善彦「北国の社会と日本海」『日本海と北国文化』小学館, 1990
- 13) 四柳嘉章「漆器考古学の方法と中世漆器」『考古学ジャーナル』401号, ニューサイエンス社 1996

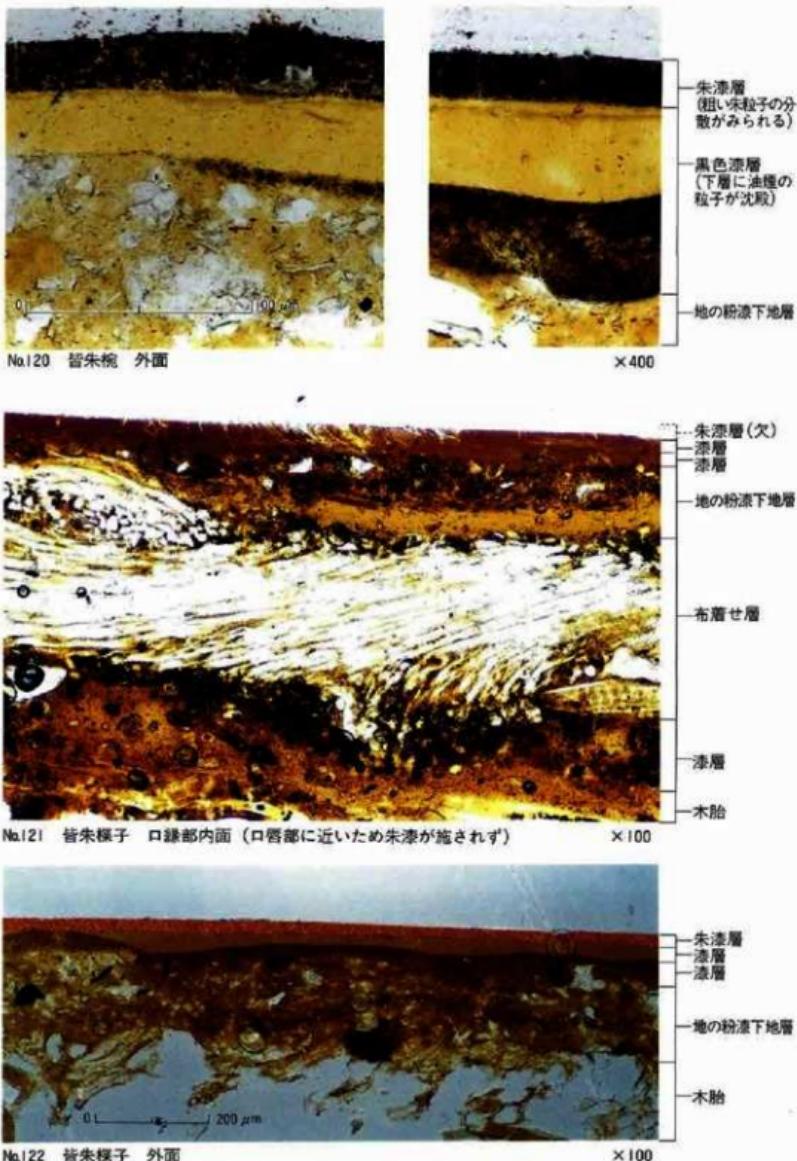


第18表 水久保道跡漆器観察一覧表

押出 番号	遺物 番号	器形	表面觀察		内面塗層分析		表面観察 色調	加熱 度	装工 程	外面塗層分析			木取り (征目)	樹種	出土地区	備考
			色調	加熱	赤	黒				①(布着せ)地の粉漆下地 ②漆③漆④赤色(朱)漆	①(布着せ)地の粉漆下地 ②漆③漆④赤色(朱)漆	①炭粉吹下地②漆				
8	117	鉢	赤		①(布着せ)地の粉漆下地 ②漆③漆④赤色(朱)漆	赤			①(布着せ)地の粉漆下地 ②漆③漆④赤色(朱)漆	赤	①炭粉吹下地②漆	①炭粉吹下地②漆	横木取り (征目)	広葉樹	21D・SK98	15世紀前半
8	118	桶	黒		①地の粉漆下地②漆	黒			①炭粉吹下地②漆	黒	①地の粉漆下地②漆	①地の粉漆下地②漆	横木取り (征目)	広葉樹	20C・SK92	
8	119	鉢	黒		①地の粉漆下地②漆	黒			①地の粉漆下地②漆	黒	①地の粉漆下地②漆	①地の粉漆下地②漆	横木取り (征目)	広葉樹	11C・SK2	15世紀前半
9	120	桶	赤		①地の粉漆下地②黒色漆 ③赤色(朱)漆	赤			①地の粉漆下地②黒色漆 ③赤色(朱)漆	赤	①地の粉漆下地②黒色漆 ③赤色(朱)漆	①地の粉漆下地②黒色漆 ③赤色(朱)漆	横木取り (征目)	広葉樹	11C・SK1	15世紀前半
9	121	櫻子	赤		①(布着せ)地の粉漆下地 ②漆③漆④赤色(朱)漆	赤			①(布着せ)地の粉漆下地 ②漆③漆④赤色(朱)漆	赤	①地の粉漆下地②漆③漆 ④赤色(朱)漆	①地の粉漆下地②漆③漆 ④赤色(朱)漆	横木取り (征目)	広葉樹	21D・SK98・ 2箇	15世紀前半
9	122	櫻子	赤		①地の粉漆下地②漆③漆 ④赤色(朱)漆	赤			①地の粉漆下地②漆③漆 ④赤色(朱)漆	赤	①地の粉漆下地②漆③漆 ④赤色(朱)漆	①地の粉漆下地②漆③漆 ④赤色(朱)漆	横木取り (征目)	広葉樹	地点不明	15世紀前半



第8図 漆器塗膜断面顕微鏡写真



第9図 漆器塗膜層断面顕微鏡写真

第VI章 まと め

1. 遺物について

遺物の時期を大別すると縄文時代、平安時代、中世、近世および近世以降である。第3表を見れば明らかのように、時期の比較的明確な土器・陶磁器類に限れば中世284点(88.8%、分類不明の25点を除き、総点数を320点として百分率を出した。以下同じ)、近世および近世以降25点(7.8%)、平安時代11点(3.4%)である。つまり土器・陶磁器の9割近くは中世で占められることから主体は中世の遺跡といえるだろう。

では中世のどの時期に限定できるか、同じく第3表を見ると、珠洲焼178点(62.7%、中世土器・陶磁器を284点として百分率を出した。以下同じ)、越前焼13点(4.6%)、青磁13点(4.6%)、白磁5点(1.8%)、瀬戸美濃焼27点(9.5%)、中世土師器47点(16.5%)、瓦質土器1点(0.4%)である。全体の2/3近くが珠洲焼で占められ、越前焼はわずか4.6%にすぎない。越後において珠洲焼から越前焼に変わるのは15世紀末葉から16世紀代【坂井前掲・遠藤前掲】と指摘されていることから、土器・陶磁器の主体の時期はこれ以前になるものと推定される。また、中国製染付は皆無であるが、15世紀後半には中国陶磁の主体は青磁から染付へと移行が始まると指摘されている【上田前掲・小野1980】ことと矛盾しない。

土器・陶磁器を種別毎に見ると、珠洲焼で時期の分かるものはほとんどが吉岡編年のIV~V期に所属し、14世紀~15世紀前半に比定される。ただ、1点(5)のみI~IIまたはIV期と所属の明確でないものがある。

越前焼は前述のように15世紀末葉以降と推定されるが、37は福井県一乗谷朝倉氏遺跡のIII期【岩田116前掲】、越前焼編年【橋崎・田中前掲】のV期後半に属し、16世紀後半に比定される。青磁碗では上田分類【上田前掲】のB II・B III類(38・39)、E類(40・41)、D II類(42)、B IVa類(43・44)に属し、14世紀後半~16世紀頃と思われる。

白磁は森田編年【森田前掲】D群(48~50)、C群とE群の中間の特徴を示すもの(51)、このほか図示していないがSK66よりD群の皿が1点出土している。D群は15世紀前後と推定される。

瀬戸美濃焼は古瀬戸編年【藤沢前掲】中期前半(64)14世紀前半、後期後半(52・55~60)15世紀後半、瀬戸大窯編年【藤沢前掲】1段階(61)16世紀前後、5段階(53)17世紀前半、白瓷系の山茶碗編年【田口前掲】IV期後半(62)15世紀中葉に相当するものである。

中世土師器皿は越後における中世土師器編年【坂井前掲・品田1991】によれば、B類が15世

紀代、A類の内72~77がB類の後に盛行する京都系のA類で16世紀代、70・71・78が14世紀代に属すると推定される。

以上、種別毎に所属年代を述べたが、遺物を見る限り水久保遺跡は14~16世紀、さらに唐津焼、越中瀬戸焼、織部焼等から17世紀前半までの存続が推定される。その中でも14世紀後半~15世紀後半の土器・陶磁器が多いことが指摘される。

2. 遺構について

本調査区で検出された遺構は掘立柱建物跡12棟、土坑112基、溝11条、その他の遺構2基、多数のピット・柱穴等である。遺構配置図を明治27年の土地更正図に重ね合わせると遺構と土地利用がほぼ一致する(第10図)。なお、遺構配置図と更正図は、もっとも後世の擾乱が少ないと思われる道・溝(SD)を基準に合わせた。

それによればSD2と村SD9・10・11、SD3とSD5は道に付随する溝と推定される。SD6とSD7は更正図に赤道はないが同様な遺構と考えられる。

SD1は更正図上に畑と水田の境、細長い水田として残存しているのが読み取れる。南西部は旧手島川の河道跡の低地(水田)があることから、方形とはならず不整五角形状の溝が巡るものと推測される。この溝については星敷を区画する溝と考えられる。

掘立柱建物跡、土坑は畑部分の周囲より高い部分に多く存在し、しかも道と推定される溝に囲まれた部分では遺構が少ない。

掘立柱建物跡は長軸と方位を基に3群に分類した。

A群：SB1・SB2・SB3の3棟。南北建物で建物軸線が9度から13度東偏する。SB2とSB3は隣接する。同群のSB1はSD1と重複関係にある。

B群：SB6・SB7・SB8の3棟。18~20区にある東西建物である。建物軸線が86~87度西偏する。建物に平行してSD6・7があり、それに直交する様に建物の西にSD5が南北に走る。

C群：SB10・SB12の2棟。遺構の位置はSB10が15区でSB12は19・20区と前の2群と比べてやや離れている。

その他：SB4、SB5、SB9、SB11は建物軸線が上記の分類に入らないものである。掘立柱建物跡は調査後の机上で検討したものであり、不確定な要素があるものの、A群がSD1、B群がSD5・6・7に関連する可能性が高いと考えている。

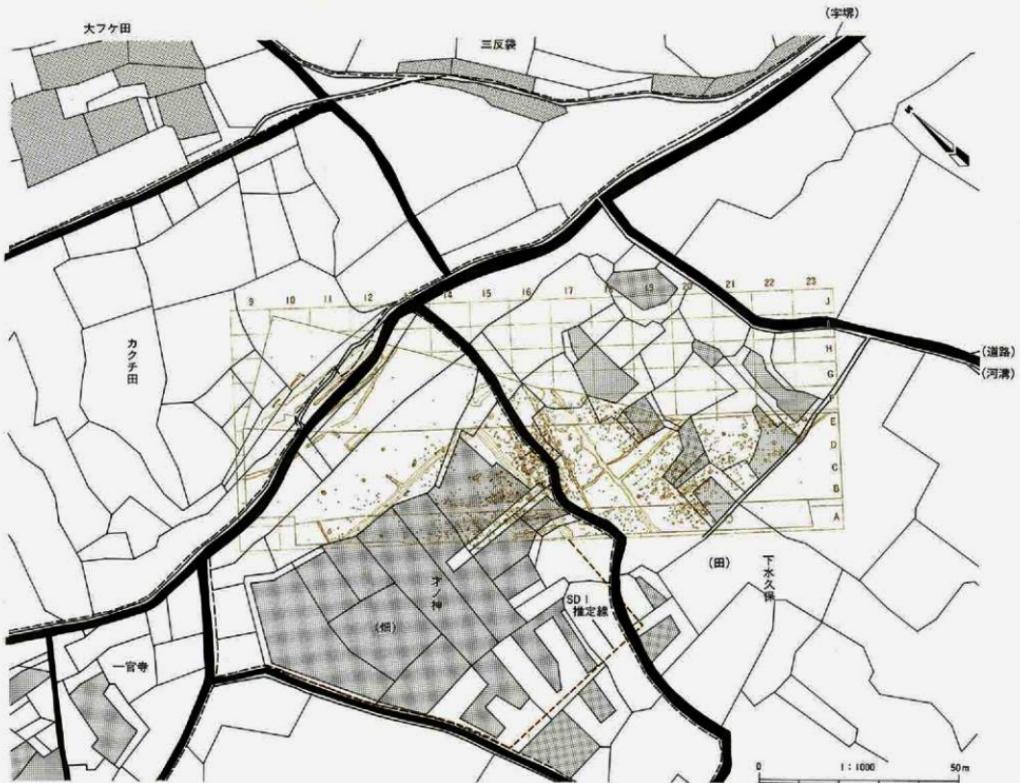
以上、詳細な検討もせず若干のまとめを記述した。遺物・遺構から中世の水久保遺跡は14世紀~17世紀前半までの継続が考えられる。これ以降の遺物も若干認められるが、遺構に伴うも

のが少なく、集落が移動したものと思われる。頭城村は近世以降旧大潟を中心に新田開発が盛んに行われ【頭城村史編さん委員会前掲】であり、このことに関係するのかもしれない。また、調査区およびこの周辺は、遺構配置図と明治27年の土地更正図を見る限り中世以降土地改編が行われていない。このことはこの地区が古代ないしは中世に開発が【坂井前掲】既に完了していた結果であり、近世の新田開発の対象にならなかったからであろう。

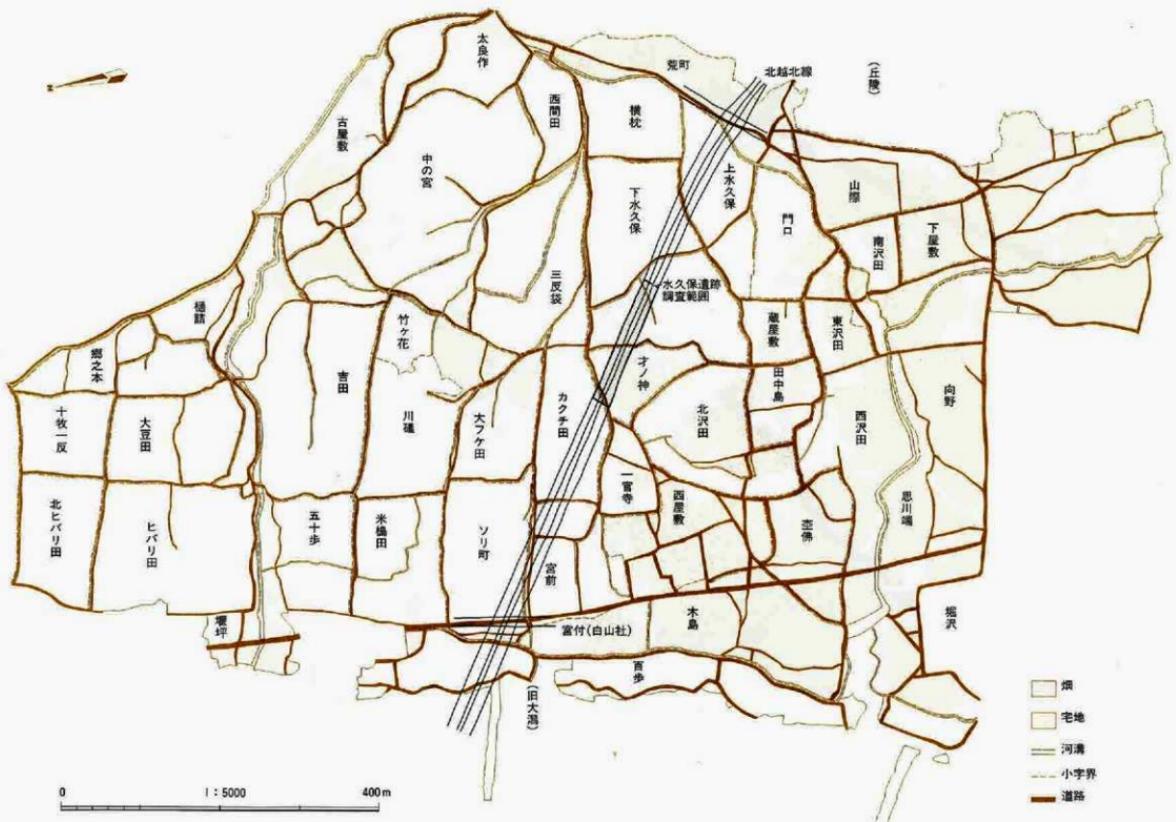
時間的制約もあり、最後に遺跡周辺の明治27年の土地更正図（第11図）を掲載し結びとしたい。

要 約

1. 永久保遺跡は中頭城郡頭城村大字手島字永久保1081番地ほかに所在する。遺跡は関川・八代川・飯田川・保倉川などによって形成された高田平野の北東部に位置し、旧大潟と東頭城丘陵とに挟まれた沖積地内の微高地に立地する。標高は約9mを測る。
2. この遺跡は北越北線の本線建設工事に先立ち、昭和63年に県教委が発掘調査を実施した。調査対象は2,694m²である。隣接範囲は県営圃場整備にかかり、頭城村教育委員会が発掘調査を実施【秦1988】している。
3. 調査の結果、中世を主体とする遺構・遺物が検出された。
4. 主な遺構は中世の掘立柱建物・土杭・溝である。遺構配置（土地利用）は明治27年の土地更正図とは一致する。中でもSD1は更正図上に畑と水田の境・細長い水田として残っており、屋敷を区画する溝と考えられる。掘立柱建物は長軸と方位を基に3群に分類した。
5. 出土した遺物は土器・陶磁器のほか木製品・土器転用品・金属製品がある。多くは遺構内出土で、溝・土坑に伴う。中でも主体を占めるものは14~15世紀に属する珠洲焼き・中世土師器・漆器である。



第10図 遺跡配置図と土地更正図 中原町明治村 明治27年11月調査



第11図 遺跡周辺の字界図 中頭郡明治村 明治27年11月調査

引用・参考文献

- ア浅香年木 1970 「越の莊園と東大寺」『古代の日本』6中部 角川書店
- イ池田敏郎・北村 亮・肥田野弘之・本間桂吉 1987 「頸城村明治地区県営圃場整備事業計画地内遺跡範囲確認調査報告書 中島古屋敷跡 五反田遺跡 水久保遺跡」新潟県頸城村教育委員会
- ウ上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会
- エ遠藤孝司 1989 「越後における越前陶の様相」「北陸における越前陶の諸問題」 北陸中世土器研究会
- オ大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」「国内出土の肥前陶磁」 佐賀県立九州陶磁文化館
大橋康二 1993 「肥前陶磁」考古学ライブラリ-55 ニューサイエンス社
- 岡本郁宗・木村宗文 1985 「池田遺跡」 新潟県教育委員会
- 荻野正博 1986 「越後国初期莊園の成立」「越後國東大寺領の推移」『新潟県史』通史編1原始・古代 新潟県
- 小野正敏 1981 「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁研究No.1』 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会
- カ加賀陶磁器研究会編 1990 「中世北陸の在地窯一生产と流通の諸問題一」 北陸中世土器研究会
ク頸城村史編さん委員会
1988 「頸城村史」 新潟県頸城村
- コ小島幸雄・中村恵美子
1984 「国指定史跡 春日山城跡発掘調査概報 昭和58年度」 新潟県上越市教育委員会
- サ坂井秀弥 1985 「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心にして—」『新潟史学 第18号』 新潟史学会
- 坂井秀弥・木村宗文・戸根与八郎・折井 敦・北村 亮・山本 肇 1985 「今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗 1986 「新井市坪ノ内館跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗 1987 「三島郡出雲崎町番場遺跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報 第1号』 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥・田中耕作・鶴巣康志編
1991 「城館遺跡出土の土器陶磁器」 北陸中世土器研究会
- 坂井秀弥 1991 「絵図にみる城館と町」「中世の城と考古学」 新人物往来社
- 坂詰秀一 1980 「図録歴史考古学の基礎知識」 柏書房
- シ品田高志 1991 「越後における古代・中世の漆器一漆器食器具を中心にして—」『新潟考古学談話会会報 第7号』 新潟考古学談話会
- 品田高志 1991 「越後の中世土師器一縦年の研究の現状と課題—」『新潟考古学談話会会報 第8号』 新潟考古学談話会

ス鈴木俊成・春日真実・高橋一功

- 1994 「一之口遺跡東地区」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
タ高橋保雄・戸根与八郎^著 1995 「宮平遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
田口昭二 1983 「美濃燒」 考古学ライブラリ-17 ニューサイエンス社
田中照久 1987 「玄海灘から発見された越前焼」 『福井県考古学会会誌』 5 福井県考古学会
田村裕 1987 「古代の中の中世」 『新潟県史』 通史編 2 中世 新潟県

ト東京大学史料編纂所

- 1983 「越後の国都絵図 一 頸城郡」 東京大学出版会

東京大学史料編纂所

- 1987 「越後の国都絵図(訳文・索引・解題)」 東京大学出版会

土岐市美濃陶磁歴史館

- 1994 「特別展 続桃山の華 大坂出土の桃山陶磁」 土岐市美濃陶磁歴史館
戸根与八郎^著 1981 「卯ヶ池遺跡」 新潟県教育委員会
戸根与八郎・高橋保雄・佐藤正知・木村康裕・小池義人・武田孝昭・土橋由里子^著
1995 「宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団

ナ奈良国立文化財研究所

- 1985 「木器集成図録 近畿古代篇」 奈良国立文化財研究所
ニ新潟県 1986 「新潟県史」 通史編 1 原始・古代 新潟県
新潟県 1987 「新潟県史」 通史編 2 中世 新潟県
新潟県 1987 「新潟県史」 通史編 3 近世一 新潟県
新潟古砂丘グループ 1967 「日本海側の古砂丘について」 『第四紀研究』 6-1 日本第四紀学会
ハ森繁治 1988 「永久保・中島古屋敷跡遺跡」 新潟県頸城村教育委員会
ヒ平野團三 1988 「律令制の夷守郷と佐味郷の境界」 『頸城村史』 新潟県頸城村
ア福井県陶芸館

- 1986 「越前名陶展」 福井県陶芸館

福井県立朝倉氏遺跡資料館

- 「特別史跡一乘谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ」 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館

福井県立朝倉氏遺跡資料館

- 「特別史跡 一乘谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅱ」 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館

藤沢良祐 1984 「古瀬戸概説」 『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』 美濃陶磁歴史館

- 藤沢良祐 1986 「総括—瀬戸大窯の編年研究—」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』 瀬戸市歴史民俗資料館

- 藤巻正信 1989 「土器片円盤について」 『新潟考古学談話会会報 第3号』 新潟考古学談話会
ホ北陸中世土器研究会

- 1989 「北陸における越前陶の諸問題」 北陸中世土器研究会

北陸中世土器研究会(新潟)

- 1995 「中世北陸の木製容器」 北陸中世土器研究会

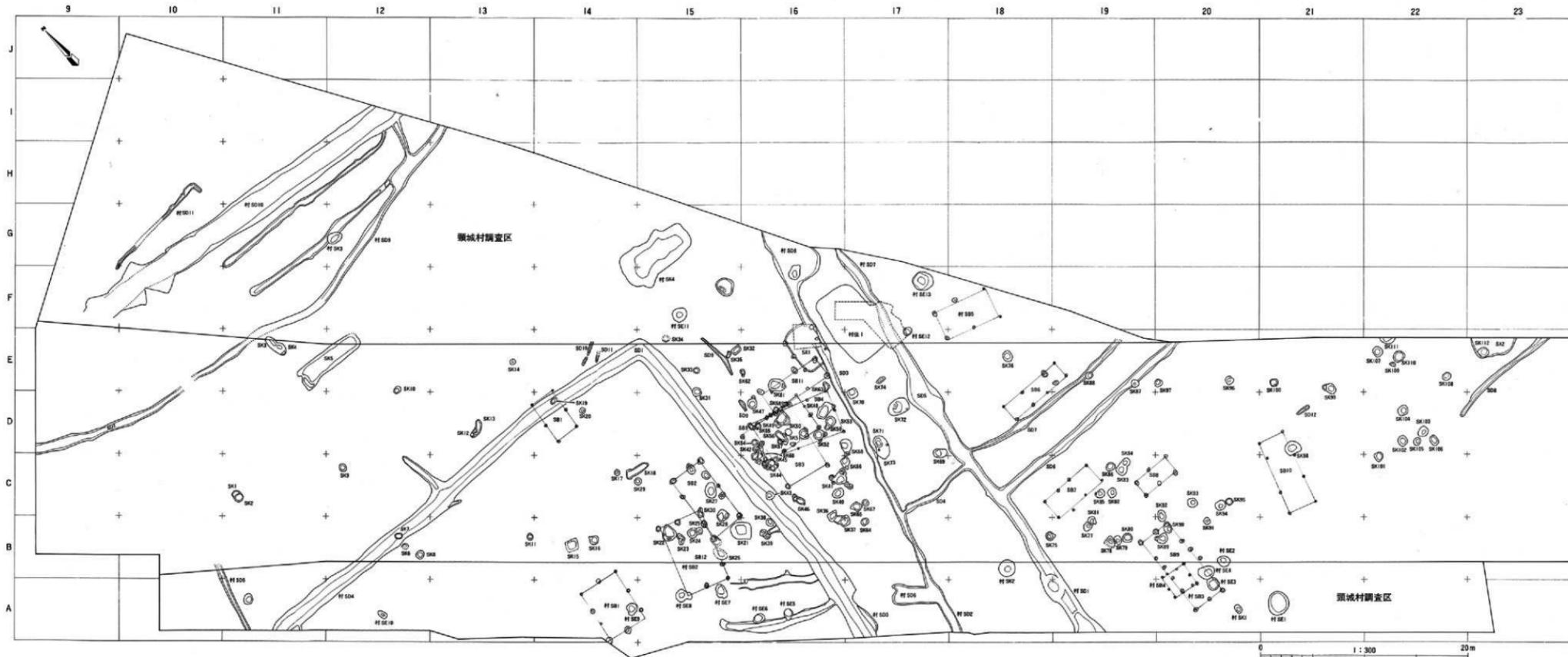
- ミ宮田進一 1990 「80年代の研究成果と今後の展望 北陸」 『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会

- 三輪茂雄 1978 「臼」ものと人間の文化史25 法政大学出版局
- モ森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会
- ヨ横田賢次郎・森田 勉
- 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
- 吉岡康暢^ら 1989 『東日本における中世窯業の基礎的研究』 国立歴史民俗博物館
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 吉川町教育委員会
- 1989 『横田遺跡発掘調査概報』 新潟県吉川町教育委員会
- 吉川町教育委員会
- 1990 『横田遺跡第二次発掘調査概報』 新潟県吉川町教育委員会
- 四柳嘉章 1991 「古代~近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会会誌』34 石川考古学研究会
- 四柳嘉章 1993 「立山町辻遺跡出土中世漆器の塗膜分析」『大境 第15号』 富山考古学会
- 四柳嘉章 1995 「地中からのメッセージ 振り出された縄文~中世の漆器ー北陸出土例を中心にー」 日本漆文化会議
- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32-6 信濃史学会

図 版

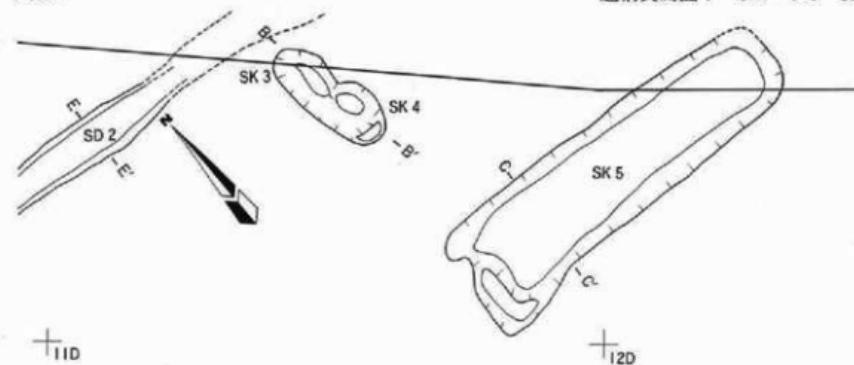


図版 I 水久保遺跡遺構全体図 (1:300)

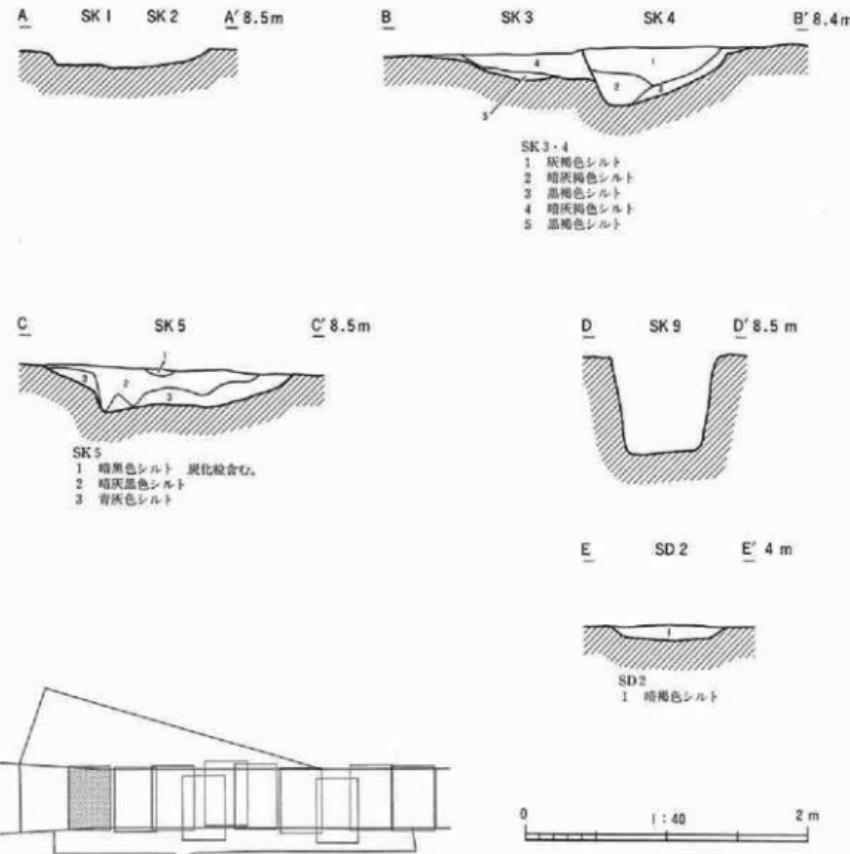


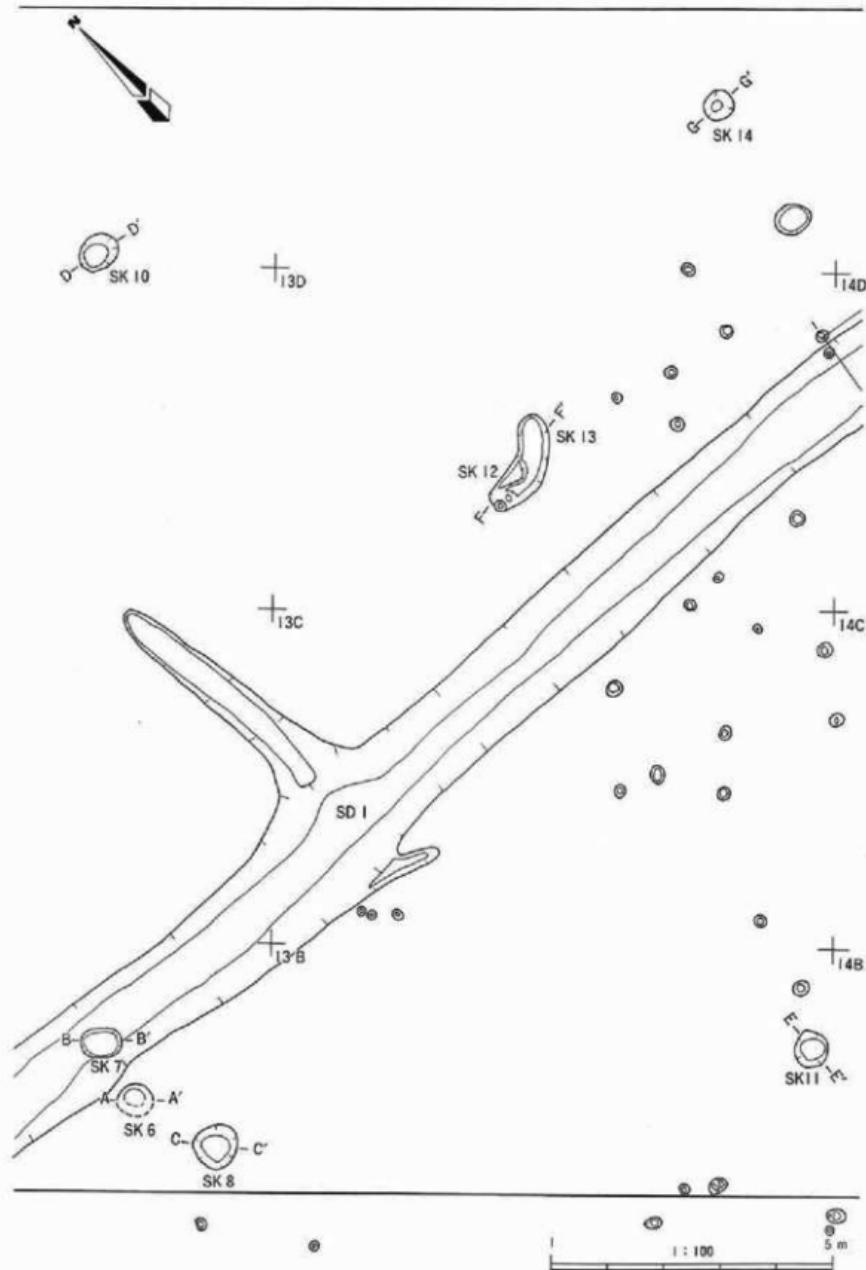
図版2 水久保遺跡遺構配置図 (1:300)

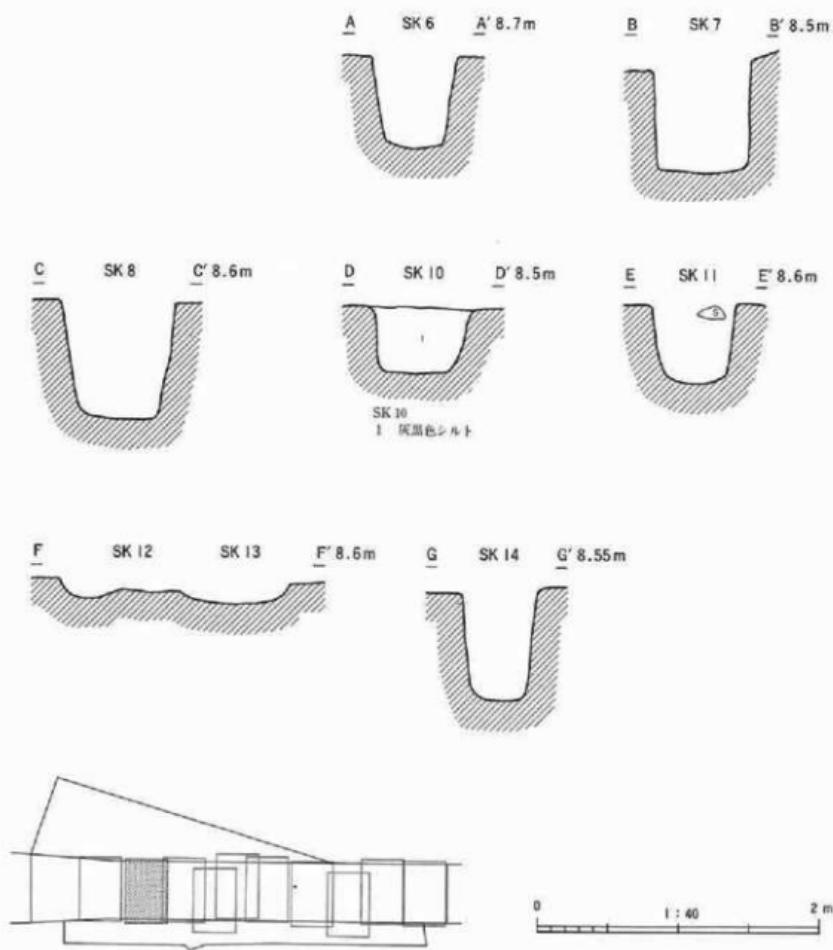


 $+_{IIB}$  $+_{I2C}$  $+_{IIB}$ $+_{I2B}$ 

1 : 100
5 m

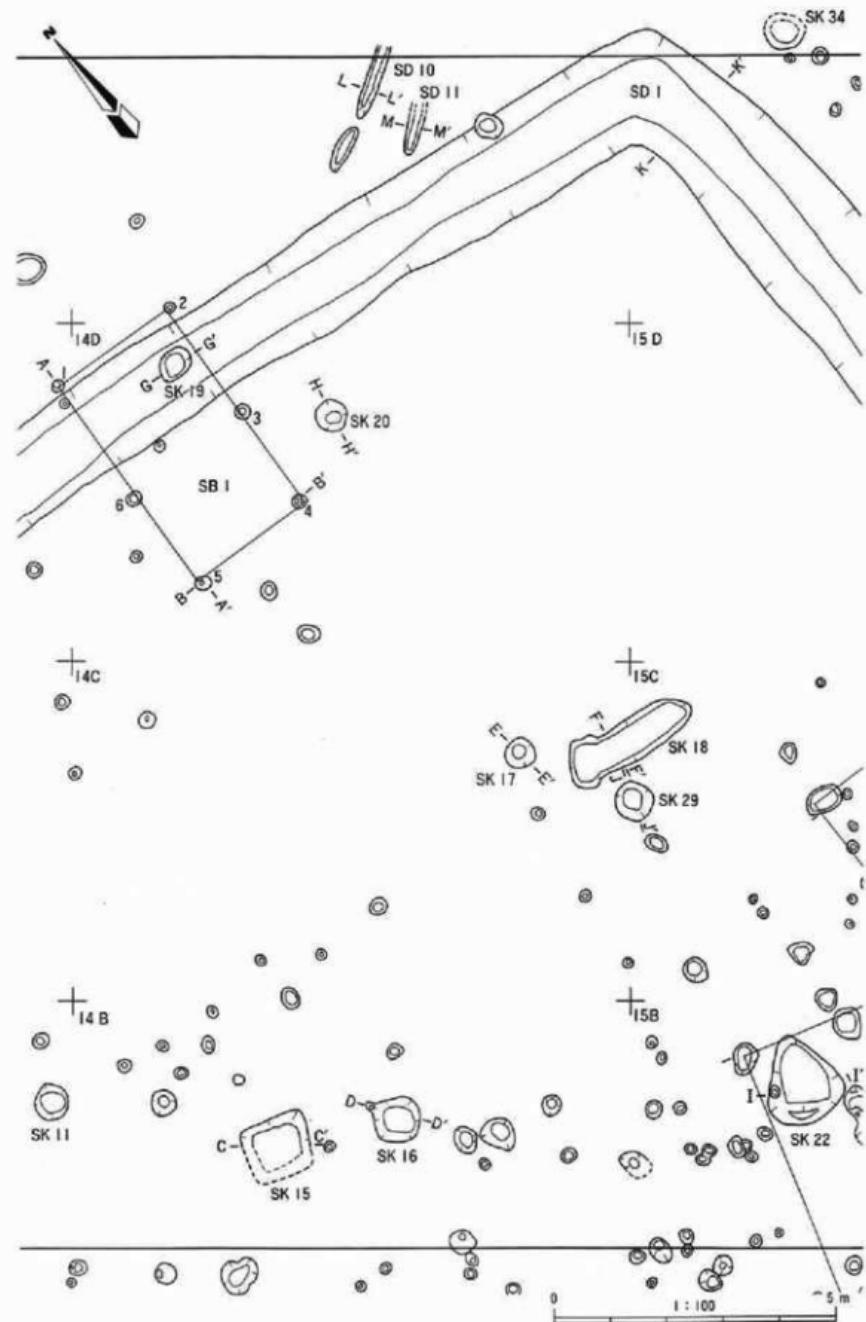


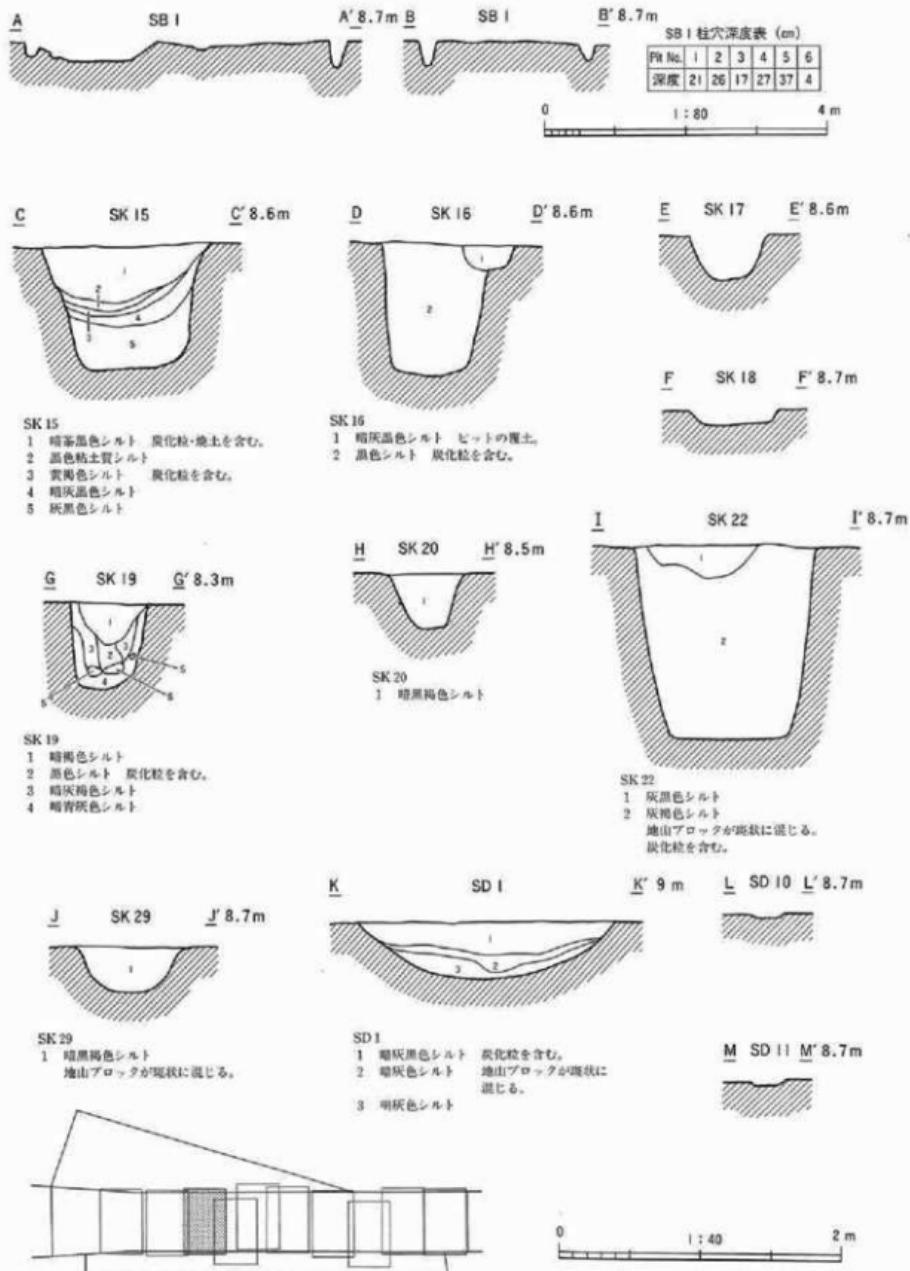




図版 8

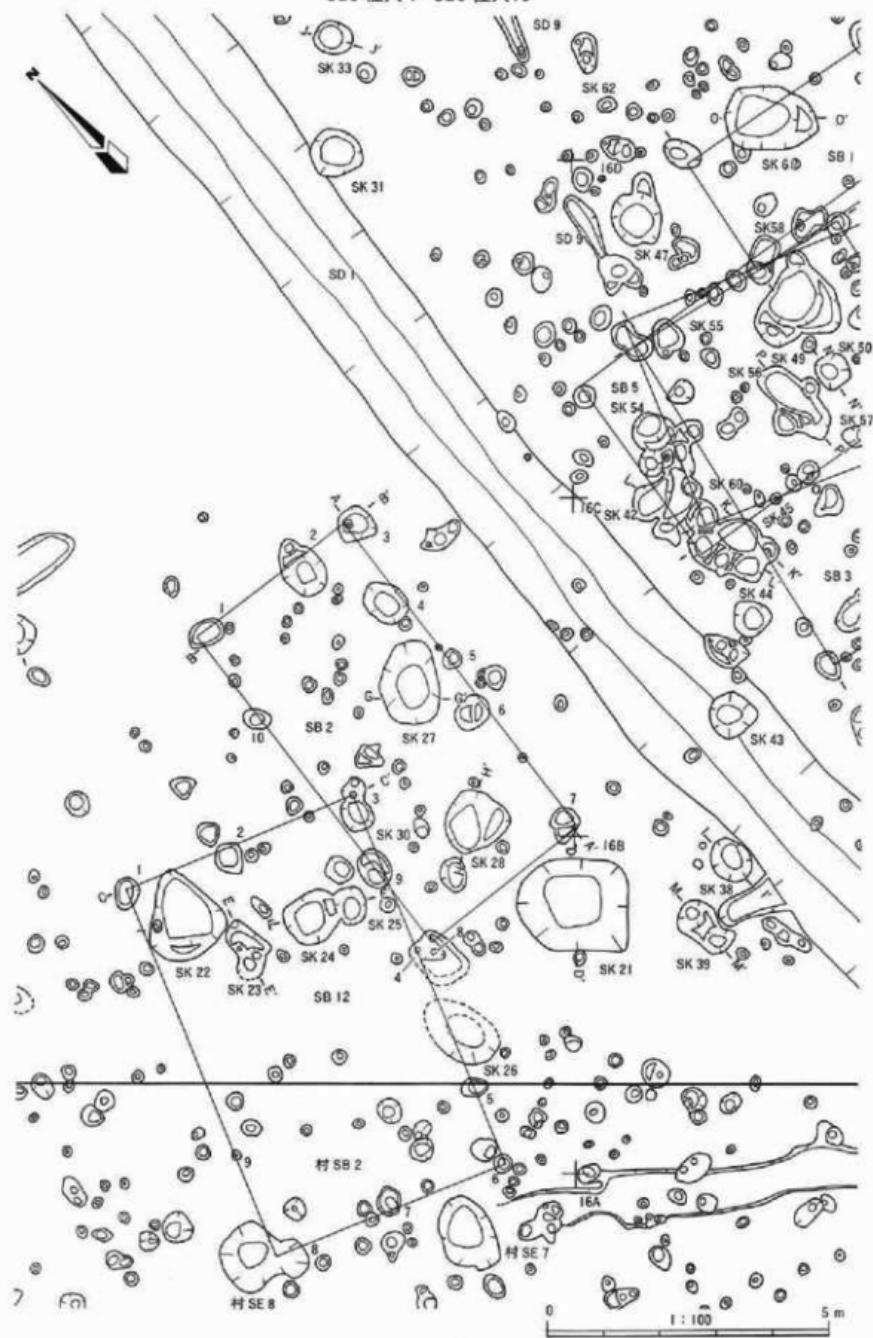
造構実測図 3 SBI SK15~20・22・29・34 SD1・10・11





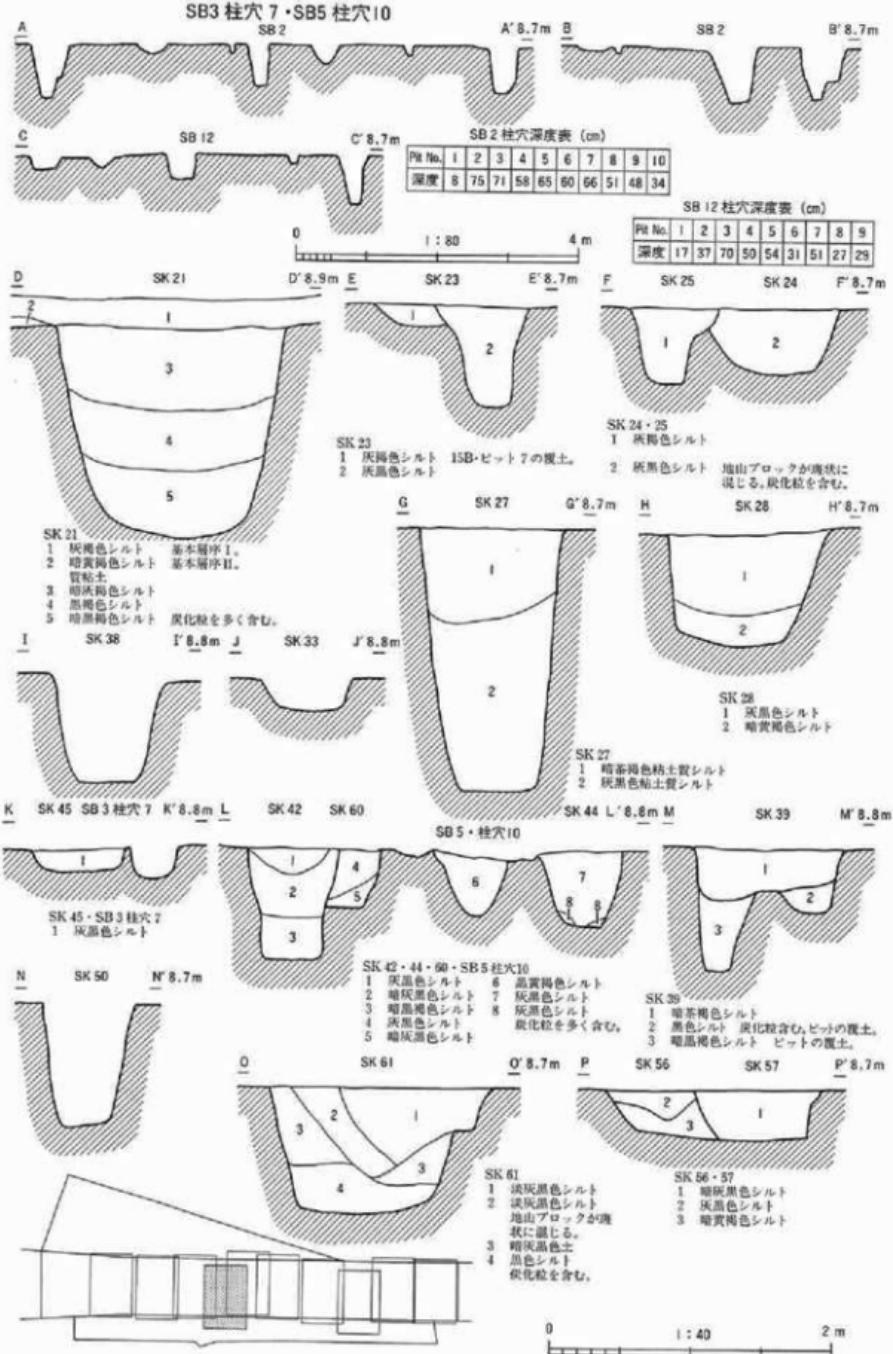
圖版10

遺構実測図 4 SB2・12 SK21・23~28・30・31・33・38・39・42・44・45・50・56・57・61
SB3 柱穴7・SB5 柱穴10

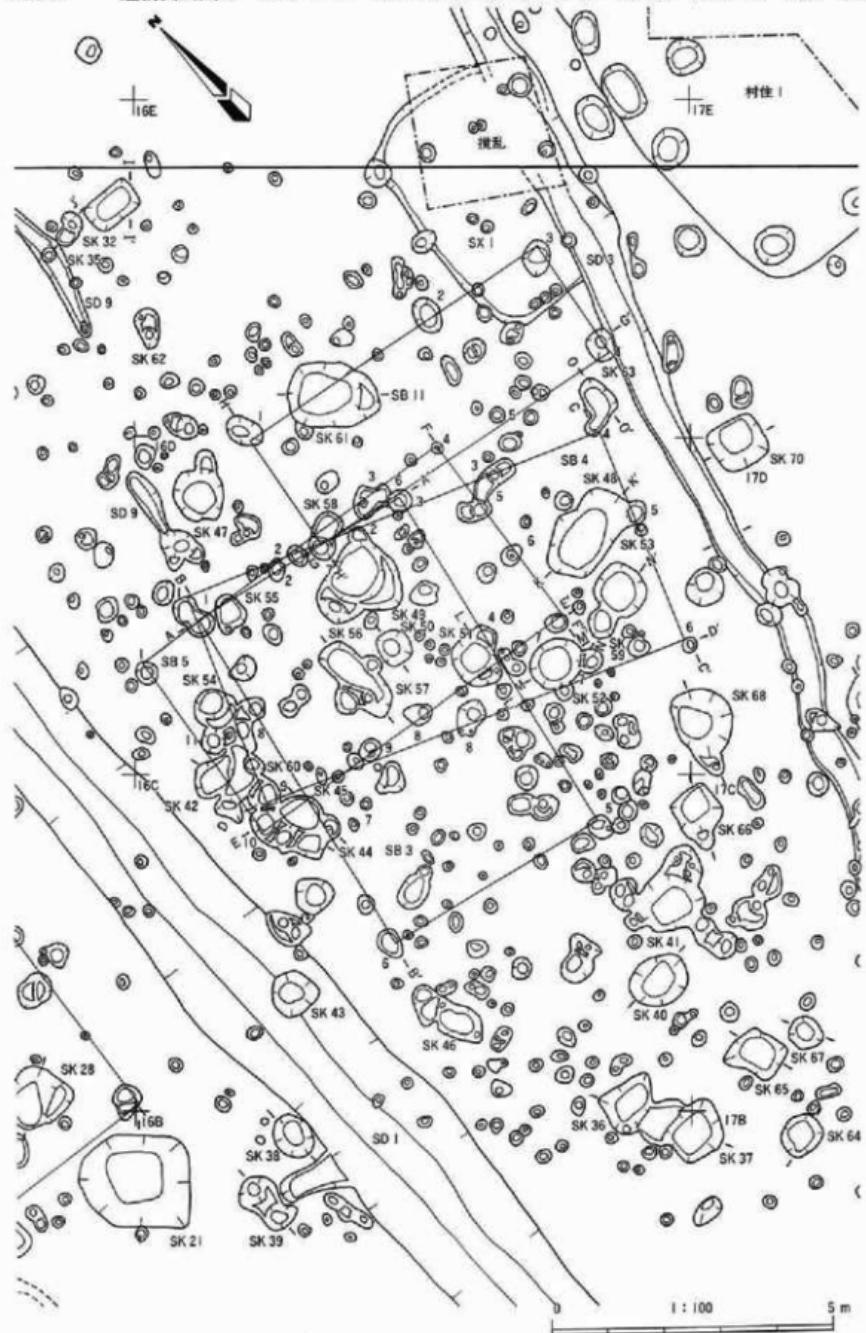


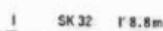
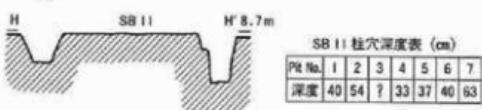
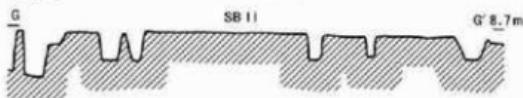
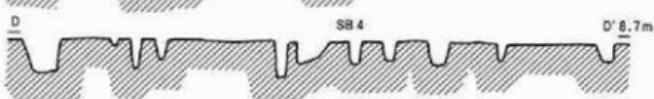
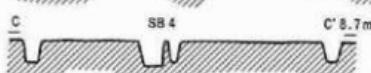
遺構個別実測図 4 SB2・12 SK21・23~25・27・28・33・38・39・42・44・45・50・56・57・61

圖版II



図版12 造構実測図 5 SB3~5・II SK32・35・41・43・46~49・51~55・58~60・62・63 SD9 SXI



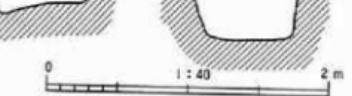
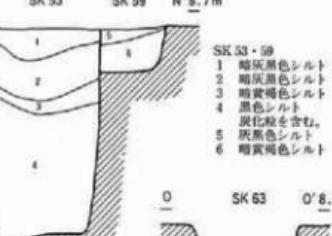
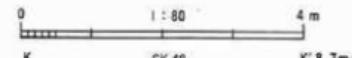


Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深度	40	54	?	33	37	40	63	

基本層序 I =
基本層序 II =

1 灰褐色シルト
2 布質褐色シルト
3 褐褐色シルト
4 暗黒褐色シルト

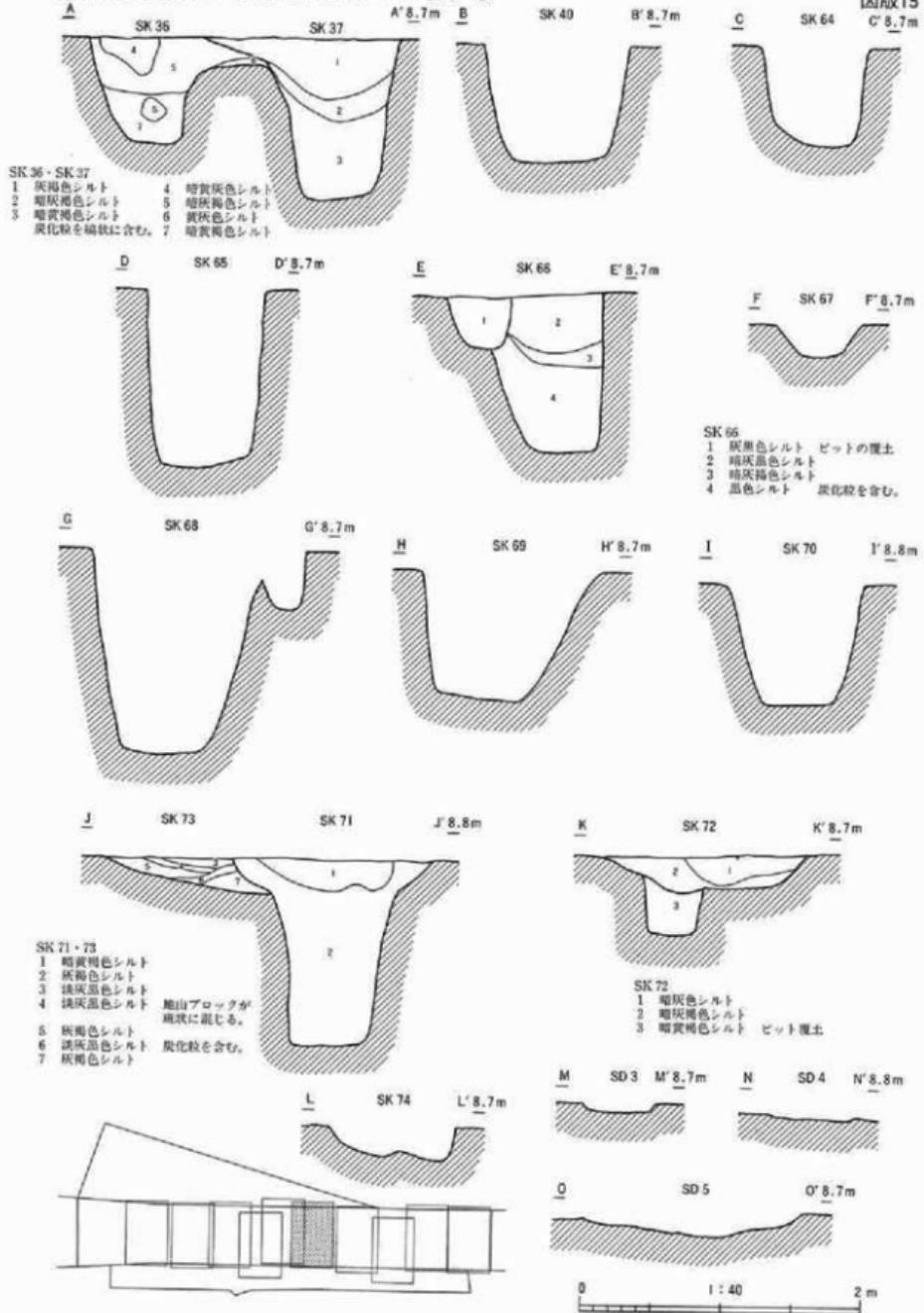
1 灰褐色シルト
2 布質褐色シルト
3 褐褐色シルト
4 暗黒褐色シルト

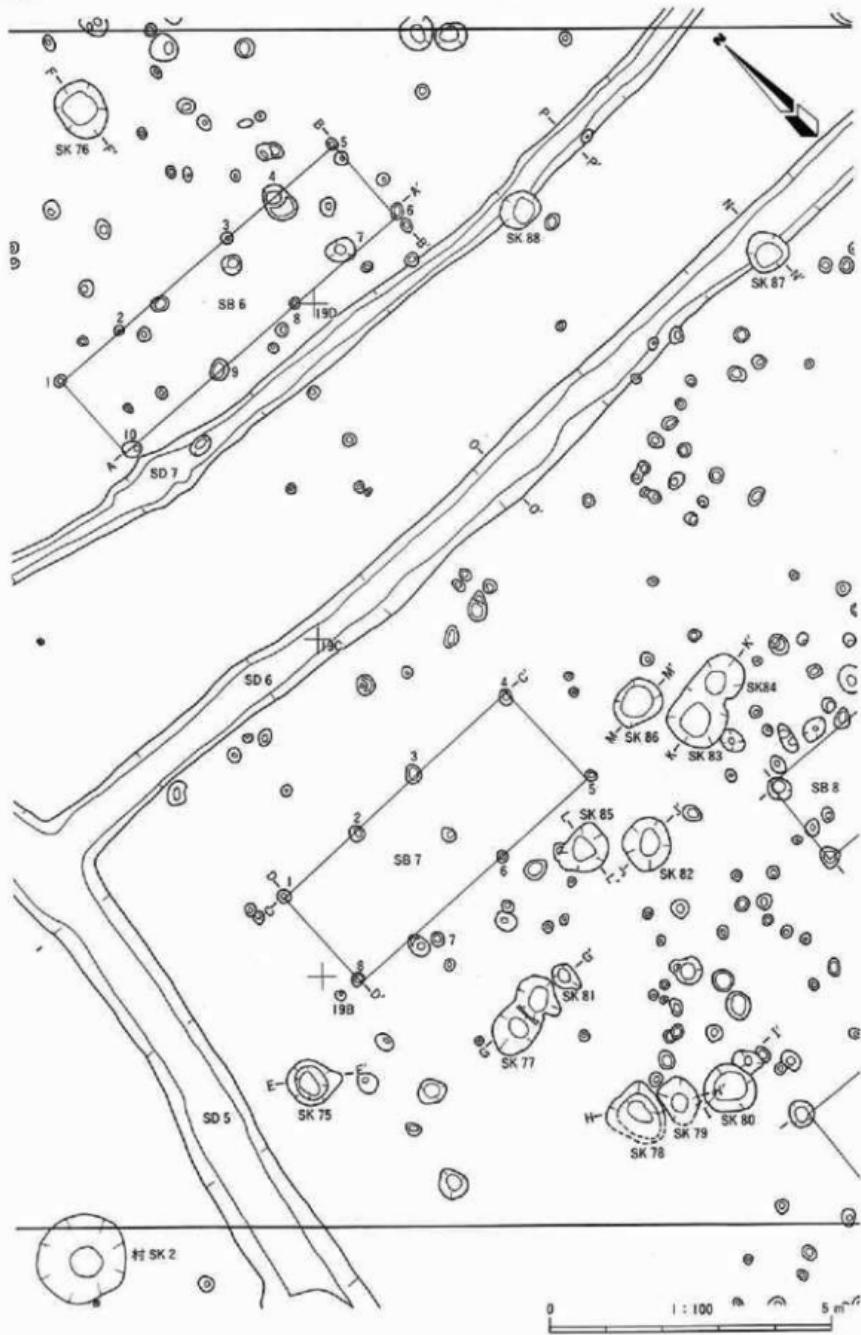


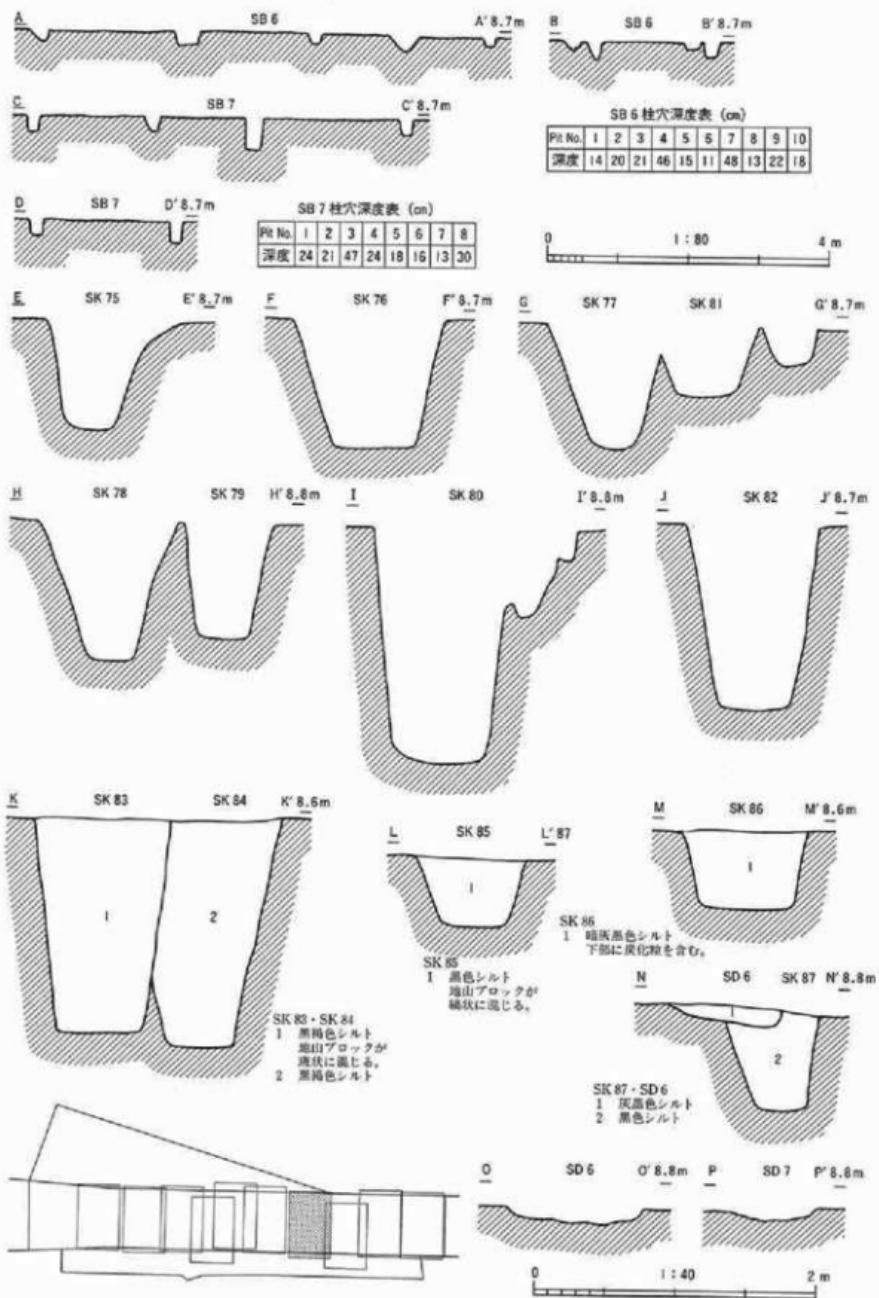


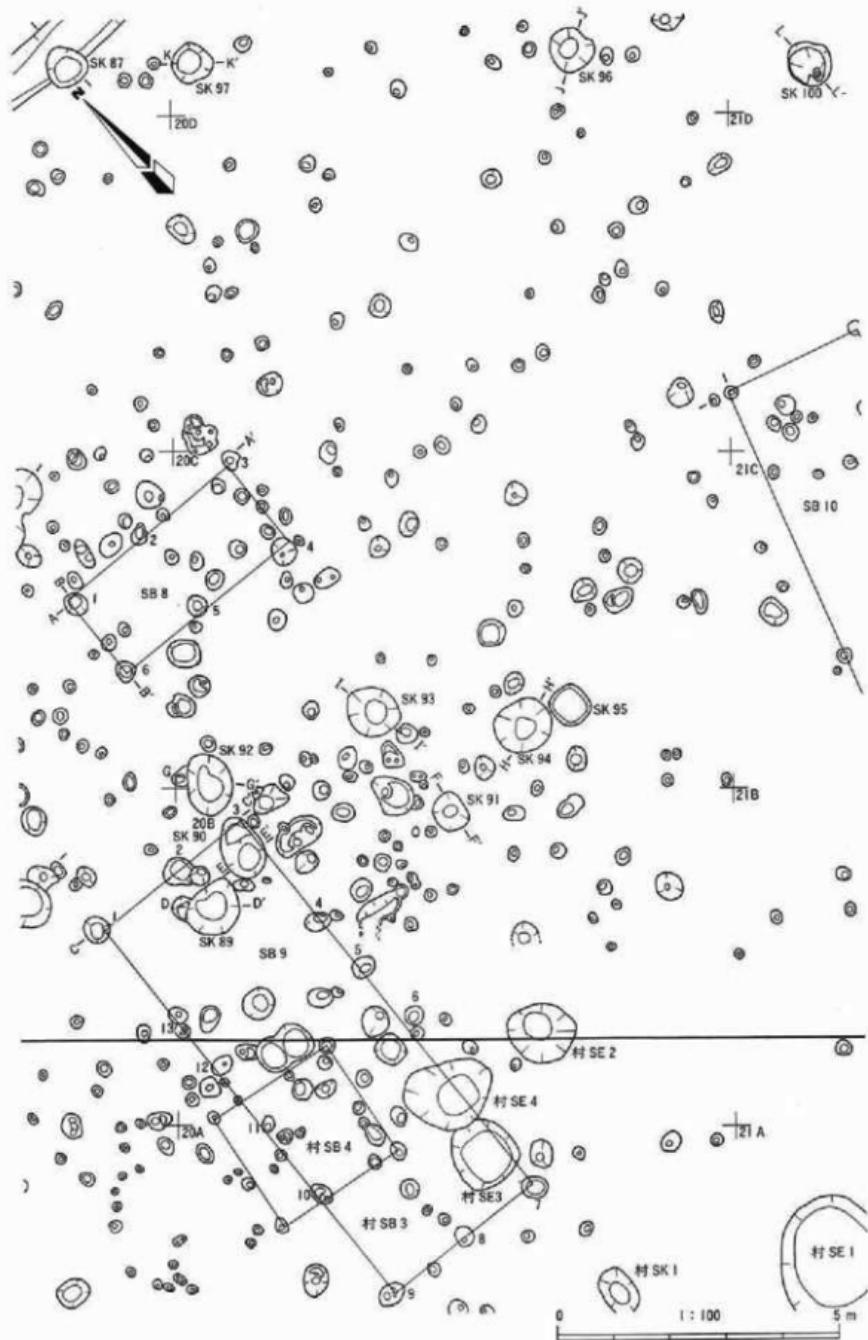
造構個別実測図 6 SK36・37・40・64～74 SD3～5

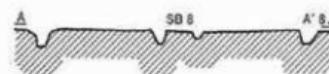
図版15







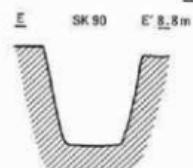
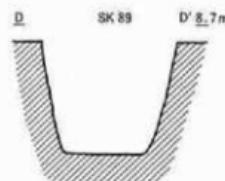




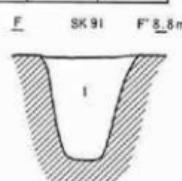
SB 8 柱穴深度表 (cm)						
Pit No.	1	2	3	4	5	
深度	26	31	20	59	62	21



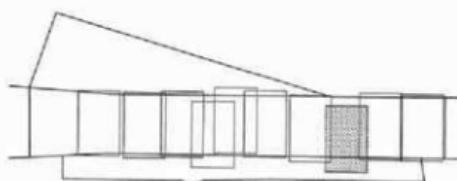
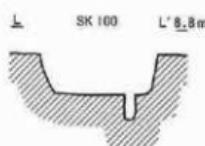
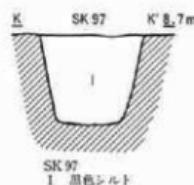
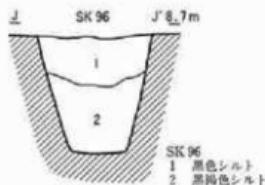
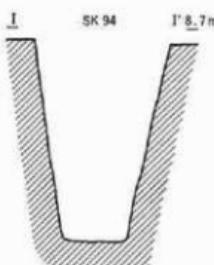
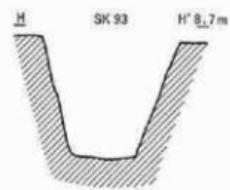
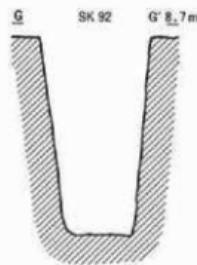
SB 9 柱穴深度表 (cm)													
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
深度	50	51	45	34	?	35	28	58	33	13	24	52	39



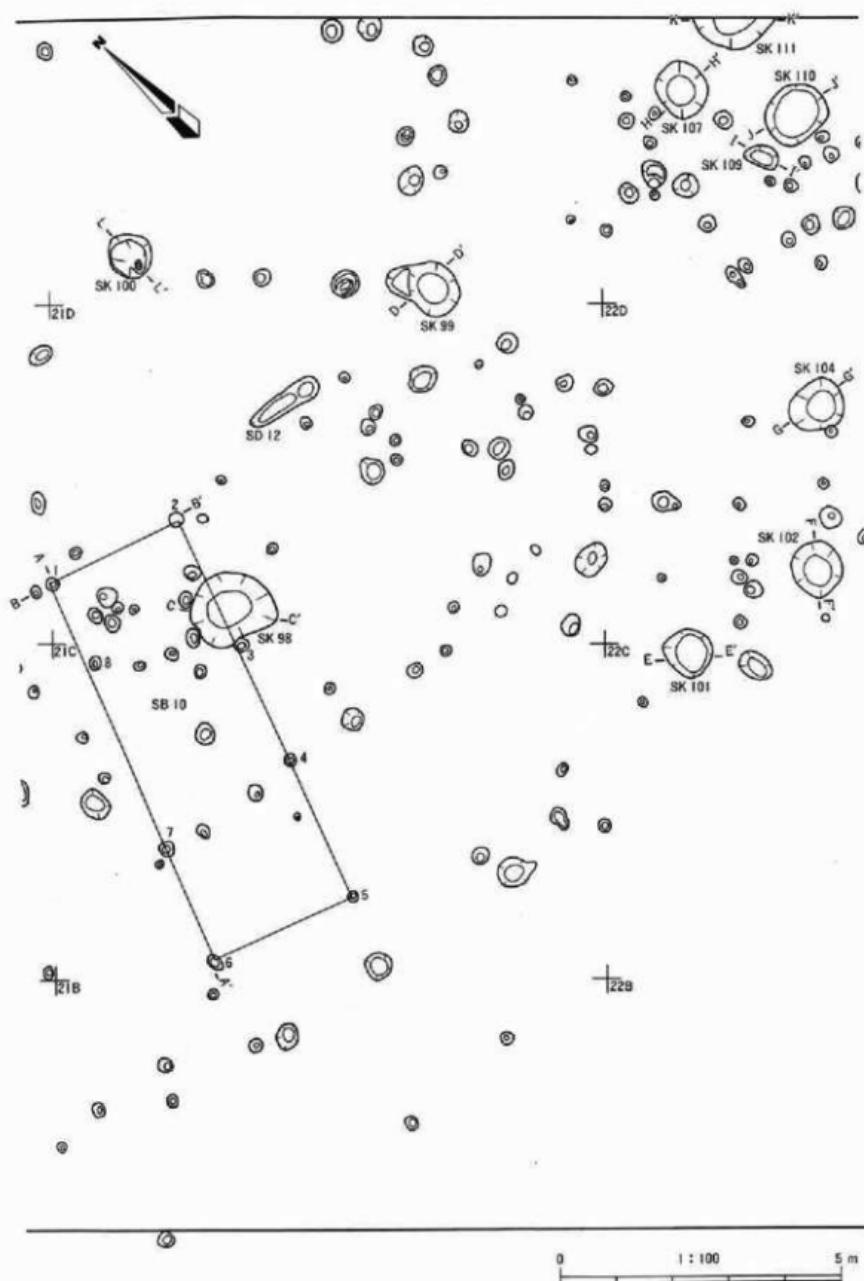
0 1 : 80 4 m

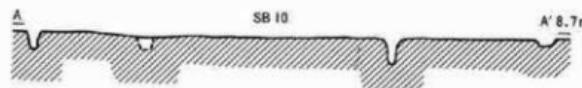


SK 91
1 黒帯薄色シルト
灰化層を含む。



0 1 : 40 2 m

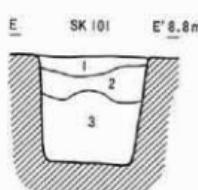
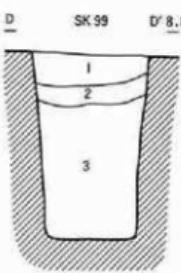
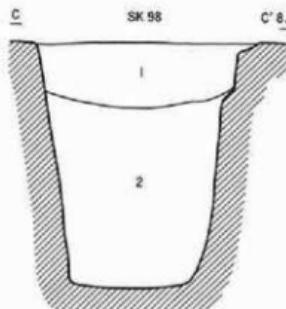




SB 10 柱穴深度表 (cm)								
Pt No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深度	25	27	16	31	9	8	34	18

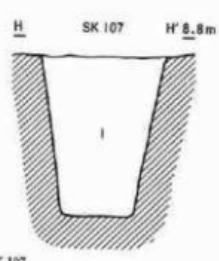
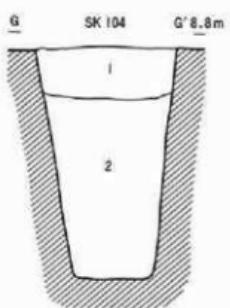
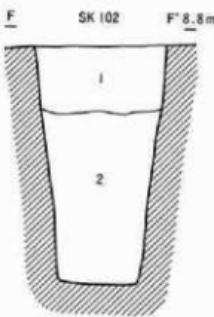


0 I : 80 4 m



SK 101
1 暗茶褐色シルト
2 黒色シルト
3 深黑色粘土質シルト

SK 98
1 灰褐色シルト
2 灰褐色粘土質シルト

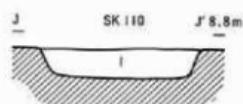


SK 107
1 灰黑色シルト 挿出ブロックが塊状に
偏在する。

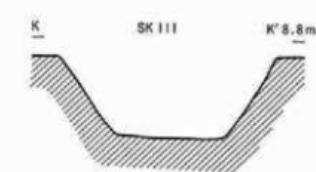
SK 102
1 茶灰色シルト 硫化粒を含む。
2 灰黑色シルト

SK 104
1 灰色シルト 炭化粒を含む。
2 灰褐色シルト

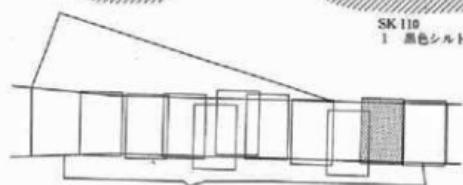
I SK 109 I' 8.8m

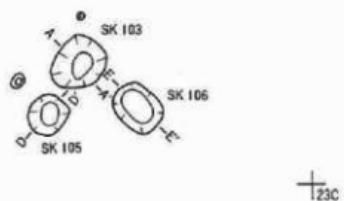
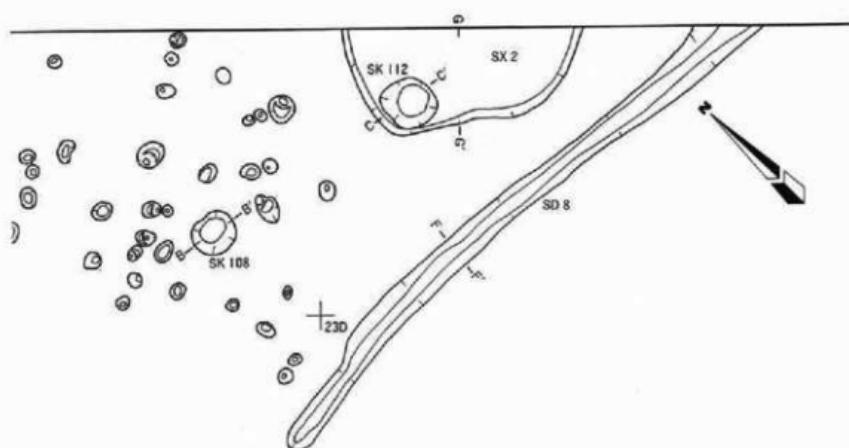


SK 110
1 黒色シルト



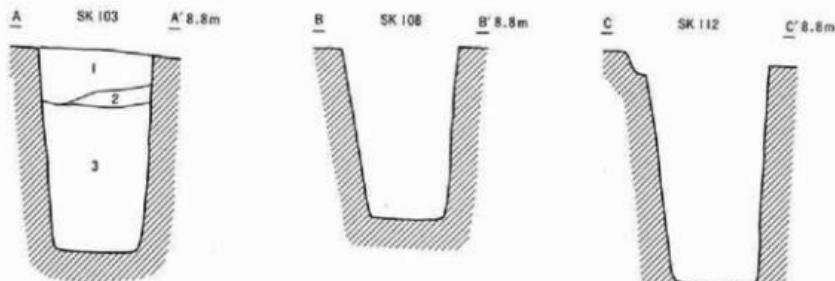
0 I : 40 2 m



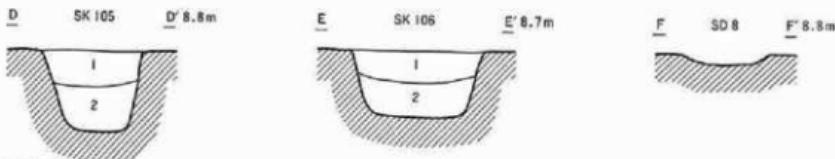


+
23B

0
1 : 100
5 m

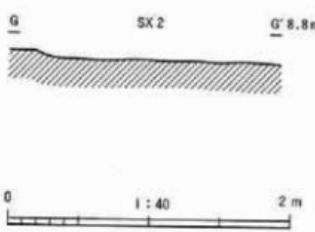
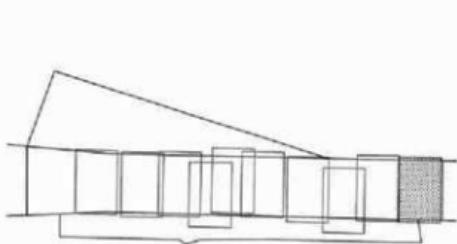


SK 103
1 深灰色シルト
2 黒色シルト
3 灰黑色シルト

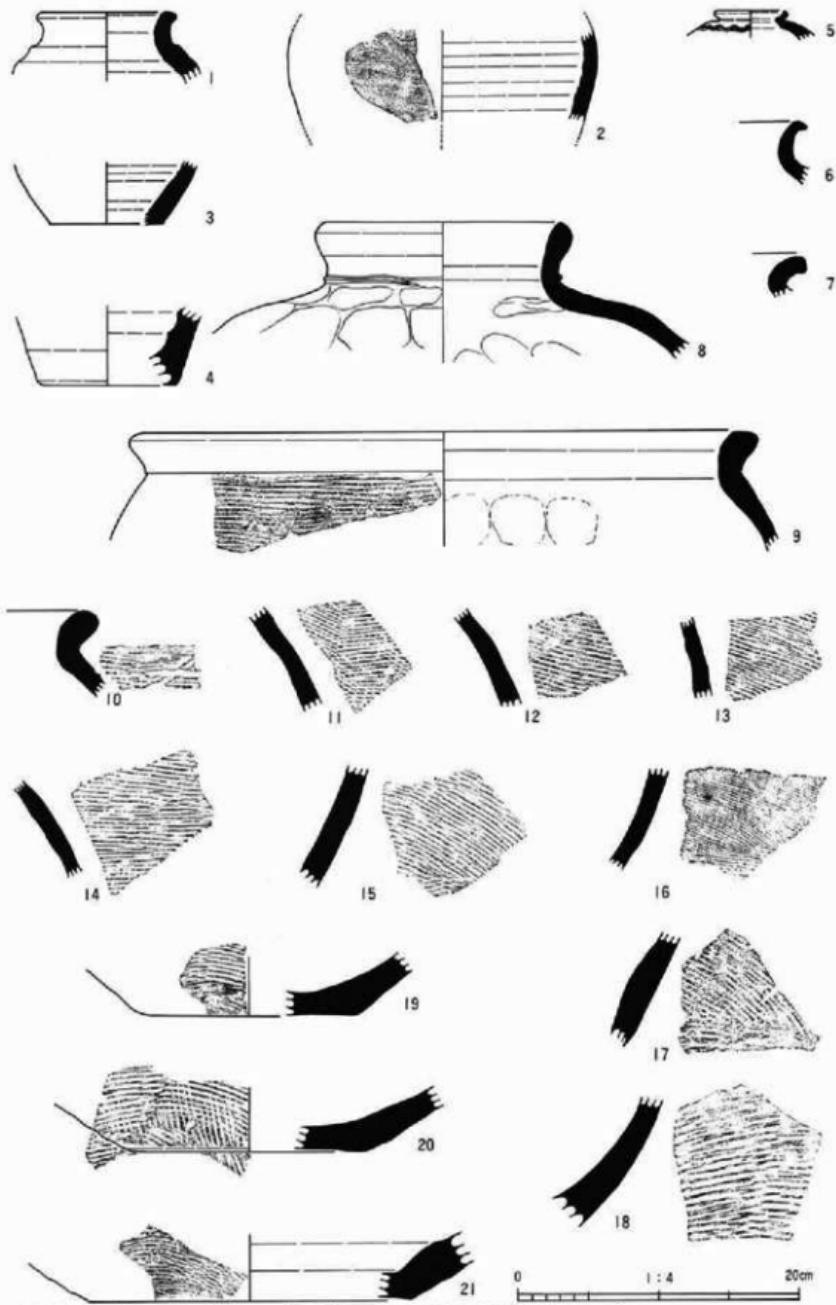


SK 105
1 茶灰色シルト 塵化粒を含む。
2 灰黑色シルト

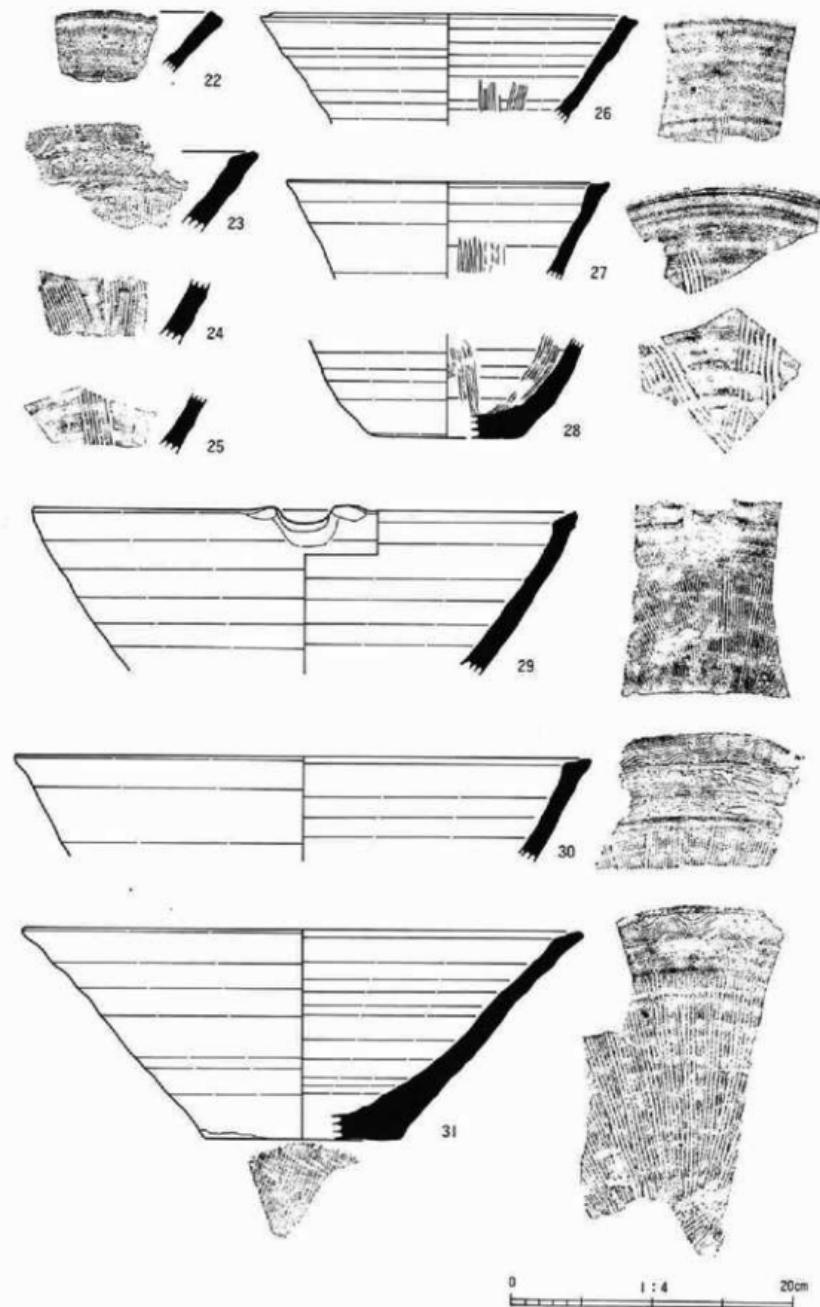
SK 106
1 茶灰色シルト 塘化粒を含む。
2 灰黑色シルト



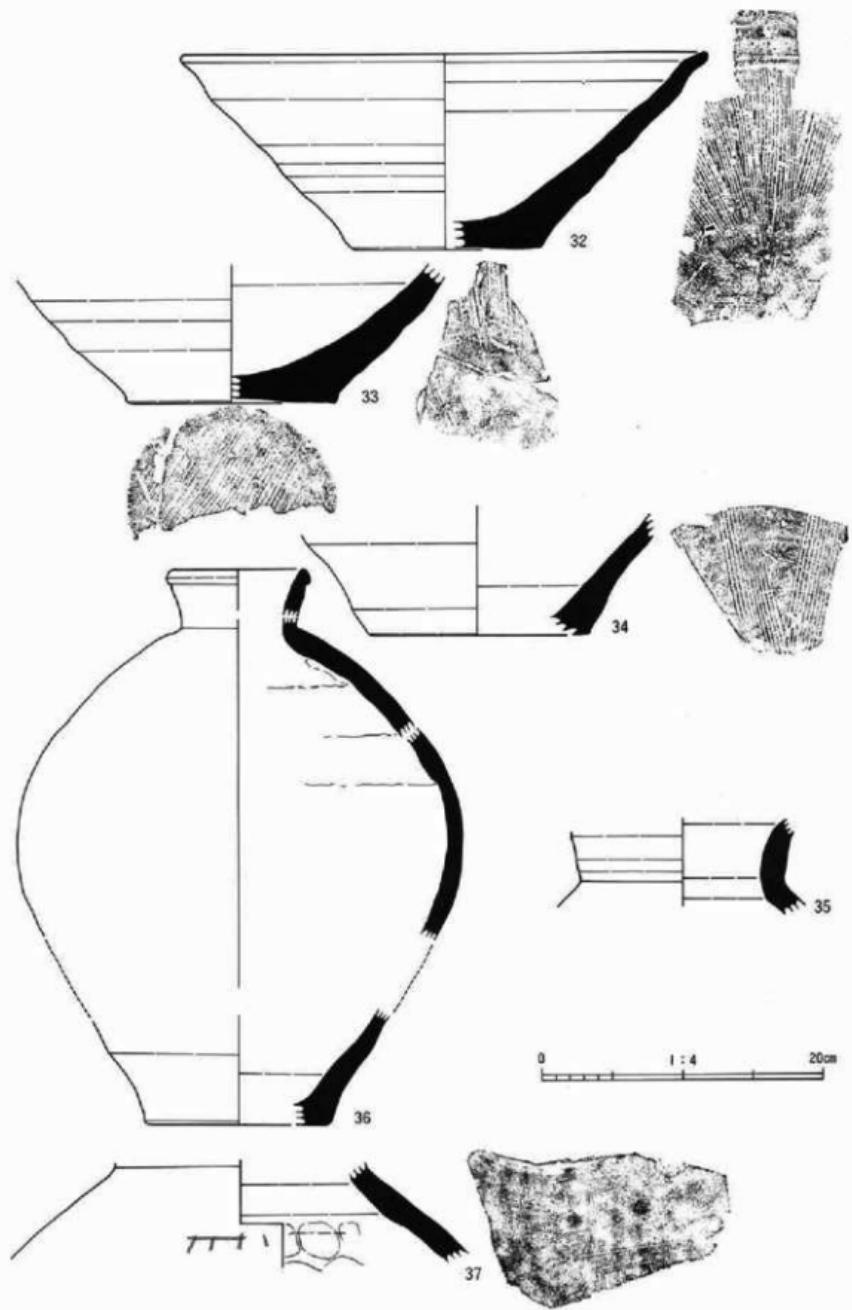
0 I : 40 2 m



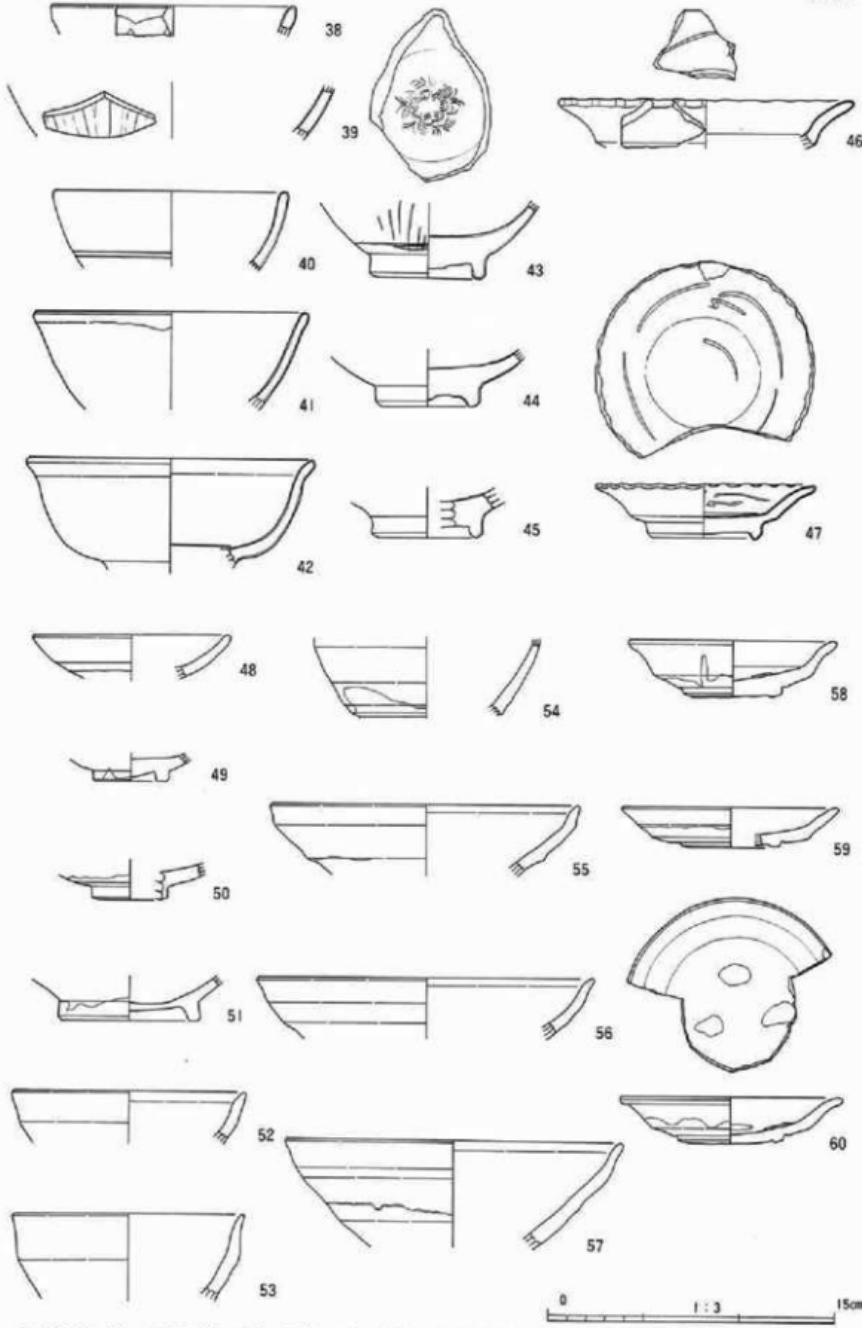
珠洲焼 小臺 (1~5) 臺 (6~8) 甕 (9+10+19~21) 甕または臺 (11~18)



珠洲焼 片口鉢(22~31)

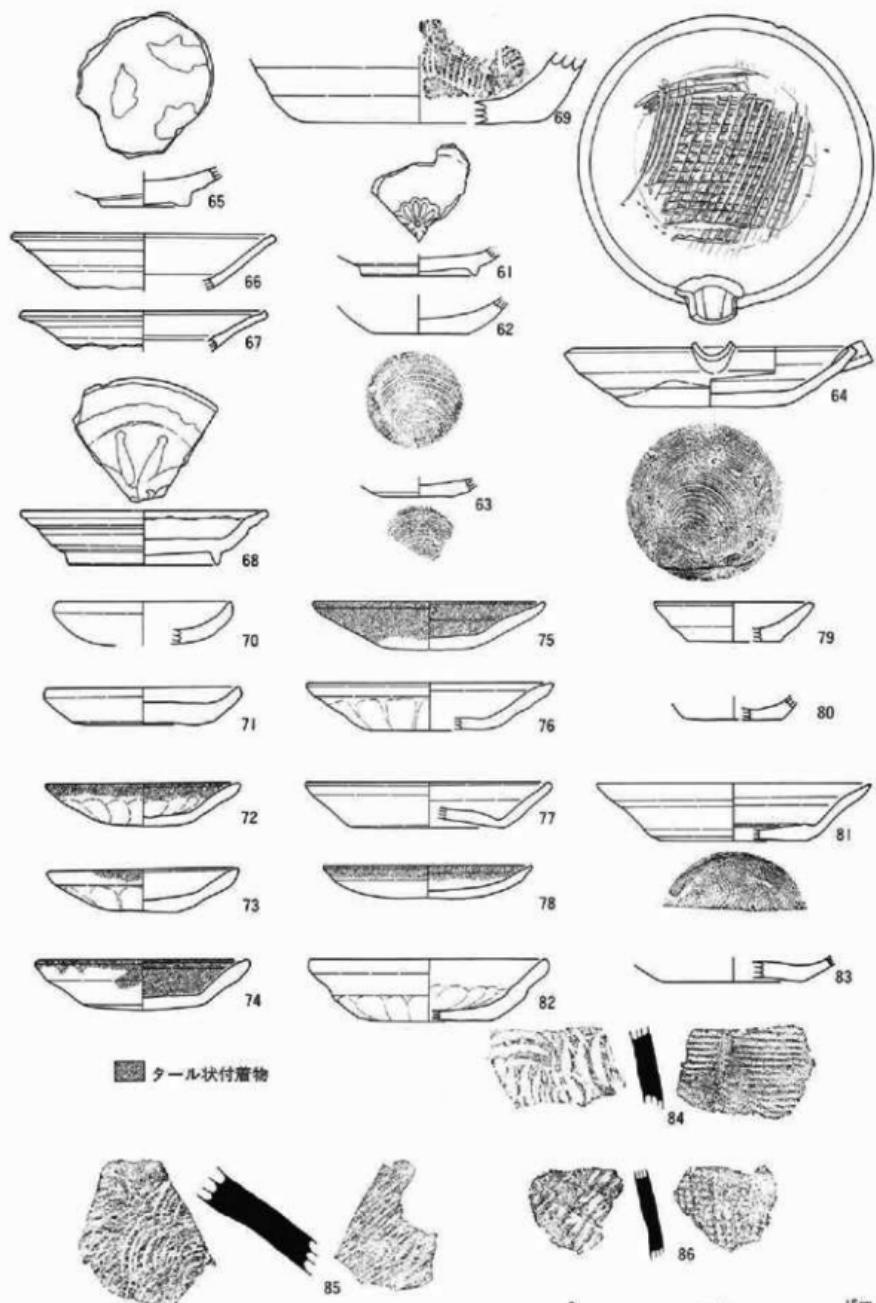


珠洲焼 片口鉢(32・33) 越前焼 片口鉢(34) 壺(35・36) 壺(37)

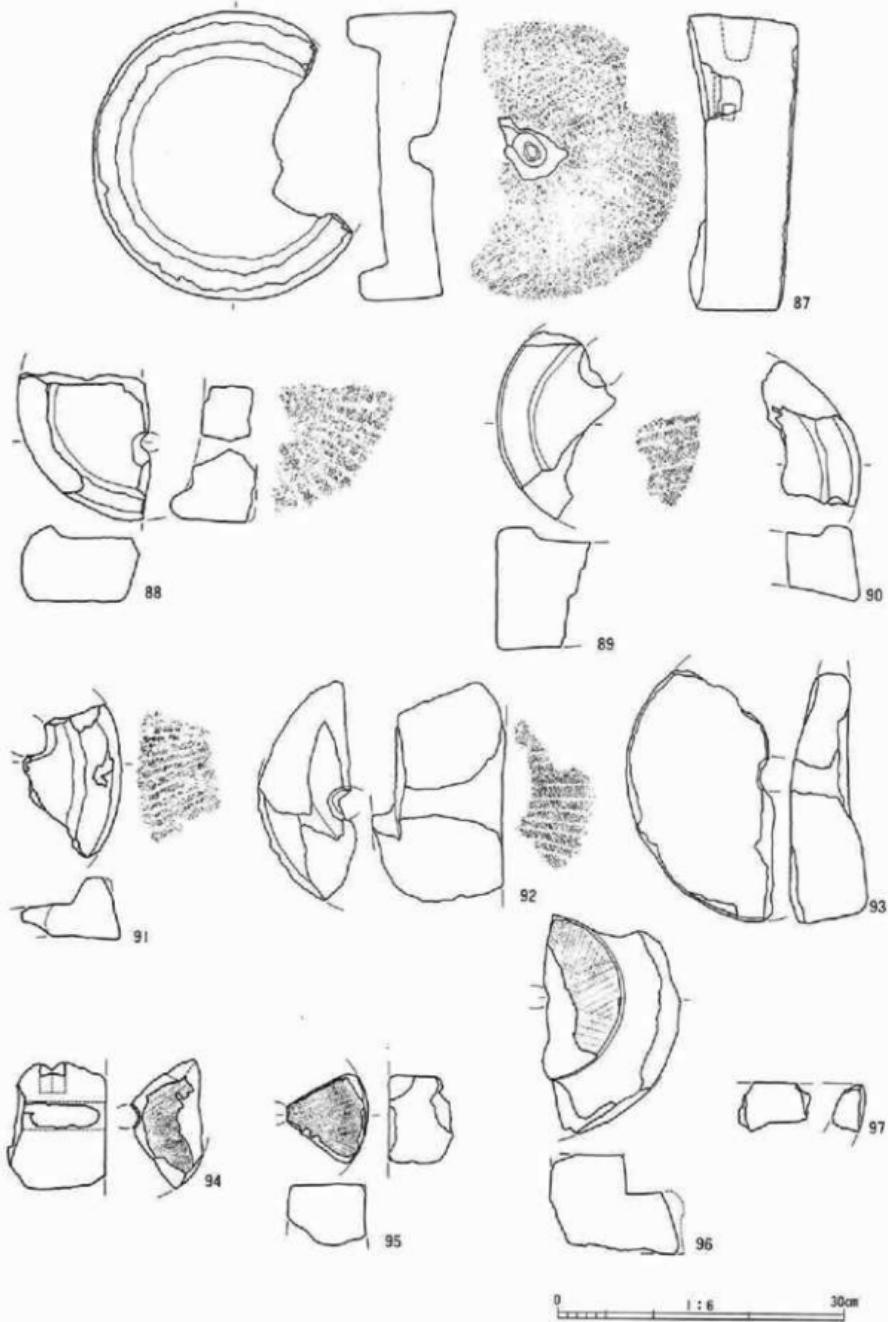


青磁碗(38~45) 盤(46~47) 白磁 盤(48~50) 碗(51) 濑戸美濃焼 天目茶碗(52~54) 碗(55~57) 皿(58~60)

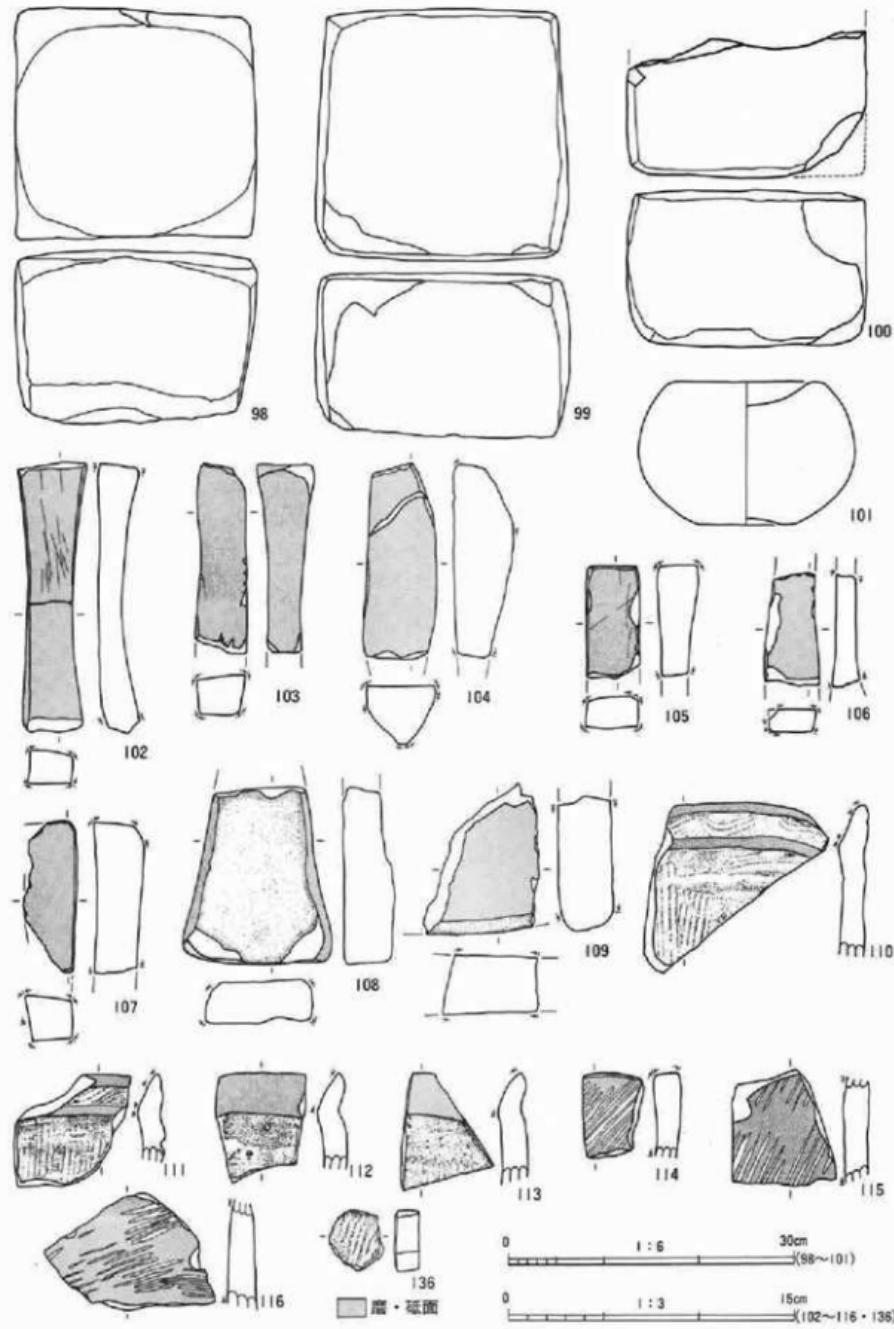
0 1:3 15cm



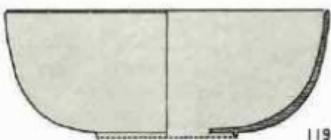
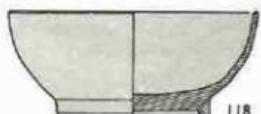
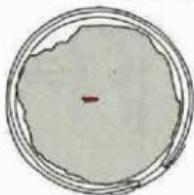
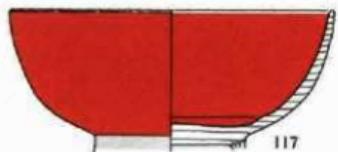
瀬戸美濃焼 盆(61・63) 碗(62) 卸し皿(54) 唐津焼 皿(65~67) 鍋部焼 皿(68) 魁中瀬戸焼 片口鉢(59)
中世土器 盆(70~81) 杯(82) 平安時代の土器 +十輪蓋環(83) 須恵器碗(84~86)



石臼 粉挽き臼(87~93) 茶臼(94~96) 石鉢(97)

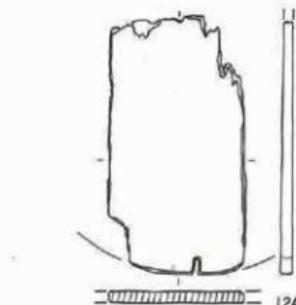
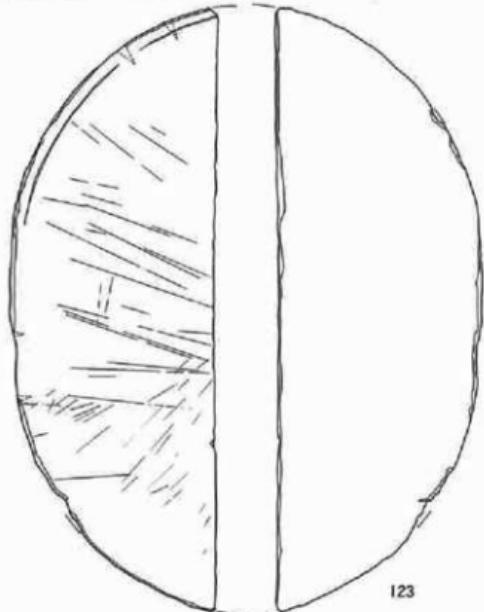


五輪塔(98~101) 砥石(102~109) 土器器研磨具・研削具(110~116) 土器片円盤(136)



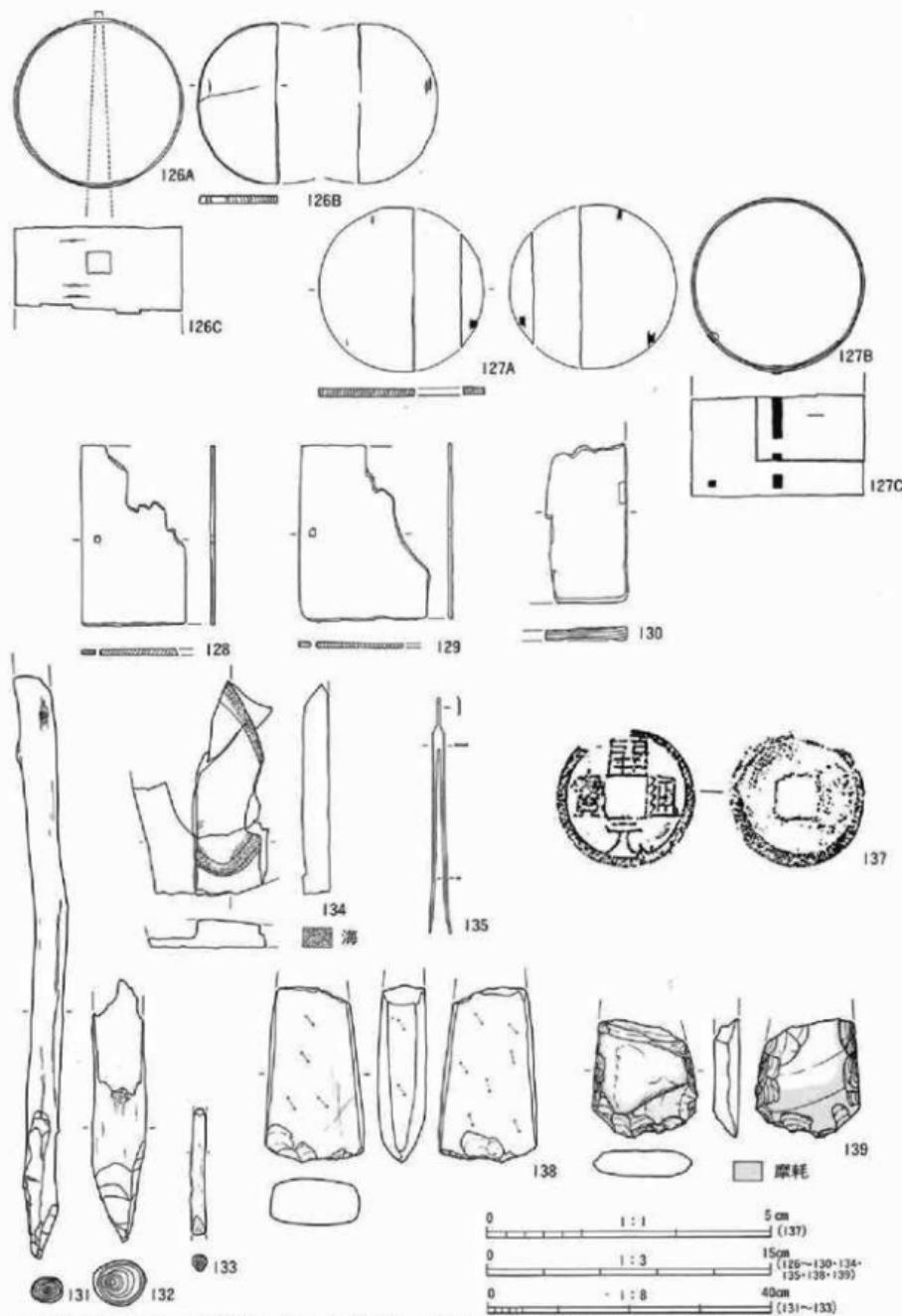
■ 黒色漆

■ 赤色漆

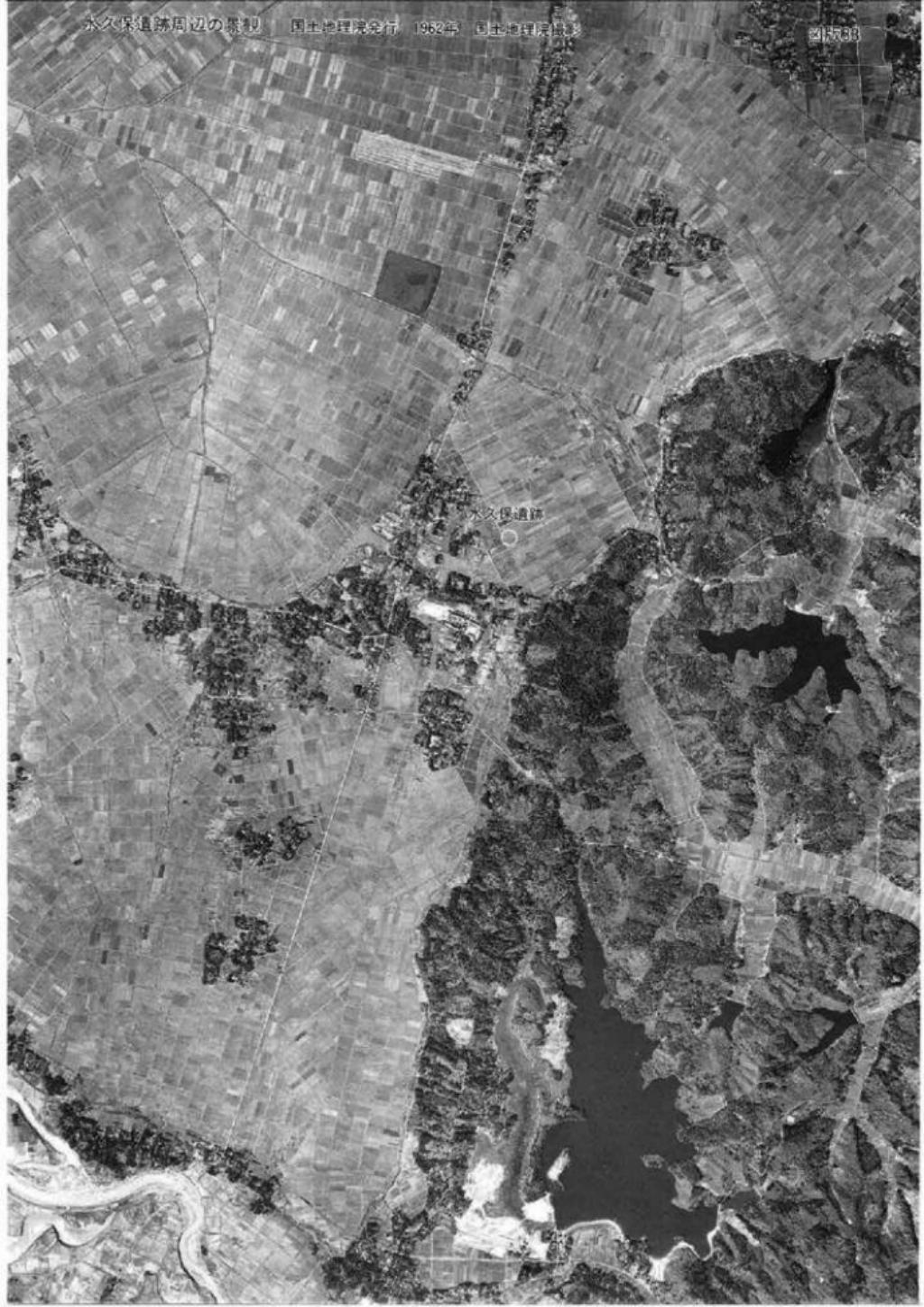


0 1:3 15cm

漆器 梶(117~120) 盆(121・122) 円形曲物(123・124) 曲物柄杓(125)



曲物柄杓(126・127) 折敷(128・129) 板材(130) 杖(131～133) 石硯(134) 鋼(135) 錢貨(137)
磨製石斧(138) 打製石斧(139)



図版34



10～17区完掘状況
南東から



20～23区完掘状況
北西から



20区付近完掘状況
南西から



SB 1 完掘
南東から



SB 2・12 完掘
北から



SB 3・4 完掘
東から



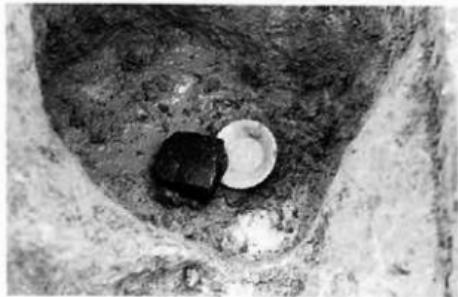
SB 5・II 完掘
東から

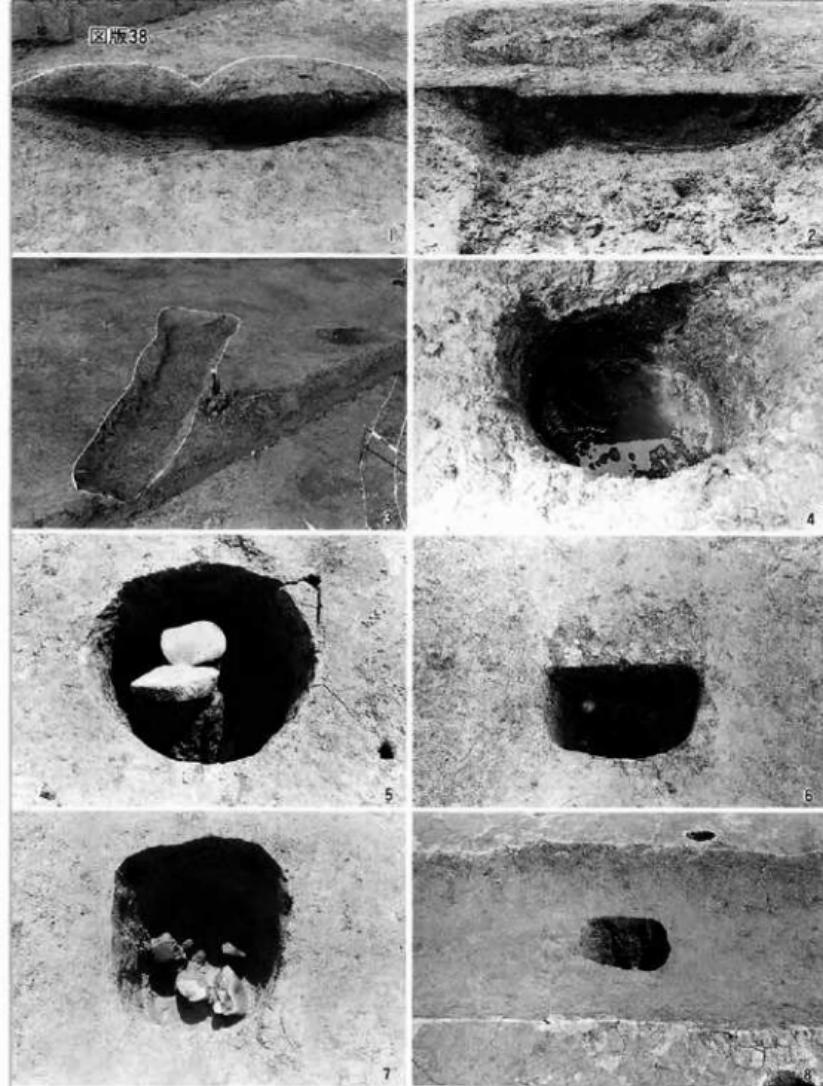


SB 6 完掘
南から



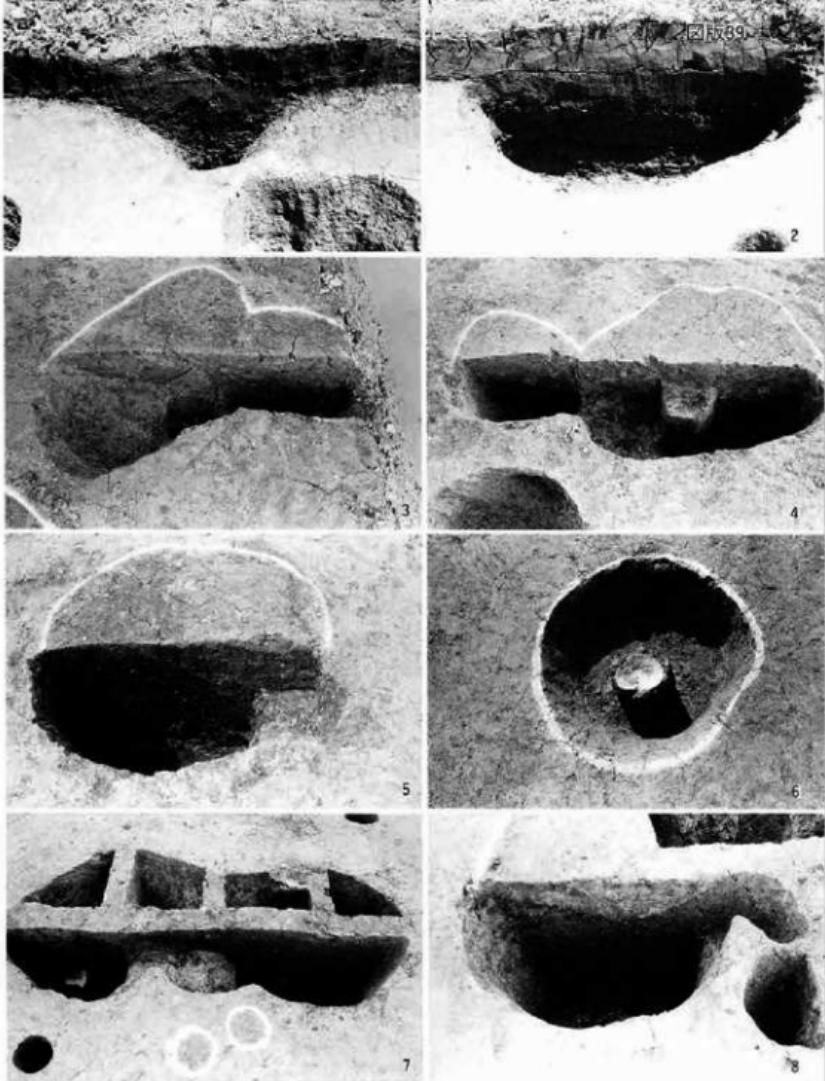
SB 7 完掘
東から





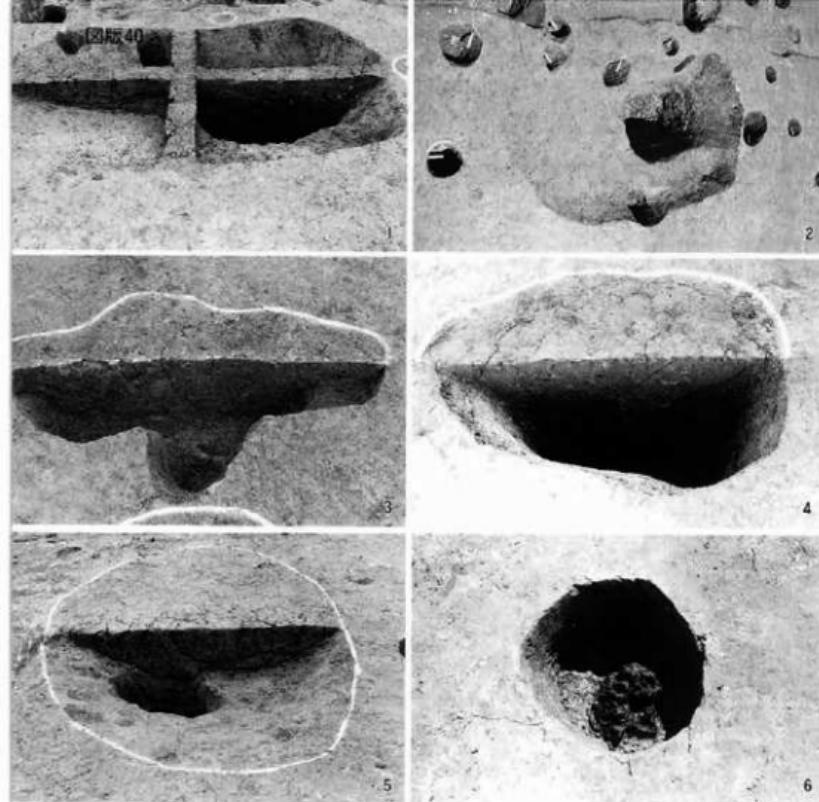
1. SK 3・4 土層断面
西から
3. SK 5 完掘
東から
5. SK 11 遺物出土状況
北東から
7. SK 19 遺物出土状況
東から

2. SK 5 土層断面
東から
4. SK 7 遺物出土状況
北から
6. SK 19 土層断面
南から
8. SK 20 完掘
南から



1. SK 32 土層断面
 北西から
 3. SK 23 土層断面
 西から
 5. SK 16 土層断面
 北から
 7. SK 36・37 土層断面
 西から

2. SK 21 土層断面
 北西から
 4. SK 24・25 土層断面
 北から
 6. SK 33 遺物出土状況
 東から
 8. SK 42 土層断面
 西から



1. SK 71・73 土層断面

東から

3. SK 56・57 土層断面

東から

5. SK 72 土層断面

北西から

2. SK 71・73 完掘

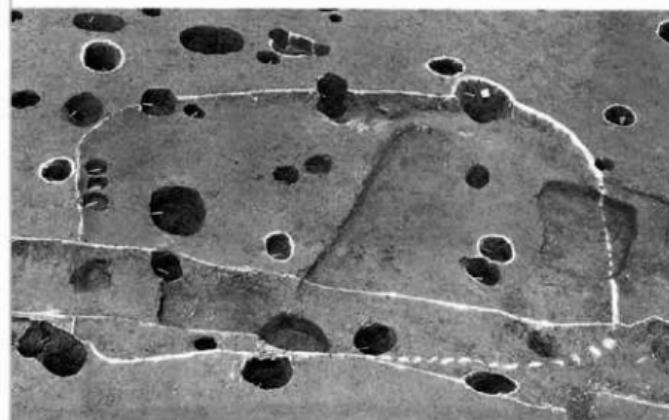
東から

4. SK 61 土層断面

北東から

6. 14B・P2 柱痕検出状況

北東から

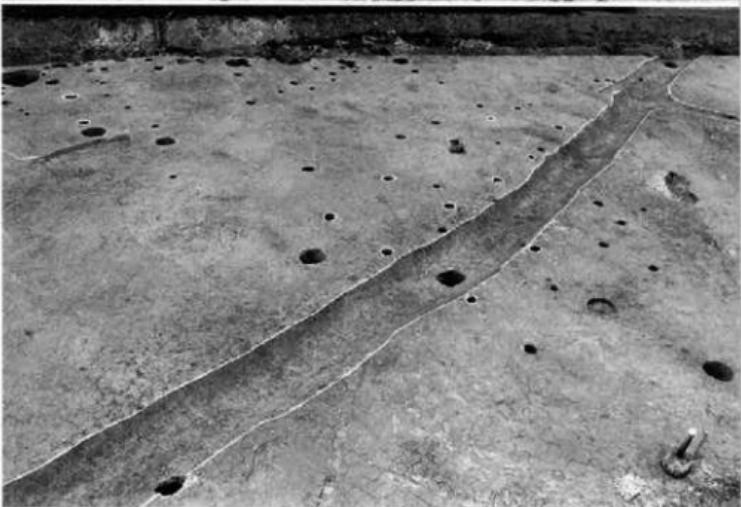


SX I 完掘

東から



SD I・3・4 完掘
南東から

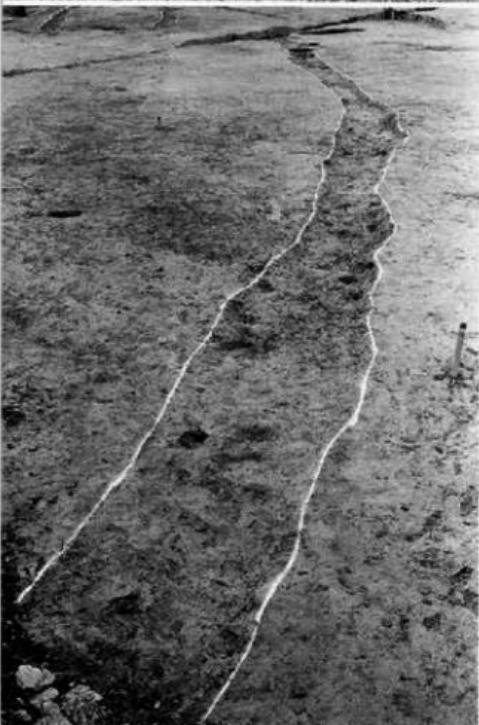


SD I 完掘
北東から



SD I 完掘
北から

SD 1 土層断面
北から



SD 2 実掘
西から



SD 2 土層断面
西から



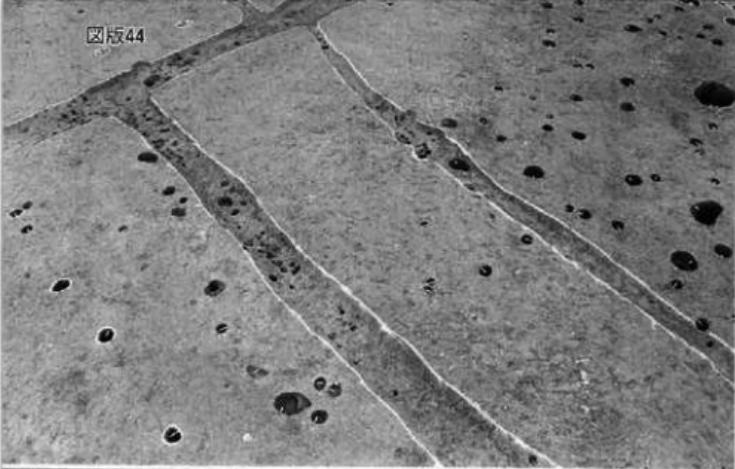
SD 3 + 4 + 5 完掘
北から



SD 5 遺物出土状況
北から



SD 4 + 5 + 6 + 7 完掘
北から



SD 6・7 完據
南東から



SD 9 完據
北から



調査風景
北西から



珠洲焼(1~29)

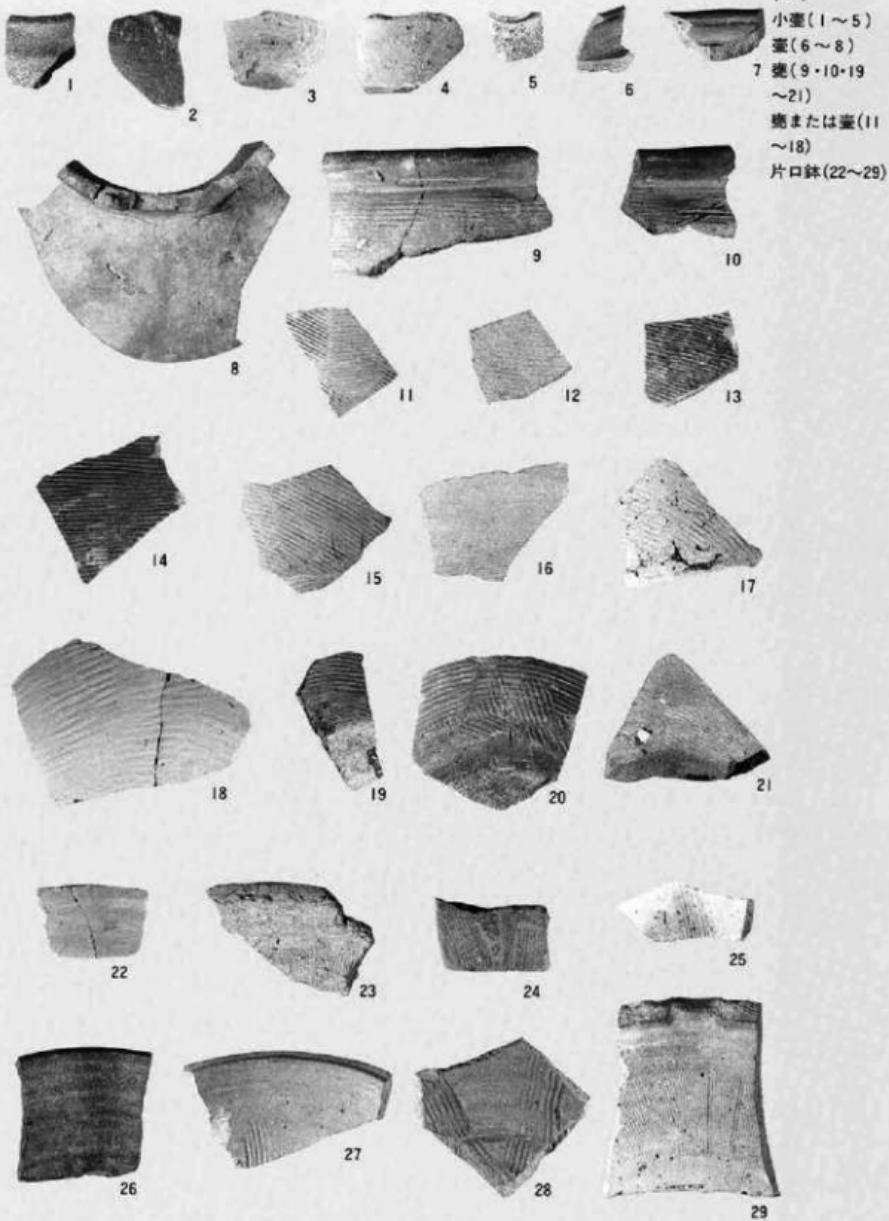
1:4

小壺(1~5)

壺(6~8)

壺(9~10~19
~21)甕または壺(11
~18)

片口鉢(22~29)



珠洲焼

1:4

片口鉢(30~33)



30



31



32



33



34



35



36



37

越前焼

1:4

片口鉢(34)

壺(35·36)

壺(37)



38



39



40



41



42



43



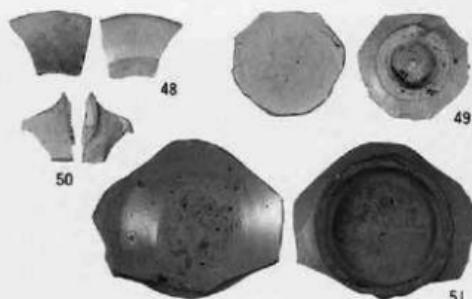
44



45

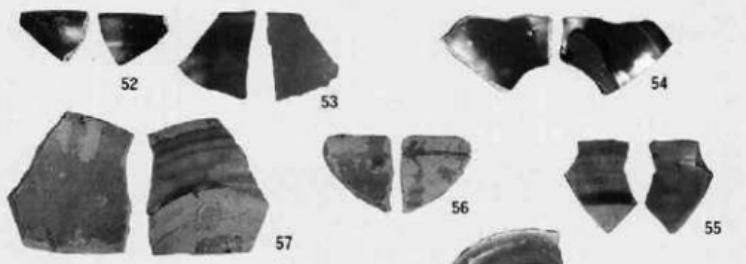


46

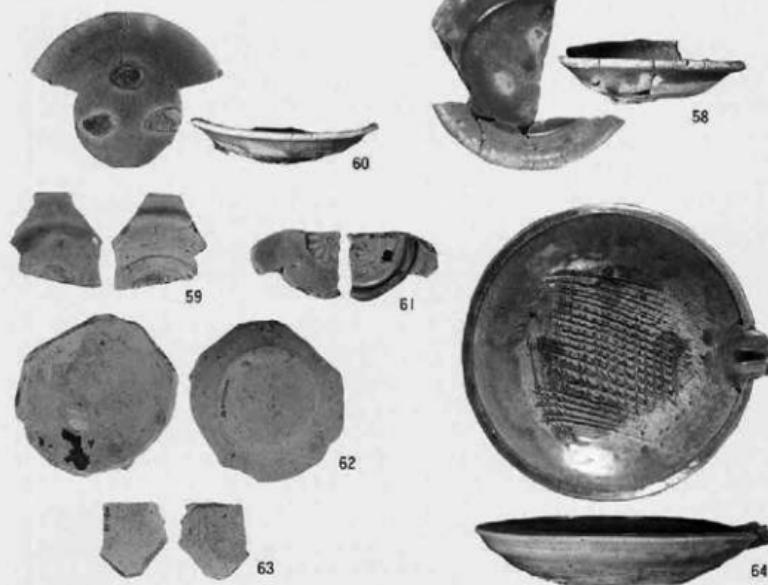


青磁
1:3
皿(47)

白磁
1:3
皿(48~50)
碗(51)



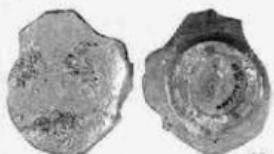
瀬戸美濃焼
1:3
天目茶碗(52~54)
碗(55~57)
皿(58~63)
卸し皿(64)



唐津焼

I : 3

皿(65~67)



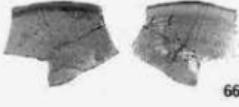
65



68



67

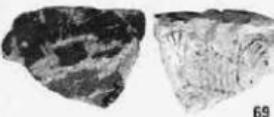


66

越中瀬戸焼

I : 3

片口鉢(69)



69



70

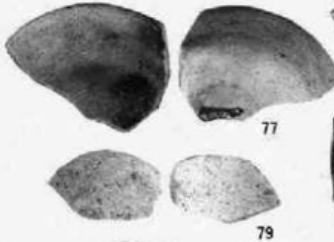
71



74



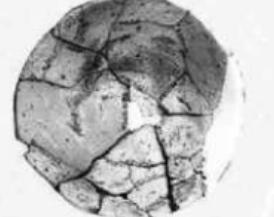
71



77



72



79



76



82



78



80



83

土器

I : 3

壺(83)

須恵器

I : 3

甕(84~86)



石臼

I : 6

粉挽き臼

(87~93)

茶臼(94~96)



87

88

89



90

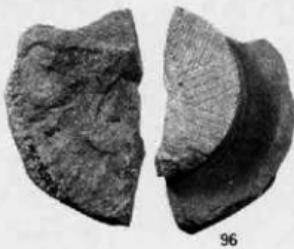


91



92

93



94



96

石鉢

I : 6

五輪塔

I : 6



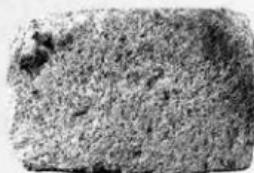
97



98

五輪塔(99~101)

1:6



99



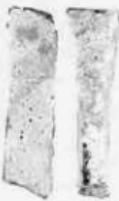
104



101



102



103



105



106



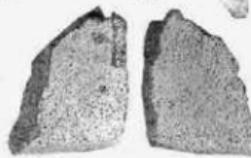
107

砾石(102~109)

1:3



108



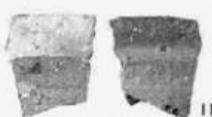
109



110



111



112

土器片研磨具

・研削具(110~112)

1:3

土器片研磨具
・研削具
(113~116)
1:3



漆器
1:3
椀(117~120)

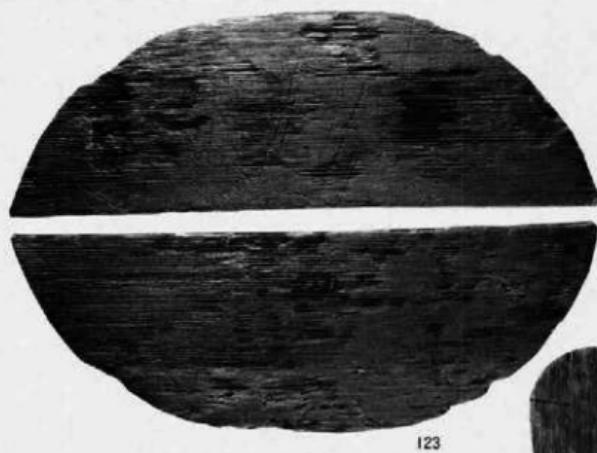


皿(121~122)

曲物
1:3
円形曲物
(123~124)



曲物柄杓(125)



123

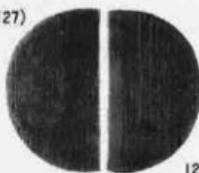


125

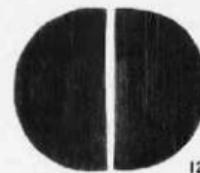
曲物

1:3

曲物柄杓(126~127)



126



127

折敷(128~129)

1:3



128



129



130



131



132

石砚(134)

1:3



134



135



136



137

銅貨(137)

1:1



縄文時代石器

1:3

磨製石斧(138)

打製石斧(139)



140



141



142



143



144

柱模(140~142)

1:8

鐵滓(143~144)

1:2

みや だいら
宮 平 遺 跡 II

例　　言

1. 本報告書は新潟県東頸城郡浦川原村横川字宮平275-1ほかに所在する宮平遺跡の1995年度発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は地方鉄道北越北線の引き込線建設に伴い、新潟県が日本鉄道建設公団から受託し、1995年度に実施した。調査主体は新潟県教育委員会（以下県教委）で、調査は財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団）が再受託して実施した。
3. 宮平遺跡は、1988年に隣接する北越北線本線部分が発掘調査〔県教委・埋文事業団1995〕されている。
4. 調査にかかる資料と遺物は、全て県教委が保管している。遺物の注記は遺跡名と年度を示す「宮95」に出土地点・層位を併記した。
5. 遺構番号は新たに101から連続して付した。1988年調査と同一の遺構については同一番号を付した。遺物番号は新たに1から連続して付した。
6. 本書の作成は埋文事業団調査課調査第一係職員（藤巻正信）が担当した。
7. 本書に示す方位は全て真北であり、磁北は真北から西偏約7°である。
8. 図版は図面と写真とし、遺構・遺物番号は全て本文と共通する。
9. 本書に使用した写真的撮影は、現場写真を沢田が、遺物写真を藤巻が担当した。遺跡空中写真は業者に委託した。
10. 引用・参考文献は著者と発行年を〔　　〕で示し、卷末に一括した。

発掘調査に当たって、浦川原村教育委員会・浦川原村立下保倉保育園からご協力をいただいた。厚く御礼を申し上げる。

目 次

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯	83
2 遺跡の環境	83
3 グリッドの設定	86
4 調査の方法	87
5 調査体制	87

第 II 章 遺 跡

1 基本層序	88
2 遺構	90
3 遺物	93

第 III 章 ま と め

1 土坑群について	102
2 中世大型溝について	102
3 出土土器について	102
要約	104
《引用・参考文献》	104

挿 図 目 次

図 1 遺跡の位置と周辺の遺跡	84
2 宮平遺跡周辺の地形図	85
3 宮平遺跡調査対象範囲とグリッド設定図	86
4 標準土層図	89

図 版 目 次

- 図面 1 宮平遺跡全体図
2 造構配置図
3 造構実測図 1 S D33・106・112
4 造構実測図 2 S K101・102・105・108・109・111
5 造構実測図 3 pit110・S X107
6 遺物実測図 1 繩文土器・須恵器
7 遺物実測図 2 須恵器
8 遺物実測図 3 須恵器
9 遺物実測図 4 須恵器・灰釉陶器・土師器
10 遺物実測図 5 土師器・黒色土器・珠洲焼き・青磁・染付
11 遺物実測図 6 石器・金属器

- 写真 1 遺跡周辺の空撮・遺跡近景
2 全景・完掘状況
3 全景・完掘状況
4 基本層序・S D33遺物出土状況
5 造構調査状況 1 S D33・112、S K101・102・105
6 造構調査状況 2 S D106、S X107、S K108
7 造構調査状況 3 S K109・111、pit110、倒木塗103・104
8 出土遺物 1 繩文土器・須恵器
9 出土遺物 2 須恵器
10 出土遺物 3 須恵器
11 出土遺物 4 灰釉陶器・土師器
12 出土遺物 5 土師器・黒色土器・須恵器・珠洲焼き・青磁・染付・焼土塊
13 出土遺物 6 石器・金属器

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

宮平遺跡の発掘調査は過去に1回行われている。北越北線建設工事に先立ち、昭和63年に県教委が日本鉄道建設公団から受託して、本線部分の面積2,600m²を対象に発掘調査を実施した。

その後、平成6年10月になって宮平遺跡範囲に引き込線建設の計画が発表され、県教委と鉄建公団との間で遺跡発掘調査についての協議が行われた。これにより、埋文事業団が新潟県から再委託を受ける形で、第二期発掘調査を実施することと決定した。第二期発掘調査は、第一期発掘調査区に隣接する同引き込線建設範囲とし、400m²を対象に平成7年5月8日から5月31日まで実施した。

2. 遺跡の環境

前回報告書〔高橋1995〕に詳しいので、これを抜粋・掲載する。

高田平野は妙高山麓から北に向かって流れる関川を中心を開けている。平野をとり囲むように東には東頭城丘陵・西には西頭城丘陵・南には妙高火山群が連なっている。宮平遺跡が所在する東頭城郡浦川原村は高田平野の東方に位置し、東頭城丘陵の西端にあたる。浦川原村は、ほぼ東西に貫流する保倉川流域の沖積地と山地・丘陵地で構成される。宮平遺跡の所在する東頭城丘陵は、高田平野と信濃川縦谷帯との間に、南南西から北北東に向かって延びる第三系の丘陵である。宮平遺跡は保倉川右岸の丘陵平坦部に位置しており、標高約34mを測る。

浦川原村周辺の主な遺跡の分布は図1のとおりである。周辺地域では分布調査や近年の各種開発事業に伴う発掘調査により、年々多くの遺跡が確認されてきている。当地域では、縄文時代以降の遺跡が分布している。浦川原村の顯聖寺遺跡は古くから知られた縄文時代の遺跡である。この時代の遺跡は東頭城丘陵と保倉川沿い、高田平野に面した小段丘・丘陵斜面に集中して立地している。また、一部、山地・丘陵の頂きや尾根筋にも立地している。浦川原村には現在、弥生・古墳時代の遺跡は確認されていないが、高田平野の南東・南西に古墳群の存在することは広く知られている。奈良・平安時代になると、高田平野の微高地に遺跡の分布が広がる。特に関川流域と板倉町から柿崎町にかけて集中している。中世では山間地に城館跡・塚・寺院跡・石造物などが多く分布している。

古代の浦川原村域は頭城郡に属していた。古代の頭城郡の範囲は、ほぼ現在の頭城地方の範

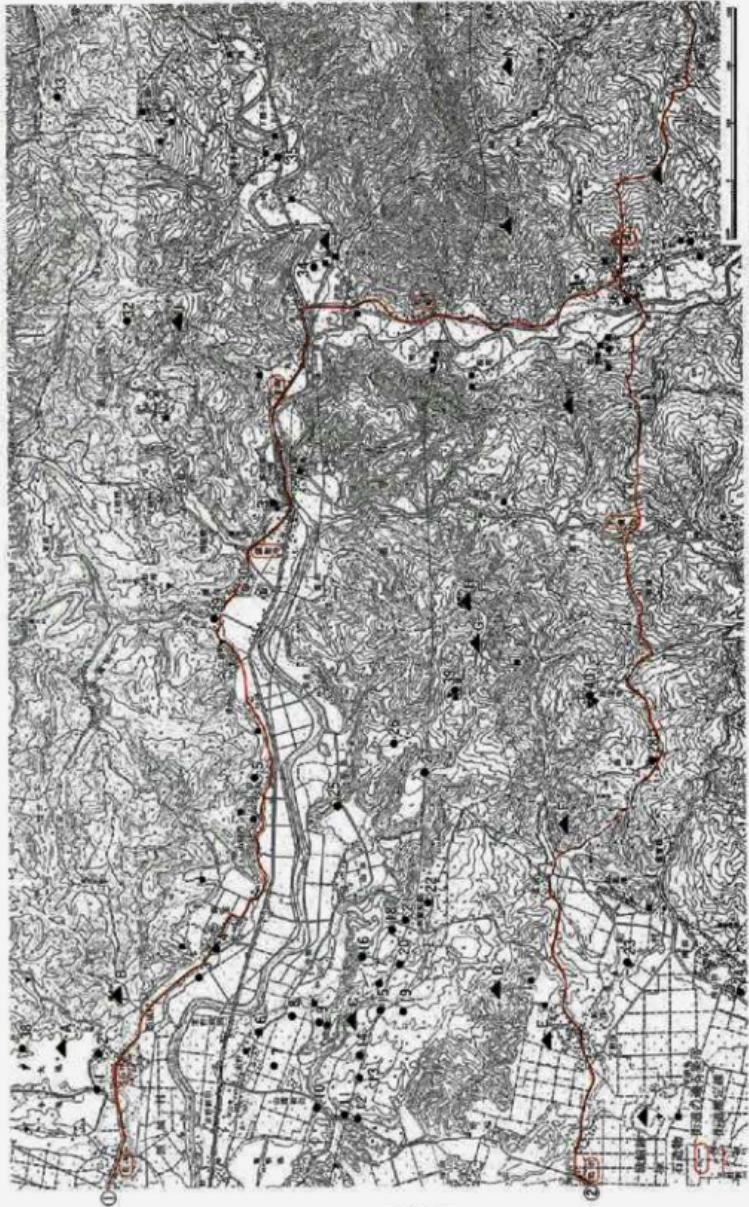
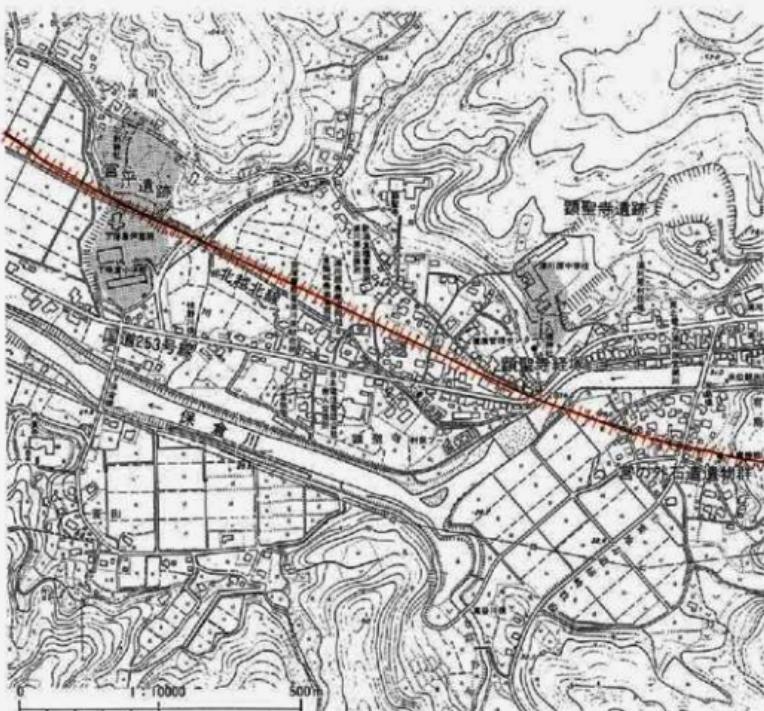


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

高田東郎・安螺・渕町・原之町(1982)



浦川原村役場作成浦川原村全図
1:5000 昭和46年12月測図

図2 宮平遺跡周辺の地形図

周辺の遺跡一覧

1. 塔ヶ崎遺跡	縄文	16. 今熊室跡 I	平安	31. 頸型寺遺跡	縄文	D. 大間城跡
2. 堂山遺跡	縄文	17. 今熊室跡 II	平安	32. 烈町遺跡	中世	E. 大間船跡
3. 境原遺跡	平安・中世	18. 下原山遺跡	縄文	33. 山京駁遺跡	縄文	F. 法定寺城跡
4. 大明神遺跡	平安	19. 長峰窟跡 1号	平安	34. 馬場遺跡	縄文・平安	G. 家ノ浦城跡
5. 東峯遺跡	縄文	20. 宮分遺跡	縄文・平安	35. 相分け遺跡	縄文	H. 店野城跡
6. 高堆遺跡	縄文	21. 下原山 II 遺跡	縄文	36. 南田遺跡	縄文	I. 荒城跡
7. 五反田遺跡	平安	22. 原山遺跡	縄文	37. 家之山遺跡	縄文	J. 虫川城跡
8. 坂下遺跡	平安	23. 鴨田遺跡	平安			K. 江守城跡
9. 立場遺跡	平安	24. 横尾敷遺跡	平安	38. 鞍馬遺跡		L. 直峰城跡
10. 東野窟跡	平安	25. 北沖遺跡	中世	39. 法定寺跡		M. 二ツ城跡
11. 芽山 A 遺跡	縄文	26. 福場遺跡	縄文	40. 跡日寺跡		N. 坊金城跡
12. 長峰窟跡 3号	平安	27. 岩塗遺跡	縄文			①. 三国街道
13. 長峰西遺跡	縄文	28. 大道遺跡	縄文	A. ふるかんどう館跡		②. 花ヶ崎街道
14. 長峰窟跡 2号	平安	29. 大光寺遺跡	中世	B. 鹿金城跡		
15. 三口沢遺跡	縄文	30. 宮平遺跡	縄文・平安・中世	C. 树形城跡		

囲と考えられる。頸城地方は比較的早くから開けた地域であり、古代史上の重要な地域でありながら、不明な点も多い。古代末から中世にかけて、浦川原村城は保倉保の保城であった。越後においては、河川の流域に成立してきた保が目立つが、保倉保も保倉川流域に存在していた。

3 グリッドの設定

国土地理院の座標軸に合わせて、図3のように設定した。
前回調査時のグリッドと一致する。大グリッドは15m方眼とし、北から南へ数字列を、西から東へアルファベット列を配した。大グリッドはさらに北西隅から南東隅へ3m方眼で25分割して小グリッドとした。従つてグリッドの呼称は1-A-25のようである。

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

0 10m ①



図3 富平遺跡調査対象範囲とグリッド設定図

4 調査の方法

調査対象地は東西に細長い畠地である。前回（昭和63年）調査後に、北側を北越北線敷設のため比高差6m程掘削され、南側には保倉保育所が存在する。このため、隣接する畠地を借地して調査事務所・排土置き場を設営した。

調査区の北側、北越北線に接するラインに土層観察トレンチを設定し、前回標準土層と大きく異なることを確認した後、バックホウを用いて耕作土を除去した。次いで、作業員により包含層発掘・遺構検出と作業を進めたが、確認の結果バックホウにより地山面まで掘削した範囲もある。

検出した遺構は、前回に連続するものは同一番号を、新たなものには101番から番号を付した。半剖・断面観察の上、図化・写真撮影を行い、全掘調査した。出土した遺物は大小グリッド・遺構別に採取したが、溝状遺構についてはグリッドによらず、便宜的に小分割区を設けて採取した。遺物の注記は、官平遺跡1995年度調査を示す「宮95」に地区等を併記した。

5 調査体制

A 調 査

調査は県教委が主体となり、平成7年5月8日～5月31日の間、埋文事業団が受託して実施した。

主 体	新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
調 査	新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）
管 理	藍原直木（専務理事・事務局長） 山上利夫（総務課長） 亀井 功（調査課長）
指 導	藤巻正信（同 調査第一係長）
担 当	沢田 敦（同 文化財調査員）

B 整 理

整理は埋文事業団が受託して、平成7年度冬期間に実施した。

担 当	藤巻正信（調査課調査第一係長）
-----	-----------------

第II章 遺 跡

1 基本層序

基本的には前回報告〔高橋1995〕のとおりであるので、以下に一部改変して引用する。

基本層序はI～V層に識別される。以下、I～V層について説明する。

I 層 黒褐色を呈する表土・耕作土で、約10～20cmを測る。調査区すべてに認められる。

II 層 暗褐色土を基本とするが、部分的に淡い色調を呈すところもあり、径約1～2mmの白色粒子を多く含み、他に炭化粒子・淡赤色粒子も含む。

II-2層 暗褐色シルト（耕作土）

II-3層 黒褐色シルト（耕作土）

III 層 暗褐色土を基本とし、少量の白色粒子・炭化粒子を含む。黄褐色の地山土・地山礫をそれぞれ多く含む場合とそうでない場合がある。伴出遺物が少なく明確ではないが、中世・平安時代の遺物包含層と推定される。約0～30cmの堆積で厚く堆積するところ、ほとんど堆積していないところがある。

IV 層 暗黄褐色を呈する地山漸移層である。約0～10cmの堆積で薄く、存在しないところも多い。中世・平安時代の遺物は出土しない。1点のみであるが縄文土器が出土した。

V 層 黄褐色を呈する地山であり、土のみ、土と礫混じり、礫のみで構成される部分がある。礫は固結度の弱い泥岩である。

今回調査範囲においてはIII層（遺物包含層）は調査区の北東隅（メインセクション⑩）にのみ認められた。このことは、緩傾斜地である調査区の西南隅が高く北東隅が低いことから、耕作による上土の移動と、その後の耕作のために遺物包含層が破壊されてしまったものとして理解することができる。すると、II層は耕作土であり、その結果メインセクション⑪～⑯においてはII-2・3層が派生している。

前回調査区と比較できるよう、図4に今回調査メインセクション⑪～⑯を示した。

II 這 路

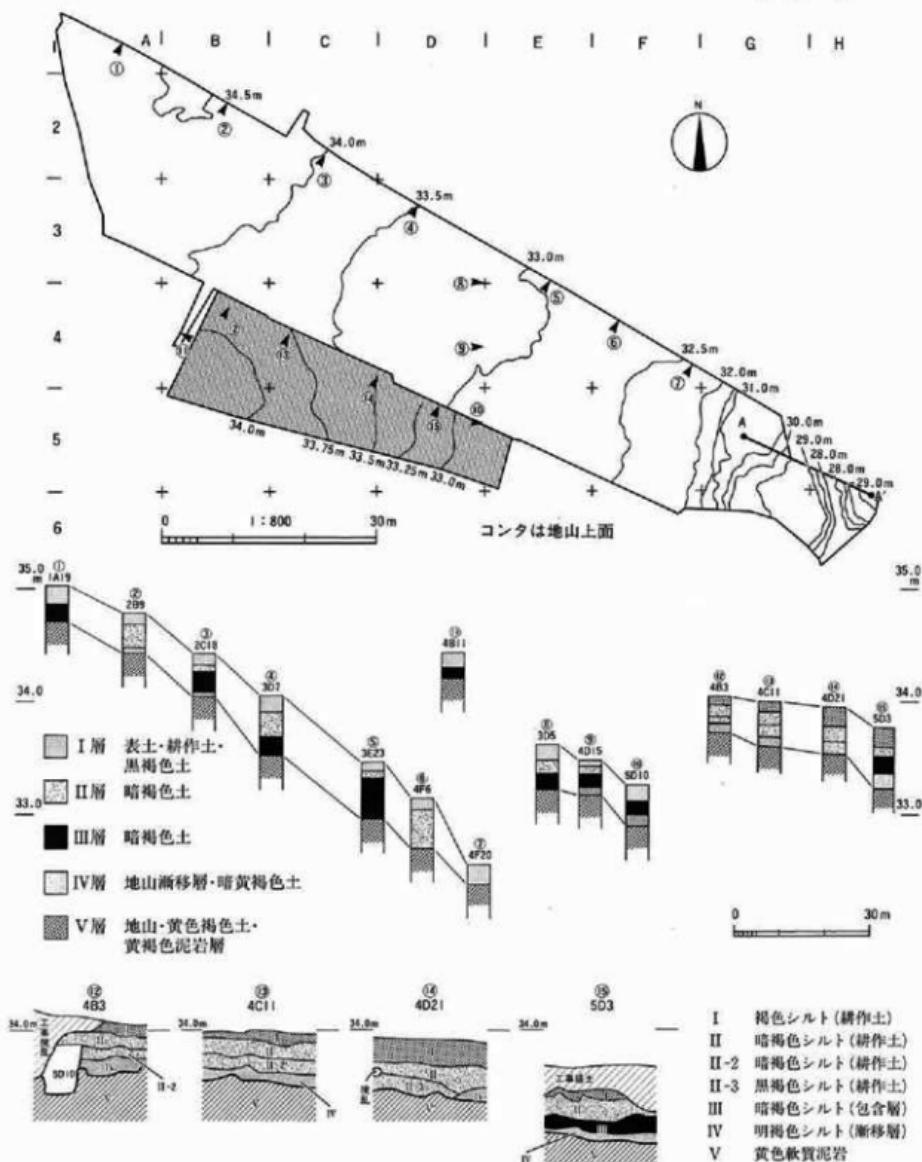


図 4 標準土層図

2 遺構

今回調査範囲は前回調査範囲の遺構分布空白域に隣接している。それでも、今回検出された遺構には S D (溝)・S K (土坑)・P i t・S X (性格不明遺構)がある。出土遺物には縄文時代・平安時代・中世のものがあるが、遺構の所属は平安時代・中世以降と考えたい。

S D (溝)

4 条検出され、うち 2 条は新規検出である。前回調査した S D 10・S D 33 の連続部分を調査することができた。また、S D 33 の延長とも見られる S D 112 を検出調査することができた。

S D 10 (図面 2、写真 3・12)

4 B 9 ~ 5 B 3 に存在する。南北に直線状で、長軸方向は N-12°-E である。北側は前回 S D 10 に連続し、南側は更に直線的に伸長するものと思われるが、範囲外であるため不明である。幅は天端で約 60cm・下端で約 30cm、深さ約 45cm、全長は前回・今回合わせて 60m 以上である。床は平坦で、側壁は直線的に立ち上がる。溝の内外・周間にピット等付属施設は認められなかった。埋土は 1 層のみである。出土遺物には須恵器甕・長頸瓶がある。どちらも S D 33 と同一個体か。基本層序の II-2 層を切って設けられ、II 層に切られている。また、倒木跡 104・S D 112 を切って、それらよりも新しい。S D 10 は、これに並行する溝・埴造物がないこと、ほかにこのような広範囲に及ぶものがないこと、耕作土である II-2 層を切って設けられ、より新しい耕作土である II 層に切られていることなどから、中世以前の遺構ではないものとも考えられる。

S D 33 (図面 2・3、写真 2・4・5)

5 C 3 ~ 5 E 12 に存在し、直線的で、長軸方向は N-80°-W である。東側は更に前回調査区へ伸長して、若干北側へカギ形にズレて前回 S D 33 に接続するものと考えられる。西端は 5 C 3 で終了するが、土橋様に 420cm を置いて、延長線上に S D 112 が存在する。このことは前回調査範囲の S D 1 と S D 2 との関係と同様であると考えられる。幅は天端で約 130~160cm・下端で約 100~120cm、深さ約 40~60cm、全長は約 30m となる。床は平坦で、側壁は直線的に立ち上がる。溝の内外・周間にピット等付属施設は認められなかった。埋土は 4 層に区分され、北側からの供給によって自然的に埋没したもの（または徐々の埋め戻し）と考えられる。上層から下層まで遺物を含むが、中層に最も多い。出土遺物には須恵器長頸甕(4~10)・横瓶(11~20)・甕(23~24・29~33・34~38・42~44・46~48)、灰釉陶器甕(50・52)、土師器甕(53~59)・

長甕・鍋 (60~62)、黒色土器碗 (79~83・84)、刀子 (103) がある。

S D106 (図面2・3、写真3・6)

5 C 7~4 B 22~5 D 1に存在する。南北溝と東西溝とからなるL字状の溝で、S D33とS D112の陸橋部付近から始まり、S D112に近接して陸橋部を南北に通り、4 B 22で東へほぼ直角に曲折してS D33と並行する。東側は5 D 1で一旦終了し、更に伸びているとも見られるが、伸長部分は掘り込みが浅く、範囲は不明瞭である。東西溝の長軸方向はN-77°Wである。幅は天端で約130cm・下端で約100cm、深さ約20cm、長さは11mである。床は平坦で、側壁は直線的に立ち上がる。南北溝の長軸方向はN-11°Wである。幅は天端で約50cm・下端で約30cm、深さ約10cm、長さは6mである。床は平坦で、側壁は直線的に立ち上がる。溝の内外・周囲に付属施設は認められなかった。埋土は2層があり、自然堆積と見られる。出土遺物には土師器杯 (63・64)・甕 (65)・長甕 (66・67)、黒色土器碗 (77・78・86)、染付飾利 (94) がある。近世以降の所産と考えられる。

S D112 (図面2・3、写真3・4)

5 C 1~4 B 21に存在し、直線的で、長軸方向はN-81°Wである。幅は天端で約130~160cm・下端で約100~120cm、深さ約40~60cm、調査した全長は約16mとなる。床は部分的に凹凸があるが平坦で、側壁は直線的に立ち上がる。溝の内外・周囲にピット等付属施設は認められなかった。埋土は7層に区分され、北側からの供給によって自然的に埋没したもの(または徐々の埋め戻し)と考えられる。上層から下層まで遺物を含むが、中層に最も多い。出土遺物には繩文土器1点(1)、須恵器長頸壺 (8)・甕 (32)、土師器(微細片1点)、珠洲焼き櫛リ鉢 (89・90)・壺 (91・92)、青磁1点(93)がある。東端は5 C 1で止まるが、土橋様に420cmを置いて、延長線上にS D33が存在する。西端は調査範囲外にあるため不明である。

S K (土坑)

6基が検出された。多くはない数であり、所属時期は一様ではないものと予想されるが、前回調査範囲と合わせると、全体は大きな環状の分布を示す。

S K101 (図面4、写真5)

4 C 24に存在する。東側にピット110を挟んで、略同規模のS K102と隣接する。径約90cm、深さ約15cm。平面略円形で床はやや傾いているが平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、全体は皿状で、東側に段を持つ。埋土は2層認められ、自然堆積と考えられる。土器等遺物は出土

していない。

S K102 (図面4、写真5)

4 C25に存在する。西側にピット110を挟んで、略同規模のS K101と隣接する。長径約100cm、短径約75cm、深さ約25cm。平面形は略南北に長い長円形で、床はやや丸く凹み、全体は鍋状を呈する。埋土は2層に分けられ、自然堆積と考えられる。土器等遺物は出土していない。

S K105 (図面4、写真5)

4 B19に存在する。長径約170cm、短径約130cm程度の東西に長い長円形であったものと見られるが、西側を倒木跡104に切られてしまっている。深さ約30cm。床は略平坦で、壁は丸く立ち上がる。埋土は3層に分けられ、自然堆積と考えられる。出土遺物には縄文土器(2)、須恵器甕がある。

S K108 (図面4、写真6)

5 D10に存在する。長径約90cm、短径約60cm、深さ約20cm、隅円の不整長方形。床は略平坦で、壁は緩く立ち上がり、全体は皿状を呈する。埋土は2層に分けられ、礫を含み、自然堆積と考えられる。S D33と全く重複し、これよりも古い。土器等遺物は出土していない。

S K109 (図面4、写真7)

5 D3に存在する。長径約80cm、短径約60cm、深さ約30cm、隅円の不整長方形。床は略平坦で、壁は緩く立ち上がり、全体は深めの皿状を呈する。埋土は1層のみ。S X109と全く重複し、これよりも古い。土器等遺物は出土していない。

S K111 (図面4、写真7)

5 D1・6に存在する。南側の大半をS D33との重複によって切り取られている。もとは長径約120cm、短径約80cm、深さ約35cm程の隅円の不整長方形であったものと思われる。床は丸く凹み、壁は緩く丸味を持って立ち上がり、全体は深めの皿状を呈していたものと思われる。埋土は2層に分けられ、レンズ状堆積で、礫を含み、自然堆積と考えられる。S D33と重複し、これよりも古い。土器等遺物は出土していない。

その他

Pit 1基・S X (性格不明遺構) 1基・倒木跡2基を検出・調査した。倒木跡は遺構に絡

んだり、遺物を出土する場合があるので、必要最低限の調査を実施した。

Pit 110 (図面5、写真7)

4C24に存在する。SK101とSK102に挟まれて存在する。ピットとしては単独の存在で、約40cm、深さ約20cm。略円形で、床は平坦である。埋土は1層で、土器等遺物は出土していない。

SK107 (図面5、写真6)

5D1~10に存在する。深さ約10cmで、壁の立ち上がりは明確でなく、床は平坦な皿状を呈する。南側をSD33に切られてこれより古く、SK109に重複してこれより新しい。長方形状の部分と溝状の部分とからなっており、本体は5D2・3にあり、本来は長径220cm・短径120cm・深さ20cm程度の略長方形状で、東側・西側は別の溝状構造と重複しているものかもしれない。埋土は1層のみで、出土遺物には須恵器長頸壺(5)・甕(28 SD33と接合)、土師器碗(68~71)・長甕があるが、どれも浮いている。

倒木跡103 (写真7)

4D21・22、5D1・2に存在する。径約3.2m程の略円形と見られ、内、1/2は調査範囲外にあり、全体の1/4程度、5D2について発掘調査した。深さは約90cmで、播り鉢状を呈する。土器等遺物は出土していない。

倒木跡104 (写真7)

4B19に存在する。長径約3m、短径約2.5mの長円形で、深さ約60cm、全体は播り鉢状を呈する。東側はSK105を切ってこれよりも新しく、西側はSD10に切られている。土器等遺物は出土していない。

3 遺 物

今回の発掘調査では土器・石器類・金属器が出土した。それらは縄文時代・平安時代・中世・近世に所属する。出土量が多くないので、種別ごとに記述する。

A 土器・土製品

縄文土器・須恵器・灰陶器・土師器・黒色土器・珠洲焼き・青磁・染付がある。数量的に主体を占めるものは圧倒的な須恵器とこれに付随する土師器・黒色土器である。以下、種別ご

とに説明する。

縄文土器（図面6・写真8）

次の3点が存在する。どれも細片である。

1はSD112の埋土中から1片のみ出土した。外面黒色・内面黒茶色の口縁部付近の破片である。破片の下側には輪積痕が認められ、上端はやや外反気味で肥厚しており、そのまま口唇となっておさまるものと思われる。胎土に白色砂粒・繊維を含む。外面に左下がりのRL斜縄文が施されている。器厚は上端で6.4mm、下端で5.3mmである。

2はSK105の埋土中から出土した。4片存在するが、全て同一個体かと思われる。外面暗褐色・内面黄褐色の深鉢口縁部破片である。平口縁で、口唇端はやや肥厚し、内傾する平坦面となっている。外面に左下がりのRL斜縄文を施し、内面には横位のナデ調整が加えられている。胎土に白色砂粒・繊維を含む。器厚は口唇端で5.6mm、下端で5.2mmである。

3は1片のみ表面採集された。淡茶褐色の深鉢口縁部片で、胎土に金雲母・白色石英粒のはか、わずかな繊維を含む。平口縁で、口唇はわずかに外反し、端部はやや平坦な面をもつ。外・内（表裏）面に、右下がりのLR細粒斜縄文が、ことに内面で密に施されている。表裏の施文原体は同一かと思われる。器厚は口唇端で4.1mm、下端で6.1mmである。

須恵器（図面6～9・写真8～10）

出土遺物の中心を占める。長頸壺・横瓶・甕が出土している。須恵器の含まれる遺構はSD33・SD112・SX107である。遺構間の接合例がある。

長頸壺（4～9）

頸部・肩部・胴部片がある。胎土及び色調等から10個体に分けられる。胎土に海綿骨針を含むものはない。遺構間の接合例がある。

4は口縁部破片（SD33）。5～7は頸部から肩部にかけての破片（SD33+SX107）と胴部下半の破片（SD33）で、接合はしないが同一個体と見られる。胴部は薄く、ていねいな作りで、胎土にわずかな砂粒と白色粒を含む。焼成は軟質で暗紫褐色の表皮の下は橙色となっている。内面は滑らかだが、外面に砂粒大の黒斑・白色粒が現れてザラついている。

8は肩部片（SD33+SD112）である。肩部上面には自然種が滴り、胴部外面は黒色で、肩部及び胴部中央に各2条の沈線を巡らす。被熱して表皮がハジケている。

9・10は肩部及び胴下半部片（SD33）で、焼成は暗灰色。内外面に砂粒大の黒斑が噴き出している。被熱して表皮がハジケている。色調・胎土から3個体が存在するものと見られる。

ほかに口縁部・頭部の細片 4 点がある。

横瓶 (11~20)

口頸部・肩部・胴部片が出土している。全体の形状を復元できたものはない。叩き目・色調等から 7 個体に分けられる。胎土に海綿骨針を含むものはない。全て S D33 から出土している。

横瓶 1 (11・12) 短い頸部に端部を横へつまみ出された口縁をもち、胴部は俵形にすばまる。外面に格子叩き目・内面に青海波の当て具痕を有す。色調は白黄灰色で、頭部に自然釉がつく。内・外面に粗な黒斑が噴出している。ほかに暗灰色で黒斑のない口頸部片 1 点 (13) がある。

横瓶 2 (14・15) 更に短い頸部に端部を横へつまみ出された口縁をもつ。外面に密な格子叩き目をもち、内面はナデられている。色調は白黄灰色で、内・外面に細かな黒斑が噴出している。被熱してハジケている。

横瓶 3 (16) は俵形の胴部片。粗い格子叩き目が、胴端部ではスリ消されている。内面はナデ調整されているが、大部分は被熱して内壁が剥がれてしまっている。色調は灰色で内・外面に黒斑が噴出している。

横瓶 4 (17・18) 17 は外面に密な格子叩き目をもつ胴部片。黒灰色の自然釉がかかり、内面にはナデ調整の上に生体の爪痕が特徴的に残されている。内・外面に細かな黒斑が噴出している。14・15 と同一個体か。ほかに白灰色のもの 1 点 (18) がある。

横瓶 5 (19・20) 俵形にすばまる胴部片である。外面に密な格子叩き目をもち、胴端部には円板を当てられている。端部外面はナデられて叩き目が消されている。灰色一暗灰色で、自然釉のかかる部分もある。内・外面に細かな黒斑が噴出している。被熱してハジケている。17 と同一個体か。

甕 (21~49)

口頸部・胴部・底部が出土している。全体の形状を復元できたものはない。形態・色調・叩き目・胎土等で 27 個体以上に分けられる。

大甕 1 (21~24) 口縁部・胴部片が存在する。S D33・S D112・S X107・包含層から出土しており、接合関係は S D33 + S D112 がある。大きく横へ折り返しつまみ出された口縁端部の直下に、これも折り返しナデつけによる太い隆帯が 1 条巡らされている。肩部以下胴部には外面に斜行する平行叩き目・内面に同心円当て具痕が残り、口頸部内面及び外面のすべてが黒青色に塗彩されている。酸化焰焼成か、軟質の焼き上がりで橙色の部分もある。22 は隆帯の下部に波状文が描かれていている。文様・器厚等から 4 個体以上が存在する。

大甕 2 (25~29) 口頸部・胴部・底部片が存在する。S D10・S D33・S X107・包含層か

ら出土しているが、造構間での接合はない。25・26は口縁を平帯状に折り返し、上端部を横方向につまみ出している。直下に櫛描きによる波状文が巡らされている。色調は口縁部を中心に濃茶褐色に光沢をもつ範囲と胴部の青灰色を呈する範囲とがある。外面は擬格子状の平行叩き目、内面は同心円の当て具痕が残る。29は外面に擬格子状の平行叩き目、内面に青海波状の当て具痕を残す底部片、暗紫色・黒色のツヤをもつ。胎土に白色礫・褐色礫を含む。被熱してハジケているものがある。3個体以上が存在する。

大甕3 (30~33) 口縁部・肩部・胴部片が存在する。SD33・SD112・包含層から出土している。造構間接合はない。30は口縁を平帯状に折り返し、上端部を横方向につまみ出している。直下に櫛描き波状文を施す。31・32は外面に平行叩き目・内面に同心円の当て具痕を残し、33は内外面ともナデられる肩部片。胎土に白色礫を含み、灰茶褐色を呈する。小粒の黒斑が噴出しているものが1点ある。3個体以上が存在する。

大甕4 (34~39) 口縁部・頸部・肩部・胴部片が存在する。SD33・SD112・包含層から出土している。造構間での接合はない。34は口縁端部を下方に引き出し、口縁帯を設けている。口頭部の色調は黒灰色で光沢をもつもの(34)と白灰色の素地のままのもの(35)とがある。36・37は頸部に濃緑茶色の釉がかかる。38・39は外面に擬格子状の平行叩き目が羽状に施され、内面に38は浅く、39は深い同心円の当て具痕が残る。38は黄茶色でツヤのある塗彩を施され、39は暗紫色を呈する。被熱してハジケているものもある。7個体以上が存在する。砂粒大の黒斑が噴き出している。

大甕5 (40~42) 口縁部・頸部・胴部片が存在する。SD33・SD112・SX107から出土しており、造構間接合は(SD33+SX107)がある。40・41は口縁端部を下方に引き出し口縁帯を設け、直下に上向き連弧状の櫛描き波状文を2段に施し、以下は無文としている口頭部。42は胴部片で、外面は斜行する平行叩き目の上からナデて、黒色塗彩されている。内面は青海波状の当て具痕が残る。白灰色で砂粒大の黒斑が噴き出している。胎土に白色礫を含む。被熱してハジケているものもある。

甕(43) 脇部・底部片がある。SD33・SD112・包含層から出土している。外面には平行叩き目の上から全面にカキ目が施され、内面には同心円状の当て具による深い青海波状痕が残る。この遺跡では優品で、胎土は精良で白色礫をわずかに含み、青灰色を呈す。砂粒大の黒斑が噴き出している。被熱してハジケているものもある。

ほかに口縁部片7個体以上(44~49)が存在する。

灰釉陶器(図面9・写真11)

碗5点(口縁部片2点・脇部片2点・底部片1点)が存在するが、どれも細片で、接合はし

ない。全て S D33からの出土である。

50はS D33の埋土中・51は排土中から検出した椀口縁部破片である。口縁端部は大きく外反して、内外の全面にツヤのある灰色の釉がかかる。

52はS D33の埋土中（I層）から出土した有台椀の底部片である。胎土は精良だが砂粒を多く含む。底面は切り離し後に高台を付けられ、その後に高台内部を回転ヘラ削りされている。高台は明瞭な「く」の字形で、光ヶ丘1号窯式期に比定される。内面はナジ調整され、底部付近までわずかな灰釉がかけられている。

ほかに体部片2点（S D33・表採）がある。口縁端部・器厚・釉・胎土等から5点はそれぞれ別個体と考えられる。

土師器（図面9～10・写真11～12）

椀・甕・長甕・鍋がある。長甕片には叩きの見られるものがある。土師器の含まれる遺構にはS D33（椀口縁部8点（53～55）、底部13点（56～59）、長甕胴部3点、鍋口縁部3点（60～62）、S D106（椀口縁部2点（63・64）・底部1点、長甕胴部2点（66・67）、甕口縁部1点（65）、S D112（椀体部細片1点のみ）、S X107（椀復元1点（68）・口縁部2点（69）・体部2点・底部3点（70・71））がある。遺構間での接合はない。ほかに、表採・包含層出土（椀口縁部1点・体部3点・底部5点、甕胴部1点）がある。椀には胎土にわずかに海綿骨針を含むものが5点あるが、甕・長甕・鍋は胎土に海綿骨針を含まない。

椀はどれも破片で、復元できたものは1点だけである。1点のみ測ることができた高さは4.0cmである。口径は11.0～13.2cmがあり、12.0cmと13.0cmに集中する。底径は4.8～6.4cmがあり、5.0～5.4cmに集中する。椀はすべて無台で回転糸切りである。53は灯明皿に利用され、口唇部にタール状の黒色付着物が認められる。

黒色土器（図面10・写真12）

出土は遺構内と表採（85～87）に限られている。黒色土器を含む遺構はS D33（79～84）・106（77・78・86）とで、S D33が全体の大半を占めている。遺構間での接合はない。器種には椀と鉢？とがある。全て内面黒色で、外面・画面黒色はない。外面に赤（褐）彩されているものがある。

椀

ほぼ完形に復元できたもの2点（S D106 77・78）のほか、口縁部2（S D33（84）・S D

106 (86) 各 1 点・体部 6 (SD33 4 点・SD106 1 点・表採 1 点)・底部 8 (SD33 5 点 (79~83)・表採 2 点 (85~87)) がある。内面はよく研磨されている。外面に赤(褐)彩されているもの (82~86) がある。口縁部は 2 点とも外面に褐彩されている。体部は SD33 出土の細片 1 点が赤彩されている。底部は全て無台で、ヘラ削りされている。4 点 (SD33 2 点 (82~83)・表採 1 点 (85)) が赤彩されている。赤彩は底面の全域に及んでいる。

例外なく底面及び体部下半がロクロヘラケズリされて、器形全体に丸味がある。体部上半から口縁部はロクロナデされ、口縁端部はやや丸味を帯びている。口径は復元できたもので 12cm 前後、高さは 4.2~4.4cm である。底径は 4.4~6.3cm があり、5.0~5.2cm に集中する。胎土に海綿骨針を含むものが 2 点 (79) ある。

鉢?

大型の椀または筒椀状のものか。体部 1 点 (表採) と底部 1 点 (SD33) とがある。88 は大きく立ち上がる体部片である。底部片は細片のため図示できなかったが、回転糸切りされている。

珠洲焼き (図面 10・写真 12)

4 点存在する。全て SD112 の埋土 (I 層) 中から出土している。擂り鉢 2 点・甕 2 点がある。

擂り鉢

89 は片口の擂り鉢口縁部片である。外面はロクロナデ、内面は口縁直下に約 5cm 幅の横ナデを施して無文帶とし、その下位に櫛状工具による 9 本 1 束のスリ目が放射状に施される。1 束の幅は約 2cm で、単位間には上端で 1.5~2.0cm の空隙がある。口縁部はやや外反し、端面は平坦でおおむね水平となる。指頭によって片口部を捻り出している。白灰色から暗灰色を呈する。胎土に白色砂粒・海綿状骨針を含む。被熱して、器面に無数の細かなハジケが存在する。器厚は口縁部直下で 1.4cm、胴部で 1.7cm である。珠洲焼き福年の III 期 [吉岡 1994] に比定される。90 とは別個体と考えられる。

90 は擂り鉢体部片である。内・外面ロクロナデの後に、内面に櫛状工具によるスリ目が間隔をもって放射状に施される。胎土に細砂粒を多く含むが、海綿状骨針は含まない。被熱して赤変している。器厚は 1.2~1.5cm である。

甕《土器片研削具》

胴部片 2 点 (91・92) が出土している。2 点とも外面には斜行する叩き目が、内面には径 2

~3cmの当て具痕が並んで残る。器厚は8.0~10mmである。外面の平行の叩き目をヤスリに利用した転用研削具で、破片の中央部が著しく摩滅している。破片は共通して長さ9~10cm・幅5~6cmで、片手で把むのに適當な大きさに折取られている。叩き目と直交する破片の長軸方向に、使用による線状擦痕・面状摩痕が存在する。2点とも胎土に海綿状骨針を含む。

青 磁 (図面10・写真12)

1点のみ存在する。93はS D112の埋土中から出土した碗の口縁部破片である。白灰色の精良な胎土で、外面に蓮弁文を施し、薄青色の釉を厚くかけている。器厚は口唇端で4.3mm、下端で4.0mmである。

染 付 (図面10・写真12)

皿・徳利の破片が1点ずつ存在する。いづれも肥前系で、S D106から出土している。

焼 土 塊 (写真12)

1点(102)が出土している。破片のため、元の形状は不明である。赤褐色の焼き上がりで、凹凸の指頭痕を残し、厚く、裏側は剥げている。胎土は海綿状骨針を多く含み、土師器・黒色土器に共通しない。

B 石器類 (図面11・写真13)

石器・焼け礫・生礫がある。この土地は表土・暗色土には石・礫を含まず、地山は軟質凝灰岩(地元で言ライワ)であり、従って、石・礫は全て搬入品である。以下に、種別ごとに説明する。石器は全点を報告する。

礫 器

1点のみ出土している。95はS D106の埋土中から出土した。自然扁平円礫を利用したもので、全体の1/6程が残存している。図正面下端には図裏面側からの剝離による刃部が作出されており、図裏面のこの位置にはわずかな摩擦痕が認められる。現寸4.5cm×4.7cm×2.0cm・41.2g。泥板岩。

凹 石

1点のみ出土している。96はS D112の埋土中から出土した。自然扁平円礫を利用したもので、図正面中央に浅い凹み1ヶが存在している。表皮は風化して穴だらけで、全体は被熱して赤変している。ほかに使用・加工の痕跡は認められない。12.3cm×10.1cm×5.4cm・855.8g。石英角閃石安山岩。

磨 石

1点のみ出土している。97はS D33の埋土中から出土した。全体はやや扁平な球状を呈するものと思われるが、割れて肩部から側縁の部分、全体の1/8程が残存している。表面は風化して細かな孔が無数にあいているが、図正面及び側面にツルツルの磨面が認められる。被熱して表層は赤変しているが、割れ口の内面は黒色である。現寸8.2cm×5.6cm×4.9cm・147.6g。石英角閃石安山岩。

石 血

1点のみ出土している。98はS D112の埋土中から出土した。被熱して赤・黒変している。厚さ約3cmで、全体は扁平な円形状を呈するものと思われるが、割れて1/6程が残存している。図正面の略全域に磨面が認められ、右端に浅い凹みが存在する。9.5cm×8.6cm×3.8cm・244.9g。砂岩。

剥 片

1点のみ出土している。99はS D33の埋土中から出土した。I②-I型【藤巻1991】の表皮を残した剥片である。下辺は折損している。打面は剥離面打面で、図正面右側に先行する剥離痕が認められ、同一作業面での連続剥離が予想される。加工痕・使用痕は認められない。現寸3.2cm×2.6cm×1.2cm・8.1g。玉髓。

石 核

2点出土している。100はS D33の埋土中から出土した。全体は不正六面体状を呈し、原石面を残していない。3面の作業面に両極からの剥離が4カ所認められるが、剥離痕からは剥片石器を作出するに有効な大きさの剥片は得られなかつたものと認められる。4.7cm×2.8cm×2.4cm・26.4g。花崗岩。101はS K105の埋土中から出土した。図上面に原石面を残し、2面の作業面を有している。作業面1(図正面)・2(図下面)は原石面を打面にして、剥離作業が行われているが、いずれも剥片石器を作成するに有効な大きさの剥片は得られなかつたものと認められる。ほかに、古く大きな剝製面1(図裏面)を有す。6.9cm×3.7cm×3.2cm・84.8g。チャート。

焼け礫

石質は石英安山岩・石英角閃石安山岩が主体で、軟質の角閃石安山岩が割り合いで少く存在する。全て自然石を利用したもので、加工されたものはない。被熱して赤・黒変し、割れ・ハジケているものがある。油煙・タール状の黒・茶色付着物が認められるものもある。形状は塊状・棒状・扁平球状・板状がある。大きさは鶏卵大（32点）～拳大（15点）～掌大（10点）～人頭大（4点）～超枕大（2点）まで。重さは183.4g～10kg超がある。全て（63点）遺構内から出土した。深さ20cmのコンテナで4箱を採取した。ほとんどはSD33に集中（51点）し、ほかにSD106（3点）・112（5点）、SX107（4点）に所属する。

生 磯

石質は石英安山岩・石英角閃石安山岩が主体である。全て自然石である。形状は塊状・棒状・扁平球状・板状がある。大きさは鳩卵大（10点）～拳大（23点）～掌大（23点）～枕大（2点）まで。重さは40.7g～10kg超がある。全て（46点）遺構内から出土した。深さ20cmのコンテナで3箱を採取した。ほとんどがSD33に集中（40点）し、ほかにSD106（3点）・112（3点）に所属する。

C 金 屬 器

刀子1点がある。

103はSD33の溝底から出土した。全面に茶色の錆を著しく噴いており、細部は不詳であるが、全体の形状はよく残っている。両刃で、直線状の刀身はやや内反りしている。棟に柄を持つが、鎬・三ツ頭は設けられていない。刃先は両刃である。長めの茎に目釘穴は1か所設けられている。ソフテックス透過によると銘は存在しなかった。鍛造されたものであり、錆の剥出によって刀身方向に3枚に剥離している。現寸全長29.3cm・刀身18.9cm・茎長10.4cm・最大幅2.34cm・最大厚0.52cm・目釘穴径0.55cm・重さ91.76g。

第III章 まとめ

1 土坑群について

今回の調査で時期不明の土坑群は北東側に偏る傾向が認められ、前回調査結果と矛盾しない。前回調査区と合わせると土坑群の分布は径約60mほどの大きな環状になるものと見られることが判明した。しかし、その内部は造構空白域であり、また、外部の様子は不明である。土坑群は南方で今回調査区の中世溝SD33と重複し、東方で前回調査区のSBと重複する。従ってSKの多くは、平安時代と見られるSB・SEと中世のSD1・2・34・112とは異なる時代・時期の所産とも考えられる。当遺跡には縄文時代・平安時代・中世・近世以降の遺物が存在し、それらの時代の重複遺跡である。消去法による遺物と造構の関係からは、SK群の所属時期は縄文時代とも推測されるが、明らかではない。

2 中世大型溝について

SD112の西端を調査することができなかったので、SD1との関係及び全体の形状を明らかにすることはできなかったが、溝の幅・深さ・陸橋様の切れ目などの類似からは、SD1・2とSD33・112とで直線L字状の2辺を構成するものではなかったかと考えられる。また、この2辺のL字溝は東側の沢地と北側の未知の溝等で大きく区画を設けるものではなかったかとも想像される。各辺の略中央と見られる位置に存在する陸橋様の切れ目は進入路ではなかったか。とすると、形態上の類似からは館のような存在を考えることが可能であろうか。しかも、断面観察からはSD33・112の埋土の供給は溝の北側からと考えられ、区画溝内部での工作活動をうかがわせる。しかし、2辺のなす角度は大きく鈍角で、その内側と考えられる前回調査区の中央部はSB・SI等造構分布の空白域であり、にわかには館のようなものを想定することは難しい。

3 出土土器について

今回の調査で得られた遺物の中心を占める古代の土器の内訳は、次表のようである。

遺跡のごく一部を発掘調査したに過ぎないが、前回調査区と合わせても平安時代の遺物が主体を占めることは間違いない。その中で、他地域と比較して、第一に食器の割りに煮炊具が

	須恵器	灰釉陶器	土師器	黒色土器
食膳具	—	椀 5点	椀口縁部 15点	椀口縁部 20点
煮炊具	—	—	長甌 5点 甌 2点 鍋 3点	—
貯蔵具	大甌 25点 甌 1点 横瓶 7点 長頸壺 10点	—	—	—

非常に少ないと、第二に貯蔵具が非常に多いこと、また貯蔵具の中でも横瓶が多いと感じられたこと、第三に須恵器杯の存在しないことが特徴としてあげられる。

第一・第二の特徴とした点は遺跡の性格に係るものとも考えられるが、発掘調査によって検出された数少ない遺構・遺物からは考察の材料を得られない。

第三の特徴とした須恵器杯を欠くこれらの土器類は、灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式期（9世紀後半）【齊藤1994】、須恵器甌・横瓶・長頸壺は佐渡小泊産（9世紀後半）【春日1991、坂井ほか1984】、黒色土器は9世紀後半【坂井ほか1984】、土師器は9世紀後半【坂井ほか1984、鈴木・春日1994】に所属するものとしてそれぞれ概ね併行期にある。灰釉陶器椀は前・後の時期ともそう変化していない。仮にこれらを食膳具のセット関係ととらえると、黒色土器椀が須恵器杯の不在を補っているものと考えられる。このことは、頭城地方で10世紀中頃まで存在する在地の土師器椀と佐渡小泊産の杯という食膳具セットのうち、後者が欠けて代わりに黒色土器椀が採用されることになったものと見ることもできよう。東頭城のこの地域で該期までに流通機構の変容があったものか、それともこの地域が須恵器杯を必要としない文化圏に所属していたものと考えることができる。

要 約

- 1 宮平遺跡は新潟県の南西部、東頸城郡浦川原村大字横川字宮平275番地1ほかに存在する。遺跡は保倉川によって形成された谷合の丘陵平坦面に立地し、標高約33mを測る。古代にあっては国府の置かれた越後国頸城郡内に含まれる。
- 2 この遺跡は北越北線の建設に伴い、昭和63年に発掘調査を実施[高橋ほか1995]している。
- 3 今回調査は北越北線の引き込線建設工事に先立ち、平成7年5月8日から5月31日まで実施した。調査対象は前回調査区の南側に隣接する畠地で、面積は400m²である。
- 4 調査の結果、縄文時代・平安時代・中世・近世以降の遺構・遺物が検出された。
- 5 主な遺構は中世の大型区画溝と考えられる溝1対と性格不明遺構1基。時期不明の土坑6基である。時期不明の土坑は前回調査区を合わせると径約60m程の環状に分布することが明らかになった。
- 6 主な遺物は平安時代の須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器である。これらはセット関係にあったものと考えられ、9世紀後半から10世紀初頭に所属する。

引 用 ・ 参 考 文 献

- ア 浦川原村史編纂室 1984 『浦川原村史』 浦川原村役場
大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
- カ 春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学講話会報 第8号』 新潟考古学講話会
木村康裕 1995 「羽茂町内遺跡確認調査報告書II一小泊窯跡群」 新潟県佐渡羽茂町教育委員会
小池義人・土橋由理子 1995 『中ノ山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
サ 斎藤隆正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猪宿窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西東3—』 古代の土器研究会
坂井秀弥 1984 「今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」 新潟県教育委員会
品田高志 1993 「柏崎市の遺跡II」 新潟県柏崎市教育委員会
鈴木俊成・春日真実・高橋一功 1994 「一之口遺跡東地区」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
タ 高橋保雄・戸根与八郎 1995 「宮平遺跡」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
ハ 郷巻正信 1988 「西田・鍋巻田遺跡群」 新潟県教育委員会
郷巻正信 1989 「土器片円盤について」『新潟考古学講話会報 第3号』 新潟考古学講話会
郷巻正信 1991 「城之腰遺跡」 新潟県教育委員会
郷巻正信・横田浩 1995 「鉄砲町遺跡」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
ヤ 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

図 版

凡 例

1. 図版は図面と写真とした。

2. 遺構・遺物の報告番号等は、全て本文の報告番号と共通する。

3. 遺物の種別等は報告図面中、実測図にトーンで次のように表示した。

■ 断面黒塗り 須恵器

□ 断面網かけ 灰釉陶器

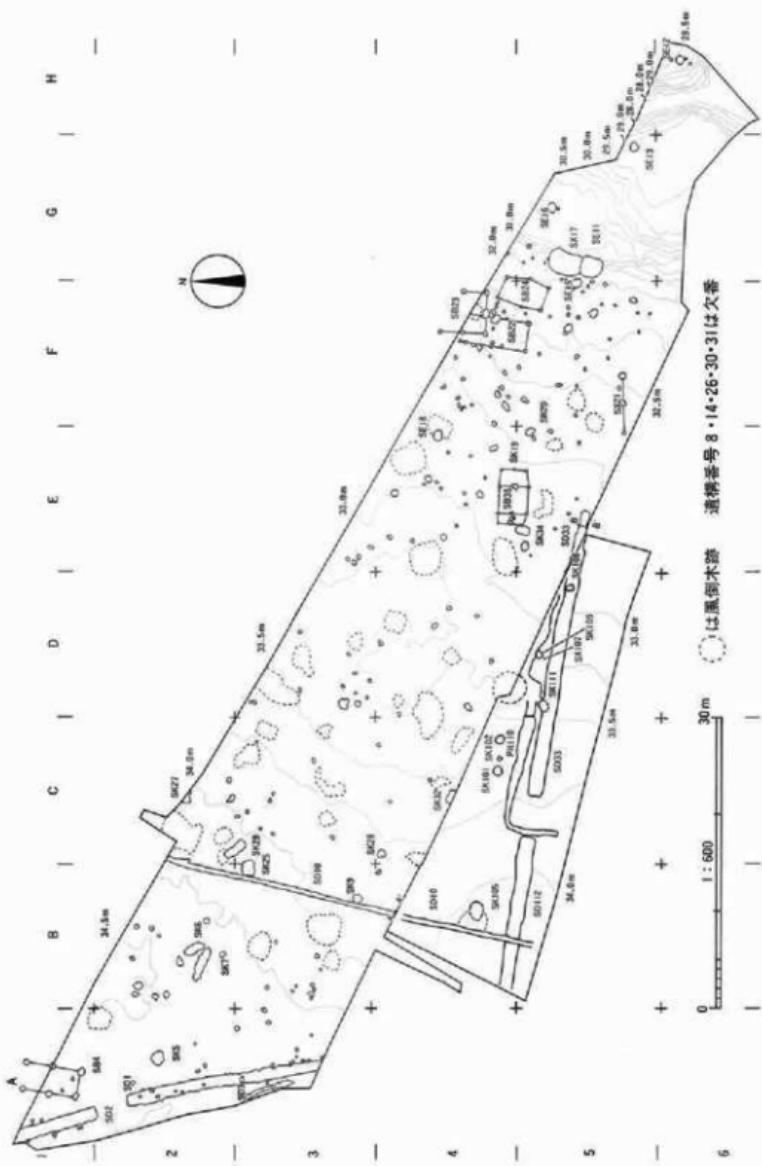
□ 内面網かけ 黒色土師器

□ 白ヌキ 上記以外の遺物

4. 図版に掲載した写真的撮影は、遺物關係を藤巻正信が、遺構關係を沢田 敦が担当し、空中写真は業者に委託した。

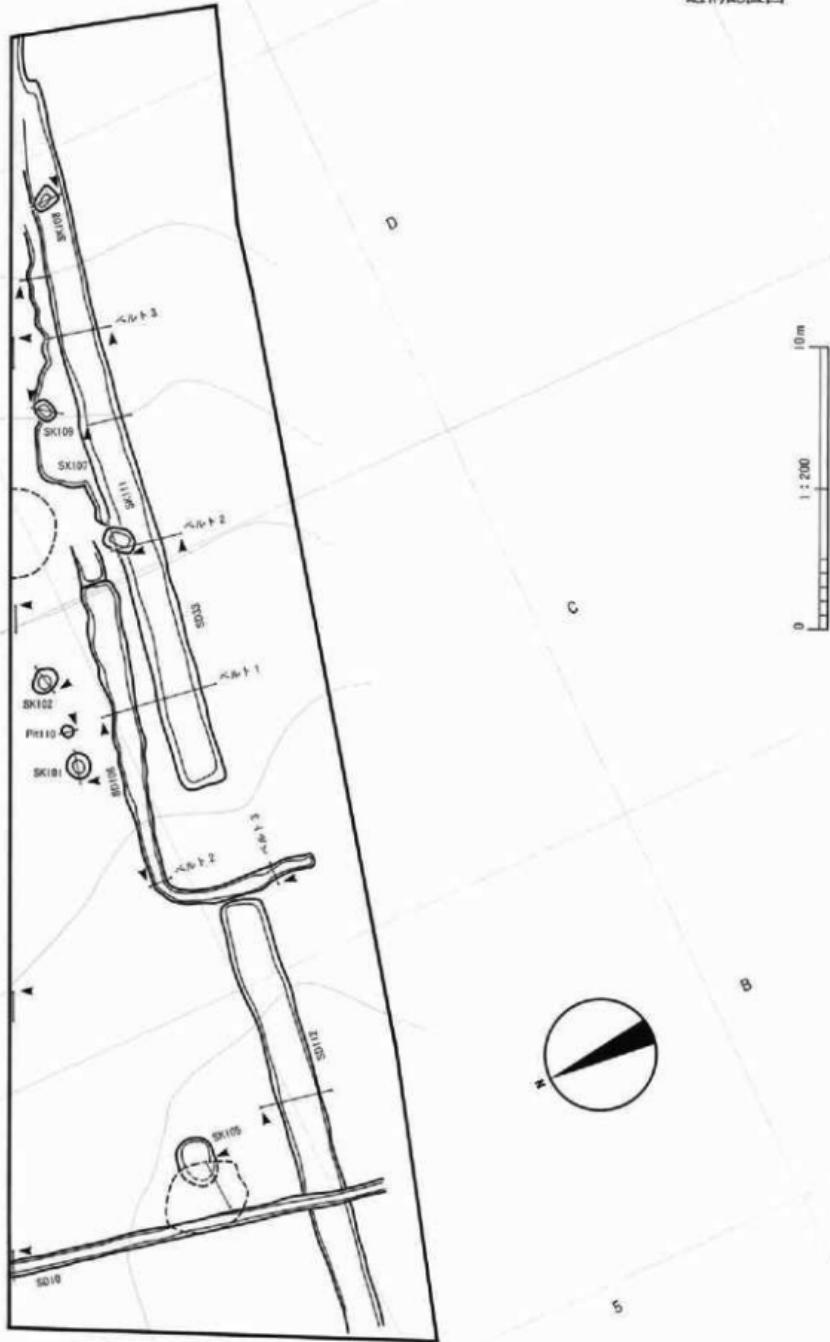
宮平遺跡全体図

四面！

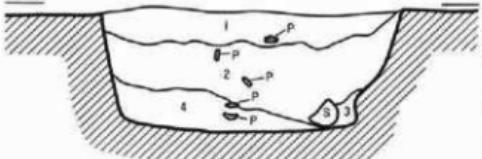


図面 2

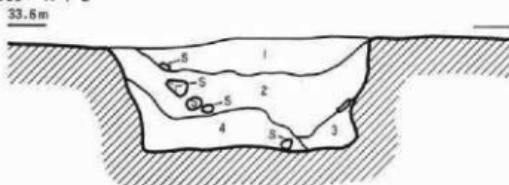
造構配置図



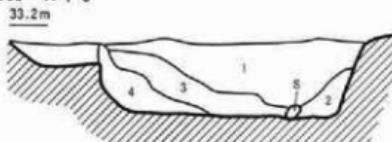
造構実測図 I

SD33 ベルト 1
33.8m

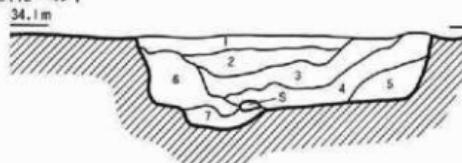
- 1層：暗褐色シルト。しまり中、粘性や弱。 $\phi 5\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。 $\phi 5\text{ cm}$ 以下の炭化物を少量含む。
- 2層：暗褐色シルト。しまりやや弱、粘性中。 $\phi 3\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。 $\phi 1\text{ cm}$ 以下の炭化物を少量含む。
- 3層：暗褐色シルト。しまり弱、粘性中。 $\phi 1\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。ローム粒 $\phi 3\text{ mm}$ を含む。幾つかの崩落土か？
- 4層：暗褐色シルト。しまり中、粘性中。1～4層の中で最も暗く黒い色調をもつ。 $\phi 10\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。 $\phi 5\text{ mm}$ 以下の炭化物を含む。

SD33 ベルト 2
33.6m

- 1層：ベルト 1 の 1 層に同じ。ややベルト 2 の方がしまりが良い。
- 2層：ベルト 1 の 2 層に同じ。
- 3層：ベルト 1 の 3 層と同一層と思われる。
- 4層：ベルト 1 の 4 层と同一の層と思われるが、本層の方が色調が明るい。また $\phi 5\text{ mm}$ 以下のローム粒を含む。

SD33 ベルト 3
33.2m

- 1層：ベルト 1・2 の 2 層と同一層と思われる。暗褐色シルト。しまり中、粘性中。
- 2層：ベルト 1・2 の 3 層と同一層と思われる。暗褐色シルトでローム粒を含む。しまり弱、粘性中。
- 3層：ベルト 1・2 の 4 层と同一層か。暗褐色シルト。しまりやや弱、粘性中。
- 4層：暗褐色シルト。しまりやや弱、粘性中。 $\phi 2\text{ mm}$ 以下のロームブロックを含む。 $\phi 5\text{ mm}$ 以下の軟質砂岩を含む。

SD112 ベルト
34.1m

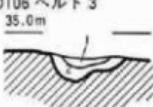
- 1層：褐色シルト。しまり中、粘性中。 $\phi 2\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。色調・土質とも SD33 の 1 層・2 層に似る。
- 2層：暗褐色シルト。しまり中、粘性中。 $\phi 3\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。1 層より少し暗い。
- 3層：褐色粘土質シルト。しまり中、粘性中。 $\phi 1.5\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。1 層よりもさらには明るい色調を呈する。
- 4層：暗褐色粘土質シルト。しまりやや弱、粘性中。 $\phi 2\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。2 層よりさらに色調が暗い。
- 5層：褐色シルト。黄褐色土色混じり。しまりやや弱、粘性やや弱。堅ざわの崩落土。
- 6層：暗褐色シルト。しまり弱、粘性弱。 $\phi 1\text{ cm}$ 以下の岩片。
- 7層：黄褐色土混じり、褐色シルト。しまり弱、粘性中。

SD106 ベルト 2
35.0m

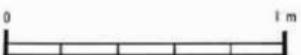
- 1層：褐色シルト。しまり中、粘性弱。 $\phi 2\text{ cm}$ 程度の黄褐色土ブロックを含む。

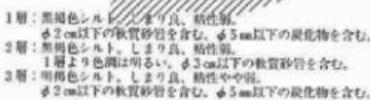
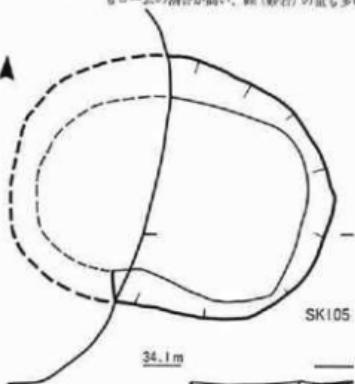
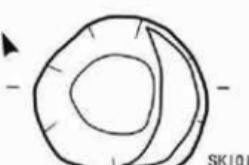
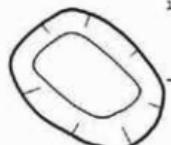
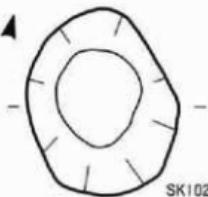
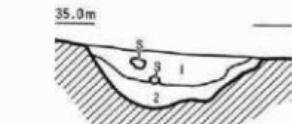
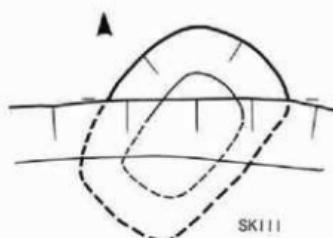
SD106 ベルト 1
33.8m

- 1層：褐色シルト。しまり中、粘性中。 $\phi 5\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。 $\phi 3\text{ mm}$ 以下の炭化物を少量含む。

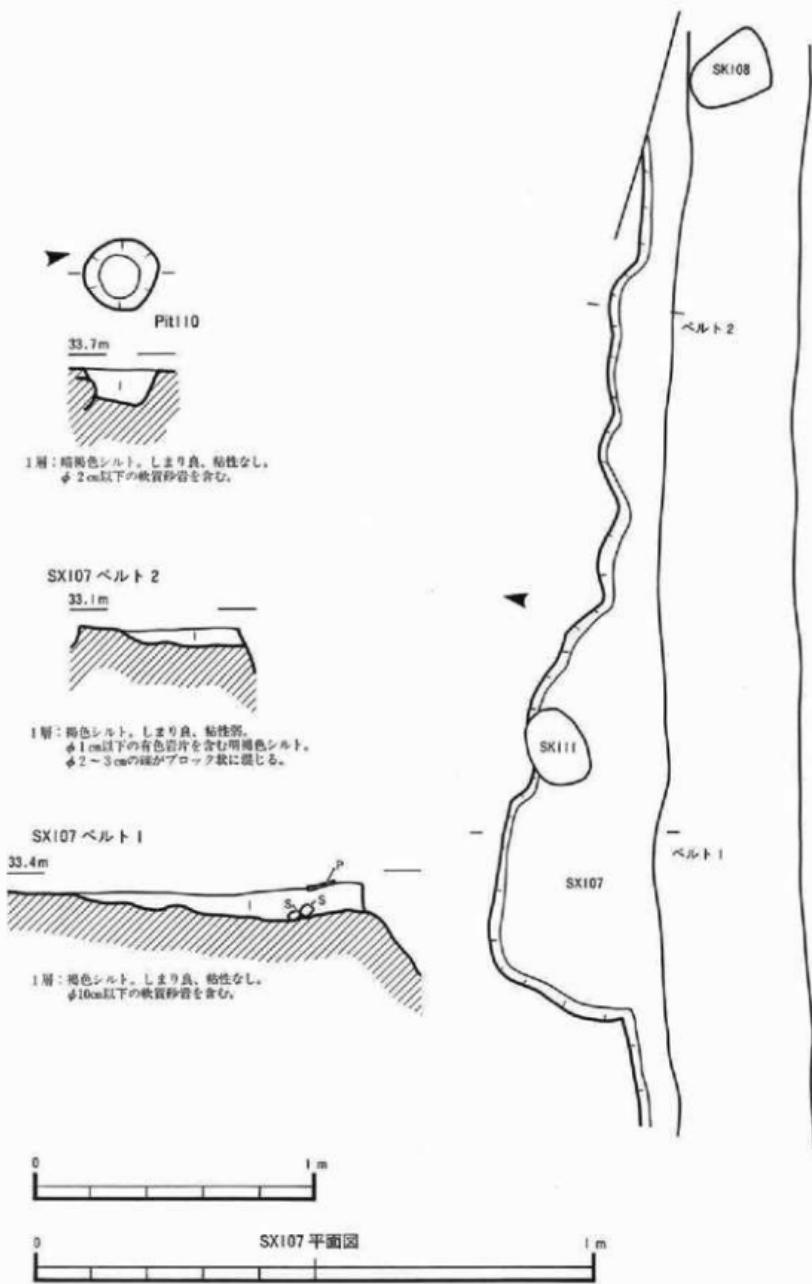
SD106 ベルト 3
35.0m

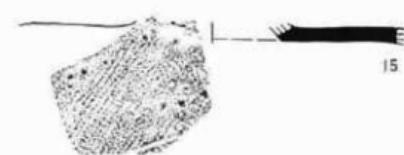
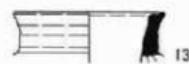
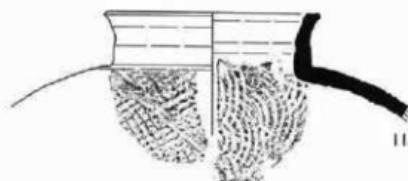
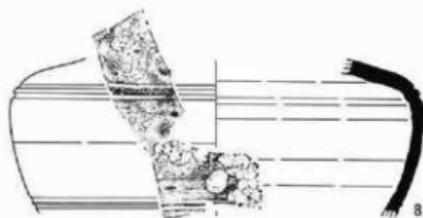
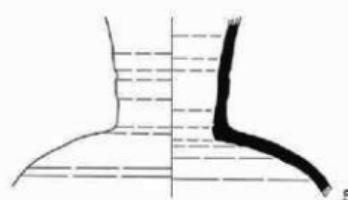
- 1層：褐色シルト。しまり良、粘性弱。 $\phi 3\text{ cm}$ 以下の軟質砂岩を含む。
- 2層：明褐色シルト。しまり良、粘性弱。暗褐色ロームと褐色シルトが混じり合った土。



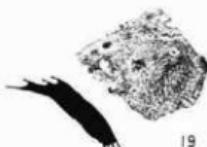


0 1 m

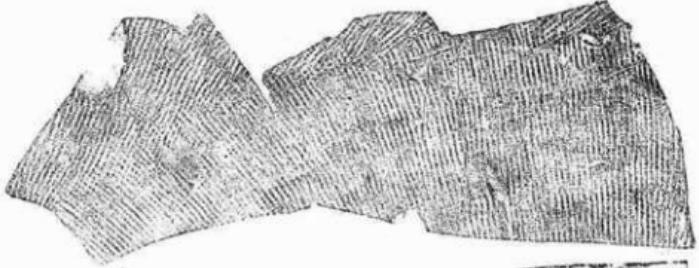




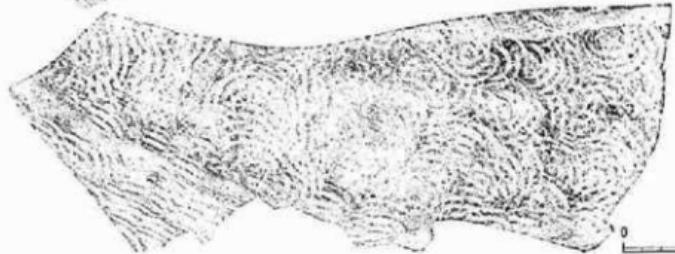
0 1 : 3 10pm



24



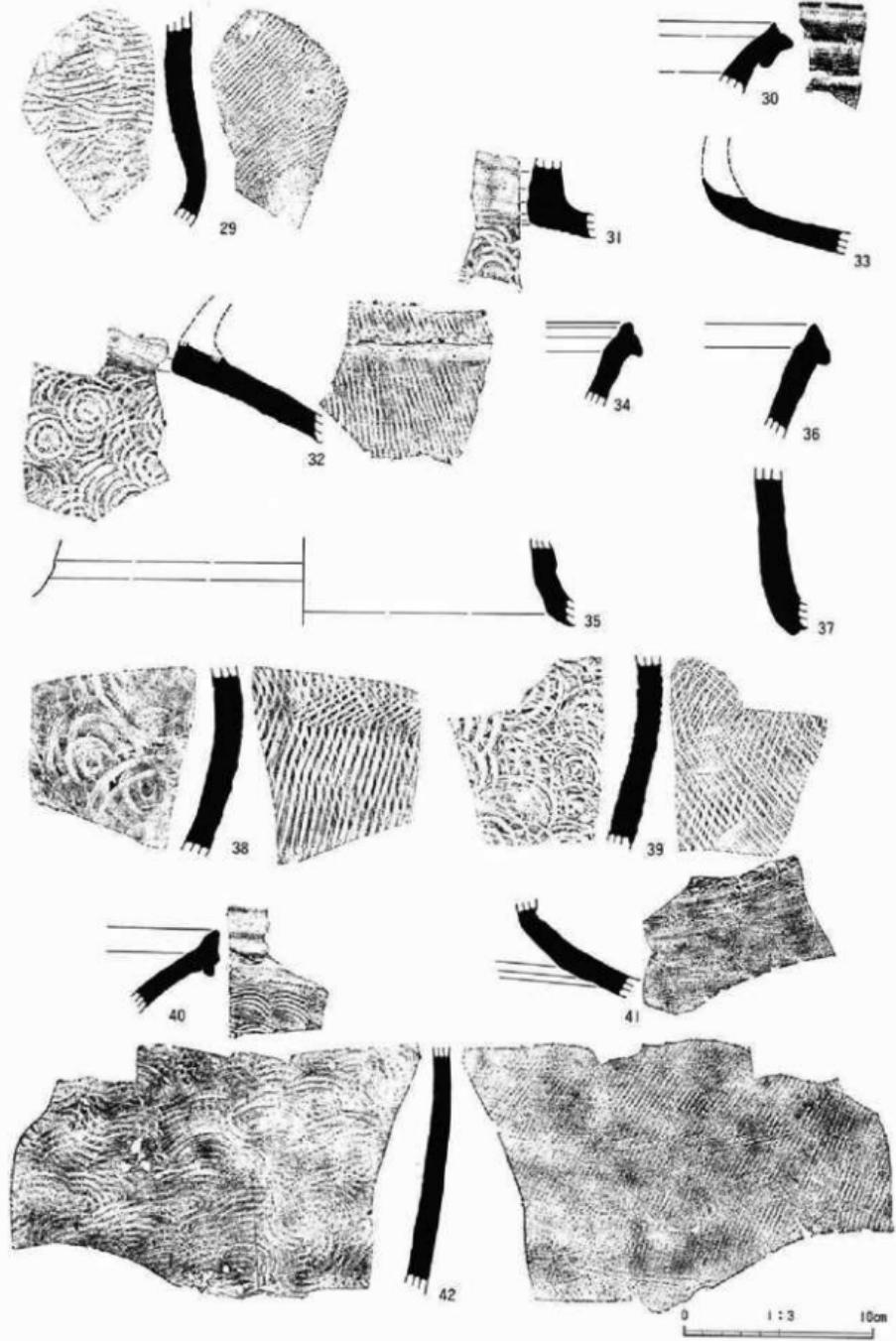
28

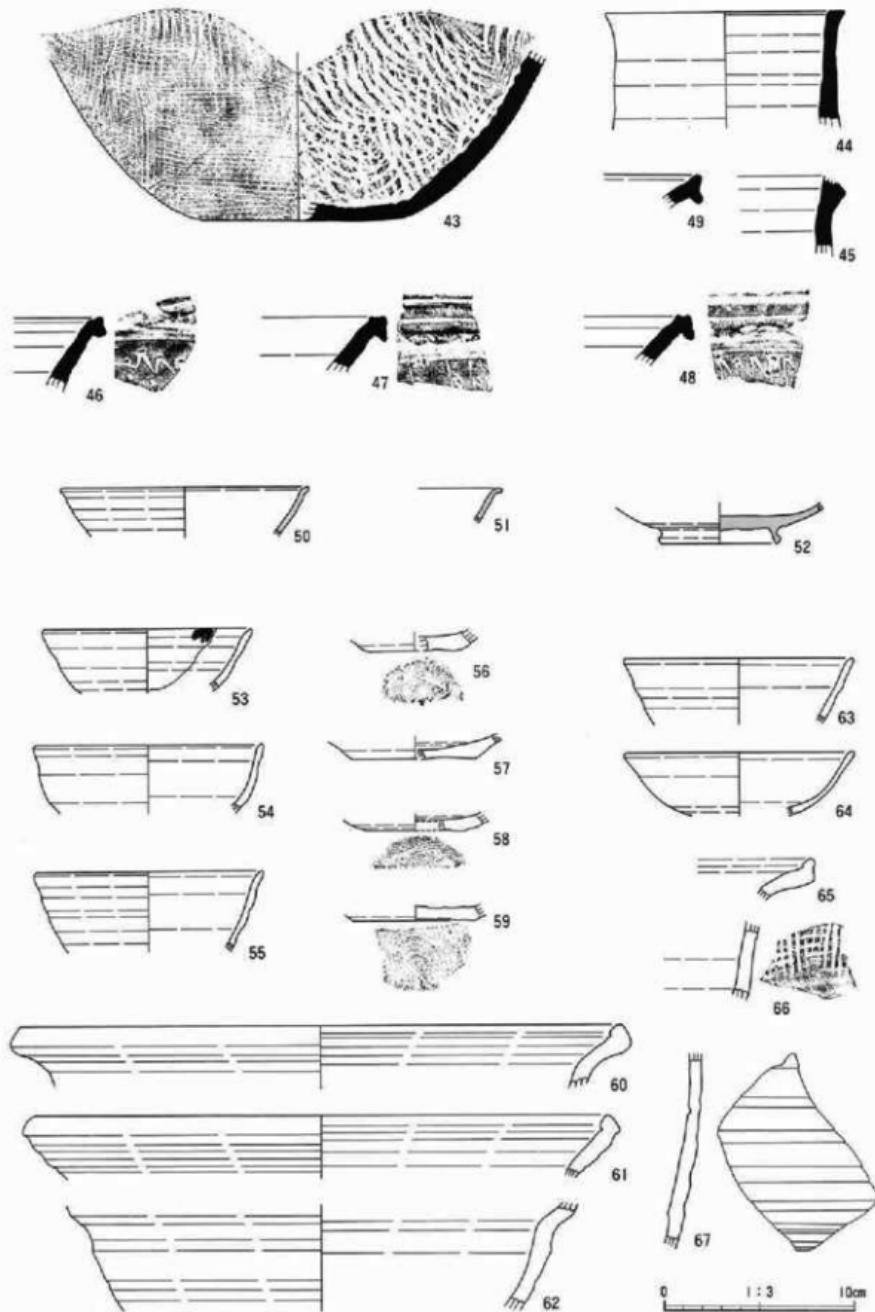


0 1 : 3 10cm

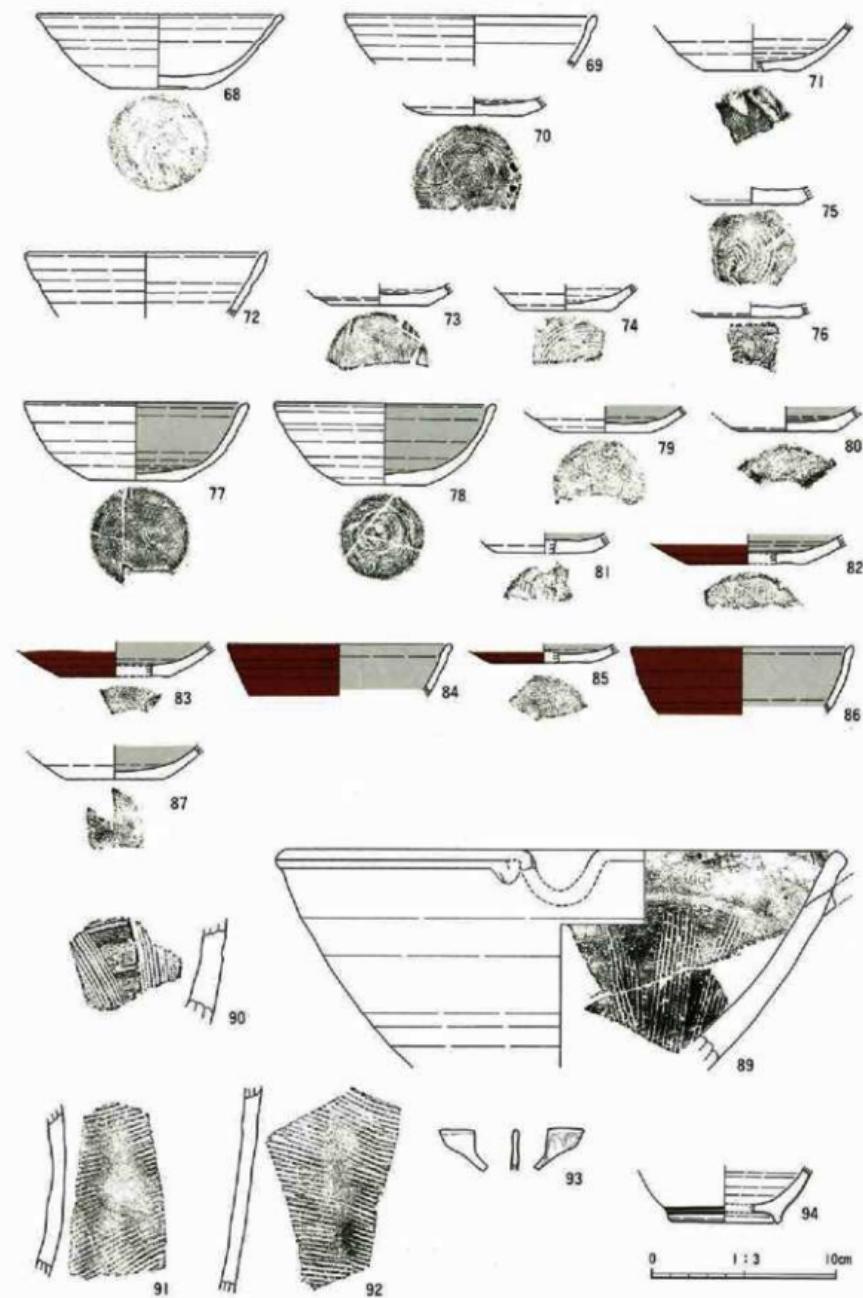
図面 8

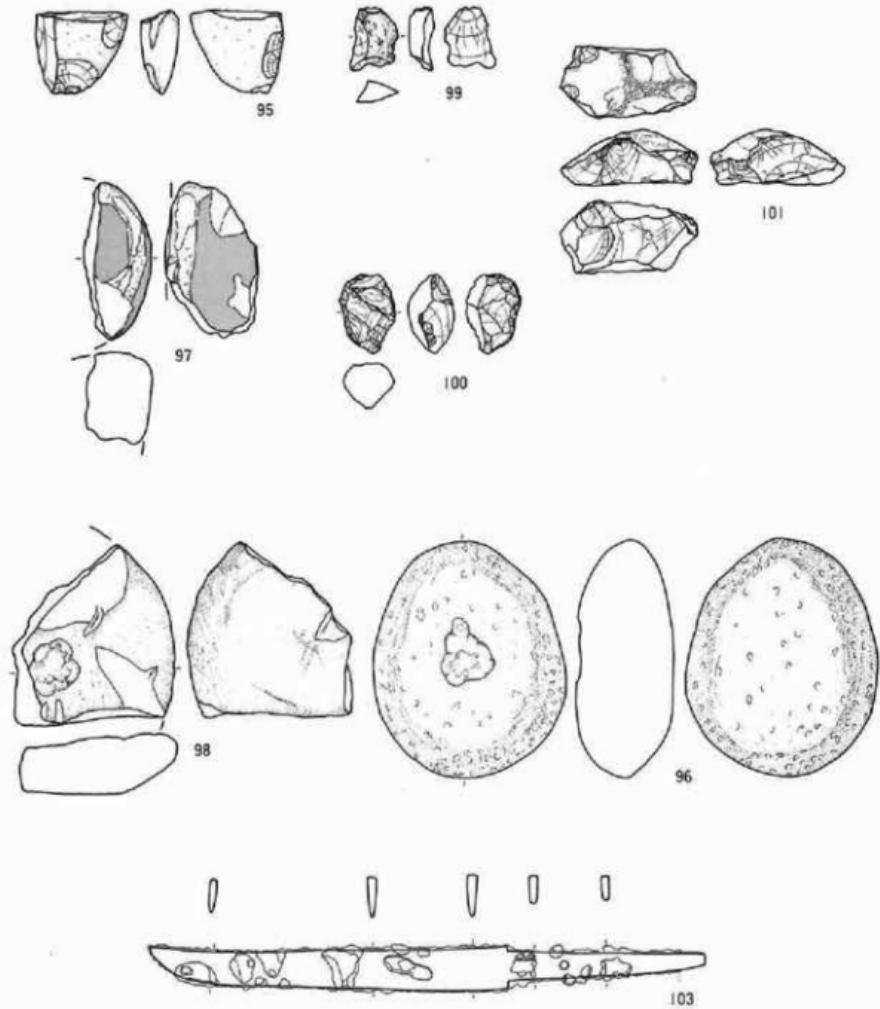
遺物実測図 3

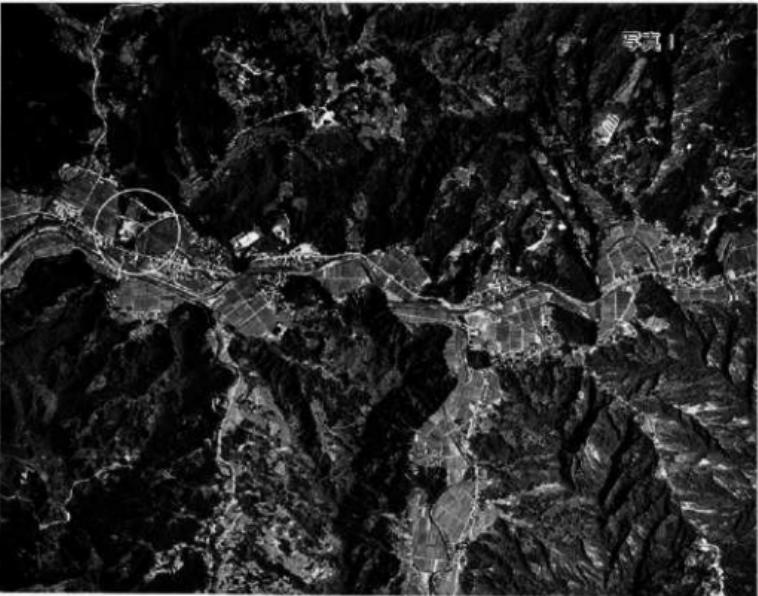




0 1 : 3 10cm







1 遺跡周辺の空撮
(国土地理院)
1984年撮影



2 前回近景
(北東から)



3 今回近景
(北東から)



全景（南東から）



完成（南東から）



全景（北西から）



完掘（北西から）

写真-4



2



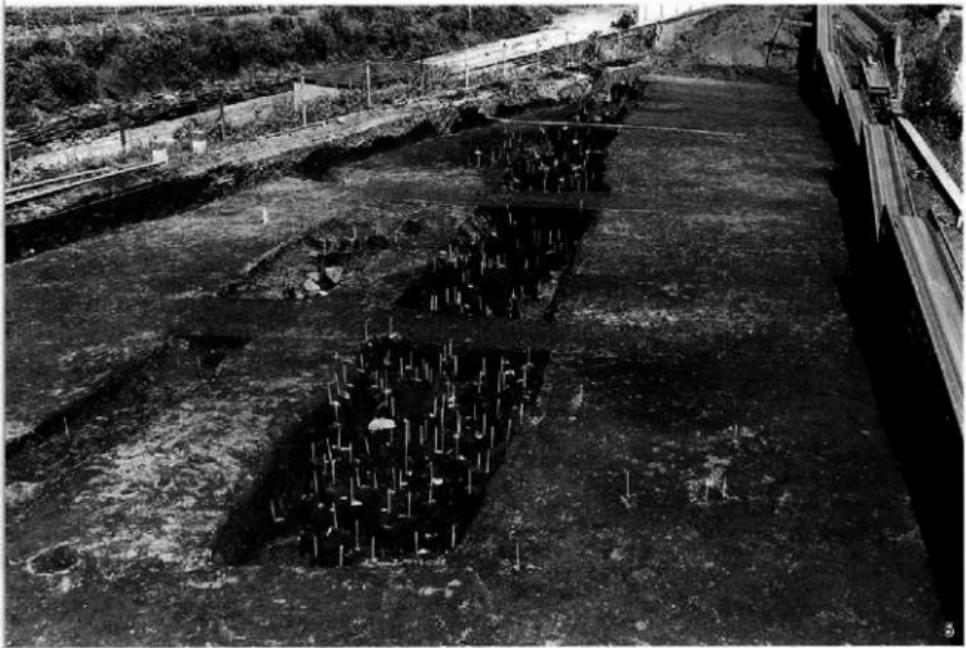
3



2

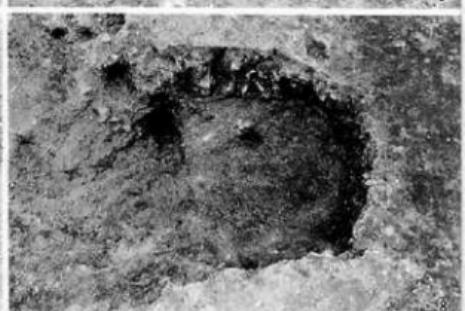
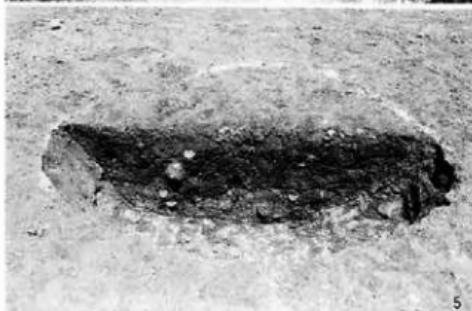


4



5

1 基本層序⑫ 2 基本層序⑬ 3 基本層序⑭ 4 基本層序⑮ 5 SD33 造物出土状況（北西から）



1 SD33 刀子出土状況（北東から）

3 SD33 ベルト2（西から）

5 SK101（南から）

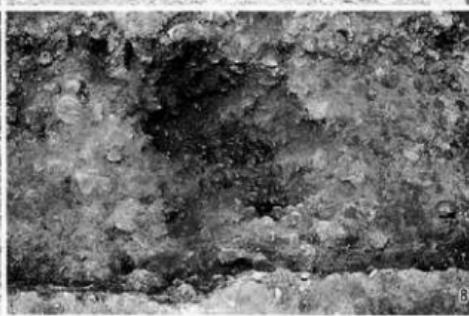
7 SK105（南から）

2 SD33 ベルト1（西から）

4 SD112 ベルト（西から）

6 SK102（南から）

8 SK105（南から）



1 SD106 (東から) 向って左は SD33

2 SD106 ベルト1 (西から)

3 SXI07 検出状況 (南から)

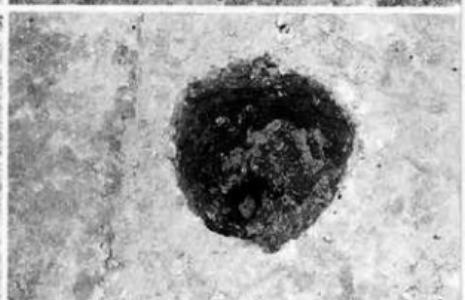
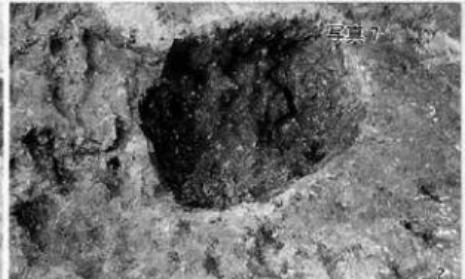
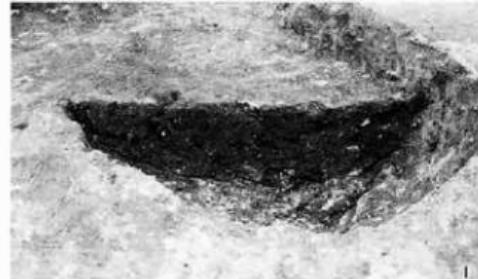
4 SXI07 ベルト1 (西から)

5 SXI07 実掘 (南から)

6 SXI07 ベルト2 (西から)

7 SKI08 (東から)

8 SKI08 (南から)



1 SK109 (東から)

3 Pit110 (東から)

5 SK111 (南から)

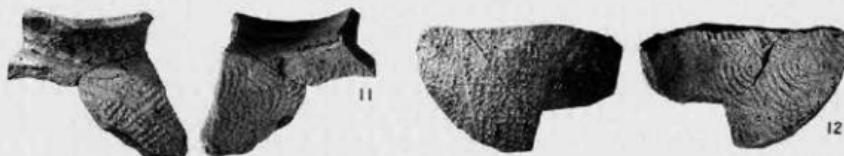
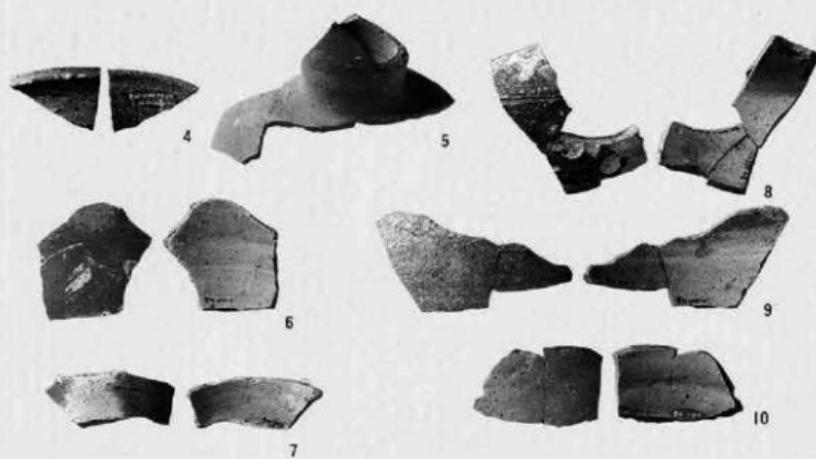
7 倒木跡103 (南から)

2 SK109 (南から)

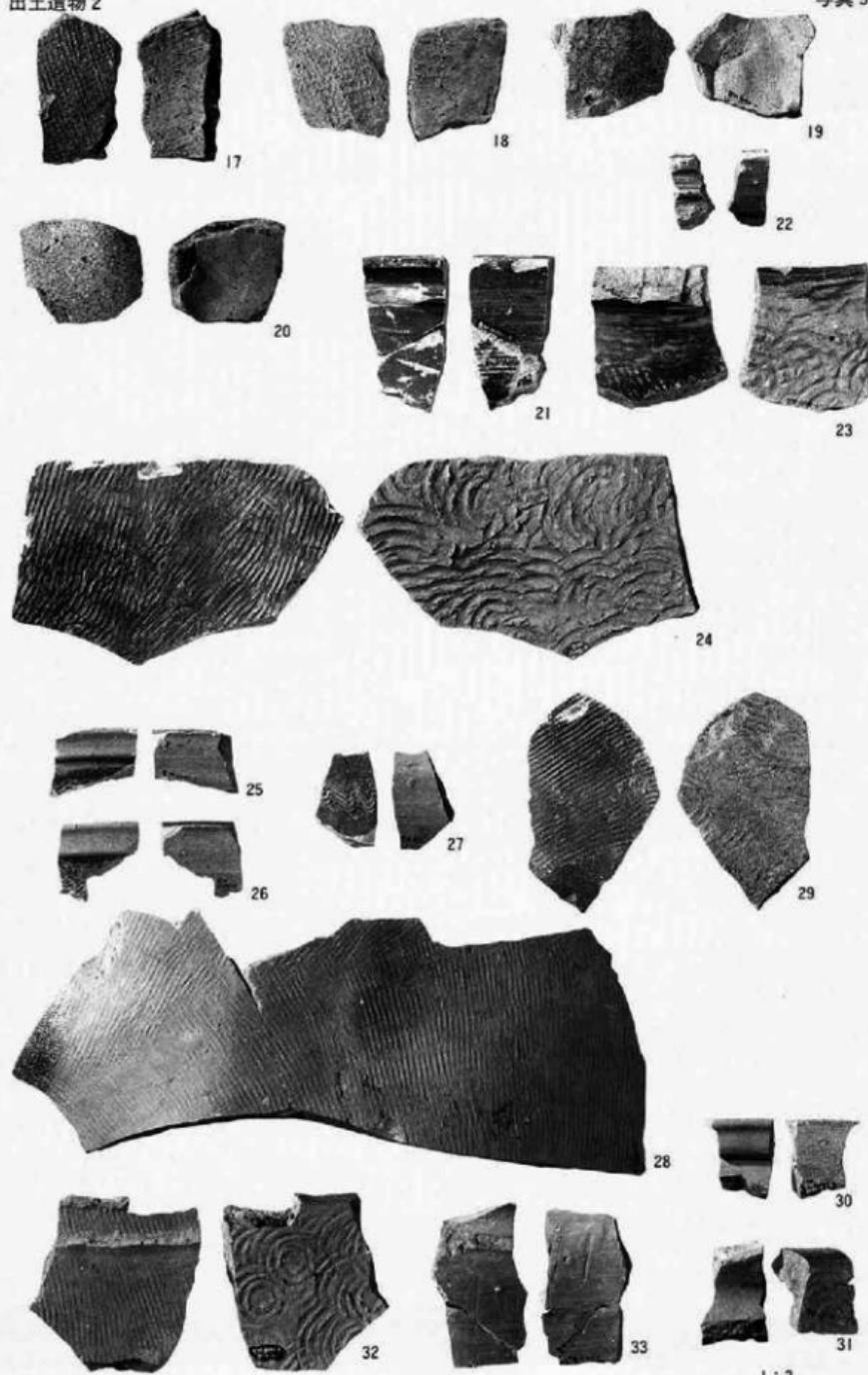
4 Pit110 (南から)

6 SK111 (南から)

8 倒木跡104 (東から)



1:3





34



35



36



37



38



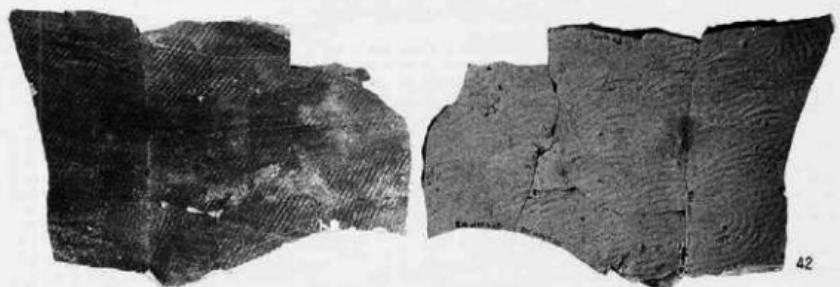
40



41



39



42



43



44



45



46



47

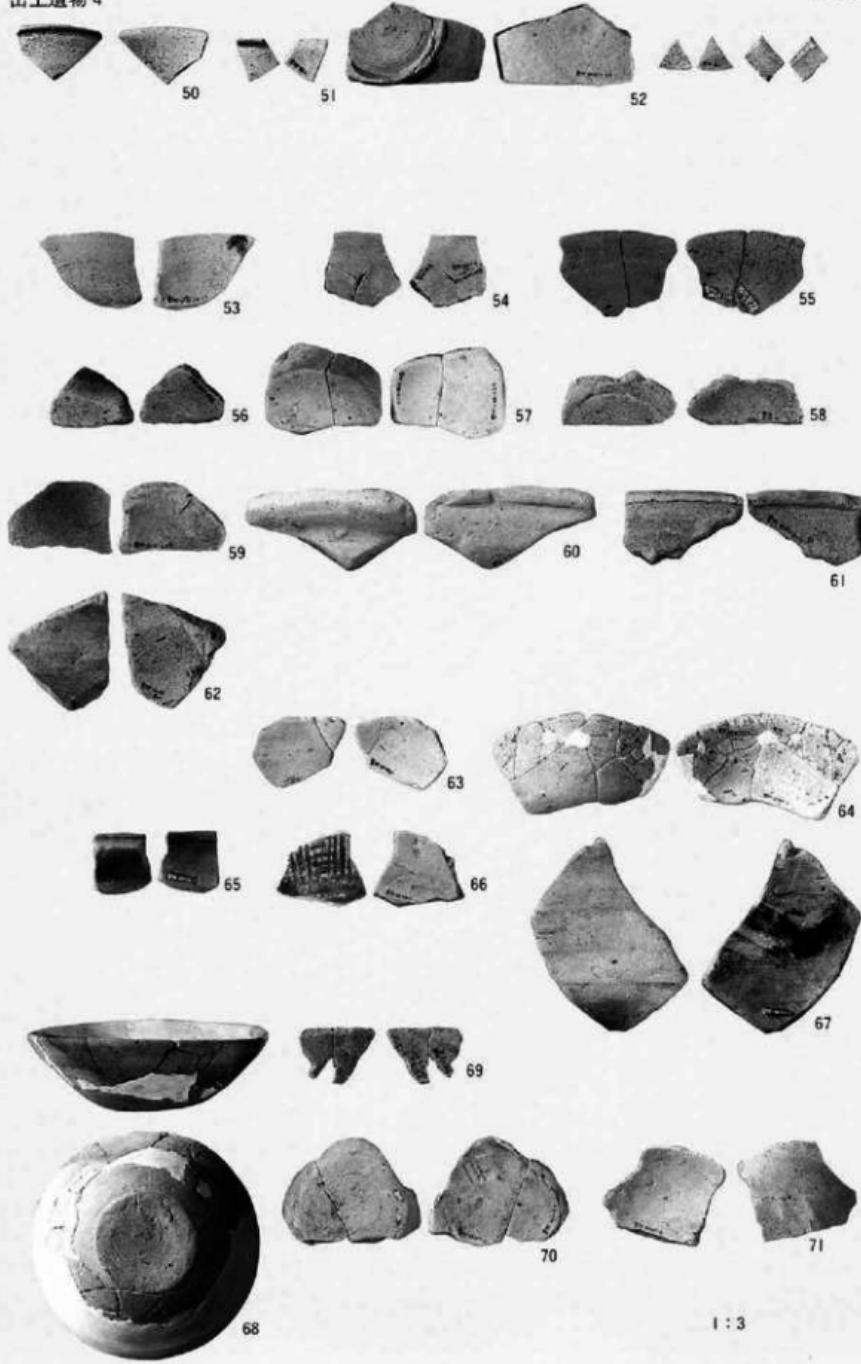


48



49

1 : 3



1 : 3



78



79



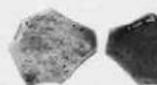
80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90



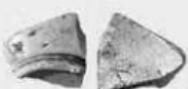
91



92



93



94

1 : 3



報告書抄録

みずくばみやだいら								
書名	水久保遺跡・宮平遺跡II							
副書名	北越北線関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第79集							
著者名	〔水久保遺跡〕 高橋保雄・田海義正・小池義人・荒川隆史・石山精哉・佐藤 恒・山田 翌 〔宮平遺跡II〕 藤巻正信							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL 025-223-5642							
発行年月	西暦1996年3月31日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
水久保遺跡	新潟県中頃統都頃城村 大字宇忌字水久保 1081番地	15-543	56	37度11分39秒	138度21分57秒	1988.05.10-1988.06.24	2,694m ²	北越北線建設
宮平遺跡II	新潟県東頃城郡 荒川原村大字横川 字宮平275番地1	15-522	30	37度9分27秒	138度25分6秒	1995.05.08-1995.05.31	400m ²	北越北線建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
水久保遺跡	集落跡	中世・近世	獨立柱建物跡12棟・土塙112基・溝11条	珠氈鏡178点・越前焼13点・青磁13点・白磁5点・瀬戸美濃焼27点・中世土器47点・石臼16点・礫石10点・土器片研削貝23点・漆器5点・曲物5点			遺構配置図と明治27年の土地更正図が一致する部分が多い	
宮平遺跡II	集落跡	中世・平安時代	溝4条・土坑6基	須恵器・土師器・墨色土器ほか10箱 刀子1点			南接部分は1988年に発掘調査している	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第79集

北越北線関係発掘調査報告書

水久保遺跡 宮平遺跡II

平成8年3月31日印刷
平成8年3月31日発行

発行・編集 新潟県教育委員会
新潟市新光町4-1

電話 025(285)5511

新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟市一番堀通町5923-46

電話 025(223)5642

印刷・製本 佛北都

新潟市篠町1-10

電話 025(244)8255